ＩＳ　桜の花纏う真剣

エドワード・ニューゲート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　桜の花纏う真剣

【Ｎコード】
Ｎ０２７３Ｔ

【作者名】
エドワード・ニューゲート

【あらすじ】
世界でただ一人、ＩＳを使える“男性”の登場。
そのニュースは瞬く間に広がり、世界中を驚愕させた。
そんな折、ＩＳ学園に一組の男女が入学してくる。
その男は、世界で二人目のＩＳを使える男にして、話題の男性「織斑　一夏」の義弟だった。

ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉の二次小説です。

それが嫌な方は、回れ右をして戻ることをお勧めします。

ご意見、ご感想、ご指摘を遠慮なく送ってください。

プロローグ　桜、義兄と再会す

本能寺の変

織田信長が、家臣、明智光秀の謀反に遭い、京、本能寺にて自害した事件。
これにより、天下統一目前とまで言われた織田信長の野望は、光秀のたった一言の号令によって、水泡と化したのである。

歴史の教科書にも百％出てくる有名な事件であり、おそらく当時の戦国大名達は度肝を抜かれたことだろう。
天下人に最も近いと言われた人物が、家臣の裏切りに遭い、非業の死を遂げたのだから。

だが歴史全体でみてみると、こうした些細なことで、国家や時代というのは変わるものなのだ。

漢王朝の腐敗により起こった黄巾の乱然り、
民主主義の幕開けとなったフランス革命然り、
太平の世だった日本を動乱の時代に追い落とした黒船来航然り、
ソビエト連邦誕生のきっかけとなったロシア革命然り、

いずれの事項も、ほんの些細な出来事で起こり、今まで積み上げられてきたものが崩され、新たな時代、新たな国家の誕生のきっかけとなったのだ。

歴史は繰り返すとはよく言ったものだが、こういった事象こそ、言いえて妙なのかもしれない。

そしてそれは、今の社会においても例外ではないだろう。

インフェニット・ストラトス、通称「ＩＳ」

開発された当初は注目すらされなかったが、『ある』一つの事件が、その存在に注目させ、はては世界の軍事レベルと社会構造を一気に変化させた。

『白騎士事件』と呼ばれるその事件により、世界はＩＳに注目し、その開発に躍起になり、今はその存在が世界の抑止力となっていた。

だが、ＩＳには二つの欠点があった。

一つは、核となるコアがブラックボックスであること。

つまり使い方は解るが、中身が一切わからないというのだ。

とはいえ、別にこちらはさして問題ではない。

問題はもう一つの方だ。

それは……女性にしか扱えないことだ。

これにより、世界各国は極端な女性優遇政策をとるようになり、

今では「女性というだけで偉い」と言う、所謂「女尊男卑」社会が形成されてしまった。
とはいえ、現実昔は「男尊女卑」があったから、歴史的に考えればそれが逆になっただけだ、深い意味はないだろう。
しかし、その風潮に風穴を開ける事態が勃発する。

世界でたった一人、ＩＳに乗れる男性が登場したのだ。

このことはすぐに世界中に知れ渡り、震撼させた。
まさしく青天の霹靂、大番狂わせと言ってもいい。

だが、ここに世間の甘さがある。
こういった大番狂わせは一度しか起きないと認識している人が多いことだろう。

だが、忘れてはならない。

本能寺の変の後、信長の後釜、つまり天下人となったのは誰なの

かを。

誰もが、信長を討った光秀が次の天下人であると、当時は予測できただろう。

しかし、その予想は大きく裏切られた。

そう、大番狂わせは二度続くのだ。

そしてそれは、ここ、ＩＳ学園で起ころうとしていた。

「うわ、広っ！」

手に持ってる地図と目の前の光景を見比べながら、腰に日本刀を差したグレーっぽい髪の少年がそう呟いた。

「これは、教室に着く前に迷子になるかなあ」

「大丈夫。直人の方向感覚はコンパスより確かだから、迷子になることはない」

「そりゃどうも」

隣にいる、透き通るようなきれいな白髪の少女の言葉に、直人と

呼ばれた少年はそう答える。

「と言うか、ここで待ってろって言ってたけど、良いのかなあ？」

「下手に迷うよりはましだと思うけど？」

「そりゃそうだけど、そろそろＳＨＲが始まる頃だろ？　教室の方で待ってた方が良いと思うんだよ」

「うーん、そうかもしれないけど」

そんな会話をしていると……

「待たせたな」

黒い髪とスーツを着た、鋭い目つきの女性がやってきた。
そしてその姿を確認するや、少年は深々と頭を下げる。

「お久しぶりです。千冬師匠」

「頭を上げろ。そんなに畏まらなくていい。それとここでは織斑先生と呼べ」

「はい。し……織斑先生」

「相変わらずだな、馬鹿弟子」

少年の真面目すぎる対応に、目の前の女性、織斑千冬は苦笑した。

「でっ、お前は？」

そう言うと、千冬の視線は隣の少女に向けられる。

「……」

しかし、少女はなぜか答えようとしない。

「おい真白。挨拶ぐらいしろ」

「……うん、わかった」

少年の問いかけに、真白と呼ばれた少女はしゃべり始める。

「風花真白です」

ただそう言って、真白は軽く頭を下げる。

「すいません。こいつはこういうやつ何で」

「まあ良い、教室まで案内する。二人とも、ついてこい」

「「はい」」

こうして二人は廊下を歩き始める。

「私が呼んだら入ってこい。後馬鹿弟子、その刀はここに置いてけ」

「いくら先生でも、それは承服しかねます。これは俺のアイデンティティーみたいなものですし」

「そうだったな。とは言え、むやみに振り回したりしたら即没収だからな」

「ご心配なく」

そう言って千冬が入ってくと、二人はしばらく廊下で待つことに。

「ところで直人」

「ん、何だ？」

真白に呼ばれ、少年、直人は振り向いた。

「確かここに、直人の義兄がいるって聞いているけど？」

「ああ、そう言えばそうだな」

「どんな人？」

真白はその義兄に余程興味があるのか、強い渇望の眼差しで聞いてくる。

「そうだな……一言でいえば良い奴だ。誰にでも優しいしな」

「ふーん。強いの？」

「……それは如何だろうな」

とぼけるように言ってはいるが、実際のところ、本人にもよくわからないのだ。

「まあ、腕っぷしとかでは俺より弱いな。いや、俺が異常なだけなんだが」

「それは私も」

「まあな。でも、あいつの強さは、そんなもんじゃないと思うんだ」

「えっ？」

「なんつーかさ、俺より力はないのにどこか強い感じがするんだよ。在り来たりな言葉で表すとしたら、「心が強い」……って言うのかな？」

「心……か」

「まあ、そういうところを見てると、さすがあの人の弟だよなあ、って思うんだよ。それに比べたら、どれだけ腕っぷし強くたって、俺はまだまだあいつにはかなわないと思うんだ」

「そうなんだ」

真白がどこか思うところがあるような顔をした途端、教室の方から誰かが殴られる様な音が聞こえ、その直後に「げぇっ、千冬姉！？」という声が聞こえ、間を置かずに二度目の音が聞こえた。

「ねえ、今の」

「全く。何やってんだ？　あいつ」

『それではＳＨＲを終わりにする。・・・と言いたいところなのだが、まだ自己紹介を終えてない奴らがいてな・・・。おい、入れ』

二人がやや呆れていると、千冬が呼んだので、二人は教室のドアを開けて入る。

（うわ、予想以上に緊張するなあ……）

目の前の光景に、直人は思わずたじろいでいた。

ＩＳの特性上、クラスの全員が女子であることはある程度覚悟していた。

だが実際目の前にしてみると、その光景は意外に応える。

これからこのクラスで過ごすことを考えれば、彼が気後れするのは無理からぬことだ。

「おい、どっちでもいいから自己紹介しろ」

「あっ、はい」

緊張していた直人は千冬に催促される。

ちらっと真白の方を見るが、相変わらず無表情で自分からしゃべる気はないようだ。

「やれやれ。じゃあ、まずは俺から」

覚悟を決めた直人は咳払いをすると、自己紹介を始めた。

「えー。本日より編入となった、桜庭直人と言います。いろいろ不便をおかけするでしょうが、よろしくお願いします」

最後に頭を下げて自己紹介を終える。

その後しばらくは静粛が支配していたが……。

「き……」

「き？」

『キャァァァァァァ！！！！』

突然湧き上がる歓声に、直人は完全に面喰ってしまった。

「男よ男！　二人目の！！」

「うわー、カッコいい！！」

「それでいてどこか優しそう！！」

すごいハイテンションの女子たちに、直人は完全に面喰ってしまった。

「なあ、女子って皆こうなのか？」

「多分、同い年ぐらいの男の子が来ることはないから、興奮してるんだと思う」

「納得……」

そんな風に小声で真白と話していると。

「静かにしろ！」

千冬の一喝が教室を鎮めた。

「これが初めてじゃないんだ。あんまり騒ぐな馬鹿ども」

（さ、さすが師匠。厳しい）

ま、それでこそだけど。とか考える直人だった。

しかし、女子たちの黄色い声はとどまるところを知らず、それば
かりか、千冬が担任ということもあってか、余計に騒がしくなった
ようだった。

「・・・毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。私のクラス
にだけ集中させてるのか？」

頭に手を置きながら呆れる千冬の横で、

（師匠。心中お察しします）

と、心の中でその心労を感じ取る直人だった。

「それと桜庭。お前もあまり畏まるなと言ったはずだ。女子とは言
え、こいつらはお前と同年代なんだぞ」

「ですが師匠、こういうのは第一印象が大事だと思いますし……」

パシィィィン！！

「織斑先生だ。馬鹿者」

「す、すいません……」

ついうっかり口が滑ってしまい、千冬に出席簿で殴られてしまった。

その意外な攻撃力の前に、直人は思わず額を抑えたが、涙が出るのだけは必死に堪えていた。

「ねえ、今千冬様の事「師匠」って言ったよね？」

「えっ？　じゃああの子、お弟子さん！？」

「羨ましい！！」

しばらくして持ち直した直人は、額を抑えながら教室を見渡し、ある人物を確認するや女子たちの黄色い声には目もくれず、その人物の前に近づいた。

「あっ……お前」

その人物が直人を確認するや、直人はにっこり笑って言った。

「三年ぶりか。久しぶり、元気にしてたか？」

そう言うと、懐からあるものを取出し、それを見せながら言った。

「誓い通り帰ってきたぞ。我が義兄、織斑一夏！」

第一話　再会と幼馴染とスパルタ？（前書き）

連続投稿です。

プロローグだけはあかんだろう、と言うことで、投稿いたします。

作者は基本、アニメの方で行きますので、第四巻以降はそのうち買う予定です。

ただ、それ以前に原作情報を提供いただければ幸いです。

それではどうぞ。

第一話　再会と幼馴染とスパルタ？

「直人……直人なのか！？」

直人の目の前にいる、このクラス、否、ＩＳ学園唯一の男子生徒、織斑一夏はわが目を疑っていた。

「おいおい。まさか忘れたとかいうんじゃないだろうな？」

手に懐から取り出した物、刀の形をしたキーホルダーをぶら下げながら、直人は目の前の義兄、織斑一夏に聞く。

そして返ってきた答えは……

「……忘れるわけ、ねえだろ！」

そう言って一夏も、ポケットから同じ形のキーホルダーを出した。

違うところは、一夏のが金色で、直人のが銀色だということだ。

「久しぶりだな。直人」

「おお、久しぶり。一夏」

二人は手を握り合って再会を喜んでいた。だが……

パシィィィン！！×２

「「痛っ！！」」

「再会を喜ぶのは構わないが、まだ自己紹介の途中だぞ、馬鹿者ども」

黒い出席簿がものの見事に二人の頭を直撃したのだった。

「「何するんだよ（ですか）！　千冬姉（師匠）！！」

パシィィィン！！×２

「織斑先生だ」

「「はい、すいません」」

二度目の出席簿を食らって、二人はただただ平伏するしかなかった。

「それより桜庭。こいつを何とかしてくれ、さっきから何も喋らん」

そう言って千冬は真白の方を指さす。

「あっ、はい。ほら真白、自己紹介しろ」

「ん。解った」

直人が催促すると、真白は身なりを整えて深々とお辞儀をしながら自己紹介を始めた。

「風花真白と言います。これから三年、よろしくお願いします」

その変わり身の早さに、千冬は驚いた。

「ずいぶん礼儀正しいな、さっきとは大違いだ」

「こう見えて、礼儀はしっかり叩き込みましたから」

千冬の疑問に、さも同然のごとく応える直人。

「はい」

そしてそれに呼応するように真白もうなずいた。

「まあいい。桜庭の席は織斑の隣、風花はそうだな、その後ろが空いてるな、座れ」

「「解りました」」

そういうと、二人は指定された席に着いた。

「まさか隣通しになるとは。狙ったのかなあ、千冬姉」

「ま、知らない奴の隣よりずっといいさ。またよろしくな、一夏」

「ああ、直人」

二人は教師二人に見えないように、机の内側でこぶしを握りあった。

一時間目の終了後、一夏と直人は二人で会話していた。
三年ぶりの再会ということもあって、周りの女子のささやき声などどこ吹く風、二人は会話に熱中していた。
しかし、一夏にしてみれば、この会話はある意味真剣な物だった。

「にしてもさ。連絡もよこさねえで、三年間何してたんだよ？」

そう、小学校の卒業とともに、自分を見つめなおす旅に出かけ、三年間ずっと音信不通だったのだ。
いろいろ彼としては聞きたいことがあった。

「いろいろさ。話すと長くなるし、連絡をよこさなかったのは悪いと思ってるさ。でも、おかげでいろいろ勉強になったよ」

「そっか」

直人の返事に、一夏は問い詰めるでもなく、癪に障った感じもなく、ただそう言った。

「まあ、今度機会があったら話してもらうぜ。それよりさ」

言葉を区切ると、一夏は後ろを振り向いて聞いてきた。

「あいつ、さっきから話しかけてもうんともすんとも言わねえんだけどさ。俺、嫌われてるのかな？」

そこには、やたら分厚い本を読む真白の姿があった。

それを見て苦笑しながら、直人は言った。

「ああ、真白は他人には無関心だからな。でも、今は違う理由みたいだけど」

「へっ？」

「読書してる時の真白はな、そのことしか集中してなくて人の話なんて聞こえないんだよ」

「そうなのか？」

「ああ。こうなったら、梃子でも動かねえ。俺の話も全然聞こえないよ」

直人はやれやれといった感じで肩をすくめながら呆れる。

「ま、意識を向けさせる手がないわけじゃないけどな」

「へー、どうするんだ？」

「それはな……」

と、直人が真白の意識を向けさせる方法を実践しようとした時だった。

「ちょっといいか？」

「「ん？」」

突然、声をかけられた二人はその方向を向く。
するとそこには、凛とした顔つきのポニーテールの女性が立っていた。
二人はすぐにそれが誰なのか一目でわかった。

どうやら彼女は一夏に用事があるらしく、察した一夏はどうしようかと直人の方を向く。
それに対し直人は「行ってこい」とジェスチャーを送ったため、一夏はその女生徒と一緒に教室を出て行った。
その際、何人かがついて行ったのは見なかったことにしようと思った。

「……さてと」

見送った直人は、真白の方に向くや、思いっきり猫騙しをした。

「ん、何？」

猫騙しされた真白は、驚く風でもなく、直人の方に意識を向ける。

「いや、熱中していたからさ。それにしてもまた分厚い本読んでるな」

真白の手に持ってる本を見ながら、直人は呆れた。

「そう言えば、さっきの子、誰？」

「何だ、見てたのか？」

「休憩入れてたら目に入ったから、それで誰？」

しきりに催促してくる真白に対し、直人は、彼女がここまで他人に興味を示したことに驚きながらも答えた。

「彼女は篠ノ之箒。小四のころまで一緒にいた、俺と一夏の幼馴染だ」

「小四まで？」

「引っ越したんだよ、身内の関係で……な」

「……ああ、そういうこと」

どこか暗そうな表情をしながら言った直人の言葉に何かを察し、少し考察した真白は、それ以上何も聞かなかった。

「では、ここまでで質問のある人ー？」

休み時間が終わって二時間目、クラスの副担任、山田真耶の授業を受けていた。
真白は勤勉にノートにいろいろ書いており、直人は教科書にアンダーラインを引きながらあれこれ考察していた。
ここまでは良い、問題は直人の隣にいた。

（こいつ……いや、そうだな、絶対そうだ）

隣で何やら気まずい顔をしている一夏を眺めながら、直人は何か確信を持っていた。
とはいえこのまま放置というのも可哀そうなので、小声で話しかけようとした時……

「織斑君、何かありますか？」

山田先生が先に声をかけてきた。

「質問があったら言ってくださいね。何せ私は先生ですから」

すごくいい笑顔で聞いてくる先生に、一夏は挙手しながら言った。

「せ、先生……」

「はい、織斑君」

「殆ど全部、解りません」

「えっ、全部ですか？」

冷や汗だらだら掻きながら答える一夏と、それを聞いて驚愕する山田先生だった。

この時彼は気付いていなかったが、隣にいた直人は「やっぱりか」と小声でつぶやきながら呆れ、答えを聞いた真白は直人の後ろでくすくす笑っていた。

「今の段階で、解らないって人はどのくらいいますか？」

先生の質問に誰も挙手しない。

すると、さっきまで黙っていた千冬が近づきながら言ってきた。

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「えーっと、あの分厚いやつですか？」

「そうだ、必読と書いてあっただろ」

すると、これまた予想外の返答が返ってきた。

「いや、古い電話帳と間違えて捨てました」

その刹那、千冬が手に持ってた出席簿を喰らわせた。

鈍痛に耐える一夏に、とうとう我慢できなくなった直人が聞いてきた。

「一夏、お前この三年間で何があった。確かに勉強ができる方とは言えなかったが、いくらなんでも必読品を間違えて捨てるなんて馬鹿なことしなかっただろ！」

「いやー、余りに分厚かったから、つい……」

「表紙をちゃんと見ろ表紙を」

至極もっともな答えが返ってきたので、とうとう一夏もぐうの音が出なくなった。

「織斑、再発行してやるから、後で教務室に取りに来い。桜庭、お前は如何だ?」

「えーっと、一通り読んできたんですが、乗ってる時の感覚と単語とがいまいち合致しないんです。知識だけなら問題ありません」

「そうか……」

それを聞くと、少し一息ついた後……

「桜庭、悪いが……」

「解ってます。一週間以内に覚えさせろって言うんでしょ」

「ふっ、流石だな」

まさに以心伝心、その様子を見た山田先生や他の生徒たちも驚いていた。

「と言うわけだ一夏。全部覚えるまで、地獄の日々が続くものと覚悟しとけよ」

「何だよそれ!!」

突然のスパルタ宣告に一夏は叫ぶが、当の直人は聞く耳持たずだった。

「これ以上お前が醜態をさらすのは義弟として心苦しい、一週間と言わず五日で物を叩き込んでやる！！」

「いや、あの厚さで一週間は無理だって！　まして五日だなんて……」

どうにかしようと奮闘する一夏だったが……

「織斑、やれ」

「とのお達しだ」

「……はい」

必死の抗議もむなしく、千冬という援護を受けた直人に負けてしまった。

「真白。お前も手伝ってくれ」

「うん、解った」

さっきまでくすくす笑ってた真白は、その言葉を聞くや二つ返事で承諾した。

「とりあえず次の休み時間に、２０ページ分覚えさせるか。全体の五分の一終わるまで今日は寝かさんからな」

「なっ！」

「一ページでも間に合わなかったらノルマとして追加するからな、覚悟しておけよ！！」

「勘弁してくれーーーーー！！」

直人の恐るべきスパルタ宣告に、一夏の悲鳴が教室全体に響き渡った。

直後、千冬の出席簿が一夏の頭を直撃したのは言うまでもない。

第一話　再会と幼馴染とスパルタ？（後書き）

いかがでしたか？

ここおかしい、とか、ここが変、みたいなご指摘をいただければ幸いです。

次回は金髪ロール、そしてオリキャラをもう一人登場させます。

ご意見、ご感想、よろしくお願いします。

第二話　代表候補生と紅葉色（前書き）

水曜に更新するといっておきながら、更新したのが深夜とはこれいかに？
すいません、アニメ情報があるからと、少し油断していました。
まあ何はともあれ、第二話投稿です、それではどうぞ。

第二話　代表候補生と紅葉色

「ここがこうなるから、こうなるの」

「ああ、成る程」

二時間目の終了後、一夏は休み時間を利用して参考書の内容を真白から教わっていた。

「しっかし、真白の教え方は解りやすくて助かるぜ、ありがとうな」

「ん……」

一夏に礼を言われた途端、真白は黙り込んでしまった。

「どうした？　俺なんか嫌なこと言ったか？」

「ううん。直人意外の人に、褒められたこと、あんまり無くて……」

「そうなのか、でも、そんだけ教え方うまいんだから、良い先生に教わったんだな」

そう言った途端、真白は今度はくすくす笑い始めた。

「何だよ、いきなり」

「ううん、面白いこと言うなあって思って」

「は？」

「だって、私の先生は……」

真白が言葉を紡ごうとしたその時、

「い～ち～か～」

突然、直人のアイアンクローが一夏の頭を捕らえた。

直人の額には日の丸を挟んで「努力」と書かれた鉢巻が巻かれていた。

「なーにくっちゃべってるんだ？　お前にはそんな暇がないってわかってんのかなー！」

「いてててててて！！」

相当強く掴まれた一夏の頭から、みしみしと音がしているのは気のせいではないだろう。

「解ったらさっさと続きをやれ！！　終わらなかったら次の時間にノルマでプラスするからな！」

「か、勘弁してくれーーー！！」

相当なスパルタでしごきに来る直人に、一夏も従うよりほかになかった。

「……私の先生は、今目の前にいるんだけどなあ」

そんな真白の呟きが、聞こえたとか、聞こえなかったとか。

「ちょっとよろしくて？」

「へ？」

「「ん？」」

スパルタの直人、解りやすい説明をする真白、そしてそんな二人の講義を受けてる一夏の三人は、突然話しかけられた。

三人が振り向いてみると、そこには腰まであるくらいの金髪をした、青い瞳の女性が立っていた。

「まあ！　なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

「悪いな、俺、君が誰だか知らないし」

「右に同じく」

「うん」

女性の高飛車な態度をさして気にもせず、三人は異口同音の答えを言った。

その答えがお気に召さなかったのか、両手で机を強くたたくと、興奮したような様子で言ってきた。

「わたくしを知らない？　セシリア・オルコットを？　イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

「あっ、質問良いか？」

すると、一夏が途中で口を挟んだ。

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

ポーズをとりながら、見下したような態度で言うセシリアに、一夏の口から飛び出した言葉は、

「代表候補性って、何？」

その瞬間、セシリアは凍りつき、周りの生徒たちは一斉にずっこけ、直人は頭を抱え始めていた。

「……真白、俺なんだか頭痛くなってきた」

まさかここまでＩＳ関連の知識が欠落してるとは思わなかった。

一夏のとんでも回答に、直人は最早呆れることしかできなかった。

頭を抱え込みながら後ろの方を見てみると……

「くくく……」

必死に笑いをこらえている真白がそこにいたのだった。

「あ、あ、あ…」

「あ？」

するとここで、先ほどまでフリーズしていたセシリアがようやく再起動した。

「信じられませんわ！　日本の男性というのは、皆これほど知識に乏しいものなのかしら？　常識ですわよ、常識！」

「日本中の男性を代弁して言ってやる。古今東西これほど知識が欠落してるのはこいつだけだ」

セシリアの言葉に、直人は声を上げて反論するが、一夏を貶めてることには変わりなかった。

高飛車な態度が気に入らなかったものの、さすがにこればっかりはセシリアに同調せざるを得なかった直人だった。

「でさ直人、代表候補性ってなんだ？」

「ここで俺に振らないでくれ、俺今頭が痛いんだ」

「そうなのか？　どっか具合悪いのか？」

本人にしてみれば純粋に心配しているのだが、直人はこの時、誰かに代弁してほしかった。

この頭痛の原因はお前だと。

「はぁ、まあいい。代表候補性っていうのはだな、ＩＳの国家代表の候補として選抜される実力者のことだ。まあ、在り来たりな言葉で言えばエリートってことだな。つうか単語から想像できるし、テレビとかでも結構やってるだろ」

「ああ、そう言われればそうだな」

「……やべ、俺本気で頭痛くなってきた」

最早ここまで来ると呆れを通り越して感心させられかねないが、直人の頭からは完全に頭痛しかしなかった。

「そう！　エリートなのですわ！」

ここにきて、セシリアはようやく本調子になったらしく、声高らかに言葉を紡ぎだす。

「本来なら、わたくしのような選ばれた人間とクラスを同じくすることだけでも奇跡…幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「「そうか、それはラッキーだ」」

流石義兄弟、と褒めてやりたい位、一夏と直人の言葉はシンクロした。

「……馬鹿にしていますの？」

「お前が幸運だって言ったんじゃないか」

「そうそう」

「大体、あなたはＩＳについてなにも知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。唯一、いえ、今は二人ですが、男でＩＳを操縦できると聞いていましたけど、期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されても、困るんだが……」

「そうだな、お前にそんなこと期待するのは、高望みってやつだな」

少し困った表情をする一夏に、肩に手を置いて直人がフォローした。

フォローになってないフォローではあるが、否定できないのがまた悲しいところである。

「ふん。まあでも？　わたくしは優秀ですから、あなた達のような人間にも優しく接してあげますわよ」

表情こそ変えなかったが、この時内心、直人は見下したような発言をする彼女の態度に嫌悪感を抱き始めていた。

「分からないところがあれば、まあ、泣いて頼まれたら教えてあげ

てもよくってよ？　何せ私、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「あれ、俺も倒したぞ、教官」

「……はあ！？」

一夏のまさかの発言に、セシリアは間抜けな声で聴き返してきた。

「倒したっていうか、いきなり突っ込んで来たのを避けたら、壁にぶつかって動かなくなったんだけど」

「早い話、相手が自滅したと？」

「そうなるかな。そういや、お前と真白は如何だったんだ？」

ここで、一夏は直人に、入試は如何だったかを聞いてくる。

「まあ、倒したには倒したんだが、その後訓練機のフレームがぶっ壊れてな、引き分けってことになったんだ」

「ぶっ壊れたって、整備不良か？」

「いや、俺と真白の動きについてこれなかっただけだ」

平然と言う直人だったが、この時、話を聞いていた周りの女子たちがざわめいていることには気づかなかった。

「わ、私だけと聞きましたが？」

「それって……」

「多分……」

「「女子では、ってオチじゃないか？」」

二度目のシンクロをなした二人の言葉にセシリアは再びフリーズしてしまう。

そして、やけに後ろの席が騒がしかったので、二人が振り向いてみると……

「あはははははは！！」

腹を抱えて大声で笑っている真白がいた。

直人はその姿を見るや大いに驚愕していた。

普段無表情な真白が、これほど大声で笑った事は無かったからだ。

「あっ、でもよく考えたら、真白も教官を倒してるわけだから、もう唯一じゃないな」

「ああ、そうだな」

冷静さを取り戻した直人の言葉に、一夏も頷いた。

「まさか！　貴方達も教官を倒したっていうの！？」

するとここで、再び再起動したセシリアが、一夏達に迫ってきた。

「えーと、落ち着けよ。な？」

「こ、これが落ち着いていられ――――」

キーン、コーン、カーン、コーン

ここで次の授業のチャイムが鳴った。

「…ッ！　話の続きは、また改めて！　よろしいですわね！！」

そう言って、セシリアはそのまま自分の席に戻っていった。

「何だったんだ、一体？」

「さあ？」

「はぁ、はぁ、やっと収まった」

二人で首をかしげていると、後ろで真白が腹を抱えながら喋った。
どうやらさっきまでずっと笑っていたらしい。

「あっ、そうだ一夏」

「何だ？」

一夏を呼ぶと同時に、直人は自分の参考書に付箋を貼りながらす

っごい良い笑顔で言ってきた。

「さっきの話で中断されてた分、次の昼休みのノルマにプラスするからな」

「なーーーーーーーー！！！！！」

放課後、一夏と直人、そして真白は寮に向かって進んでいた。
その後方には、無数の女子生徒たちがつかず離れずの距離でついてくる。

「はぁ、初日でこれじゃあ、先が思いやられるよ」

「同感だな」

初日は二人、特に一夏にとっては疲れる一日だったことだろう。
厳しい姉が担任で、授業にはついていけず、休み時間は直人のスパルタ勉強を受け、その上高飛車な代表候補性に絡まれて。
これで疲れるなという方が、どだい無理なことなのだろう。

しばらくして、二人はそれぞれの指定された部屋に着いた。

「ここか」

「んで、俺がその隣っと」

一夏は１０２５室、直人は隣の１０２６号室だった。
ちなみに、真白とは部屋が別の階にあるので途中で別れた。

「じゃあな、直人」

「おお、荷物纏めたら来いよ、真白が着いたら、勉強再開だからな」

「解ったよ」

こうして二人はお互いの部屋に入っていった。
部屋に入った直人の目の前には、高級ホテルの一室と見間違えるほどの寮の部屋があった。
早速直人は、二つあるベッドの一つに腰掛け、感触を確かめる。

「んー、なかなか気持ちよさそうだな。流石ＩＳ学園、うわさには聞いていたが、結構至れり尽くせりだな」

きっと一夏も同じこと考えてるんだろうなあ、などと考えていると、突然扉が開く音が聞こえた。

「ん？」

この時、直人はふと疑問に思った。
確か話では、自分は一人部屋になったと聞いていたのだ。
そしてそんな疑問を浮かべながら、音のした方向へ視線を移して

みると。

「……あっ」

そこには、タオル一枚の姿の女性が立っていた。

「あんた、もしかして……」

「失礼しました！！」

状況を確認するや、光の速さで部屋を出て行った直人。

そして少し遅れて、一夏も隣の部屋から出てきたが、同時に扉の方から木刀が一夏めがけて突き刺された。

「一夏！」

「直人！」

「どうした一夏、誰に襲われた！　鷹の目か！　カスザメか！　烈火の将か！　龍の右目か！　それとも阿修羅をも凌駕する存在か！！」

「何動揺してんだよ直人！？　ちょっと落ち着け！！」

この後、どうにかして直人を落ち着かせた後、直人と一夏はお互いの状況を確認し合った。

「つまり、部屋に入ったら先客がいて、それが箒で、しかもバスタオル一枚の姿だったから木刀でいきなり襲い掛かられたと」

「ああ。んで、お前も似たような状況だったってことか」

「その通り。少し、いや、かなりテンパった」

はぁ、と二人で同時に深いため息をついた。

するとそこへ、徐々にラフな格好の女子生徒たちが集まってきた。

この後、一夏は扉越しで箒に散々謝って、ようやく中に入れてもらったが、

「こっちの受難は終わってないんですけどーーーーーーー！！」

一夏が部屋に入るのを確認するや、今度は直人に女子たちが群がっていった。

何とか姿を見まいと必死に目を閉じており、自分のすぐ横には部屋に入る扉があるが、あんなことがあった手前入るわけにもいかず、最早壁際状態だった。

「俺、今日が厄日だったのか？」

そう言って半ばあきらめかけた、その時だった。

「おわ！」

突然扉が開き、直人はその中に引きこまれた。

「いたた、でも助かった」

そう言って立ち上がると、さっきの赤い髪の女性が、ジャージを着て立っていた。

「……すいませんでしたあ！！」

神速、まさにそう言える速さで女性に土下座をした。

「ああ良いよ、さっきのは事故みたいなもんだし、気にしてないからさ。それよりさ……」

すると女性は、さして気にしていないような口調で言うと、次の言葉を言ってきた。

「私のこと、覚えてる？」

「……は？」

そう言って、目の前の女性を見つめる。

モミジのような赤い髪に、黒い瞳、どこか元気な感じを受ける顔と雰囲気。

「……あっ」

直人は、目の前の人物にある心当たりがあった。

幼いころに出会った幼馴染たち。

だが彼女は、真白は無論、一夏も、箒も知らない。

あってさほど時間はなかったが、決して忘れることは無かった。

「お前、紅葉……紅葉なのか？」

「うん！　久しぶり、直人！」

信じられないという風に聞いてくる直人に、目の前にいる、彼の三人目の幼馴染、秋宮紅葉は、満面の笑みを浮かべながら答えたのだった。

第二話　代表候補生と紅葉色（後書き）

テンパってる時に直人が言った五人、誰が誰だかわかりますよね？

他にいいネタもなかったので、どうか貧困なこのＺＤＳに、アイデアをください！！

ご意見、ご感想、ご指摘など、どしどしご応募ください。

第三話　キレる真剣（前書き）

最近、ゲームセンターで太鼓の達人にはまってるＺＤＳの親父です。

今回で第一話分が終わります。

そして最後ら辺には、あのセリフが！

それでは、ぜひ楽しんでください。

第三話　キレる真剣

「お前、本当に紅葉か？」

「そうだよ、正真正銘、本物の秋宮紅葉だよ！」

部屋に連れ込まれた直人の目の前にいたのは、かつての幼馴染の一人、秋宮紅葉だった。

「もう十年ぐらい前かな？　しばらく見ない間に格好よくなったねえ」

「アホか、十年だぞ十年、そりゃ様変わりもするっての」

「あはは、それもそうか」

さほど気にする様子もなく、笑顔で返してくる。

「っていうか、なんでここにいるんだ？」

「あれ？　忘れたの？　私の実家がどこなのか？」

「……ああ、そういうこと」

その言葉で、直人は彼女がこの学園にいる理由がわかった。

「実家の用事か？」

「当たり♪」

彼女の家は日本でも有数のＩＳ企業「秋宮重工業」で、彼女はその社長の娘だ。
このＩＳ学園はどこの国家にも属さず、どこからも干渉されないという規約により、多国間でのＩＳの比較や、新技術の試験などに非常に適している。
大方、彼女がこの学園にいるのも、そういった理由からだろう。

「にしても、なんで相部屋になってるんだ？　確か俺、一人部屋だって聞いてたけど」

「そうなの？」

「ああ」

そんな会話をしていると、ドアをノックする音が聞こえてきた。

「おいおい、さっきの女子たちじゃないだろうな？」

「そんなことないと思うけど、ちょっと様子見てくる」

そう言って、紅葉が扉を開けてみると、そこにいたのは、

「えーっと、あなたは？」

「……」

真白だった。

「つまり、山田先生が俺とおまえの部屋を間違えたと？」

「どうもそうみたい」

真白を部屋に招き入れた後、直人と紅葉は真白から事情を聞いていた（自己紹介を済ませた後で）。

どうも山田先生が直人と真白、おまけで一夏の部屋を間違えたらしく、今は隣の部屋の前で一夏に謝り倒しているそうだ。

「って、お前はどうして来たんだ？」

「直人と一緒に寝に来た」

「ガキか」

「私、１３」

「うっ……」

それを言われて直人は黙り込んでしまう。

「別に私は構わないけど、ベッドは二つだよ？」

「ああ、お前と真白はベッドで寝ろ……っと、その前に」

そう言うと、直人は突然立ち上がり、鞄から参考書を取り出す。

「行くぞ、真白」

「うん、解った」

直人が呼ぶと、真白も立ち上がって筆記用具やらノートやらを取り出し、直人についていく。

「どこ行くの？」

「ちょっと馬鹿をしごきに」

「行ってきます」

そう言い残し、二人は部屋を後にした。

その後、何が起こったかはその場に居合わせた者たちのみが知ることであった。

次の日、普通に起きた直人、真白、紅葉の三人は食堂で朝食をとっていた。
向かい側には箒と、抜け殻に様になってる一夏がいた。
「これはひどい。直人、あんた何やったの？」
「何って、この馬鹿の頭に必要なものの五分の一を叩き込んでやったが？」
「それが何か？」みたいな口調であっさりと返してきた。
「そして今日もその五分の一を叩き込む予定だよ」
相槌を打つように真白が本日の予定（一夏の）を言う。
「直人、あれは私でもやりすぎだと思うぞ？」
「顔合わせ早々に木刀で襲いかかった奴の言う台詞じゃねえだろそれ」
一夏の勉強は彼の部屋、つまり箒の部屋で行われたので、その様子を見ていた箒は昨日の風景を思い出しながら呆れるように言った。
だが、実際問題彼女も風呂上り姿を見られたとはいえ、一夏に木刀で斬りかかったのだ、人のことは言えない。
それは察したのか、直人にそう言われた瞬間、黙り込んでしまった。
「まあ何、今日の授業の初めには復活するだろ」

と、鮭の切り身を口に頬張りながら言う。
と言うより、もしそれで復活しないようなら、容赦なくあの人の攻撃が炸裂することだろう。

「そういや聞きそびれたが、紅葉、お前何組だ？」

「あたし？　一組だけど」

「マジか！！」

そして一時間目、一夏も（ようやく）復活した。
ちなみにさっき確認してみたところ、紅葉は箒の席の近くだった。
そして、一時間目の担当は誰かと言うと……

「これより、再来週のクラス対抗戦に出る代表者を決める！」

千冬だったとさ。

「クラス代表者とは、代表戦だけでなく、生徒会の会議や委員会への出席など……まあ、クラス長と考えてもらっていい」

ようするに、クラスのまとめ役を決めようということなのだ。
しかも、一度決まると一年間は変えられないらしい。

「自薦他薦は問わない、誰かいないか？」

と、千冬が聞いてはいるものの、この時直人は、すでにこの後の展開が読めていた。

「はい、織斑君を推薦します」

「私もそれがいいと思います」

「お、俺！？」

混乱する一夏の横では、直人が「やっぱり」といった感じで顔に手を当ててため息をついていた。

すると……

「じゃあ、私は桜庭君を推薦します」

「私も！」

「……何！？」

突然、誰かから推薦され、驚く直人。

「他にはいないのか？　いないのなら多数決で決めるぞ」

「ちょっと待ってくれ！　俺はそんなのやらないからな」

「俺だってそうです！　それに俺は……」

推薦された二人は明確な拒否の意思を示す。そして、直人がさらに言葉を続けようとしたとき……

「納得いきませんわ！！」

強く机を叩きながら、この結果に反論を唱えるものが一人いた。

セシリア・オルコットである。

「そのような選出は認められません。男がクラス代表だなんていい恥曝しですわ！　このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

身振り手振りを加えながら言ってくるセシリア、だが、一夏と直人は、その言動に顔を険しくして言っていた。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、私にとっては苦痛……」

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で、何年覇者だよ」

とうとう一夏は我慢の限界に達した。隣の直人は怒りこそしていないが、顔をうつむかせておりその表情はうかがい知れなかった。

「おいしい料理はたくさんありますわ！　あなた！　私の祖国を侮辱しますの！？」

一夏の反論にセシリアも顔を真っ赤にして怒る、しばらく両者はにらみ合いを続けていたが、やがて……

「決闘ですわ！！」

「おおいいぜ、四の五の言うよりわかりやすい」

「わざと負けたりしたら私の駒使い、いいえ、奴隷になってもらいますわよ」

こうして話はどんどん進んでいるが、この時、千冬以外のものは気付かなかった。
直人の体が、小刻みに震え始めているのを……

「で、ハンデは？」

「あら、早速お願いですの？」

「いや、俺がどのくらいハンデをつければいいのかって聞いてるんだけど」

そういった瞬間、教室は笑い声に包まれた。

「織斑君、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強いなんてＩＳ登場前の話だよ？」

そう、それがこの世界の常識なのだ。
一瞬一夏は「しまったあ」と心の中で自分の失敗を自覚した。
だが、次の瞬間……

ドオォォン！！

突然、大きな音が教室全体に鳴り響いた。
一瞬、地震でも起こったような錯覚に襲われ、生徒たちは机にしがみついたりきょとんとした目で周りを見渡したりした。
いや、実際少し揺れたかもしれない。
そして暫くして、全員が音の震源地に視線を向けると……

「おい、いい加減にしろよ、お前ら……」

そこには、目が座り、どすの利いた声を放つ直人の姿があった。
しかも、さっきまでとは体勢も変わっていた。
足を大股に開き、右手に腰に差してた刀の一本を握り、それを強く床に突き刺していた。
この時誰も気づかなかったが、鞘に収めた状態で強く突き刺したらしく、その部分には小さい罅が蜘蛛の巣のように入っていた。
その姿は、さながら本陣で構える総大将のようであった。

「おい、金髪。前出ろ、前」

「な、何ですの？」

ゆっくりと立ち上がりながら、直人はセシリアを呼ぶ。
だが、彼の醸し出している雰囲気はさっきまでとは打って変わり、明確な怒りがこもっていた。
その姿と相まって、それはまるでヤクザ、極道のようであった。

「その決闘、俺も受けて立ってやる。いくらハンデをつけてほしい？」

直人はそういうが、一夏の時とは違い、笑いを巻き起こらなかっ

た。

誰もが、今の直人の姿に恐れを抱いていたからだ。

「い、いりませんわ！　この私が、あなたたちに負けるわけがありませんもの！！」

「いや、つけてもらった方がいいよ」

ここで口を出したのは、真白だった。

「どういうことですか？」

「直人はあなたとは格が違うから。ＩＳも、技量も」

「ちょっ！　それはどういう……」

「おい真白。あんまりべらべら喋るな」

「ん、解った」

セシリアの言葉を、直登の言葉が遮った。

そのどすの利いた声におびえもせず、淡々と真白はしゃべり続けた。

「でもこれだけは言っておく、このクラスで直人に勝てる人は万に一つもいない。あなたも、副担任の山田先生も勝てない。もし勝てる人物がいるとすれば、織斑教諭しかいないよ」

『えええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！』

このカミングアウトに、一年一組が揺れた。
まあ当然だろ、彼女のカミングアウトは要点を言えば「直人の実力はクラス一」と言うことになるのだ。

「言ってくれますわね」

「事実だもん、それでもいらないっていうなら構わないけど？」

「結構です！！」

「そうか、なら一つだけ言っておく」

セシリアの返答を聞くと、直人は先ほどの雰囲気を出しながら、セシリアに言ってきた。

「お前が俺たちをどう思おうがそんなのは勝手だ。だがな、一夏を、俺の義兄を浅い思慮で侮辱することは許さん」

「なっ！　浅い思慮ですって！」

「そうだ、その浅い思慮と傲慢で一夏を侮辱するなら、俺が容赦なくたたっ斬る！　剣の腕と心を教えてくれた師匠と、俺の魂であるこの菊一文字ど虎徹にかけて……」

言葉区切ると、彼は懐から三日月のエンブレムをしたネックレスを取り出し、言った。

「この俺の、ＩＳ（刃）でな！」

第三話　キレる真剣（後書き）

ようやく第一話分が終わりました。

ただせっかく書いても感想が来ないので結構不安です。

読んでいただいてる方、どんな些細なことでも構いませんのでご感想をください！

さて、次回から第二話目です。

頑張って書くぞー！

第四話　義兄弟（きょうだい）の絆、降り立つ白（前書き）

アニメ第二話目の始まり始まり。
バトルは次の回です。
とりあえず、どうぞ

第四話　義兄弟（きょうだい）の絆、降り立つ白

クラス代表選出は、セシリアと一夏、直人との決闘と言う形で決まることになった。
期限は一週間後、第三アリーナで行われることとなった。

尚、一夏のＩＳは予備の機体がなく、専用機が宛がわれる事となっている。
本来専用機は、国家、或いは企業に属する者にしか与えられないが、一夏の場合、状況が状況なので、データ収集を目的として与えられることとなったのだ。

そして今、一時間目終了後の休み時間の教室では。

「なんとまあ、勇み良いと言うか無謀と言うか……」

そう席に座りながらため息をついたのは紅葉だった。

「ねえねえ、篠ノ之さん」

「何だ？」

紅葉は前の席の箒に語りかける。

「織斑君と直人って、いつもあんな感じだった？」

「まあ、一夏は昔から女性に媚びるような事はしなかったが、まさか代表候補生に勝負を挑むとは……」

「いや、まあ、気持ちはわかるけどね。あんなに明らかに見下したように言われちゃあ、私が同じ立場でもムカついてるよ」

頭を抱え込む箒に、紅葉はフォローを入れる。

確かにあのセシリアの態度は腹を立てるには十分すぎるものだ。

「それに、直人も変わってなかったしな」

「そうなの？」

「ああ、一夏を馬鹿にされると、ああいう風にキレてたな。あそこまで静かに怒ってはいなかったが」

「ふうん」

箒は昔を思い出すように喋り、紅葉もそれをじっと聞いている。

「ところでさ……」

すると突然、紅葉はそう言いながら、視線を横の方に向ける。

「あれ、何だろう？」

「知らん」

視線の先には、三つの籠を席の上に置いている真白だった。

「ねえ真白ちゃん、何してるの？」

気になった紅葉と箒は真白の席に移動して聞いてみた。

「賭け」

「賭け？」

「うん、誰が勝つか」

三つの籠にはそれぞれ、「セ」「一」「直」と書かれた紙がセロハンで貼ってあった。

「ちなみに発想者はあの子」

そう言って指差した先に居たのは、のんびりした雰囲気の女子だった。

「まあ、結果は予想通りだけどね」

「相手は代表候補生、普通に考えれば、これは当たり前かな」

籠の中身を見てみると、「セ」と書かれた籠に十円玉から五百円玉まで差はあれど多くの硬貨が集まっていた。

「この一万円札は誰が入れたんだ？」

箒が指差した先には、「直」と書かれた籠に入っている一万円札があった。

「それ、私」

「嘘！？」

驚きの声を紅葉があげた。

「良いの！　負けたら大損じゃん！！」

「大丈夫。勝つのは直人だから」

「随分自身があるな、根拠はあるのか？」

何やら確信めいたように言う真白の態度が気になった箒が問い詰める。

「私知ってる。直人のＩＳの事も、直人が旅の間してきた努力も」

そう聞いた途端、二人の中からこれ以上何かを問おうという気は消えて行った。

「……そういえばさ」

ここで紅葉が気になったことを一つ口にする。

「その問題の二人はどうしたの？」

目の前の席にいるはずの一夏と直人はそこにいなかった。

本来だったら、あの鉢巻をまいて一夏を扱く直人の姿がそこにあろうはずなのだが。

「二人なら、さっき教室を出て行ったよ」

「何、どうしてだ？」

「解んない。織斑が直人を呼んで、そのまま二人で行っちゃった」

「何なんだろう?」

紅葉の疑問に答えるものは誰もいなかった。

その頃、肝心の二人、一夏と直人は屋上に来ていた。

「なあ、話ってなんだ?」

「ちょっとな」

一夏に「大事な話がある」と呼ばれ、直人は一緒に屋上に来ていたのだ。

「早く済ませろよ。って言うか、お前こんなことしてる余裕ないんだぞ」

「解ってるよ」

至極まっとうなことを言う直人だが、振り返った一夏の瞳を見て、ただの世間話の類じゃないことを悟った。
そしてしばらく黙っていると、一夏が口を開いた。

「直人さ、さっきの授業の時なんだけど……」

「おお」

授業の時、恐らく一夏が言ってるのは、直人が切れた時のことを言っているだろう。

「あの時、お前……昔に戻ってたぜ」

「！！！！」

その言葉を聞いた瞬間、直人は大きく動揺した。
昔の彼、それは最も忌むべきものだからだ。

「そう……なのか？」

「一瞬だったけどな、何か、雰囲気的に」

「そう……か」

そう呟くと、直人は顔に手を当てる。
表情は見えないが、何か愁いを帯びてるようだった。
それからしばらく、二人の間を重い沈黙が支配する。

「でもさ、安心したよ」

「えっ？」

しかし、その沈黙を破ったのもまた、一夏だった。

「何年経っても、直人は直人なんだなって思えてな」

「それ、褒めてねえ」

「いや、褒めたつもりもねえし」

あっさりと返してきたが、直人にはその返事が、どこか嬉しかった。

「まあ、別に責めてるわけじゃねえんだ。俺のために怒ってくれたのはわかってるしな。でもな……」

そこで直人の肩に手を置き、言葉を続けた。

「あんまりやりすぎるなよ。俺のために怒ってくれるのは嬉しいけど、その所為でお前を孤立させたくねえしな」

「一夏……」

その言葉に、ふぅと軽く息を吐きながら、直人は向き直っていった。

「解ったよ、他ならぬ義兄（お前）の頼みだしな」

直人がそう言うと、二人は互いの拳を軽くぶつけ合った。

二時間目、三時間目の授業を終え、昼休みに昼食をとってる間、一夏、箒、直人、真白、紅葉の五人で一夏のＩＳ練習をどうするかについて話し合った。

とりあえず動かすのに必要な基礎体力を見極めるために、放課後に剣道で箒と勝負をすることになり、今まさにその様子を残りの三人が見ていたわけなのだが……

「これは……」

「ＩＳ以前だね」

「論外」

三人の辛辣な言葉が道場に響く。

無論、その元凶は……

「いてて……」

目の前にあるわけだが。

「どういうことだ」

「どうって言われても」

「「どうしてそこまで弱くなっている（んだ）！！」」

見事に箒と直人の言葉がシンクロした。

この三人は小さいころから剣道をやっており、一夏も二人には劣っていたが、それでもそこそこ強かった。

だがどういう訳か、今の彼はその時以上に弱くなっている。

相手が大会優勝者となるほど強くなっていることを差し引いてもだ。

「ねえ、織斑君。中学の時、何部に所属してたの？」

「帰宅部、三年連続皆勤賞だ！！」

それを聞いた瞬間、真白と紅葉は同時にこけた。

そりゃ、弱くもなるわけだ。

「……の……」

「ん？」

「この、あほんだらーーーーー！！」

刹那、やり投げの要領で投げた直人の竹刀が、一夏の額を直撃した。

「へぶっ！？」

そして、それを喰らった一夏はその場に倒れ伏してしまう。

「箒、後頼む」

「解った」

そう言って直人はその場を後にし、真白もその後をついていった。
唖然とする紅葉と妙にやる気満々の箒、そして気絶から目を覚ました一夏を残して……

そして一週間、一夏を鍛え上げながら、ついに迎えた、クラス代表決定戦の日。
五人は第三アリーナのピットにいた。

だが、直人の表情は憮然としていた。
そしてその元凶である箒を睨む。

「何か言うことはあるか？」

「……」

直人の問いに何も答えず、箒はただ目をそらす。
それを見て、腹を立てるでもなく、呆れながら言った。

「いやな、お前のやったことが無駄とは言わん。確かにＩＳを動かすのに体力は必要だし、今のこいつはそれ以前の問題だってのも解ってる。でもな……」

一区切りつけた後、再び勢いをつけて喋りだす。

「この一週間剣道の稽古しかしてこなかったってどういう事だ！お前は一夏を勝たせる気がないのか！！」

「し、仕方ないだろ！　お前はともかく、一夏のＩＳはまだ届いてないんだから！」

「だったら訓練機でも借りて、最低限の動き位マスターさせろ。っていうか、それならＩＳでやった方が確実にこいつのためになっただろう！！」

「うっ……」

確かにそうだ、同じ稽古をやるにしても、ＩＳを装着してやった方が動きも覚えるし体力も普通に稽古するよりつくだろう、まさに一石二鳥のはずだ。
最も、やりすぎで体を壊すようでは元も子もないが、そこは紅葉もいるので適度に休憩をとれただろう。

「まったく、知識に関しては俺と真白で叩き込んでやったが、どうするんだこれ」

「どうもこうも、今さら終わったことをぐだぐだいってもしょうがないよ」

「それはそうだが……」

真白の言葉に同意しつつも、直人の頭には、最早一夏が敗北した時の光景しか頭になかった。

無論、どのような光景になるかなど言わずもがなだ。

「大丈夫なのか？」

「まあ、駄目で元々でしょ」

「駄目すぎるだろ」

紅葉の言葉に、直人は冷ややかに突っ込む。

「んで一夏、どうするんだ？」

「どうするって？」

「先に行くか？　不安なら俺が先に行くが」

今尚到着してないことを考えると、一夏が戦うとなれば、確実に『初期化（フォーマット）』と『最適化（フッティング）』を行わない初期状態で戦うことになるだろう。

もしこれで自信がなければ、直人は自分から行こうというのだ。

「いや、俺が先に行くよ」

「良いのか？」

「ああ、せっかく直人や箒が俺のためにいろいろ教えてくれたしな、その期待に応えてやらねーと」

「そうか、お前がそういうのなら、もう何も言わない」

そうして会話を終えると、五人は表示されてるディスプレイに目を向ける。

映像には、すでにＩＳを展開させて飛行しながら待つセシリアの姿があった。

「あれがあいつの専用機か」

「イギリスの第三世代型ＩＳ『蒼い雫（ブルー・ティアーズ）』」

「真白、知ってるのか？」

「先生から名前だけ聞いた」

「お前ならその先も知ってそうで怖いよ」

そんな風に軽口を叩いていたが、直人は内心心配だった。

手に持ってるライフルと周囲に浮いてる細長い武装を見て、彼女のＩＳは遠距離戦に特化したものだと容易に想像がついた。

しかし反面、一夏はこれまでの経過を鑑みるに、戦闘は近接主体とならざるを得ないだろう。

つまり、相性が最悪なのだ。

（うまく懐に入れれば勝機も生まれるかも知れないが、相手は代表候補生、そう簡単に間合いに踏み込ませてはくれないだろうなあ）

やっぱり自分が先に行くべきだったか？　と言う考えが頭をよぎり始めたその時、

《織斑君！　織斑君！　織斑君！》

突如、山田先生のアナウンスが響く。

《来ました！　織斑君の専用ＩＳ！！」

《織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使える時間は限られている、ぶっつけ本番でものにしろ》

（相変わらずむちゃくちゃ言うなあ。ま、そうするしかないけどな）

直人がそう心の中でつぶやくと、搬入口の扉が開く。

そして、扉が開いたその先に、先ほど到着したＩＳがその姿を現す。

《これが、織斑君の専用ＩＳ　『白式』です！》

白式、名前の通り、白、とは若干言い難い色のＩＳがそこにあった。

「ほうほう、中々いいじゃん」

すると紅葉が顔を覗かせ、機体を見ながらそう呟いた。

「解るのか？」

「私はＩＳ企業の社長の娘だよ？　小さいころから見てきたから、見ただけでいい機体なのかどうかすぐわかるよ」

一夏の問いかけに、あっけらんとばかりに応える。

「そんなことより一夏、さっさと装着しろ、時間ないし」

「あ、ああ」

直人に急かされ、教師陣の指導を受けながら、一夏は白式を装着する。

「よし、行って来い！」

「そして勝ってこい！」

「ああ！」

二人の声援を受けて、一夏は大空高く飛び立った。

第四話　義兄弟（きょうだい）の絆、降り立つ白（後書き）

うーん、今回は結構文章滅茶苦茶かも。

まあ、一番書きたかった前半が書けたから、良いっちゃ良いんだけど。

えー、何度も言っていますが、どこが悪かったのかとか、どこが良かったのか、意見や感想を遠慮なく申し上げてください。

次回もよろしく。

第五話　光る刃、乱れ舞う桜（前書き）

いよいよ主人公のＩＳの登場です！

どんな戦いをするのか、そしてどんな勝負になるのか、楽しんでいただければ幸いです。

ただ自分、描写がまだまだなので、その辺は期待しないでください。

それではどうぞ。

第五話　光る刃、乱れ舞う桜

結論だけを言うと、勝負は一夏の敗北で決着した。

序盤は誰もが予想した通り、セシリアの優勢で戦いが展開された。遠距離主体の彼女に対し、近接武装しかない一夏は防戦一方で追いつめられる。

それでも善戦し、さらに白式が第一形態移行（ファースト・シフト）を終えると、形勢は一気に逆転した。

だが、あと一歩と言うところでシールドエネルギー残量がゼロになり、勝敗が決したというわけだ。

理由は二つ、一つは、序盤に攻撃を受け過ぎたこと。

そしてもう一つが……

「零落白夜か……」

そう直人はため息をつきながら呟いた。

もう一つの原因は、直人が先ほど言った、白式の単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）、「零落白夜」だ。

これは、対象のシールドエネルギーを消滅させるという能力を持ち、バリアを無効化して、相手のシールドエネルギーに直接ダメージを与えるという代物だ。

だが、これは自身のシールドエネルギーをかなり消費するため、

これと序盤の損傷が、敗北につながったのだ。

「つまるところ、装備の特性を理解しなかったからと言う訳か」

「そう言うことになるな」

「まあ、浮かれすぎてたのも敗因だな。手が閉じたり開いたりしてたし」

直人の簡潔した答えに、千冬も肯定の言葉を言い放ち、さらに直人が辛辣な言葉をぶつける。

ちなみに手が閉じたり開いたりするのは一夏の癖で、この動作をする場合は初歩的なミスをするのだ。

「でもまあ、かなり危うい状態であそこまでいけたわけだし、上出来だと思うよ、私は」

「うん」

紅葉と真白が、辛辣な二人に対し一夏をフォローする。

二人の言うことも最もだ。

片や実績ある代表候補生、片や今回を含め二回しか起動していないズブの素人。

しかも、序盤は初期化と最適化すら終わってない状態で戦闘していて、それであと一歩のところまで食いついたのだ。

勝利を逃したとはいえ、始めとしてはかなり上々だと言ってもいいだろう。

「それより桜庭、次はお前だぞ」

「はいはい、解ってます」

千冬に促され、直人は首に掛かってる三日月型のネックレスを取り出す。

すると、そこから光が発せられるとともに、直人は桜の花びらのようなものに包まれる。

そしてそれが晴れると、そこに光沢を帯びた灰色のＩＳに乗った直人がいた。

「それが……」

「ああ、俺のＩＳ「灰桜（かいおう）」だ」

その姿を見た一夏に、直人がにやりと笑っていった。

胸部には仏胴を思わせる丸みを帯びた装甲に、肩に装備された装甲。

そしてその右手と肩の装甲に装備された、計五本の刀。

さながら、日本の鎧武者のような姿だった。

「ふっ、お前らしい姿だな」

「まったくだぜ」

「ああ」

「それ、褒めてるの？」

千冬、一夏、箒の呟きに、どことなく苦笑が混じってるような気がした直人が聞き返す。

三人は何も言わなかったが、さほど気にも留めず、直人は準備をする。

「じゃ、弔い合戦といきますか。ああ、それと一夏」

「何だ？」

出る直前、直人が一夏を呼び止める。

「しっかり見ておけよ、俺の戦いぶりを。お前のためにもなるからな」

そう言うと、直人は飛び立った。

「来ましたね」

先の戦いで失った装備の補充を終えたセシリアが空中で待機していると、太陽の光に照らされて、ＩＳを纏った直人が現れた。

「待たせたな」

「いいえ、それより、貴方はどうします？」

「どうって？」

「先ほどのように、今謝るというのなら、許してあげないこともありませんよ」

これは、一夏の時も言っていたことだ。

無論、彼は突っぱねたが。

「あのなあ……」

それを聞いた途端、ゆっくりと地上に足をついた直人は呆れるように言った。

「あんな啖呵きっといて、今さら降参なんてするか？　それにな……」

そして、手に持ってる刀を構えながら、言葉をつづけた。

「義兄が、俺よりずっと不利な立場で戦ったんだ。ここで俺が逃げ出しちゃあ、師匠にも、義兄（一夏）にも、合わせる顔がねえんだよ！！」

「なら……お別れですわ！」

そう言った直後、セシリアはレーザーライフル「スターライトｍｋ？」を構え、四基の自律兵装「ブルー・ティアーズ」を展開する。

「さぁ、踊りなさい！　私、セシリア・オルコットとブルー・ティ

アーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で！」

そういった刹那、に攻撃、五本の光線が、一気に直人に襲いかかり、着弾と同時に土煙が舞った。

（当たった！）

そう思ったが、すぐにそれは間違いだと気付いた。

「もらったーーー！！」

「なっ！」

突然、後ろから振りかぶった直人が斬りかかったのだ。

間一髪のところでかわしたが、掠ったらしく、僅かにシールドエネルギーが削れた。

「あ、貴方！　一体どうやって！」

「どうやってって、普通に前進した後飛んで、斬りかかっただけだが？」

驚きを隠せないセシリアに、直人は平然と答えた。

「くっ、それなら！」

すると今度は、自律兵装で攻撃を仕掛けてきた。

だが、直人はそれに慌てず、全身のスラスターを稼働させて回避運動に徹する。

全方位からくる攻撃を見事にかわす直人には、直撃どころがかすりもしなかった。

「もらいましたわ！」

そういうと、二つの光が襲い掛かる。
止まるところだったため回避は不可能と思われた。

「……ふっ」

そう直人が不敵に笑った途端、驚きの事態が起きた。
腰の装甲が左右９０度展開し、スラスターを稼働させる。
すると、突然方向転換し、その攻撃をかわしたのだ。

「嘘っ！」

まさかの事態に、セシリアは再び驚きの声を上げる。

「どうした？　まさかこれだけってわけじゃないよな？」

「あ、当たり前ですわ！！」

直人の挑発で我に返ったセシリアは再び攻撃を開始する。
だが、直人はそれをただかわすだけだった。

「す、すげー……」

二人の戦いを見ていた一夏は、驚きの声を上げる。

しかし、驚いているのは箒と紅葉、そして管制室にいる山田先生と千冬も同じだった。

「おい、風花」

「はい」

すると通信で、千冬は真白を呼び出した。

「データでも見せてもらったが、何だあのＩＳは、確かに機動力と加速能力に優れている様だったが、それにしてもあれは異常だぞ」

そう、戦闘前に開示されたデータでは、灰桜は近接戦闘型で、機動性と加速能力に関しては優れているを通り越して異常と言わざるをえなかった。

「織斑先生、直人が戦闘において心がけていることは知ってますか？」

すると、真白はそう聞き返してきた。

それに間を置かず、千冬は答えた。

「奴は昔から、先手必勝と一撃必殺を心掛けていたな。相手がどんな手を持っていようと、先に仕掛けることで機先を制し、尚且つ一撃で仕留めることで、それも意味をなさなくする」

「そうです。しかし、実戦ではそう簡単に距離を詰めれるわけではありません。ましてＩＳの戦闘は高機動戦闘です。セシリア・オルコットのように、距離を取って戦うタイプとはまさに水と油、相性は最悪です」

先ほどの一夏など、第一形態移行（ファースト・シフト）を済ませるまでは全くの防戦一方だったわけであるから、その通りと言っても過言ではない。

「ならどうすればいいか、簡単なことです、相手が反応できないほどのスピードで近づけばいいのです。その為に灰桜には、背部の高出力メインスラスターのほかに、肩の装甲に加速用のブースター、腰部装甲と脚部に推進方向を自在に変えられる偏向スラスターが装備されています。もしこれを前方に移動する目的で、このスラスター全部を展開すれば……」

「そのスピードは計り知れないな」

「はい。最も、考えなしに直球で突っ込むほど、直人も馬鹿ではありませんから、ここぞというとき以外は使いませんけど」

「ちょっと待って」

ここで紅葉が待ったをかけた。

「たしかにそれだけスラスターを装備すれば、機動力と加速能力は

約束されるけど、その分、搭乗者に掛かるGは相当なものの筈だし、エネルギーの消費だって大きいんじゃないの？」

紅葉の言葉に、真白は頷きながら答えた。

「確かにそうだよ。でも、灰桜には、重力質量と慣性質量を別個で変化させる装置が搭載されていて、高効率の推進を可能にしているの」

「そ、そんな装置があるの！？」

「灰桜の製作者が作ったの、まだ実験段階って言ってたけど」

「あれで……」

真白の言葉に、紅葉はただ唖然とするばかり。

「それだけじゃない、エネルギーの大半を推力に回した結果、その他の性能は第二世代型と同クラス、良くてもラファール・リヴァイヴと同じ位になってしまったの」

「それでこんな性能なのか」

真白の説明に、灰桜の性能票を見ながら箒が呟いた。

「そして、紅葉の言うとおり、確かに莫大なGが搭乗者に掛かる。だけど、直人はそれを乗りこなした」

その言葉に、誰もが息をのんだ。

それが意味するところは、一つしかないからだ。

「灰桜はまさしく、正真正銘の直人専用機。仮に他人が乗って動かそうものなら、そのGとスピードに翻弄されて気絶、酷いと全治一か月はお約束できる」

「全治……」

「一か月……」

箒と紅葉がその言葉に、唖然とする。

だがそんな中で、一夏と千冬は、直人の戦いをしっかりと見つめていた。

「もうそろそろいいか」

そう言うと、直人は回避一辺倒だった動きをやめ、上空に舞い上がり制止する。

これまでの戦いで直撃こそしていないが、ところどころ掠っており、シールドエネルギーは三分の二ぐらいまで減っていた。

「あら、もう観念いたしましたの？」

「いや……」

セシリアの質問に反論すると、直人は続けて言った。

「お前の円舞曲（ワルツ）の終了時間だ！」

そう言うと、肩の装甲に装備されていた四本の刀がはずれた。

「行け！　安綱！　國綱！　光世！　恒次！」

そう言うと、四本は一斉に飛び散り、直人の周囲を飛び回る四基のブルー・ティアーズを一瞬で切り裂いた。

「そんなっ！」

その光景に思わず声を荒げるセシリア。

そんな彼女を無視して、直人はしゃべり始めた。

「悪いが、俺はワルツなんて高尚なものは踊れないが……」

「剣舞ならいくらでも舞ってやるぜ！」

そう言うと、四本が一斉にセシリアに襲いかかった。

そのスピードにセシリアは反応しきれず、四方から襲い掛かる刀の攻撃にどんどんシールドエネルギーが削れていった。

（こ、このままでは……）

徐々に焦りが見え始めたその時、一気に直人が近づいてきた。
全身のスラスターを展開し、一気に距離を詰めようとする。

「速い！　でも、直線なら！！」

そういうと、腰のブルー・ティアーズから、ミサイルが発射された。
このままでは、確実に直撃するはずだった。
だが……

「安綱！　恒次！」

直人がそう言った瞬間、二本の刀によってミサイルは切り裂かれてしまった。

「一意専心！！」

そう言うと、手に持っている刀「三日月宗近」の刀身がエネルギーに覆われていた。

そして……

「チェストォォォオ！！」

その掛け声とともに、宗近を思いっきり振り下ろした。

そして交差の後、しばらくの沈黙が続いたが、その沈黙を破った

のは……

「一刀、両断！！」

直人だった。

《勝者、桜庭直人！！》

そして、試合の終了を告げるブザー音とアナウンスが鳴り響いた。

第五話　光る刃、乱れ舞う桜（後書き）

いかがだったでしょうか？　ちゃんと書けたか不安ですが、楽しんでいただけたなら幸いです。

ちょっと主人公無双になってしまった感はありますが、どうですか？

灰桜の武装は、知ってる人は知ってるかも、次は本編とキャラ、ＩＳ紹介を載せますので、その時にばらそうかと。

本編は第二話の終わり、後話です。またオリジナルをはさみます。

オリジナルキャラ、ＩＳ紹介（前書き）

キャラ紹介と直人のＩＳ「灰桜」の説明をします。

ここでいうＩＣ（イメージキャラクター）とは、外見的なものなのでそこを留意してください。

オリジナルキャラ、ＩＳ紹介

桜庭直人　（さくらばなおと）

性別：男

年齢：１５

髪：灰色っぽい銀、長髪（肩甲骨のあたり）。

瞳：灰色

好きなもの：織斑姉弟、時代劇

嫌いなもの：一夏または千冬を穢すもの、馬鹿の仕掛ける悪戯

趣味：鍛錬、刀の手入れ

性格

質実剛健

自分を誇らず対等に接してくる為、驕りや傲慢とは無縁。
義侠心と正義感が強く、卑劣な行為を嫌う。目上、年上には基本敬語。
怒ると口調が荒くなり、本気でキレると静かに、だが荒々しくなる（一夏曰く「極殺モード」）。
他人の気持ちには極めて敏感だか、自分に対する好意に関しては一夏と同レベル。

備考

千冬の剣道の弟子で、プライベートでは彼女を「師匠」と呼び慕う。

旅の途中である人物に鍛えてもらった経緯もあり、剣術に関しては達人級の腕を持つ。

「先手必勝」と「一撃必殺」を心掛けており、示現流の達を好んで使う。

腰に差してある刀は「菊一文字」と「虎徹」。

イメージキャラクター：ＢＬＥＡＣＨ　黒崎一護（髪型は機動戦士ガンダム００のミハエルみたいな感じ）

イメージキャラクターボイス：森田誠一（ＢＬＥＡＣＨ　黒崎一護、戦国ＢＡＳＡＲＡ前田慶次、ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ　不死鳥マルコ）

風花真白　（かざはなましろ）

性別：女

年齢：１３

髪：白、光沢あり、腰に届くほどの長髪

瞳：黄色

好きなもの：直人、甘いもの

嫌いなもの：直人を傷つけるもの、居場所を奪われる事

趣味：銃の手入れ、読書、お菓子作り

性格

冷静沈着

無表情で感情表現に乏しい。
基本的に誰に対しても無口なのだが、直人には比較的素直に受け答えしている。
強い意志を秘めており、事自分の居場所（直人）を奪われることに関しては抵抗し、それを傷つける、或いは貶すものには一切容赦がない。

備考

射撃を得意としており、拳銃を六丁、アサルトライフルを二丁、スナイパーライフルを一丁持っている。

ＩＣ：スーパーロボット大戦ＯＧ　ラトゥーニ・スゥボータ

ＩＣＶ：高垣彩陽（機動戦士ガンダム００　フェルト・グレイス、デルトラクエスト　ジャスミン）

秋宮紅葉　（あきみやこうよう）

性別：女

年齢：１５

髪：紅葉色（ちょっとオレンジっぽい紅）

瞳：黒

好きなもの：友達、ＩＳ弄り、甘いもの

嫌いなもの：Ｇ（ある虫の隠語）、暗いところ、怪談話

性格

明朗快活

明るく社交的で誰とでも仲良くできる、時々周りをまとめるリーダーシップを発揮することも。

真白と同様強い意志の持ち主で、一度決めたことは絶対やり遂げる、よく言えば実直、悪く言えば頑固。

備考

ＩＳ企業「秋宮重工」の社長の娘のため、ＩＳ関連の知識量はトップクラス。

直人の幼馴染だが、彼と一緒にいた期間は一か月足らずで、しか

もたいてい彼が一人の時だったため、一夏や箒の事は知らなかった。

ＩＣ：探偵オペラ　ミルキィホームズ　銭形次子

ＩＣＶ：林原めぐみ（スレイヤーズ　リナ＝インバース、ポケットモンスターシリーズ　ムサシ、ロストユニバース　キャナル・ヴォルフィード）

ＩＳ紹介

灰桜　（かいおう）

世代：第四世代

待機状態：三日月型のネックレス

形状

鎧武者のような出で立ちで、胸部に丸みを帯びた胸当て、両肩に装甲を装備しており、背部に高出力のメインスラスター、両肩の装

甲に加速用ブースター、腰と両脚にの装甲に偏向スラスターを装備している。

詳細

近接戦闘特化型。
「先手必勝」と「一撃必殺」を旨とする直人専用に調整されており、特に体各部にあるスラスターと、重力・慣性質量を変化させる特殊装置により、相手が反応しきれないスピードを誇り、機動性・加速力に関してはＩＳトップクラスの性能を誇るが、その他の性能は第二世代型とさして変わらない。

武装

三日月宗近　（みかづきむねちか）

本機体の主力武装で右手で保持して使用する。
斬撃特化の近接武装だが、装甲を展開してエネルギーを放出、纏うことで強化したり、エネルギーの刃を飛ばすことができる。

童子切　（どうじぎり）・鬼丸　（おにまる）・大典太　（おおてんた）・数珠丸　（じゅずまる）

両肩に装備される四本の刀。鍔にあたる部分に三基のバーニアを装備している点を除けば、構造上は宗近と同じ。
自律兵装として飛ばすことが可能、こちらは半自動制御となっているため、少し意識するだけでその方向に自動的に飛んでいき攻撃を加える。
また、このうち一本を左手で持つことで二刀流として使ったり、万が一宗近が使えなくなった場合の予備兵装としての側面も持つ。

オリジナルキャラ、ＩＳ紹介（後書き）

名称はすべて天下五剣からとらせていただきました。

イメージキャラは、ほとんど思いつきに近かったですが、自分ではかなりマッチしてると思います。

第六話　真剣の思い、真剣の誓い（前書き）

昨日の時点で、ＰＶアクセス数が一万を突破しました。

多くの方々にご愛好いただいてるようで、誠にうれしい限りです。

今回は戦闘後のお話、ここで直人にフラグが立ちます。

それでは皆さん、今後とも、「桜の花纏う真剣」を、よろしくお願いします。

第六話　真剣の思い、真剣の誓い

「っ……」

「大丈夫？」

「ああ、まあな」

クラス代表決定戦が終わり、空がすっかりオレンジ色に染まったころ、五人はアリーナから出て寮に向かっていた。

試合の終了後、難なく戻ってきた直人だったが、灰桜のスピードに身体が少し悲鳴を上げてるらしく、体が軋む感じが彼を襲っていた。

「駄目だな、ほんの一か月と半月動かしていなかっただけで身体が悲鳴を上げるなんて」

「無理ないよ、あれのスピードは半端じゃないんだから」

「と言うより、よくそれで済んでるな」

ポキポキ鳴らしながら肩を回してぼやく直人に、仕方ないとばかりに言う真白と、少し呆れる箒。

普通の人間が乗れば、一か月病院おくりにできる代物を使ってこれなのだから、この三年間、相当鍛えたことが窺える。

「って言うか、動かしてなかったのか？」

「と言うより、動かす必要がなかったってのが正しいな。しかし、

これじゃいかんな」

一夏の質問に平然と答えながらも、直人はそう声を漏らした。

「これからいろいろこいつに教えなきゃいけないのに、これじゃ不味いよな」

そう呟いて少し考えた後、直人は意を決したように言った。

「真白。悪いけど、一夏の勉強、今日はお前一人で教えてやってくれ」

「良いけど、直人は？」

「ちっと鈍った体を鍛えなおそうと思ってな」

そう言うと、軋む体に鞭打って、直人はさっさと戻ってしまった。

「と言う訳だから、後で部屋に寄らせてもらうけど。良い？」

「ああ、別に構わないが」

直人が去った後、真白は部屋の主である箒に許可を取る。

特に断る理由もない、寧ろ必要なものであることもあり、箒もあっさり許可を取る。

「にしても、これで直人がクラス代表かあ」

「いや、それはないと思うぜ」

「「うん、うん」」

クラス代表に直人がなるであろう事を紅葉が呟くと、一夏がその予想を否定し、箒と真白もそれに頷く。

これに紅葉はきょとんとした。

「何で？　だって織斑君が最初に負けて、次に直人が勝ったわけでしょ？　クラス代表には直人がなるんじゃ……」

「いや、直人の事だからな、あいつならきっと……」

所変わって、ここは寮の部屋の一角。

一夏達の部屋とは違う、豪華と言う言葉が似合いそうな部屋のシャワールームから、一人の女性が出てきた。

セシリア・オルコットである。

彼女は今回の戦いのことで、二人の人物の事を考えていた。

一人は織斑一夏

勝負は自滅に近い形で彼に勝ったものの、なぜか彼の事ばかり考えていた。
だが、彼以上に心惹かれる人物がいた。
それが二人目、桜庭直人だ。
自分に勝ったという事、彼の明らかに卓越した操縦技術にも驚かされた。
しかし、何より印象的だったのは、彼の目だった。
一夏と同じように、決して誰にも媚びない強い瞳。
だが、直人の瞳には、それとは別の何かがあるように感じた。
（あの目は、一体。それに……）
それと同時に、先ほどから彼の事を思うたびに、胸の鼓動が高鳴るのを感じる。
（どうしてですの？　この気持ちは一体……）
その正体が気になり、窓に手を置きながら外を見ていた時だった。
「……あら？」
下の方に視線を落としたとき、その人物が視界に入ってきたのだ。
剣道着に身を包み、腰に日本の刀を差して移動する、直人の姿が。
（一体、何ですの？）
先ほどの疑問の事もあり、非常に気になったセシリアは、手早く

着替えると、部屋を後にした。

「んー、この辺でいいか」

辺りを確認しながら呟くと、直人は腰から一本の刀を抜く。
刀の銘柄は「菊一文字」直人の愛刀にして、新撰組一番隊隊長、沖田総司が使っていたとされる刀だ。

それを抜くと、直人はそれで素振りを始めた。
一回、また一回と刀を振るたびに、鋭く風を切る音がする。
しかし、それと同時に、灰桜のスピードによる体の軋みが直人を襲う。
しかし、それを苦にもしてないように、直人はひたすら刀を振り続けるのだった。

そして、それを物陰から見つめる人物がいた。

直人の姿を見かけ、部屋を出てきたセシリアだった。

「……」

セシリアは少し驚いていた。
剣術に詳しくない彼女でも、一目で解る程、鋭い風切り音のする素振りを、一心不乱に行う。
そんな彼の姿に見惚れていたのだ。

「ふぅ……」

しばらくすると、彼は素振りをやめ、ため息をつく。

「やっぱりちょっと鈍ってるな。身体もあちこち痛いし、素振りも少し悪くなってるな」

（えっ！　鈍ってる！　あれで！！）

さっきの言葉に、声にこそ出さなかったものの、胸中で驚きの声を上げるセシリア。
だが、彼の前ではそれがいけなかった。

「誰だ！」

気配を察し、直人は刀を構えながらすごい剣幕を放つ。
その剣幕に、思わずセシリアは物陰から出た。

「あっ、何か用？」

相手がセシリアだと解ると、先ほどまでの剣幕は鳴りを潜め、いつもの雰囲気に戻った。

「いえ、お見かけしたものですから、気になって」

「そっか」

「えっと、ここで何を？」

一週間前の荒っぽい口調がまるで嘘のように接してくることに少し戸惑いながらも、セシリアはなにをしていたのかを聞いてみる。

「何って、鍛錬」

「鍛錬？」

「そ、まあ日課みたいなものになってるんだけどな」

手に持ってる刀を鞘に納めながら、先ほどやっていた素振りについて説明する。

「でも、今回の戦闘とさっきの素振りで解ったよ、やっぱ鈍ってるわ」

「さっきもおっしゃってましたね、あんなにお強いのに」

「そうでもないさ、一か月と半月動かしてなかっただけで体が軋むんだからな」

「あっ、そうですわ」

一週間前の険悪ムードはどこへやら、二人はいろいろ話し合っていた。

するとここで、何か思い出したようにセシリアは言ってきた。

「その、何時ぞやは失礼なことを言って、申し訳ありませんでした」

頭を深々と下げながら、セシリアは一週間前の事を謝罪してきた。

「ああ、いいよ。いつまでも細かいことをねちねち言う趣味はないし」

一方の直人も、もう気にしていないとばかりに手を振ってきた。

「俺の方こそ、怒ったりしてすまなかった」

「えっ？」

「いや、昔からな、一夏を馬鹿にされたりすると、すぐ頭に血が上っちまうんだよ。よく注意されたのに」

「随分ご執心なんですね」

セシリアがそう言うと、少しなつかしそうな顔をして、直人は喋りだした。

「俺は昔、あいつに救われたんだ」

「えっ？」

以外と言う顔をするセシリアに、乾いた笑をしながら直人は言った。

「言っとくけど、多分想像してるのと違うぞ」

「えっ？」

「小さい頃なんだけど、ちょっといろいろあって、俺は一人だったんだ。そこを一夏に助けてもらって、と言うより、仲良くなってくれてな。あいつは俺にとって、かけがえのない存在なんだ」

詳しくは話さなかったが、話してる時のうれしそうな顔を見て、彼にとって一夏が、どれほど大事かを悟っていた。

「それでな、小5の時に義兄弟の契りを交わしたんだけど。その時、俺は誓いを立てたんだ」

「誓い？　どのような？」

聞かれた直人は、懐かしそうな、それでいて嬉しそうな顔をして、その誓いを口にした。

「俺が一夏の剣となって、奴に刃を向けるもの、奴の守りたいものを侵すものを切り捨てるってな」

その時の彼の瞳は、戦闘中に見たその瞳と全く同じだった。

そして、彼の瞳を見て、セシリアは先ほどの疑問が何なのかが分かった。

彼のさっき言った誓い、それこそが、あの瞳の正体であり、彼の強さの原動力なのだろうと。

そして同時に、自分の中にある感情の正体も理解した。

（私は、この人を……）

自分の思いを自覚したセシリアは、その思いを乗せた視線で直人を見つめる。
そんな彼女の考えと思いに気づかないまま、直人は言葉をつづけた。

「それにな、お前は強いって言うけど、俺はまだ弱いよ」

「謙遜しすぎですわ」

「いや。少なくとも、俺の求める強さには程遠いよ」

決して謙遜などではない、と言わんばかりに、その言葉には自身がこもっていた。

「ごほん。まあ、何はともあれ、クラス代表はあなたになるわけですが」

「ああ、その件だが……」

「俺、辞退するわ」

「……はぁ!?」

そんな答えが返ってくるなどと思ってなかったのか、思いっきり声が裏返る。

「な、なぜですの!?」

「いや、何故って言われても……」

そして返ってきた答えも、ある意味単純なものだった。

「俺は一夏の剣だからな、主より偉い剣なんて、聞いたこと無いだろ?」

その答えに、セシリアは少し拍子抜けしてしまったが、今までの話から納得してしまう。

「まあ、そういう訳だから、クラス代表を譲るから」

「うーん、なんか納得いきませんわね」

「そう言われてもなあ……あっ」

お互い納得が行かず、このままでは水掛け論になりそうだったが、ここで直人はあることを閃いた。

「ならさ、こういうのはどうだ……」

「……成程、それなら納得ですわ」

こうして二人はお互いに納得する方法を思いついた。

まあそのために、一人犠牲になることになった訳だが……。

第六話　真剣の思い、真剣の誓い（後書き）

取り敢えず、セシリアフラグを立てた直人でした。
ちゃんとできたか怪しいですけど、いかがですか？

後半の直人とセシリアの対談は書きたかったところです。
形にできてよかったです。

次はアニメ第三話、いよいよツンデレ猫娘の登場です。

第七話　実習とクラス代表決定パーティー（前書き）

アニメの第三話目突入です。

この作品では通信での台詞は≪≫とさせていただきます。

ただし、基本的にあまり使わないと思いますので、あまり気にならさらず。

それではどうぞ。

第七話　実習とクラス代表決定パーティー

「これより、ＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう」

クラス代表決定戦から少し経ったこの日、グラウンドでＩＳスーツを着て、一年一組の生徒たちは千冬の授業を受けていた。

「織斑、オルコット、桜庭、ためしに飛んでみろ」

「はい」

「承知」

「解りました」

三人は返事するや、ＩＳを展開し始める。

一秒と掛からずしてセシリアが展開を終えてＩＳを身に纏い、程なくして直人も展開を終え、ＩＳに身を包む。

だが、未だに展開ができない奴が一人……

「あ、あれ？」

「早くしろ！　熟練したＩＳ操縦者なら、展開に一秒と掛からないぞ」

千冬に急かされ、一夏はＩＳを展開するために集中する。

「集中……来い！　白式！！」

そう言って、ようやく一夏もＩＳを展開し終える。

「はぁ、やっと展開したか」

「桜庭、お前も人の事は言えないぞ」

展開におおよそ数秒掛けた一夏に呆れてる直人に、千冬はそういってきた。

「お前も展開に一秒以上は掛けている、その展開方法を何とかしろ」

直人のＩＳ展開方法は、待機状態のＩＳから桜の花びらに似たエネルギーが全身を包み完成する。

だがこの方法では、どうやっても一秒以上かかってしまうのだ。

「すいません、こいつを作った馬鹿がこうプログラミングして、自分以外に変えられないようにしたんです。文句ならその馬鹿に言ってください」

「前から聞こうと思ったのだが、その馬鹿とは誰の事だ？」

するとここで、ふと疑問に思った箒が聞いてくる。

千冬も興味があるのか、直人の言葉を待つ。

「天才と書いて馬鹿と読む奴です。し……織斑先生と箒なら心当たりがあると思いますが、それの同類です」

「……」

「苦労してるんだな、お前も」

直人の答えを聞いた途端、千冬は頭に手を置いてため息をつき、箒は同情の言葉を投げかける。

「まあ、無駄話はこれくらいにして、三人とも、飛んでみろ」

『はい！』

「ああ、桜庭は一寸待て」

「はい？」

いざ飛ぼうとしたとき、直人は千冬に止められる。
その間に、セシリアはさっさと垂直に飛び上がる。

「お前は出力が半端じゃないからな、背中のメインスラスターのみ、それも出力を通常の７０％に抑えて飛べ」

「ま、妥当ですね。承知しました」

こうして了承した矢先、一夏が飛び始めたのだが、かなりふらふらしながら飛んでいった。

「何やってんだか、本当に」

「桜庭、お前も早く行け」

「はい」

そう言うと、直人も背中のスラスターを展開して飛行を始める。

「７０％なら、すぐに二人に追いつ……いや、今ひとり抜いた」

その一人と言うのは、言うまでもなく一夏だ。

≪遅い。スペック上の出力は、白式の方が上だぞ≫

「そう言われても……」

≪おーい、一夏≫

「あっ、直人」

千冬にどやされる一夏が見ていられなくなり、直人は通信を入れる。

「お前、ちゃんとわかってるか？」

「自分の前方に角錐を展開させるイメージだっけ？　言葉だけじゃわかんねえよ。なんかコツとかないか？」

「俺はほとんど感覚で手にしたからあーだこーだ言えないけど、やっぱり自分がしっくりくる方法を見つけるのが一番だな」

≪直人さんの言うとおりですわ≫

すると、セシリアからも通信が入る。

「イメージはしょせんイメージ、自分がやりやすい方法を模索する

方が建設的でしてよ」

「大体、空を飛ぶ感覚自体、まだあやふやなんだよ。何で浮いてるんだ、これ？」

「その辺りは真白か紅葉に聞け。どうせ放課後やるんだろ？」

「ああ」

「ま、数こなしてりゃ慣れるさ」

≪織斑、オルコット、桜庭、急降下と完全停止をやってみせろ≫

「了解です。では、お二人とも、お先に失礼します」

そう言うとセシリアは一気に急降下したのち、そのままグラウンドに着地する。

「うまいもんだなあ」

「そりゃ代表候補生だからな、じゃ、次は俺だ、よく見ておけよ」

そういうと、直人もセシリアがやったのと同じ要領で急降下と完全停止をやる。

「よし、俺も」

そして、一夏も一気に急降下を始める。

だが……

「あ、わあぁ！！」

その瞬間、グラウンドに轟音と共に一夏はグラウンドに墜落した。

「一夏！！」

「織斑君！！」

箒と山田先生が名前を呼びながら墜落地点に向かい、千冬、真白、紅葉がこれに続く。

そして、噴煙が晴れ、中心には……

「うわあ……」

「一夏くーん、生きてますかー？」

真白の呆れ声と紅葉の言葉からわかる通り、ＩＳが解除された一夏が、顔から地面に突っ込んでいた。

「まったく、ここまで予想通りだと逆に笑える……な！」

「ぷはっ！」

そう言って、いつの間にか近づいていた直人が、一夏を引っ張りぬく。

「馬鹿者、グラウンドに穴をあけてどうする」

「すいません」

この後、一夏は一人でグラウンドの穴埋めをすることになったという。

「織斑君、クラス代表おめでとう！！」

『わーーーーー！！』

クラッカーが一斉になり、生徒たちが一斉に拍手を送る。

何をやってるのかと言うと、一夏のクラス代表決定のパーティーだ。

最も、当の主役はと言うと……

「なんで俺がクラス代表なんだよ？」

「それは俺と」

「私が辞退したからですわ」

疑問を投げかける一夏に直人とセシリアが答える。

「いや、直人は解ってたよ、俺より目立つことはしないってわかっ

てるし、でもなんでセシリアまで？」

「と言うより、二人は何時からそんな仲良しに？」

一夏の後に、真白も疑問を呈す。

「クラス代表選の後、鈍ってる体を鍛え直すために鍛錬してたらセシリアが来てな、いろいろ話してクラス代表の事で、俺が辞退するって言ったんだけど、本人も納得いかなくてさ、どうしようか考えた結果、二人で辞退して、一夏に代表の座を譲ろうという事になったんだ」

「まあ、勝負はあなたの負けでしたけど、しかしそれは考えてみれば当然の事、何せ私が相手だったのですから」

「確かに」

「寧ろ、あそこまで食いつけた一夏君はすごいと思うよ？」

セシリアの言葉に、真白と紅葉も同意の言葉を示す。

ちなみに、紅葉は今まで名字で呼んでた一夏の事を名前で呼んでいる。

これはクラス代表選の後、「名字だと堅苦しいから名前で呼んでいい？」と聞いて、一夏があっさりＯＫを出したからである。

ちなみに同様の理由で、箒の事も名前で呼ぶことになったが、ちゃん付けされるのは嫌だろうし、かといって呼び捨てにするのも失礼だという事で「箒さん」と呼ぶことになった。

「それで私も、大人げなく怒ったことを反省しまして、直人さんの

提案に乗って、一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたの」

「いやー、セシリア解ってるねー」

「せっかく男子がいるんだから、持ち上げないとねー」

クラスのメンバーに持ち上げられる一夏だが、そんな様子が面白くない人物が隣にいた。

「人気者だな、一夏」

「そう思うか？」

「ふん！」

一夏の返事に不機嫌そうにそっぽを向く箒。

「「ねえ、直人」」

「何だ？」

ここで真白と紅葉が直人にさっきの様子を見て思ったことを聞く。

「箒さんってさ、もしかして一夏君の事……」

「ああ、古い言い方するとほの字だ。だが、箒はあの通り素直じゃないし、一夏は呆れるほどの鈍感だからな、まったく気づいてない」

「そうなんだ」

「でもさ、それ直人が言える口？」

「はっ？　どういう意味だ？」

「「……はぁ」」

本人に自覚はないが、直人もまた、一夏の同類であったのだった。

「はいはーい、新聞部でーす！」

その時、フラッシュがしたので見てみると、目の前にカメラを構えた女子生徒が立っていた。

彼女の名は黛薫子、先ほども言った通り、ＩＳ学園の新聞部だ。

「注目の専用機持ち三人のスリーショットといきましょうか。ほら握手」

「三人で握手って、どうするんだ？」

「とりあえず、こんな感じでどうだ？」

「な、直人さん！？」

直人がした三人での握手と言うのは、直人とセシリアが握手し、その上に一夏の手を置く形になった。

当然、直人と手を握ったセシリアの顔は真っ赤になってるわけだが。

「……むぅ」

紅葉はその顔を見てどこか面白くない様子。

「はい、それじゃとるよー、はい、チーズ」

そうしてとられた写真には……

一組のメンバーが全員入っていた。

「なぜ皆入っていますの！？」

「まあまあ」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょう」

「む～」

全員に丸め込まれ、セシリアは一寸不服のご様子。

「やれやれ、じゃ、俺はそろそろこの辺で」

「何だ、もういくのか？」

「ああ、そろそろ時間なんでな」

そう言って直人は鍛錬を行うために立ち去ろうとした時だった。

「じゃあみんな、精々師匠に見つからないように楽しんで……！！？？」

突然、直人の体が身震いをした。

「ど、どうしたんだ、直人？」

「い、いや……なんか言い知れない悪寒が背中を走った」

「悪寒？」

「い、いやなことの前触れじゃなきゃいいんだが……」

背中を走った悪寒が杞憂であることを願いながら、直人はその場を去って行った。

だが、この悪寒が、二重の意味で彼に災難を振りまくことになることを、この時は直人をはじめ、誰も知る由はなかった。

第七話　実習とクラス代表決定パーティー（後書き）

後書きコーナー（仮）

作者「と、いう訳で、この話から、後書きコーナーを設けたいと思います」

直人「何をとち狂った？」

作者「酷！　いや、大体この辺でやろうかな？　って思ってたんだよ、キャラ紹介とかもしたわけだし、それにやってみたかったんだよ」

直人「そんだけか？」

作者「まあ、そんだけっちゃあ、そんだけ」

直人「はぁ、で、なんでタイトルが仮なんだ？」

作者「いやさ、アイデアが貧困な作者に、凝った名前を求めるなんておかしいだろ？　まあ、今考えてないだけで、アニメの第四話目に入るまでにはつけようと思う」

直人「勿論、読者の方からも募集するんだろ？」

作者「モチコース！　と、いう訳で、このコーナーのタイトルと、やってほしいことなどを募集します」

直人「基本作者の思いつきとかが形になると思うが、付き合っても

らえるとありがたい」

作者「さて、ではそろそろこの辺で」

直人「待て、まだ話は終わってない。あいつが出てくるんじゃなかったのか？」

作者「いや、最初はそのつもりだったんだよ、でもさ、この作品はアニメの一話分を三話に分割して書いてるじゃん。そのスタンスで行くとこの辺が区切り良いかなあって思って」

直人「まあ、出てこられても困るがな」

作者「安心しろ、ちゃんと伏線は張っておいたしな」

直人「この悪寒、二重の意味の災難ってどういう意味だ？」

作者「それは話が進んでのお楽しみ、とにかく、次回は正真正銘偽りなしで、彼女が登場します！」

直人「これからも、【ＩＳ　桜の花纏う真剣】を、よろしくお願いします」

第八話　転校生来襲！　その名はセカンド幼馴染！！

クラス代表決定パーティーの次の日。
一組では、もうすぐおこなわれるクラス対抗戦とは別に、もう一つの話題が持ち上がっていた。

「そうだ、二組のクラス代表が変更になったって聞いてる？」

「ああ、何とかって転校生に変わったんだよね？」

一夏と直人の席の近くに集まって、女子たちが件の話題について話す。
当然、その近くにはセシリア、真白、紅葉もいる。

「転校生？　今の時期に？」

「うん、中国からの転校生だって」

「……っ！？！？」

その言葉を聞いて、再び身震いを起こす直人。
そしてそのまま、机に突っ伏してしまう。

「おい、直人大丈夫か？」

「大丈夫って言いたいけど、流石に堪えてる」

パーティーを去る際に感じた悪寒。
あの後も直人は、鍛錬時、入浴（正確にはシャワー）時、就寝時

と、一日中その悪寒を感じていたのだ。
直人は最早不吉の前触れではないかと気が気でなく、朝食を摂っての登校後（この間も悪寒を感じた）、教室に入ってから精神的に少し消耗してしまい、ずっとこんな感じである。
そして、先ほどのクラスメイトの言葉「中国からの転校生」と言う言葉を聞いて、直人はこれまでにないほど強い悪寒を感じた。

「ったく、何だってんだよ、この悪寒は」

流石の直人も、そう愚痴らずには言われなかった。

「ふん、私の存在を今さら危ぶんでの転入かしら？」

「どっちかって言うと、ＩＳの試験のためじゃないかな？」

転校生の事で腕を組みながら言うセシリアに、紅葉は企業の娘らしいセリフを言う。
このＩＳ学園は、いかなる国家、組織からの干渉を許さないという国際規約により、他国間のＩＳの比較や新技術の試験などに非常に重宝する場である。
なので、そういう可能性で送り込まれたとしても、何ら不思議ではない。
かく言う紅葉も、自社のＩＳ新武装試験評価のためにここにいたりする。

「どんな奴なんだろうな？　強いのかな？」

興味があるらしく、一夏は転校生の事について聞いてみる。

「確か、今のところ専用機を持ってるのって、うちと四組だけだよ

ね？」

「そう聞いてるよ？」

紅葉の言うとおり、専用機を持っているのは一組と四組。

しかも、一組には三機も専用機があるという、「何者かの陰謀か？」と聞き返したくなるほどの集中ぶりである。

「その情報、古いよ」

すると、突然声が聞こえてきた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの、そう簡単には優勝できないんだから」

全員が視線を向けた先には、長いツインテールをした、勝ち気そうな女子が立っていた。

制服は改造してあるのか、肩の部分が露出していた。

そしてその顔を見て、一夏は驚きの表情を、直人はどこか気まずそうな顔をしていた。

「鈴……お前、鈴か？」

「そうよ。中国の代表候補生、凰鈴音（ファン・リンイン）！　今日は宣戦布告に来たってわけ！！」

信じられないという風に聞いてくる一夏の問いかけに件の転校生、凰鈴音は、ビシッと指を一夏に差して声高らかに宣言する。

「……マジか」

そして一夏の隣では、さっき以上に気まずそうな顔をしながら、直人が誰にも聞こえない声でそう呟いた。

「直人さん、どうしましたの？　今朝からそうでしたけど、なんだかお顔の色が優れませんけど？」

ここで、直人の様子がおかしいのに気付いたセシリアが聞いてくる。

「ああ、大丈夫。ちっとばかしまいってるだけだから」

だが当の本人は、そういって手をひらひらと振る。

（それにしても……）

ここで直人は、あることを思った。

「（何かっこつけてんだ？　すっげえ似合わねえぞ？）」

ここでも義兄弟シンクロ炸裂。一夏と直人は同じことを思い、そして鈴にそう言った（直人は心の中で）。

「なっ！　なんてこと言うのよアンタは！！」

「あっ……」

一夏に「似合わない」と言われ怒り出す鈴。

するとここで、真白が何かに気付いたが、時すでに遅し。

刹那、鈴の頭に鈍い音と衝撃が炸裂した。

「いったー。何すんの！　……げっ！」

当然、殴られた鈴は文句を言うが、その相手を見て硬直する。

「もうＳＨＲの時間だぞ」

「ち、千冬さん……」

一組の支配者、千冬だった。

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ邪魔だ」

「す、すいません」

苦手意識があるのか、先ほどまでの強気が嘘のようにあっけなくドアから退く。

「また後で来るからね。逃げないでよ一夏、そして直人！！」

そう言って、鈴は二組へと戻っていった。

「あいつが代表候補生……」

そして教室には、意外な事実を聞いて唖然とする一夏と……

「真白」

「何？」

「この世界に神はいないんだな」

「……何を今さら」

額に手をつきながら、暗い顔をする直人がそこにいたのだった。

授業終了後、六人は食堂へ行き、そこで先ほどの転校生、鈴と合流した。

「びっくりしたぜ。お前が二組の転校生だとはな、連絡くれりゃいいのに」

「そんなことしたら劇的な再会が台無しになっちゃうでしょ」

「……はぁ」

一夏と鈴の会話の後ろで、いまだにため息をつく直人。

「何よ直人、さっきからため息ばっかついて」

「何でもない。それよりお前、まだ師匠が苦手なのか？」

ここに来てずっとため息ばかりついてる直人に食いついてくる鈴に、先ほどの様子から聞き返す。

「違うわよ、ちょっと、その、得意じゃないだけ」

「人、それを苦手と言う」

それに鈴はそう答えるが、パロディっぽく答える紅葉。

「丸一年ぶりになるのか、元気にしてたか？」

「してたわよ。あんたこそ、たまには怪我病気しなさいよ！」

「どういう希望だよそれ」

「全くだ」

滅茶苦茶な鈴の要望に、呆れ気味に返す一夏と直人。

そして食事を受け取り、七人は席に着く。

「にしても、俺はともかく、よく直人のこと覚えてたよな」

「そりゃあ、あの髪と目の色してる奴って言ったら、アタシの知ってる中じゃ、あいつしかいないでしょ？」

「だとよ」

「……さいですか」

鈴の答えを聞いて、一夏は直人にその答えを返し、直人はまたため息をつく。

「んで、何時代表候補生になったんだよ」

「あんた達こそ、ニュースで見たときびっくりしたじゃない」

「ん？　ちょっと待て」

ここで、直人がふと疑問を呈する。

「一夏はともかく、俺もニュースに出たのか？」

「知らないの？　あんたの事、一夏のニュースの翌日に流れたわよ」

「……一応聞くが、誰が流したかわかるか？」

「誰かまでは解らなかいけど、確かニュースだと、「創世の芸術家」とか名乗る奴が発信元らしいわよ」

それを聞いた途端、直人の中から怒りが沸々と湧いてきた。

「あいつ、今度会ったら三枚に卸す！！」

「「おい（ちょっと）！　何物騒なこと口走ってんだよ（のよ）！！」」

突然刀に手を掛けながら物騒なことを言い出す直人に、一夏と鈴は見事にシンクロした。

その後暴れかけたのだが、二人だけでなく、箒、セシリア、紅葉も加わって、どうにかなだめることができた。
ちなみにこの間、真白は普通に食事を食べていた。

「すまん、少し取り乱した」

「まったく。そんなことより、入試の時にＩＳ動かしちゃったんだって、なんでそんなことになっちゃったのよ？」

「何でって言われてもなあ」

ここで、鈴が話題を一夏の事に変えたため、矛先を向けられた一夏は、当時の事を思い出しながら話した。

本来、一夏は私立藍越学園に入学するはずだったのだが、試験会場である私立の多目的ホールで迷ってしまったそうだ。
そこで歩き回ってたらＩＳを見つけ、それに触れたら反応したというのだ。

「んで、いろいろあって、この学園に入れられたって訳だ」

「ふうん、変な話ね。それで直人、あんたはどうなの？」

「俺か？　俺は確か……」

ここで直人も話題を振られたため、何があったのか考え込むが……

「いや、頼む、思い出させないでくれ。あいつの事を思い出すと、さっき収まった怒りが……」

そう言い区切った途端、再び腰の刀に手を掛ける。
しかも今度は二本。

「あいつぅぅぅ！　三枚卸しじゃ生ぬるい！！　いっそのこと微塵切りにしてくれるーーーーー！！！！」

「「「「「だから落ち着け（落ち着いてください）ーーーーー！！！！」」」」」

再び怒り心頭の直人を、再び五人が抑えつける。
ちなみにこの間、真白は何事もないようにお茶を飲んでいた。

「それで一夏、直人、そろそろ説明してほしいのだが」

直人の怒りをなだめた後、鈴の事について、箒が説明を要求してきた。

「そっか、ちょうど入れ違いだったな」

「入れ違い？」

直人の説明に、箒は首を傾げる。

「ほら、箒が転校したのは、小４の時だろ？　鈴が入ってきたのは小５の時だから、ちょうど入れ違いなんだよ」

「成程、だから箒さんは知らないんだ」

「そういうことだ」

直人の説明に、紅葉がぽんと手を叩いて納得する。

「まあつまりな、箒はファースト幼馴染、鈴はセカンド幼馴染ってとこだ」

「俺からしてみれば、紅葉がセカンドだがな」

一夏の説明に、直人が少し自己補足を加える。

「初めまして、これからよろしくね」

「ああ、こちらこそ」

と、あいさつは普通に平静を装っているが、箒と鈴の間に火花が散っているように見えるのは、恐らく気のせいではないだろう。

「散ってるねえ」

「散ってるね」

と、冷静に二人の様子を見守る紅葉と真白だった。

「……はあ、一夏、悪いけど、先に教室に戻ってるぞ」

「え？　良いのか？」

「ああ、色々思うところがあってな。真白、行くぞ」

「うん」

と、直人は逃げるように真白とその場を後にした。
ちなみにその際、後ろでなにやらセシリアと箒と鈴が揉めだしたことについては、直人は全力で聞こえないことにした。

「……」

だが、そんな直人の様子を、紅葉は何か確信を持ったような目で見つめていたのだった。

第八話　転校生来襲！　その名はセカンド幼馴染！！（後書き）

後書きコーナー（仮）

作者「と言う訳で、後書きコーナー第二回目！」

直人「今回は企画を行うんだと？」

作者「おおよ！　タイトルも決まってるぜ」

直人「ほお」

作者「と、その前に、前回の話に感想をくださった、三月語様、こもも様、本当にありがとうございます」

直人「三月語様に至っては、真白がお気に召したようで」

作者「作った身としても、光栄の極みです」

直人「これからもよろしくお願いします。これから見られる方も、是非ご感想をください」

作者「それじゃあさっそく、企画その一、その名も「直人の目安箱」！！」

直人「三月語様からのアイデアだな、にしても、何だ目安箱って？」

作者「江戸幕府八代将軍徳川吉宗が、庶民からの意見を聞くために設けた箱の事だ。まあ、コーナー自体は普通の質問コーナーなんだ

けどな」

直人「まあいい、それで」

作者「早速、三月語様から質問を頂いていますので。直人に答えてもらおうと思う」

直人「答えられる範囲でならな」

作者「えーっと、「一夏を義兄とする直人に質問。今まで一夏を見た中で、『ああ、馬鹿だ・・・』最もと思えたことは？」だそうだが」

直人「最も馬鹿だと思えたこと？　そうだな、ここ最近の一夏は本当にそう思う事の連続だな」

作者「うわ、手厳しい」

直人「だってそうだろ？　必読品を古い電話帳と間違えるとか、勉強を教えてても、本人解ったつもりでも、聞き直すと「解らねえ」って返してくるし」

作者「まあ、確かにあきれることは多いな」

直人「だが一番となると難しいな。敢えて挙げるとすれば、あの鈍感さで、手痛い目にあった時かな？　なんであれで気づかないんだ？　って、何度思ったことか」

作者「成程、でもそれは君の言える義理かな？」

直人「何だよ？」

作者「何でも。とまあ、こんな風に、皆様から頂いた素朴な疑問を、直人に答えていただきます」

直人「俺に限らず、真白や紅葉についても、質問をおくってもらって構わないぞ」

作者「それでは二つ目の企画「抱腹絶倒！　アフレコ委員会！！」だ！」

直人「これはお前が考えたんだっけか？」

作者「そ、原作、オリキャラ問わず「この人にこう言う台詞を言わせたい」と言う企画だ。今回も、直人の目安箱の質問同様、三月語様から頂きました。

直人「んで、誰が何を言うんだ」

作者「それはこれから、では登場していただきましょう。この二人です！！」

「どうも」

「いきなり呼ばれたんだけど。何なの？」

直人「真白！　それに鈴！」

作者「と言う訳で、本日は真白と鈴音をご指名です。じゃあ二人とも、この紙に書いてある台詞を言ってね」

鈴「どれどれ……」

真白「……うん、解った」

作者「それじゃ、まずは真白から」

真白「時は戻らない・・・それが自然の摂理・・・」

作者「【テイルズオブシンフォニア】から、プレセア・コンバティールの秘奥義終了時の台詞です」

直人「……違和感ねえ」

作者「まあ、真白は感情表現が乏しいし、背も一応、現メンバーの中では低いからな」

直人「んで、次は鈴か」

作者「準備はいいか？」

鈴「良いわよー」

作者「それじゃ、どうぞー」

鈴「バーカ」

作者「こちらは、バカとテストと召喚獣、通称「バカテス」から、第四話冒頭の島田美波の台詞だそうです」

直人「作者はバカテスを知らないが、鈴なら普通に言うと思うぞ？」

作者「確かに」

直人「とまあ、こんな風に、俺達でも一夏達でも、この台詞を言わせたいってのがあれば、是非応募してくれ。

作者「応募の際は、次の事を守ってください」

・誰に言わせるか

・作品名と登場人物の名前

・何と言ったのか

作者「以上を踏まえてご応募ください。今後登場のキャラでもいいですが、その場合は本編で登場するまで保留させていただきますので、ご注意ください」

直人「後、この後書きコーナーのタイトル名と、企画も応募しています。皆さんの応募、お待ちしております」

作者「次回でアニメ第三話は終わり。食事シーンでは解りづらかっただろうけど、何故直人が鈴に苦手意識みたいなのを持っているか、その理由についてを書きたいと思います。

真白「直人、一体何があったの？」

作者「それは次回だな。だが安心しろ、呆れるくらいさっぱり洗い流す予定だから、今はともかく、今後の話に禍根は残さないつもりだ」

真白「ふーん」

作者「と言う訳で、今回はここまで、次回もお楽しみにー！」

第九話　悩む真剣、そして始まるクラス対抗戦（前書き）

今回でアニメ第三話の話は終わりです。

後皆さん、この作品の後書きコーナーの企画案やタイトルなどを募集しています。

ぜひ、ご応募お願いします。

第九話　悩む真剣、そして始まるクラス対抗戦

放課後、一夏の訓練を終えた直人は、いつものように胴着に着替え、菊一文字と虎徹を携えて鍛錬を行っていた。

「……」

一心不乱に刀を振り続けるが、その刀にはいつものような鋭さがなかった。

名人などが言うように、剣の太刀筋はその人の内面を映すと言う。

実際、今の彼はあることで迷いが生じており、それが振り下ろす刀に出ていた。

「……駄目だ」

何度か振って、自分の太刀筋に納得が行かない直人はそう呟いて素振りをやめる。

「はぁ。やっぱりあいつの事が気がかりで集中できねえ」

あいつとは無論、本日転校してきた鈴のことだ。

鈴が転校してきた時から、直人はあることが気がかりで落ち着かないのだ。

（あいつ、あの事まだ覚えてるかな？　覚えてるだろうなあ……）

鈴が未だに「あの事」というのを憶えてると思い、直人の顔はうかなく、また気まずそうな顔になってきた。

（もし憶えてたとして……いや、憶えてなくても同じか。どっちにしても、これからどう付き合えば……）

素振りをしてる時も、ずっとそのことばかりを考えており、直人はずっと悩んでいた。

「やっほー」

すると、背中から声がしたので振り向くと、そこには紅葉が立っていた。

いつもなら気配で気づくだろうが、悩んでいた直人はその気配に気づくことはなかった。

「紅葉か。真白は？」

「部屋に一緒にいたけど、もうそろそろ一夏君に勉強教えに行くんじゃないかな？」

「そうか。んで、お前は行かなくていいのか？」

自分を鍛え直す事を始めて以降、直人に代わって真白と一緒に紅葉が教えるようになった。

ＩＳの企業の娘である彼女なら、知識を教えるには申し分ないとのことで、当人も暇つぶしになるというので二つ返事で了承した。

「良いの、真白ちゃん一人でも教えるには十分だし。それに、聞きたいことがあってね」

「聞きたいこと？」

直人の言葉に紅葉は頷く。

「うん。あの子、鈴ちゃんの事」

「!?」

その言葉に、直人は顔が強張る。

「直人、明らかにあの子を避けてたよね。お昼の時はそんな風に見えなかったけど、あの子が来てから、ずっと態度が変だったもん。明らかに幼馴染にとるような態度じゃないよ、あれは」

「……」

紅葉は真剣な表情で聞き、それに直人はただ黙りこむだけだった。

「いったい何があったの?」

「……」

紅葉に聞かれて、しばらくは黙り込んでいたが、やがて考え出すようなしぐさをし、そして……

「……お前になら、別にいいかな」

しばらくの沈黙の後、直人はそう呟いた。

「言っておくけど、他言無用だからな。あんまり話したくないんだ」

「いいよ、それで」

紅葉から了承を取ると、直人はその訳を話し始めた。

「昔、小5の時に、鈴と喧嘩したことがあるんだ」

「えっ？」

「もうほとんど覚えちゃいないけどな。何が原因だったのかも、どっちが悪かったのかも。ま、もうどっちでも良いんだけどな」

「何？　まさかそれだけで避けてるの？　特にあの子は気にしている様子は無いけど」

「まさか、原因も何も覚えてないような喧嘩で、あそこまで避ける気はないよ」

「じゃあ何で？」

紅葉がさらに問い詰めると、少し戸惑ったような表情をしながらも、続きを話す。

「その喧嘩でな。俺、鈴を泣かせちまったんだ」

それを聞いて、紅葉は驚いた表情をする。

「まあ、そうなるとさ、どっちが正しいか関係なく、なんか、こっちが悪い気がしてくるだろ？」

「それは解るけど」

「それでその後先生が来て、その場は収まったんだけど。何か、気まずくてな」

「成程、それで避けてたんだ」

直人が鈴を避けてた理由は、過去の喧嘩で泣かせてしまったことにくる負い目だったのだ。

「でも、もう気にしてる風じゃなかったけど？」

「どうだろうな。忘れてるとは考えにくいし、仮にもう気にしてなくても、やっぱり俺は気になるんだよなあ」

「でもさ、もう理由も何も忘れちゃってるような喧嘩なら、もう気にしなくても」

「そうじゃない」

気にする必要は無い、と言おうとした紅葉に、直人はそうじゃないと言ってきた。

「喧嘩自体じゃない。俺があいつを泣かした。それが問題なんだ」

そう言うと、直人はそのまま、寮へと戻っていった。

その時の顔と背中は、どこか寂しそうだったと、紅葉は思いながら、その後を追いかけて行った。

部屋に戻り、汗を洗い流した直人は、真白と紅葉の手伝いをするべく、一夏と箒の部屋に向かっていた。

しかし、その間も鈴とどう付き合えばいいのかについて思い悩んでいた。

（いつまでもこのまま避けてるのは悪いよなあ。でも、今さらどんな顔して向き合えば……）

そんな風に考えてると、二人の部屋である１０２５室に到着しようとした。

「ん？」

だがここで、部屋の中が妙に騒がしいことに気付く。

「何だ？　また一夏と箒が何か言い争ってるのか？」

と、呆れ気味に部屋に入る。

「おーい二人とも、痴話喧嘩も良いが程々に……げっ！？」

しかし、確かにそこでは言い争いが起こっていたが、一夏と言い争っていたのは箒ではなく……

「何怒ってんだよ！　ちゃんと覚えてただろう！！」

「約束の意味が違うのよ！　意味が！！」

「だから説明してくれよ！！」

一夏と言い争っていたのは鈴だった。

しかもよく見てみると、一夏の頬に平手打ちの跡があり、くっきり紅葉を形成していた。

「「「あっ、直人」」」

「真白、箒、紅葉、一体どうなってんだ？」

状況が呑み込めない直人は、声を合わせて呼んだ三人に事の次第を聞く。

説明中……

「つまり、鈴との約束を憶えてない一夏に、鈴が怒ったと。そういう事か？」

「正確には、約束の意味をはき違えているみたい」

事の次第を聞いた直人は、紅葉のその言葉の後にため息をつく。

「それで直人。一夏がした約束とはなんだ……」

そう聞いてくる箒は、どこか黒いオーラを纏っていた。

「い、いや、俺も知らん。さっき聞いて初めて知った」

「そうなの？」

「ああ、俺だって四六時中一夏と一緒にいるわけじゃないから、それに中学の時の約束とかだったら完全に蚊帳の外だぞ？　俺その時旅してたから」

「そ、そうだったな」

箒のだす黒いオーラにたじろぎながらも、正直に話す。

その言葉に嘘偽りがないと悟ったのか、箒も落ち着き、黒いオーラも引っ込んだ。

「じゃあこうしましょ。次のクラス対抗戦で勝った方が、負けた方に一つ言う事を聞いてもらうって言うのは！」

「おお、良いぜ。俺が勝ったら、説明してもらうからな！」

「あんたこそ、覚悟していなさいよ！　それと直人！！」

「なっ！　何だ？」

突然鈴に名前を呼ばれ、狼狽えながらも返事をする。

「あんたには聞きたいことがあるから、対抗戦の後、アタシに会いに来ること！　逃げるんじゃないわよ！！」

そう言って鈴はボストンバックを引っ提げて部屋を後にするのだった。

「はぁ、今あいつの事で悩んでるってのに……気がめいるなあ」

「まあまあ、取り敢えず、対抗戦終わったら、話だけでも聞いたら？」

「だよな、流石にこのままってのは不味いと思ってたし」

紅葉に言われ、腹をくくった直人は、取り敢えず対抗戦の後、鈴と話をすることを心に誓った。

「ま、それはそうと……」

そして直人は一夏の方を向く。

「「一夏」」

「ん？　何だ？」

「「馬に蹴られて死ね」」

「ええ！？」

一夏の時に負けず劣らぬシンクロっぷりで、直人と箒はそう言い放つのだった。

そして、対抗戦当日。

初戦から、一組と二組の対決、つまり一夏と鈴が激突するのだった。

「中国の第三世代ＩＳ，甲龍（シェンロン）。白式と同じパワータイプで、燃費効率も良い。これはかなり厄介だね」

「今度はちゃんと調べたんだ」

「織斑先生に頼んだら、「ビットの中でのみ開示を許す」って条件で貰った」

真白は貰った鈴のＩＳ甲龍のデータを見ながら話した。

「これは、下手したら鈴に軍配が上がるかもな」

「どういう意味だ？」

直人の言葉に真意がわからない一夏は聞いてくる。

「前回は、まったく異なるタイプ同士の戦いだったろ？　お前が近距離戦特化で、セシリアが遠距離型、だけど今回は、同じタイプ同士の戦いだ。場合と状況にもよるが、こういう場合は、互いの技量と経験が勝敗を分ける。剣道とかと同じだ」

「成程な」

「だから気を引き締めて行けよ。出ないと、冗談抜きでぼこぼこにされるぞ」

「解ってるよ。じゃ、行ってくるぜ」

そう言うと、一夏はアリーナへと飛んで行った。

「……」

「どうした、直人？」

ここで、直人の表情がどこか曇ってることに気付いた箒が尋ねる。

「あっ、いや」

「大丈夫ですわ。一夏さんは勝ちますわ」

「それとも、やっぱり鈴ちゃんと会うのが気まずい」

「どっちでもない」

「じゃあ、どうして？」

セシリアと紅葉は、それぞれの考える懸念を聞いてみるが、直人はどれでもないと否定する。

そして真白の言葉に、直人は胸を押さえながら言った。

「何か、妙な胸騒ぎがするんだ」

「胸騒ぎ？」

「ああ、こういう胸騒ぎがするときは、大概碌なことが起こらない。杞憂で終わってくれれば良いんだが……」

直人は嫌な予感を憶えつつ、その胸を強く抑える。

そんな不安の中で、クラス対抗戦が始まるのだった。

第九話　悩む真剣、そして始まるクラス対抗戦（後書き）

後書きコーナー（仮）

作者「そろそろこのコーナーの名前を考えないとな」

直人「何時までもこれで通すわけにはいかないしな」

作者「今回は直人の目安箱だけです。ぶっちゃけアフレコ委員会の方に応募が一つもなかったので」

直人「それぞれ事情があるんだ。一通来ただけでもめっけもんだろ？」

作者「ま、そうだな。質問の投稿者は、前回と同様、三月語様からだ」

直人「で、どんな質問だ？」

作者「えーとだな、『こちらで一回行った『パスタ選手権』で食べてみたいと思ったもの、或いは絶対に食べたくないと思ったものは？（論外扱いになったものは除外）』だそうだ」

直人「ああ、あれか。お前結構笑ってたよな」

作者「いや、中々面白くて。んで、どうなんだ？」

直人「まあ、髑髏組以外は皆美味しそうではあったが、やっぱり箒

の奴かな？」

作者「幼馴染補正入ってないか？」

直人「そうじゃない。ちゃんと理由もある」

作者「ほー」

直人「いやな、確かにどれも美味しそうではあった、唯……」

作者「唯？」

直人「ルティアのごはん○すよパスタに、シャルロットの焼きパスタとか見てて、これってある意味炭水化物に炭水化物って組み合わせだよな？　って思ってな」

作者「あー、リースのうま○棒　たらこ味パスタもそうだったしな」

直人「それでそれらを除外して、一番の候補に挙がったのは、箒、鈴、真琴の三人だったんだが、悩んだ末に箒に決めたんだ。まあ、どれも美味そうだから、実際甲乙付け難かったけどな」

作者「成程」

直人「ま、実際はこれ考えてた時、丁度県民ＳＨＯＷで大阪の奴をやってたからだけどな」

作者「ちょ！　メタ発言禁止！！」

直人「良いだろ？　どうせ本編と関係ないんだから」

作者「まったく。んで、一番食いたくない奴は？」

直人「ダントツでラウラのフリスクパスタだ」

作者「……だな、コメントいらずだな」

直人「そういうことだ」

作者「取り敢えず、三月語様のために直人が選んだ好みのパスタをランキングにしてみました。上に行けば食いたいと思ったので、下に行けば食いたくないものです。

一位：箒　『野菜炒めパスタ』

二位：鈴　『酢豚あんパスタ』

三位：真琴　『エビチリパスタ』

四位：ルティア　『『ごはん○すよ』パスタ』

五位：シャルロット　『焼きパスタ』

六位：リース　『うま○棒たらこ味パスタ』

七位：沙霧　『すき焼きパスタ』

八位：ルシエラ　『フォアグラパスタ』

九位：セシリア　『チョコレートパスタ』

十位：オリヴィエ　『冷製スイカパスタ』

十一位：ラウラ　『フリ〇クパスタ』

直人「と、こんなところか」

作者「なあ、やっぱりこれ幼馴染補正入ってないか？」

直人「そんなつもりはないんだが、まあ、二人とも料理がうまいし、食べ慣れてるからかな？」

作者「と、そろそろ時間が来たため、本日はここまで」

直人「ご意見、ご感想と、目安箱への質問、アフレコ、企画案、そして来週いっぱいまで、このコーナーのタイトルを募集します。皆さん、どしどしご応募ください！」

作者「さて、次回はアニメ第四話の話だ」

直人「いよいよ始まった一夏と鈴の戦い」

作者「誰もがその行方を固唾をのんで見守る中、一人直人は胸騒ぎを覚える」

直人「そしてそれは的中し、事態はとんでもない方向へ！」

作者「次回もお楽しみに！！」

第十話　招かれざる者、襲来（前書き）

この小説のＰＶ数が、２５，０００を突破しました。
多くの方々にご愛好いただいているようで、誠にありがとうございます。

これからもＩＳ　桜の花纏う真剣を、よろしくお願いします。

第十話　招かれざる者、襲来

「ふんふふんふーん♪」

どこと知れない、薄暗いラボの中で、一人の人物が鼻歌まじりにディスプレイを見つめていた。

ディスプレイに映っているのは、今クラス対抗戦が行われている、ＩＳ学園だった。

「さーって、そろそろかなあ～♪」

子供のように言いながら、どことなく楽しそうに言う。

「束（たば）ちゃん、ＩＳ学園の諸君、そして直人、これから楽しい時間の始まりだよ♪」

そして、ディスプレイを見つめながら言った。

「Ｉｔ，ｓｈｏｗ　ｔｉｍｅ♪」

謎の人物が不敵な、しかし子供のような笑いを浮かべていたころ、アリーナでは、一組代表の一夏と、二組代表の鈴による、クラス対抗戦が行われていた。

まず手始めに、先手必勝と言わんばかりに一夏が突っ込むが、鈴は不敵な笑いを浮かべた後、それを難なくかわす。

そして鈴は、甲龍の主武装である大型の青龍刀「双天牙月」を手に持ち、一夏に斬りかかり、そしてそれを防ぐ一夏。

「ふーん、初撃を防ぐなんてやるじゃない。でも……」

そう言うと双天牙月をもう一本取出し、再び斬りかかる。

再び雪片でそれを防ぐ一夏。

勝負は一見互角に見えながらも、徐々に鈴の方に傾きつつあった。

一方、アリーナにいた箒達は場所を変え、試合の様子を見守っていた。

「一夏……」

「あああもう！　何をやってますの！！　私が教えたクロスグリットターンを使いなさい！！」

「まあまあ、落ち着いて」

心配そうに見つめる箒とその様子に苛立ちを覚えるセシリア、それをいさめる紅葉。

三者三様とはこのことだが、その中で一人、冷静に分析をしている人物がいた。

「……」

それは真白だった。

「風花、お前はこの状況をどう思う？」

先ほどから黙りこくっている真白に、千冬が問いかける。

「ひどい言い方になりますが、予想通りとしか言えません。試合前に直人も言っていましたが、同じタイプ通しの戦いでは、相手の技量や経験が勝敗を分ける大きな要因になります」

「ふむ……」

「そして、一夏がその二つを持っているかと言われれば、ＮＯと答えるよりありません」

「確かに、それらは本来、時間をかけて身に付ける物だ、一週間そこらで身に着く技術や経験など、たかが知れているしな」

真白の理路整然とした問いの答えに、千冬は感心しつつ言う。

「ですが……」

「何だ？」

「このままでは終わらないでしょう」

「ほお、何故だ？」

何となく予想しているが、千冬は意地悪そうに聞いてくる。

「根拠は二つあります。一つは、人間が持つ爆発的な力、火事場の馬鹿力とでも言いましょうか。それらは時として、技量や経験を上回る力を発揮するものです」

「ほお。だが、それだけで勝てるほど戦いは優しくないぞ。もう一つの根拠は何だ」

「それは、織斑先生が一番ご存知じゃないんですか？」

その言葉に対し、千冬は表情も変えず、何も答えようとはしなかった。

それを見越していたのか、真白も特に問い詰めようとせず、二つ目の根拠を口にした。

「クラス代表決定戦から今日まで、貴方の弟を鍛え上げたのは、貴

方の弟子だからです」

一方、その弟子はどこにいるのかと言うと。

「うわあ、解り切っていたとはいえ、容赦ないなあ、鈴の奴」

箒達が移動したのに対し、直人はいまだにピットに残って試合の様子を見ていた。

「一夏も押されてるな、今頃セシリア辺りが「私が教えたクロスグリットターンを使いなさい！！」とか喚いてるだろうなあ」

寸分違わず当たってた。

まあ、状況的に使った方が良いというのは直人も理解しているため、彼女の性格なども考慮すれば想像はつくだろう。

だが、試合の様子を見守る傍ら、その右手は胸を強く押さえていた。

それは、今尚している胸騒ぎから押さえていた。

（杞憂で済むならそれに越したことはないが……）

気のせいで済んでほしいと願う反面、既に確信めいたものを感じていた。

（この戦い、何かが起こる……！）

そして胸を押さえていた右手は、いつの間にか首に掛かる待機状態の灰桜を握りしめていたのだった。

一方、アリーナで鈴と対峙する一夏だが、状況は完全に押されていた。

再び距離を置いた後、鈴は双天牙月を連結させ、回転を加えながら斬りかかる。

その攻撃に守勢に立たされるのを余儀なくさていた。

（このままじゃ、消耗戦になるだけだ、一旦距離を取って……）

このままでは自分が危ないと危惧した一夏は、距離を取って体勢を立て直そうとする。

「甘い！！」

だが、距離を取った途端、甲龍の肩の装甲が展開、そこから見えない「何か」が放たれた。

「うわ！？」

間一髪それをかわすが、その後ろで爆発が起こる。

「今のはジャブだからね！」

そう言って鈴は再び放つ。

今度は直撃し、一夏は地上に吹っ飛ばされる。

「何だ、今のは！！」

突然何が起こったのか解らず、箒が声を上げる。

実際、見ている側からすれば、突然一夏が吹っ飛ばされたようにしか見えなかったからだ。

「あれは、衝撃砲（ショック・カノン）だね」

「そうです。空間自体に圧力を掛け、砲弾を撃ち出す武器です」

「私のブルー・ティアーズと同じ、第三世代型兵器ですね」

攻撃の正体を答える紅葉、そしてそれに補足説明を加える山田先生とセシリア。

「あれは厄介だね。砲弾だけでなく、砲身も見えないわけだからね、回避は困難だよ」

「それに、正面だけに撃てるとは思えない。恐らく、射角に制限はないよ」

「それはつまり、死角がないと？」

「そういう事」

紅葉達の言葉に、なお一層不安そうな顔をする箒だった。

そして、起き上がった後も、状況は何ら変わらず、むしろ悪化の様相さえ呈していた。
起き上がった直後に、鈴の衝撃砲による攻撃が襲い掛かり、それを回避するので精一杯だったのだ。

「よくかわしたわね。この龍砲は、弾丸も砲身も見えないのが特徴なのに」

そう言いながら、鈴は尚も砲撃をやめない。

（目に見えないのは厄介だけど、あの位のスピードなら……）

そんなことを考えながら、一夏は少し前の事を思い出していた。

それは、クラス対抗戦の五日ほど前の事だ。

「なあ」

「何だ？」

放課後、二人で練習していた一夏は、素朴な疑問を直人に聞いて

きた。

「白式の装備って、この雪片二型だけなんだよな？」

「そうみたいだな、それは俺も気になってた」

白式の装備と言えば、この刀の形をした、かつて一夏の姉、千冬が世界大会で優勝した時と同じ武装の後継機、「雪片二型」のみだ。

「でもま、師匠はそれで大会を勝ち抜いたんだ。俺も実質刀だけだし、お前にはその一太刀があれば十分だよ」

「世界大会優勝者や、三年間武者修行してた奴と一緒にされても、困るんだけどなあ」

「大体、俺が言えた義理じゃないが、素人のお前に射撃戦闘何ぞできるわけねえだろ。銃を構える、狙いを定める、引き金を引くの三動作の間に、反動制御、弾道予測、距離の取り方、その他諸々の事を考慮に入れてやらなきゃいけないんだ。それをお前、自分ができると思ってるのか？」

「うぅ、すまん」

直人の言葉に散々打ちのめされた一夏は少し落ち込んでしまう。

「セシリアも簡単に銃を撃っちゃいるが、頭の中ではこれらの事を計算して撃ってるんだ。射撃は目で見るのと実際に撃つのとは違うんだ」

「そうなんだなあ」

「それに、師匠なら、きっとこう言うと思うぞ」

まだ落ち込み気味も一夏に対し、直人は手に主武装である三日月宗近を持って言った。

「一つの事を極める方が、お前には向いているってな」

「直人……」

「俺たちはどうやったって、物事を並列で進めるなんて器用な真似はできない。だったらひたすら我武者羅に、一つの事を極め様じゃないか、その方が、よっぽど俺たちらしいだろ？」

「……ああ、そうだな」

「よし、立ち直ったところで、もう一本いくぞ！」

「おお！　来い！！」

（バリアー無効化攻撃、いけるか？）

五日前の会話、そして今までの事を思い出しながら、一夏は反撃の機会を窺っていた。
そして彼には、勝機を掴む方法が、一つだけあった。

《鈴》

《何よ？》

《本気でいくからな！》

そう言った瞬間、一夏の目が変わった。

《な、何よ！　そんなこと、当たり前じゃない！！　とっ、とにかくっ！　格の違いってやつを見せてあげるわよ！！》

そう言った鈴は、再び双天牙月を構えつつ、龍砲を発射する。
一夏はそれをただ避けてるだけだが、今度はただ逃げ回ってるわけではなかった。

（イグニッション・ブースト、千冬姉と直人が教えてくれた、これなら）

イグニッション・ブーストとは、一瞬でトップスピードをだし、相手に接近する奇襲攻撃である。
出しどころさえ間違えなければ、まだ技量が低く、経験の浅い一夏であっても、代表候補生と渡り合うことは可能だ。

（でも、直人も言ってたな……）

「良いか一夏、イグニッション・ブーストに限らず、奇襲や不意打ちと言った類の攻撃は、決して二度目は通用しない。なぜならこういうのは、相手の油断を突いてこそ、意味があるんだ。一度かわされれば、相手はそれを警戒するし、対処法も思いつく、だから二度目は通用しない。決めるなら一発で決めろ！」

（ああ、解ったよ！）

直人の言葉を胸に、一夏はイグニッション・ブーストの使いどころを探る。

（……ここだ！！）

そしてそれを見つけ、飛んでくる攻撃を掻い潜り、一気に鈴に近づく。

「なっ！？」

突然の奇襲に驚きを隠せない鈴。

この時、勝敗は決した、誰もがそう思った。

だが、次の瞬間、アリーナに大爆発が響いたのだった。

第十話　招かれざる者、襲来（後書き）

後書きコーナー　桜爛の間

作者「後書きコーナーの名称、応募がなかったので、「桜爛の間」と決めました」

直人「まずは感想返信、三月語様、相変わらずありがとうございます」

作者「他の方々も、感想を頂ければありがたいです。それではまずいってみよう。『直人の目安箱』！！」

直人「今回も前回、前々回に続き、三月語様からの質問らしいが、どんなのだ？」

作者「奏の一問一答に出た質問をそのっま送ってもらいました。えーっと、まず一つ目、『ルティア（萌殺兵器Ａ）の涙目＋上目遣いとシャル（萌殺兵器Ｂ）の上目遣い、断り辛そうに感じるのは？』だそうだ」

直人「どっちも断りづらいが、やはり涙目で攻められると、尚更だな」

作者「女の涙ほど適わない物はないってね」

直人「まして、ルティアは小動物を連想させるからな、そんな子に涙目で迫られたら、断れないだろ？」

作者「そうだな、それじゃ二つ目、『直人的に次の中で一番社会的に抹殺されそうなのは？

1　見ず知らずの女子に突然キスされた
2　朝起きたら裸の女子がベッドにもぐりこんでいた
3　事故とはいえ、女子を押し倒してしまった』だそうだ」

直人「これは、上記二つは奏が実際に受けたものだな」

作者「そうだな、んで、どうなんだ？」

直人「個人的に言えば3だな、1も2も、まだ説明すれば不可抗力だと解ってもらえる。だが3は事故だろうが故意だろうが、恐らく払拭は不可能だろう。ま、結論言ってしまえば、どれもその場の状況次第だな」

作者「ご尤も、それでは企画その二『抱腹絶倒？　アフレコ委員会！！』、今回は、君と、さらに二名来てもらいました」

直人「今度は誰だ？」

作者「それでは、ご登場いただきましょう！」

真白「どうも」

一夏「いきなり呼ばれたんだけど、何なんだ？」

直人「また真白、んで今回は一夏か」

作者「今回は台詞が長いのもあるし、結構あるけど、頑張ってね、まずは直人から、ほいこれ」

直人「どれどれ……おいおい、これは長いし、あんまり俺のがらじゃない気が」

作者「せっかく送ってもらったリクエストなんだから、文句言わない。あっ、真白はこれ、一夏はこれな」

真白「ん」

一夏「おう」

作者「さて、準備は良いか？」

直人「何時でも良いぞ？」

作者「それじゃ、一気にいってもらいましょう！　どうぞ！！」

その一

直人「今ここにある世界を信じてみろ！！」

その二

直人「今はそれでいいかもしれない！だが、マリーメイアは歴史を繰り返すだけだ！哀しく惨めな戦争の歴史をな！ここで流れを食い止めなければ、また俺達と同じような兵士が必要となってくる！！・・・そうなれば、悲劇という名の歴史がいつまでも続く・・・！五飛（ウー フェイ）、教えてくれ・・・！俺達は後何人殺せばいい・・・？・・・俺は後何回・・・あの子とあの子犬を殺せばいいんだ・・・！・・・・・・ゼロは俺に何も言ってはくれない・・・。・・・教えてくれ、五飛！！」

その三

直人「俺は・・・俺は・・・もう、誰も殺さない・・・。・・・殺さなくて済む・・・」

作者「台詞はどれも、ＯＶＡ　新機動戦記ガンダムＷ　ＥＮＤＬＥＳＳ　ＷＡＬＴＺより　ヒイロ・ユイの台詞です。

直人「言っておいてなんだが、やっぱり柄じゃねえ」

作者「お前はどっちかって言うと、ＢＡＳＡＲＡ小十郎みたいなキャラのつもりだからな。でも似合ってたぞ？」

直人「あんまり嬉しくない」

作者「次は刹那とか来たりしてな」

直人「それも柄じゃねえな」

作者「まあまあ、次は真白だ、準備は良いか？」

真白「うん」

作者「よし、あっ、次はキャラが違うので、間にコメントを挟みたいと思います。それではどうぞ！！」

その一

真白「・・・マスター・・・」

作者「そらのおとしものより、イカロスの台詞、と言うより呼び名でした」

直人「まったくもって違和感ないな」

作者「まあ、無感情であまり喋らない子ってのが真白の初期のキャラだからな、最近は結構喋ることが多いけど」

直人「お前のせいだろ」

作者「まあね、それじゃ、真白の台詞その二、どうぞ！！」

その二

真白「少し・・・頭冷やそうか・・・」

作者「こっ、これは、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳより　高町なのはの台詞です」

直人「彼女が「魔王」と呼ばれる所以になった、第八話の台詞だな」

作者「いや、一瞬だが、この台詞を言ったとき、真白のキャラが変わった気がしたんだが、気のせいか？」

直人「いや、多分それは気のせいじゃないかｔ……」

作者「解ってる、解ってるから皆まで言わないで！！　き、気を取り直して！　最後は一夏！　準備は良いか！？」

一夏「お、おぉ……」

作者「それでは、どうぞ！！」

一夏「撤退するくらいなら、最初から逃げてるぜ・・・！」

作者「直人と同様、ＯＶＡ　新機動戦記ガンダムＷ　ＥＮＤＬＥＳＳ　ＷＡＬＴＺより　デュオ・マックスウェルの台詞です」

直人「これも違和感がないな、だが一夏なら地で言いそうだぞ」

作者「それは俺も思ったり、思わなかったり、えー、まだリクエス

トはありますが、キャラが本編未登場のため、登場までストックさせていただきます」

直人「皆様も、質問したいことやアフレコしてみたいというのがあったら、どしどしご応募してください。

作者「さて、次回予告をちょっと」

直人「今さら始めるのか？」

作者「いやー、前話でそれっぽいことしちゃったからさ」

直人「まあ、良いが」

真白「クラス対抗戦の中、突如現れた所属不明の二体のＩＳ」

一夏「生徒たちが非難する時間を稼ぐため、二体のＩＳに挑む俺と鈴」

直人「そしてそこに、再び桜が舞い降りる」

作者「次回、『切り裂く白、吠える龍、舞い散る桜』を、お楽しみに！！

第十一話　切り裂く白、吠える龍、舞い散る桜

「！！」

「何？」

一組と二組、一夏と鈴のクラス対抗戦の最中、突如としてアクシデントが起こる。

突然、アリーナの遮断シールドが破られ、何者かが侵入して来たのだ。

《試合中止！！　織斑！　凰！　直ちに退避しろ！！》

非常事態であることをすぐに察した千冬が、二人に退避を命じる。

「な、何だ？　何が起こってるんだ！？」

《一夏！　試合は中止よ！　直ぐにピットに戻って！！》

未だに事態が掴めない一夏に、鈴が直ぐに退避するように言う。

だがその刹那、白式のハイパーセンサーに警告が表示される。

―警告―　ステージ中央に熱源複数　所属不明のＩＳと断定　ロックされています

「所属不明のＩＳ？　ロックされてる？　俺があいつらにロックされてるのか！！」

ハイパーセンサーからの情報に、漸く事態を確認する一夏。
理由は解らないが、侵入して来た所属不明のＩＳは、一夏が目的のようだ。

《一夏！　早くピットに！！》

「お前はどうするんだよ！」

《あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ！》

「逃げるって、女を置いてそんなことできるかよ！！」

《馬鹿！　あんたの方が弱いんだからしょうがないでしょ！！》

「！！」

鈴の言ってることは尤もだ。
この非常事態、技量、経験共に鈴に劣る一夏は、この場合残っても、鈴の足を引っ張ることになりかねない。

《別にアタシも最後までやり合うつもりはないわよ。こんな異常事態、学園の先生たちがやってきて事態を収拾……》

鈴が言葉を紡いでるその時、突如として噴煙の中から二色のビームが鈴に襲い掛かる。

「危ねえ！！」

間一髪、一夏が助けに入り、先ほどまで鈴がいたところにビームが飛んでくる。

「ビーム兵器かよ。しかも、セシリアのＩＳより出力が上だ」

「……ちょっ、ちょっと馬鹿！　放しなさいよ！！」

一夏に助けられたものの、お姫様抱っこされてることに顔を赤らめ、一夏に自分を解放するように催促してくる。

「お、おい、暴れるな！」

「うるさい、うるさい、うるさーい！！」

「馬鹿、殴るな！　来るぞ！！」

ハイパーセンサーの感知で、二射目をかわす。

そしてしばらくすると、噴煙の中から、二体のＩＳが現れる。

一体は黒く、全身が装甲に覆われていた、ＩＳと呼ぶには異様で威圧感のある姿だった。

だが……

「ねえ、あれってなんだと思う？」

「俺に聞くなよ……」

何故か呆れ気味の一夏と鈴。

それもそのはず、二人は黒いＩＳの隣の、もう一体のＩＳを見て、呆れかえっていた。

もう一体のＩＳは全身黄色という何とも派手派手しいカラーリングをしていた。

全身が装甲で覆われている点は同じだが、右手に身の丈以上ある巨大な剣、左手には円筒状のビーム砲が装備されており、それぞれ三本のケーブルのようなもので肩の部分に接続されている。

そして、肩の装甲には、右肩に「Ｉ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵ」、左肩に「ＨＩＴ　ＭＥ」と書かれていた。

これを見て、アリーナにいる二人だけでなく、管制室にいた面子も、同じことを思っていた。

（（（（（（……悪趣味　（だ）　（ですわ）　（だね））））））

一夏、箒、セシリア、鈴、そして紅葉の五人が、ほぼ共通の認識を異口同音で思うのだった。

ちなみに、山田先生と千冬もこの二機を見ているわけだが、山田先生は二人に連絡を取ろうとしていることに神経がいっており、千冬は黒いＩＳを睨みつけており、黄色い方はｏｕｔ　ｏｆ　眼中だった。

《織斑君！　凰さん！　直ぐにアリーナから脱出してください！　直ぐに先生たちが、ＩＳで制圧に向かいます！！》

管制室から、一夏と鈴に退避するように指示する山田先生。

「いや、皆が逃げ切るまで、食い止めないと！」

しかし、一夏は退く気はなかった。
まだアリーナの観客席には、シャッターが閉まったとはいえ、逃げ遅れた生徒たちがいる。
アリーナのシールドを突き破るほどのビーム砲を装備している以上、もしそれが観客席に放たれたりすれば、逃げ遅れた生徒たちに被害が出る。
それがわかってるからこそ、避難までの時間を稼ごうというのだ。

《それはそうですけど、でも、いけません！　織斑君！！》

今尚説得を続けるが、すでに一夏の胸中は決まっていた。

「鈴、いけるな？」

「だ、誰に言ってんのよ！　それより放しなさいよさいよ！　動けないじゃない！！」

「ああ、悪い」

じたばた暴れる鈴を解放した刹那、再び攻撃が二人を襲う。
それを回避した刹那、黒いＩＳが一夏を、黄色いＩＳが鈴にめがけて襲ってきた。

「ふん！　向こうはやる気満々みたいね！！」

「みたいだな！！」

「一夏、アタシが黄色い方を引きつけながら援護するから、あんたは黒い方をなんとかしなさいよ。武器、それしかないんでしょ！」

「その通りだ。じゃあ、それでいくか！」

二人で作戦を確認し合った後、そのまま近づいてきた敵に、攻撃を仕掛けるのだった。

「もしもし織斑君！　織斑君、聞いてますか！！　凰さんも！　聞いてますか！！」

一方、管制室では、山田先生が尚も一夏達に通信を送っているが、二人は戦闘中で全く通信にこたえる気配がない。

「当人たちがやると言っているのだから、やらせてみても良いだろ」

するとここで、今まで黙していた千冬がそう呟く。

「お、織斑先生、何を呑気な事を言っているんですか！」

「落ち着け、コーヒーでも飲め。糖分が足りないからいらいらする」

そう言って、千冬はコーヒーに「ある物」を入れてしまう。

「……あの、先生」

「何だ、秋宮」

「足りなくなるといらいらするのはカルシウムですよ？　それに先生がさっき入れたの、砂糖じゃなくて塩ですよ？」

「……」

二重の意味で間違いを指摘され、その場を嫌な空気が漂う。

「一夏……」

そんな空気は露知らず、箒とセシリアはただアリーナの状況を見つめていた。

「先生！　私にＩＳの使用許可を！　直ぐに出撃できますわ！！」

とここで、見てるだけの自分に耐えられなくなったのか、セシリアがＩＳの使用許可を求めてくる。

「そうしたいところだが、見てみろ」

そう言って千冬が指摘した場所を見ると、そこには、とんでもないことが表示されていた。

「遮断シールドが、レベル４に」

「あの二機の仕業、ですか？」

「そうだ、これでは避難することも、救援に向かうこともできない」

その言葉が意味するところは一つだった。

今の一夏と鈴は、まさに孤立無援という事だ。

「……ところで風花」

「はい」

とここで、千冬は真白を呼び出す。

「何故お前は、ピットの開閉ボタンを押しているのだ？」

「えっ？　……ああ！？」

千冬の言葉に、山田先生も気づいた。

見てみると、真白はいつの間にか、ピットの開閉ボタンを押していたのだ。

「ま、真白さん！！　勝手にいじったらだめですよ！！　それに、何時から押してたんですか！！」

「シールドが破られたとこから。みんなが騒いでるうちに押しました」

淡々と質問されたことに答える真白。

「何故、そんなことをしたのだ？」

ここで、箒がその行動の意味を聞いてくる。

「今打てる最善の手を打った。それだけ」

答えになってない答であったが、千冬は、その言葉の意味を理解した。

「あいつか……」

「はい、きっとやれます」

どこか確信めいたその言葉を聞くと、アリーナの状況を見ながら、千冬は一言つぶやいた。

「これでしくじったら、また一から叩き直してやるからな。馬鹿弟子」

一方、アリーナの状況は悪くなる一方だった。

何度も一撃必殺の間合いに入って攻撃を仕掛けるが、黒いＩＳは器用に攻撃をかわす。

「一夏馬鹿！　ちゃんと狙いなさいよ！　これで四回目じゃない！！」

「狙ってるっつーの！！」

と、二人で口喧嘩してる間に、黒いＩＳからの攻撃が襲い掛かる。

「一夏、離脱！」

「ああ……！！」

鈴に促されて距離を取った一夏は、ここであることに気付く。

「鈴！　後ろだ！！」

「えっ！？」

そこには、悪趣味な黄色いＩＳが大剣を振り下ろそうとしていた。

（やばっ！）

直ぐに対処し様にも、この距離では双天牙月は間に合わない、一夏も距離的に無理だ。

そしてそのまま、大剣は鈴に向かって振り下ろされる。

（やられる！！）

そう思い、思わず目を瞑る。

だが、何時まで経っても衝撃は来なかった。

「……えっ？」

不審に思い、鈴が目を開けてみると、そこにいたのは……

「油断大敵だな」

そこにいたのは、灰色のＩＳ「灰桜」を纏い、両手に持った二本の刀で、敵が振り下ろした大剣を防ぐ直人だった。

「な、直人」

「お前！　何時の間に！！」

「積もる話は後だ、それより、いい加減に離れろ！！」

そう言うと、直人はＩＳの大剣を弾き返す。

「喰らえ！！」

そしてそのまま、手に持ってる宗近にエネルギーを纏わせ、その

まま横に薙ぎ払う。
　すると、エネルギーの刃がそのまま、黄色いＩＳに向かって飛んでいった。
　だが、当然その攻撃は回避される。
「ちっ、まあ、あんな器用な動きができるんだ。これくらい、避けられないわけないか」
　そう言って左手に持ってた刀を放すと、刀はそのまま右肩の装甲に装備された。
「鈴、大丈夫か？」
「えっ？　う、うん」
「そうか、そりゃ良かった」
　目立った外傷もなく、攻撃を喰らった様子もないのを目視で確認し、鈴からも無事だと聞いたため、ほっと安堵する。
「にしても直人、何時の間に入ってきたんだ？」
「ああ、あの二機が侵入して来た辺りからか、突然ピットの扉が開いたんで、遮断シールドが張られる前に全速力で突っ込んで入ってきた」
　一夏からの問いに、直人は事のあらましを簡潔に答える。
「にしても、あいつ……」

そう言って直人が睨んだのは、あの黄色いＩＳだった。

「直人、あいつの事知ってるの？」

「いや、初めて見るが、あんなものを作る奴は、古今東西あいつしかいないな」

鈴の問いかけに答える直人の表情には、呆れと怒りがこもっていた。

「ったく、こんな騒動起こしやがって。今度会ったら八つ裂きにした後簀巻きにしてふん縛って師匠の前に突き出してやる」

「な、直人、一体どうしたんだよ」

「あんた、最近いう事が物騒よ」

思わぬ直人の言葉に、一夏も鈴もドン引きだ。

「ま、それは置いといて、一夏、零落白夜は後何回使えそうだ？」

「今のエネルギー残量だと、あと一回が限界だ」

「そうか、幾らなんでもそれはきついな」

「どうすんの？　直人が加勢してくれたのは嬉しいけど、このままじゃジリ貧よ」

空気を一新させた後、三人は状況を確認するが、先ほどまで戦っ

ていた。一夏と鈴のシールドエネルギーはほぼ残っていなかった。

「二人とも、無理なら下がっても良いんだぞ。あんな二機、俺一人でも十分切り捨てられる」

「冗談！　誰が逃げるってのよ！！　あたしはこれでも代表候補生よ！！」

「俺が途中で投げ出すような奴じゃないってのは、お前がよく知ってるだろ！」

直人の言葉に、甘えるどころか俄然やる気を出す二人。

「はぁ、やれやれ、そう来ると思った」

だが、二人の返答に呆れながらも、直人は再び刀を構えなおす。

「なら、一夏は鈴の背中位は守れよ。お前は俺が守ってやるからよ」

「おお！」

「まったく、あんたたちは……ひぃ！？」

そんな会話をしていると、再びＩＳ二機からの攻撃が来る。

「来るぞ！！」

「ああ！！」

「解ってる！！」

直人の言葉を合図に、三人は再び、ＩＳに立ち向かっていくのだった。

第十一話　切り裂く白、吠える龍、舞い散る桜（後書き）

桜爛の間

作者「今回もまた目安箱だけです」

直人「またか、やり方を変えた方が良いかもしれないな」

作者「大丈夫、もう決まったから」

直人「ほう、それで、今日の質問は何だ？」

作者「はい、我が小説の常連になりつつある、三月語様からです。『今日からＰＳＮ復旧！けどＰＳＰは改造状態だから接続できない！次の選択肢があったらどうする？

1．諦めて現状維持に徹する
2．無理にロックを解除する
3．改造を解除して大人しく公式に戻す』だそうです」

直人「これについては作者に任せる」

作者「任された。えーっとですね、実際やったことはありませんが、私でしたら3を選ぶと思います」

直人「作者はＰＳＰを完全なゲーム機として使ってるからな、しかもここ最近は手つかずだし」

作者「そうなんだよねー。ところで改造ってなんですか？　まさか

本体をバラシテ、とかじゃないですよね」

直人「ンなわけないだろ」

作者「ま、冗談はさておき、次回で対抗戦、と言うより、謎のＩＳとの戦闘は終了、そして、直人と鈴の会話が入ります」

直人「うぅ、そう言えば、俺呼び出しくらったんだっけ」

作者「ま、次回をお楽しみに、ご感想、ご指摘、後後書きコーナーへの応募、お待ちしております」

第十二話　決着　そして氷解（前書き）

この話で、アニメ四話目、つまり原作第一巻の話が終わります。

謎のＩＳとの激闘の行方は？　そして、鈴と直人の溝は？

それでは、お楽しみください。

第十二話　決着　そして氷解

直人の参戦により、一夏達と謎のＩＳの戦いは拮抗していた。

黒いＩＳを一夏と鈴が、黄色いＩＳを直人が請け負い、それぞれ戦いを再開したのだ。

だが、拮抗はしていたが、実質千日手になりつつあった。

一夏と鈴は、これまでの戦いでシールドエネルギーを消耗しており、両者ともこれ以上の消費を避けるため、碌な反撃ができないでいた。

一方の直人はシールドエネルギーの消費は然程でもないが、近づく好機を掴めず、せめてもの攻撃と、エネルギーの刃と四本の刀で攻撃するが、黒いＩＳと同様、人とは思えない動きでひらりとかわされてしまう。

《ちょっと直人！　あんたちゃんと狙ってるの！！》

《狙ってるっての！　でもあいつの動きがちょこまかしてて当てられないし、そもそも俺は距離を取っての戦いは専門外だ！！》

いつまでも攻撃を当てられない直人にいらいらした鈴が怒鳴るが、直人もそれに怒鳴り返す。

実際、直人の本分は接近戦であり、距離を取っての戦いは四本の刀で補っているが、あまり距離を取っての戦いは得意とは言えない。

《と言うか、俺の事より自分の方に集中しろ！　よそ見してると黒こげになるぞ！！》

《うっさいわね！　解ってるわよ！！》

（はぁ、何やってんだよ……？）

こんな感じで言い争いをする二人に、一夏は心の中で突っ込みを入れるが、ここにきて、奇妙な違和感に気付く。

《……なあ、鈴、直人》

《何よ？》

《何だ？》

そして、二人に疑問を投げかける。

《あいつらの動きって、何か機械染みてないか？》

《何言ってるのよ？　ＩＳは機械じゃない》

一夏の疑問に、鈴が至極正論で答える。

《そう言うんじゃなくて。あれって……本当に人が乗ってるのか？》

《はあ！？　人が乗らなきゃＩＳは動かな……》

《一夏》

一夏の疑問に鈴が再び正論を言おうとした時、直人が言葉を遮った。

《俺も、同じことを考えてた》

《直人。あんたも何言ってるのよ！》

直人の言葉に鈴もさっきと同様に聞き返す。

《いや、ちゃんと根拠はある》

《何よ？》

《まず、あいつらの動きを見てて、おかしいと思わないか？》

《動き？　……あっ！》

ここで、鈴も直人の言葉を聞き、その違和感に気付く。

《そう言えば、さっきからあたしたちが話してる時は、あんまり攻撃してこないわね》

《仮にもこのＩＳ学園に襲撃してくるような輩だ。俺たちが狙いだというのは解ったが、態々作戦を考える時間、ましてやこんな雑談をする暇を与えると思うか？》

《それは……ないわね。長引けばシールドが解除されて、自分たちが不利になるだけだし》

いくらシールドレベルが４に設定され、誰も入れないとはいえ、時間がたてば、クラッキングで解除されることは向こうも知っているはず。

もし、これが熟練されたプロならば、こちらに余計な作戦を考える時間も与えず、真っ先に一夏と直人を狙うだろう。

だが、向こうはそんな気もなく、三人が話してる時はあまり攻撃をしてこない。

まるで、こちらの話に興味があるかのように。

《それに、これは俺の主観なんだが……》

そして直人は、自分の主観からの根拠を口にする。

《あの二機、生きてるものの気配がしないんだ》

《……直人》

《あんた、暫く会わない間に電波を……》

《おいこら。人をラジオか何かみたいに言うな》

鈴の言葉を心外とばかりに遮り、直人は補足を始める。

《世界中を旅してると、必然的に野宿とかが多くなるんだ。そして野宿してると、野生動物に襲われる危険がある。そういう気配を察知できないようにならないと。俺と真白は、今頃ライオンかハイエナの餌になってるって》

《そうなのか？》

《まあ、そう言われれば、そうかもね》

《それで、さっきから戦いながら、相手の気配を探ってたんだが、どうも生きてる人間の気配がしないんだ》

確かに直人主観で信憑性は薄いが、前の説明の事もあり、あながち馬鹿にはできない。

《……でも無人機なんてありえない。ＩＳは人が乗らなきゃ絶対に動かない。そう言うものだもの》

だが、やはり鈴はいまいち納得できていないようだ。

だが、実際彼女の言うように、無人のＩＳなど、今まで聞いたことがない。

《鈴。確かに常識的に考えればそうだろう。でもな、常識＝全てじゃないぜ》

《どういう意味よ？》

《常識だからって、非常識を否定する要素にはならないってことだ。まだ世間に広まってないだけって可能性もあるだろ？》

だが、直人は常識にとらわれる事に警鐘を鳴らす。

確かに、常識だからと言って、非常識を否定する事はできない。

現に、女性しか動かせないとされたＩＳの常識を覆したのが、今目の前にいる二人なのだから。

《……仮に無人機だとして、それなら勝てるって言うの？》

《そうだな、無人機なら、どれだけ壊そうが犠牲は出ない。つまり……》

《全力でやれる！！》

直人の言葉に相槌を打つように、一夏が答える。

《全力でって。今まで本気じゃないような言い方ね》

《ようなじゃなくて、そうなんだよ》

鈴の言葉に、直人が言葉を訂正する。

《一夏の武器、雪片弐型の単一仕様能力（ワン・オフ・アビリティー）“零落白夜”は、その特性上、威力が高すぎて訓練や学内対戦で全力は出せない。そして俺の灰桜のスピードは、全開でいけば一瞬で勝負が決まる。でもそれだと意味がないから、いつも相手に合わせてるんだ》

鈴が疑問符を浮かべていると、直人が理由を簡潔に説明する。

《でも、相手が無人機なら加減する必要は無い。一夏も俺も、全力で仕掛けられる。そうだろ、一夏？》

《ああ》

直人の問いかけに、一夏も確信を持って答える。

《零落白夜だか何だか知らないけど、その攻撃自体が当たらないじゃない》

《俺は大丈夫だ。灰桜の最大スピードなら、奴が反応するより早く攻撃できる。問題は一夏の方だが……》

《次は当てる……それでいいだろ？》

《《言い切ったな（わね）》》

一夏の出した答えに、二人は確認するように言う。

《じゃあそんなことありえないけど。あの二機が無人機だと仮定して攻めましょうか！》

《よし、さっきと同じように、一夏と鈴は黒い方を、俺は黄色い方を叩く！》

《ああ！！》

《オッケー！！》

こうして作戦が決まり、一気に三人が攻めかかろうとした。

その時……

《一夏！！》

突然、大声で一夏を呼ぶアナウンスが聞こえた。

三人が振り向くと、管制室に居た筈の箒がアナウンス席にいて、肩で息をしながら一夏に怒鳴っていたのだ。

《男なら、男なら、それくらいの敵に勝てなくてなんとする！！》

「あの馬鹿！！」

これに真っ先に直人が不味いと悟り怒鳴るが、すでに黒いＩＳが、アナウンス席に攻撃を仕掛けようとしていた。

「鈴！　やれえっ！！」

「解った！」

一夏の言葉に、鈴は衝撃砲の発射体制を取る。
すると、その射線上に一夏が割り込んできた。

「ちょっ、ちょっと馬鹿！　何やってんのよ、退きなさいよ！！」

「いいから撃て！！」

「ああもう！！　どうなっても知らないわよっ！！」

そして最大出力で放たれた衝撃砲は、当然射線軸上にいた一夏の背中に命中する。

「あいつ、無茶な事考えるな……」

そのトンでも行動に、直人もただただ呆れるしかなかった。
そして一夏は、そのまま一気に黒いＩＳに突っ込み、零落白夜を発動した雪片で、一気に斬りつけた。　それにより、黒いＩＳの片腕を切り落とすが、そのままもう片方の腕で殴り飛ばされてしまう。
そして黒いＩＳは、片腕の照準を一夏に合わせ、至近距離からビームを放とうとする。

しかし、一夏の表情に諦めの色はなかった。

「狙いは？」

《完璧ですわ》

その通信と共に、黒いＩＳに、複数のビームが襲い掛かった。

それは、セシリアのブルー・ティアーズだった。

「セシリア、決めろ！！」

「了解ですわ！！」

一夏の合図とともに、セシリアのスターライトｍｋＩＩＩの閃光が放たれ、黒いＩＳを貫いた。

「よっしゃ！！」

《まだよ！！》

黒いＩＳが倒れたのを見て、一夏は喜ぶが、鈴がすぐさま警告する。

そしてその警告を表すように、黄色いＩＳが、再び大剣を振り下ろそうとする。

《一夏！　逃げなさいよ！！》

鈴が直ぐに逃げるように言うが、一夏は逃げようとしない。

「必要ねえよ。だって俺には、最高の剣が付いているんだからな。そうだろ？　直人」

その言葉と共に、振り下ろそうとしていたＩＳの大剣は、腕ごと地面に落ちた。
そしてその後ろには、直人が立っていた。

「さて、マグロの解体ショーならぬ、ＩＳの解体ショーとしゃれ込むか！！」

そう言って、直人は右手に三日月宗近、左手に童子切を持って、ＩＳに斬りかかった。

回転を加えながらの剣撃で、ＩＳの右足を斬り落とす。
すると、ＩＳは左手のビーム砲を直人に向けるが……

「遅い！！」

いつの間にか後ろに回っていた直人はそのままビーム砲と肩の装甲を繋ぐケーブルのようなものを斬る。

「これで、お前はそいつを撃てないだろ！　これで終わりだ！！」

そしてとどめとばかりに、ＩＳの胴体を斬る。
そして、上半身と下半身が泣き別れたＩＳは、そのまま倒れこむのだった。

《間に合ってよかったですけど、ギリギリのタイミングでしたわよ？》

「何、セシリアならやれるって思ってたさ」

少し呆れ気味に通信してくるセシリアに、直人は微笑みながらそ

う言った。

《そ、そうですの……と、当然ですわ／／／》

「ははっ」

《直人》

そんな風に談笑していると、今度は一夏から通信が入る。

《やったな》

「ああ、これで一件落ちゃ……」

と、ほっと一息ついたその時……

―警告―　ＩＳの再起動を確認　ロックされています

「何！？」

ハイパーセンサーからの情報に、振り向くと、黄色いＩＳの左腕のビーム砲に、エネルギーが収束されていた。

「んなくそおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

考えを張り巡らすより先に身体が動いた。
直人はそのまま全速力でＩＳに突っ込んだ。
そして、目の前が閃光に包まれるのを見ながら、そのまま意識は暗転した。

「ん……こ、ここは？」

暫くして、直人は目を覚ました。
いまだに意識が寝ぼけているわしく、状況把握に努められずにいた。

「目を覚ましたか、馬鹿弟子」

「……師匠？」

突然声がしたので振り向いてみると、そこにいたのは、自分の師、織斑千冬だった。

「ここは？」

「保健室だ。お前はあの時、再起動したＩＳの攻撃を正面から喰らって吹っ飛ばされ、そのまま気絶したのだ」

「そうでしたか……っ！？」

上半身を起こすと、体に激痛が走る。

「無理するな。吹っ飛ばされてアリーナの壁に凄い衝撃で叩きつけられたんだ。暫くは地獄になるだろう」

「は、はぁ……そうだ、皆は！　あの後、どうなったんですか！！　あたっ！」

激痛により意識が覚醒したのか、直人は千冬に質問攻めをする。

すると、千冬に出席簿で頭を軽くたたかれた。

「落ち着け。お前と一夏以外は無事だ」

「えっ？　俺はともかく一夏も？」

「あの二機のＩＳだが、ほぼ同時に動き出したのだ。一夏も、お前と同じように奴の攻撃に突っ込んでいった」

「それで、一夏は？」

「お前と同じだ、軽い打撲で数日は地獄になる。それと、あの二機のＩＳは、あの後動かなくなった」

「そうですか……」

ＩＳの事はともかく、一夏に酷い怪我がないと解り、心の底から安堵の表情をする。

「人の心配より自分の心配をしたらどうだ？　とはいえ、無事で何よりだ。弟二人に死なれては、寝覚めが悪いからな」

「はっ？　弟二人？」

千冬の言葉に直人は疑問を呈す。

一夏は当然として、何故自分も弟勘定に入っているのかわからなかった。

「何だ？　お前は一夏の義弟なのだろ？　ならば私にとっても義理の弟という事になるのではないか？　それとも何か？　私が姉では不満か？」

悪戯っぽく答える千冬に直人は少し焦る。

「い、いえ！　不服ではないですが。俺にとっては、姉と言うより、師匠と言う認識の方が強いので」

「ふっ、相変わらず生真面目な奴だ。では、私はそろそろ席を外す」

「あっ、はい」

そう言って立ち上がると、振り返ることもせず、千冬はその場を後にするのだった。

「ふぅ、俺も焼きが回ったかな？」

先ほどの戦闘の様子を振り返りながら、直人はそう呟いた。

「前の俺だったら、もっと万全を期する筈だったのに、あの程度で気を抜くとは……」

ふぅとまたため息をつく。

そして、ぼーっと天井を見つめていると……

「直人」

突然、また声がしたので振り向くと、そこには鈴が立っていた。

「体の方は大丈夫？」

「ああ、鍛え方が違うからな」

鈴に心配される中、直人は無用とばかりに答える。

「そう言えば、対抗戦は中止か？」

「当然よ。あんなことがあったんだから」

「そりゃそうだな」

「まったく、一夏といいあんたといい、どうしてあたしの周りの男どもって、こうも馬鹿ばっかりなのかしらね？」

「一夏が馬鹿と言うのは否定しないが、一緒にされると複雑だな」

どことなく談笑しているようにも見えるが、やはり直人の表情はどこか浮かなかった。

「そう言えば、対抗戦前の話、覚えてる？」

「！！　あ、ああ……」

対抗戦前の話。

対抗戦が終わったら、話があると言っていたことだ。

「回りくどいの嫌いだから、単刀直入に言わせてもらうわよ」

「な、何だ……」

「あんたさ、あの時の事、まだ引きずってるでしょ？」

その言葉で、直人は完全に確信を得た。

「お前も、覚えてたんだな」

「まあね。にしても、あんたって相変わらずよね。律儀と言うか、真面目すぎるというか」

「……お前は何とも思わないのか？」

憶えてるようだが、まるでもう気にしてないという風に言ってくる鈴に、直人はそう聞いてくる。

「昔の事をいつまでも引きずる趣味は無いわよ。それに、もうどう

でもいいしね」

「でも、俺はお前を……」

それでも直人にとって、「鈴を泣かせた」と言う事実が、やはり重くのしかかっていた。

「あのね、小学生の時の話よ？　ちょっとしたことで喧嘩につながったり、まして喜怒哀楽が激しかったりするのは当たり前じゃない？」

「でも……」

「ああもう！！」

踏ん切りがつかない直人に、痺れを切らした鈴が詰め寄ってくる。

「とにかく！　あたしはもう気にしてないから、この話はもう終わり！！」

「いや、そんなこと言われても……」

「何時までも昔の事引き摺られて、避けられてたんじゃこっちも良い気しないわよ！！　だからもう終わり！　あんたもこれ以上引き摺らない事！！　全く！　本当に手間が掛かるんだから！！」

やや強引だったが、彼女の言うことも最もだった。

「……鈴」

「何よ？」

しばらく沈黙してた直人は、やがて口を開く。

「その……今さらだけど、すまなかったな」

本当に今さら、だけど謝らずにはいられない。

そう思った直人は、鈴に謝罪の言葉を言った。

「ふぅ、本当に今さらね。別に要らないのに」

「そういう訳にはいかない性分なんでな」

軽口気味にそう言うが、その表情に、愁いや負い目のようなものは一切感じられなかった。

「また、これからよろしくな」

「ええ」

そう言って手を伸ばし、お互いに握手して、二人の溝は埋まったのだった。

「あっ、そう言えば」

「何？」

「お前が一夏とした約束ってなんだ？　差支えなかったら、教えてくれないか？」

「えっ！？　そ、それは……」

直人の問いかけに、鈴は顔を赤くして口籠る。

「いや、無理なら別にいいんだけど」

「……ちょっと耳貸して」

そう言ってきたので、耳を貸すと、鈴は小声で約束を教えてくれた。

その約束と言うのは「料理が美味くなったら、毎日自分の酢豚を食べてくれる」と言うものだった。

「ははーん。大方一夏の奴、それを毎日ただ飯食わせてやるって勘違いしたんだな」

「そうなのよ。全くあいつは！！」

「あのな、気が付かない一夏も一夏だが、お前もお前だと思うぞ？あの鈍感な一夏にそんなこと言ったら、そう解釈されても仕方ないだろ」

「うっ」

一夏と長い付き合いだっただけに、直人は一夏の相変わらずの鈍感さにあきれる反面、回りくどい言い方をした鈴にも問題があると言う。

「直人。あんたどうにかしてあいつの唐変朴、直せない？」

「善処はするが、難しいと思うぞ？」

「だよねえ、はぁ」

直人の望み薄な返答に、鈴は思わずため息を漏らす。

「はぁ、でもよく考えてみたら。こいつも唐変朴なんだっけ？　自覚ないみたいだけど……はぁ」

「ん？　なんか言ったか？」

「何でもない」

小声で呟きながら、鈴は呆れかえっていた。

唐変朴に唐変朴を直すのを頼むこと自体、間違いなのかもしれない。

そう思わずにはいられなかった鈴だった。

一方、ここはＩＳ学園の地下施設。

ここに、乱入して来た二体のＩＳの残骸が運び込まれ、山田先生

と千冬によって調べられていた。

「やはり、無人機でした。両機とも、未登録のコアを使っていました」

「そうか」

ある程度予測していたのか、千冬は然程驚く様子はなかった。

「それにしてもこちらのＩＳ。趣向はともかく、凄い技術が使われてるみたいです」

そう言って山田先生は、黄色いＩＳの武装データを見せる。

「このＩＳの武装には、二種類のエネルギー系統があるみたいなんです。普段は肩の装甲と繋がったケーブルから、肩のエネルギーコンデンサーに蓄積されたエネルギーを使って攻撃するのですが。万が一それができなくなった場合、本体のシールドエネルギーを消費して使用できるようになってるみたいです」

「そうか、だから桜庭がケーブルを切っても、武装が使えたのか」

「はい。これは一体……」

「……」

解析されるＩＳを、二人はただ見つめるだけだった。

第十二話　決着　そして氷解（後書き）

桜爛の間

作者「これでアニメ第四話。原作第一巻分が終わったー！！」

直人「しかし、今回は長いな」

作者「すまん。３０００字から５０００字で済ませるつもりだったのに、今回はどうしても長くなってしまった」

直人「まあ、別にいいが。それで、この話で、俺と鈴は仲直りできたのか？」

作者「何故疑問形？　まあ、ここは初めから書こうと思ってたところだし、取り敢えず握手までしたんだから、仲直りしたってことで良いんじゃないか？」

直人「まあ、そういうことにしておこう。さて、まずは質問コーナー『直人の目安箱』からだ！！」

作者「我が小説の常連、三月語様からだ、えーっと『もしポケモンが女の子になったとして、次の中で嫁にするなら？

1．無口な（無口なのは恥ずかしがり屋だからと信じたい）サーナイト（脳内ＣＶ：早見沙織）

2．何でもそつなくこなすクーデレなエーフィ（脳内ＣＶ：茅原実里）

3．必殺技が『りゅうせいぐん』という名のホーリージャッジメン

トなドジっ子なデンリュウ（脳内ＣＶ：水樹奈々）』との事だが？」

直人「そうだな、やはり2だな。何でもそつなくこなすのは悪い事じゃないし、こちらとしても助かる」

作者「とのことです。もう一つの質問は『今現在、ＩＳ熾天使で最も『バカ』だと思うキャラは？』だそうだ」

直人「学力的な意味で言わせてもらえば、やっぱり真琴だな。初めはロロットと思ってたんだが、理系ができるとのことなので、真琴に決まった」

作者「だ、そうです。次は『抱腹絶倒！　アフレコ委員会！！』」

直人「今回は誰がやるんだ？」

作者「三月語様からの応募ですが、誰でも良いとのことなので、ここは小節の顔である直人にやってもらおう。はいこれ」

直人「ああ。……ちょっと待て、これ本当に言うのか？」

作者「はいはい、文句は後で聞くからやってやって」

直人「……解った」

直人「・・・貴様の水着になど、微塵も興味は・・・っ！・・・・これは日射病のせい・・・」

作者「えーっと。【バカとテストと召喚獣】より、土屋康太（ムッツリーニ）の台詞だそうですが」

直人「なんで俺なんだ？」

作者「できれば男にやらせてほしいという要望があったのですが、とても一夏はこんなこと言いそうにいなかったので、消去法で君に決まったわけですよ」

直人「そう……か」

作者「と、いう訳で、本日はここまで。次回は小説第二巻に入る前に、少し小話を挟みます。次は、季節外れになってしまいましたが、梅雨のお話です」

直人「皆様からのご意見、ご感想、ご指摘、そして後書きコーナーへの応募、お待ちしております」

第十三話　とある梅雨の日、真剣ＶＳ少女達の仁義なき戦い（前書き）

今回はオリジナルの小話、時期はずれましたが、梅雨のお話です。

そして次回はネタ満載の話になること請け合いです。

それでは、お楽しみください。

第十三話　とある梅雨の日、真剣ＶＳ少女達の仁義なき戦い

梅雨

「つゆ」或いは「ばいう」と読むこれは、日本を始めとする東アジアの広範囲に、五月から七月に掛けてめぐってくる雨期である。

梅雨は雨や曇りが多い期間であるこの時期は湿気が多く、カビや食中毒に注意する時期とも言われているが、この梅雨が明ければ、ある者にとっては楽しく、またある者にとっては厳しい夏がやってくる。

だが、梅雨のじめじめとした湿気にうんざりするものも多い事だろう。

そしてそれは、ここＩＳ学園も例外ではない。

これは、そんな梅雨時期に起こった騒動の一端である。

（（（（（（……気まずい　（な）（わね）（ですわ））））））

その日、１組の教室では、休憩時間に一夏、箒、セシリア、鈴、そして紅葉の五人が、異口同音にそう思った。

そしてその元凶は、今五人が集まってる、一夏の席の隣にいた。

「……」

隣にいる直人が、机に肘を立てて不機嫌オーラをまき散らしていたのだ。

その為に、周りがおしゃべりでどよめきあってる教室内で、その一角だけが、異様な空間を形成していたのだ。

「あの、一夏さん」

「ん、何だ？」

あまり大声では直人の勘に触るのでは思い、小声でセシリアは一夏に聞いてきた。

「どうして、今日……と言うより、ここ最近ですか、直人さんのご機嫌が悪いんですか？」

「ああ、そのことか。もうそんな時期だっけなあ」

と、何やら思い出したようなそぶりで言う一夏。

見てみると、箒と鈴も同じような顔をしていた。

頭に疑問符を浮かべていると、一夏が理由を話し出した。

「いやな、直人は梅雨の時期が嫌いなんだよ」

「そうなの？」

「正確には、梅雨の湿気の多さが鬱陶しいと言ってな。小学校の頃も、梅雨に入ると不機嫌そうになってたぞ。あそこまで不機嫌ではなかったが」

一夏の答えにきょとんとした顔で紅葉が聞くと、そこに箒が補足説明を加える。

「そうねー。いつもは結構仲良くしてたけど。この時期になると決まって「鬱陶しい、鬱陶しい」って、口癖のように言ってたわ」

「でも、あそこまで不機嫌なのは、俺も初めて見たぜ」

どうしてかと一夏が首を傾げていると、先ほど昔の事を話した鈴が、その原因を直球で口にした。

「あの髪じゃないの？」

それは、直人の肩甲骨辺りまで伸びた、特徴ある銀髪だった。

「そういや、小学校の頃はまだ短かったからな、あんなに伸びてたら、流石に鬱陶しさが増えてるよなあ」

「でもさ、そんなに鬱陶しがるぐらいならさ、直人なら切りそうじゃないの？」

「あっ、それあたしも思った」

「確かに、直人ならバッサリ切りそうだな」

鈴の言葉に、紅葉と箒も同調する。

「確かにな、直人がわざわざ髪を伸ばすなんて思えねえし」

「とすると……」

その言葉の後、後ろを向いたセシリアの視線を追いかけると。

「……」

それは一夏の真後ろの席に座ってる真白にたどり着いた。

相変わらず、何やら分厚い本を読んでおり、梅雨の湿気など気になっていない様子。

「ちょっと鎌掛けてみましょうか？」

そう言うやいなや、鈴は直人の近くに移動する。

「直人」

「ん？」

すると、無言で黙ってた時より、若干ではあるが、不機嫌オーラが薄まり、直人が反応した。

「なんか苛立ってるわね」

「知ってるだろ。俺はじめじめしてんのが嫌いなんだ」

普通の会話に聞こえるが、直人はいまだにご機嫌斜めであり、鈴もそれに留意して話を続ける。

「でも、昔はそんなに不機嫌じゃなかったでしょ」

「そりゃ苛立ちも増すだろ。これに湿気がこもって尚更いらいらする」

そう言って、髪を一束掴んで言う。

ここで鈴は、先ほど言った鎌を掛けることにした。

「だったらさあ、切っちゃえばいいじゃん」

そう言った刹那……

「駄目！！」

『！？！？』

突如、真白が大声を上げた。
普段おとなしく、滅多に喋らない彼女のその行動に、教室内にいた全員が驚いた。

「切っちゃ……駄目」

「どうしてよ？」

「どうしても……」

鈴が理由を問いただすが、真白は理由を言おうとしない。
しかし、その瞳には確固たる意志が宿っているようであり「絶対切らせない」と、心の声が聞こえてきそうだった。

「ま、そういう訳だ。俺が斬ろうとしても反発するから、切るに切れないんだ」

「そ、そうなんだ……」

鎌掛けが成功した鈴は、直人からその言葉を聞くと、そそくさと一夏達の所に戻っていった。

「やっぱり、真白さんが原因だったんですね。さっきは驚きましたけど」

「あの真白ちゃんがあそこまで取り乱すところ見たことないよ」

先ほどの鎌掛けの結果はある意味予想していた通りだったが、先ほどの真白の取り乱し様に、セシリアも紅葉も驚いていた。

「だが、何故真白は直人の髪を切らせたくないんだ？」

「俺に聞かれても……」

「「「「「うーん……」」」」」

と、五人が頭を抱え込み始めた時……

キーンコーンカーンコーン

次の授業開始のチャイムが鳴った。

「やばっ！　早く戻らないと千冬さんが来ちゃう！　じゃあね、一夏！！」

「ああ！」

そう言って、鈴は足早に教室を去っていき、他の三人もそれぞれ自分の席についていったのだった。

そして昼休み、事件は起こった。

「ねえねえ、さっくー、さっくー」

「ん？」

いつものように一夏達と昼食をとっていると、一人の生徒が声を掛けてきた。

「何だ、布仏」

その生徒の名は、布仏本音（のほとけほんね）、一組のクラスメートで、その眠たそうな顔とのんびりしたような様子から、一夏に「のほほんさん」と呼ばれてる。

ちなみにこの子、他人をあだ名で呼び、直人は「さっくー」一夏は「おりむー」と呼ばれてる。

「さっくーの髪って、すっごい綺麗だよね～」

「そうか？」

何気ない会話のように思われたが、ほとんどの女子生徒たちが、その会話に耳を傾けていた。

「さっくーって、何か特別なリンスとか使ってる～？」

「いや、普通に部屋に置いてあるのを使ってるが？」

「じゃあさ～、髪の手入れとかしてる～」

「いや、自分ではしてないが？」

その言葉が出た瞬間、食堂全体が凍りついた。

「ん？　なんだ、何か嫌な予感が……」

直人も空気の変化に不安を覚えるが、それは直ぐに的中することになった。

「「「「直人　（さん）！！！！」」」」

突如、箒、セシリア、鈴、紅葉が詰め寄ってきた。

「な、何だお前ら」

「直人、さっきの話、本当か！？」

「あ、ああ」

詰め寄ってきた箒の気迫にたじろぎながらも答える。

「「「「……」」」」

その直後、詰め寄ってきた四人表情を俯かせて黙る。

「お、おい、お前ら？」

突然の行動に何が何だかわからず。心配した直人が聞こうとすると。

「直人」

「なっ、なんだ、紅葉？」

「その髪、調べさせて！！」

「はあ！？」

突然のカミングアウトに驚く直人。

「そうだ！　何故手入れもしてないのにそんなに髪が整ってるんだ！！」

「私がこの髪をセットするのにどれだけ苦労がかかっているとおもっているのですか！！」

「あんた一体どういう髪質してるのよ！！　ちょっと見せなさい！！」

紅葉のカミングアウトの後に箒、セシリア、鈴がそう詰め寄るが。

「ふざけるな！！　何が悲しくて幼馴染とクラスメイトに髪を弄られなきゃならないんだ！！」

「「「「いいから調べさせろ（なさい）！！！！」」」」

「断る！！」

無茶苦茶な四人の要求を見事に突っぱねる。
だが、直人の敵は四人だけではなかった。

「者共！　桜庭君を捕えて、髪の秘密を解き明かすぞーーーーー！！」

『おーーーーーーーーーー！！！！』

食堂にいた1年1組のクラスメイト全てが敵だった。

「直人！！」

「覚悟しなさい！！」

「何を覚悟するのか解らないが、そう簡単に捕まってたまるかーーーーー！！！！」

その言葉と共に、直人は包囲網を突き破り、食堂を逃げ出すのだった。

今ここに、直人対箒、セシリア、鈴、紅葉、そして1年1組の女子たちとの、果てしない逃走劇が始まるのだった。

「はぁ、はぁ、何とか撒いたか？」

追手が来ないことから、振り切ったのかと様子を壁際から窺うと。

「はぁ！！」

「のわっ！？」

別方向から木刀を構えた箒が襲ってきた。

「大人しく捕まれ！！」

「断固断る！！」

振り下ろされる木刀を弾き、再び脱兎のごとく駆け出す。

直人は逃げまくり、今度はアリーナにやってくる。

「はぁ、はぁ、ここなら見晴らしが良いし、入口も限定される。何よりここならＩＳを展開しても、さして問題にはならないだろう」

と、冷静に分析しながら息を整えるべく深呼吸をしようとした、その瞬間。

「おわっ！？」

突如、自分の近くに青白いビームが着弾した。

「……まさかっ！？」

見上げてみると、不安は的中し、そこにはＩＳを纏った、セシリアと鈴がいた。

「直人さん！！」

「いい加減に観念しなさい！！」

「断るっつってんだろ！！」

そう言ってさっさと自分もＩＳを展開、バーニアをフルスピードで展開し、あっという間に二人の視界から消える。

「き、消えた！？」

「一体何処に消えましたの！？」

（……ここだったりするんだけどな）

それは、アリーナの外側だった。

アリーナの外を出るとともにＩＳを解除し、着地してさっさと身を隠したのだ。

（ふぅ、取り敢えず、このままだと不味いな。さっさとここから離れた方が……）

「あー！　さっくー、はっけーん！！」

「んなっ！？」

何とその場を離れようとしたとき、間の悪い時にのほほんさんに見つかってしまった。

『待ってーーーー！！！！』

「待つかボケーーーーー！！！！」

襲い掛かる大群に、直人はただ全速力で逃げるしかなかった。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……ったく、いい加減にしろっつうの」

上がる息を押さえながら、直人は毒づく。

すでにこれまでに、多くの襲撃をかわしながら、何とかここまで逃げてきた。

「しかし、どうしよう。このままだと捕まるのは時間の問だ……！！！！」

突然、何やら邪気を感じ、その場を避けると、そこにあった壁に風穴が明けられていた。

「直人発見！！」

その犯人は、十文字槍を構えた紅葉だった。

「さあ、大人しくお縄を頂戴しなさーい！！！！」

「ええい！　鬱陶しいんだよ！！」

襲ってくる槍の突きをかわしながら、再び逃走を図るのだった。

しかし、いくら直人といえど、全速力で逃げ続けて入れば、体力が早々持つわけがない。

「はぁ、はぁ、やべ、もう、体力が、はぁ、はぁ」

最早息も絶え絶えの直人、そしてその眼前には。

「追いつめたぞ!!」

「ここまでですわ!!」

「往生しなさい!!」

「残念でした!!」

『ふふふ……』

筹達４人を筆頭に、妖しい笑み（直人視点）を浮かべるクラスメイト達。

すでに壁際に追い詰められており、直人に逃げ場はなく、この包囲網を突破するだけの体力も残っていない。

「ちょ、待て、お前ら、取り敢えず落ち着け」

と、絶え絶えの声で何とか制止を掛けようとするが、箒達（ハンター）はじりじりとにじり寄る。

「ちょ、頼む、ま、待て、待ってくれーーーーー！！！！」

と、直人が断末魔に等しい叫び声をあげた。

その時……

『へブッ！？』

「……はっ？」

突如、箒達が１０代女子にあるまじき叫び声を挙げて蹲る。

そして、直人の目の前、彼女たちの後方に、その人は立っていた。

「もう授業の時間だぞ。何をやっているのか馬鹿者共」

そう、１年１組の頂点に立つ女性、担任の千冬が。

先ほどの悲鳴は、千冬の武器である出席簿が、彼女たちの頭に炸裂した音だった。

「授業に遅れた罰だ。ここにいる全員、後でたっぷり説教だ。それと桜庭、鳳、オルコット、お前たちはアリーナとは言え、許可なくＩＳを展開した分も加算するからな。篠ノ之と秋宮は壊した個所を修理しておけ、いいな？」

『は、はい……』

圧倒的な彼女の威圧感に、逆らえるものなど（当然ながら）いなかったのだった。

「はぁ、ったく、今日は厄日だ」

授業、および千冬の説教終了後、自室に戻った直人はベッドに身を投げ、そう呟いた。

「ふぅ、じめじめしてるから梅雨は嫌いだったが、別の意味で嫌いになりそうだな、こりゃ」

すでにこれまでの追いかけっこで流した汗をシャワーで洗い流し、その髪はしっとり濡れていた。

するとそこへ、ノックする音が聞こえてきた。

「……はぁ、来たか」

そう呟くと、直人は扉へ向かっていた。

さて、ここで少し種明かしをすると、実際に直人は特別なことをしてるわけでも、特別な髪質をしている訳でもない。
だがここで、のほほんさんとの会話を思い出してほしい。

直人は「自分では手入れしてない」と言った。

そう……「自分では」と。

「～♪」

「……はぁ」

部屋に入ってきた人物は、楽しそうに直人の灰色がかった銀髪を、ドライヤーとヘアブラシを使って手入れしていた。

「……なあ」

「何？」

「いつも俺の髪弄って、そんなに楽しいか？」

「うん♪」

「……一応聞くけど、切っちゃ……」

「駄目♪」

「だよなあ……はぁ」

直人は度々ため息をつきながら、真白による髪の手入れが終わるのをただじっとして待っているのだった。

第十三話　とある梅雨の日、真剣ＶＳ少女達の仁義なき戦い（後書き）

桜爛の間

作者「梅雨の話と言うより、髪の話になってしまったな」

直人「はぁ、今日は最悪の日だったな」

作者「まあまあ、そして、今回は真白の意外な一面をちらっと見せたわけですが」

直人「はあ、毎晩人の髪を手入れしに来るとは、ま、楽しそうだから、俺は良いんだけどな」

作者「ようござんすね。さて、まずは直人の目安箱、今回もまた、常連の三月語様から、頂きました」

直人「ほう、んで、今回はどんな質問だ？」

作者「えーっと」

Ｑ１．真白の性格が次のうちのどれかだったとして、一番マシだと思えるものは？また、その理由は？

１．ルティアタイプ、一途で恥ずかしがり

2．沙霧タイプ、過剰なレベルのぞっこんデレデレ
3．ロロットタイプ、伝統的なツンデレ

作者「とのことだが？」

直人「1だな」

作者「即答ですか、ちなみに理由は？」

直人「あいつの無口なところがそれでカバーできる。2だと多分、あんまり変化しないだろうし、3はすまないが、想像できない」

作者「とのことです。続いて二問目」

Q2．得意科目は？

直人「得意科目？　えーっと、普通の範囲でいいのか？　それとも、こっち（ＩＳの世界）基準でいいのか？」

作者「取り敢えず、後者でいいんじゃない？」

直人「解った。まず実技（ＩＳの）は当然として、日本史全般と世界史を少々、後英語、フランス語、ドイツ語、中国語もいけるぞ。理系は自分ではあまり得意な方ではないが、少なくとも一夏よりは良いという自信がある」

作者「凄いな」

直人「いろんな国を旅してたからな、外国語はそこに住んでた期間にもよるが、大概憶えられたぞ？」

作者「今度、新しい小説を書くとき、お前をヴァリアーに入隊させようかな？」

直人「やめてくれ、俺の心労が絶えなさそうだ」

作者「まあ、じゃあ、これが最後の質問だ」

Q3．もし自分の母親が『ネスツ闇の支配者』だったら？

直人「ああ、すまん。これは答えられない」

作者「何故？」

直人「元ネタをあまりよく知らないし、母親って言うのがどういうものかも知らないからな」

作者「ああ、そうか。直人の家族関係、そして過去については、また後ほど話します。取り敢えず直人の事ですから、反旗翻してでも止めようとするのではないでしょうか？　さて、次は「抱腹絶倒！　アフレコ委員会！！」今回もまた、直人にすべてやってもらいます」

直人「おいおい、またか」

作者「誰でもって書いてあるんですが、あんまり似合うキャラが居なかったので」

直人「仕方ないな……おい、ちょっとこれは」

作者「はいはい、文句は後で聞いてやる。最初は二連続、どうぞ！！」

直人「死ぬか！消えるか！土下座してでも生き延びるかぁっ！！」

直人「アイテムなんぞ！使ってんじゃあぁぁっ！ねぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！」

作者「テイルズシリーズより、同シリーズ一インパクトのあるキャ

ラ、バルバトス・ゲーティアでした」

直人「一つ目は何だ？」

作者「すでに記憶がほとんどないが、場面を察するに、カイル達との最後の勝負に敗れ、神の眼で自害するばめんじゃないか？」

直人「二つ目は、ＰＳ２版デスティニーや、ヴェスペリアで放ってた秘奥義としての台詞だな」

作者「私のバルバドスはデスティニー２で止まってるので、カウンター技としての「アイテムなんぞ使ってんじゃねえ！！」しか知りませんが」

直人「しかしこれ、喉に結構来るな」

作者「何の何の、次も似たようなものだぞ。ではどうぞ」

直人「解った。あっ、一つ言っておくが奏、お前の言葉を少し借りるぞ」

直人「望み通りに・・・天から墜ちよっ！！」

特別Ｖｅｒ

直人「望み通りに・・・天からお塩！！」

作者「ＫＯＦからイグニスの台詞でした。作者はゲームを持っておらず、当初ネスツ闇の支配者やこの天からお塩と言うのもよく解りませんでしたので、やる前にいろいろ調べました」

直人「空耳と言うのは意外にあるし、ネタとしても多いが、これは流石に、と思ったぞ。うぅ、喉がつらい」

作者「と言う訳で、ゴッドボイス若本様祭りでした！！　他にも皆さん、直人の目安箱と共に、ご応募お待ちしております」

直人「さて、次回もオリジナルの小話何だな」

作者「おう、そして次回は、いよいよ直人が散々口走っていた「あいつ」が登場します。ギャグ全開の話にするので、楽しみにしていてください。後、明日少しアンケートを取りたいので、この小説をご覧になってる方、ぜひこぞってご参加ください」

直人「……来週の虎徹と菊一文字は血に飢えているな」

作者「やめい、誰も見に来なくなってしまうぞ。と言う訳で、次回は別名、直人暴走回です。それではこの辺で！！」

第十四話　天才（馬鹿）、来たる！！（前書き）

今回は後書きコーナーに、皆さんへのアンケートを取りたいと思います。

皆さん、こぞってご応募いただけると、ありがたいです。

第十四話　天才（馬鹿）、来たる！！

「諸君。おはよう」

『おはようございます！！』

その日、職員室に千冬が入ると。先に来てた他の教師たちが一斉に挨拶を返す。

そして、朝のＳＨＭの為に教室に向かおうとした時だった。

「ん？　どうした、山田先生」

「あっ、織斑先生」

自分のクラスの副担任、山田先生の様子がどこかおかしいことに気付き、声を掛ける。

「あの、学園に変なＦＡＸが届いたので、どうしようかと」

「変なＦＡＸ？　見せてみろ」

そう言って、山田先生から手渡された、ＦＡＸを見る千冬。

そこには、こう書かれていた。

ｌａｄｙ’ｓ　ａｎｄ　ｇｅｎｔｌｅｍａｎ！！

あ、ジェントルマンはいなかったんだっけ。ま、いいや。

ＩＳ学園の皆さーん。ただいまこの学園は、僕の手により、仕掛け満載のアトラクション施設へと姿を変えましたー！！

廊下、アリーナ、教室、ありとあらゆる場所に仕掛けてあるので、存分に僕を楽しませてねー。

あ、そうそう。僕を捕まえることができたら、すべての仕掛けを解除してあげても良いけどー、そんなこと無理だよねー、だって僕がどこにいるのか解んないもんねー。

じゃ、頑張ってねー！！

そこに書かれていたのは、何とも人を小馬鹿にしたような文章だ

った。

「……くだらん。こんな悪戯に付き合ってる暇など、我々にはない。ほら、いきますよ」

「えっ？　あっ、はい……」

流石と言うべきか、千冬はこのＦＡＸの内容を一蹴し、山田先生を伴って教室へ向かおうとする。

その時……。

「キャーーーーーーーーーー！！！！！」

突如、教師の一人が悲鳴を上げた。

「ど、どうしたんですか！！」

二人は悲鳴のした教師のところに駆けつけてみると。

「キャ！　ゴキブリ！！」

その原因を見た山田先生も驚き、腰を抜かす。

しかし、流石に千冬の目はごまかせなかった。

「二人とも、これは玩具です」

「「……は？」」

そう、二人が驚いたゴキブリは玩具だった。

「こんなものに騙されるなんて、貴方達はそれでも教師ですか？」

「「す、すいません……」」

「全く、さあ、早く仕事に……」

「キャーーーーー！！！！」

「こ、今度は何ですか！？」

再び、悲鳴のした教師のもとへ向かうと。パソコンがおかしくなっていた。

「これは、コンピューターウイルス……いや、ハッキングか」

「そんな！！　ＩＳ学園のセキュリティは、コンピューターであってもそう簡単にハッキングできるん物では……」

「これは、あのＦＡＸの内容、馬鹿に出来んな……」

うーん、と何か考え込む千冬。

「せ、生徒たちが心配です！　私は先に教室に行っています！！」

そう言って、山田先生は大慌てで教室に向かおうとする。

「待て！　山田君！！」

千冬が静止を呼びかけるも時すでに遅し。

「ふみゅ！？」

職員室の扉を開けた途端、彼女の頭に金ダライが落ちてくる。

「大丈夫ですか？」

「うぅ～……だ、誰が一体こんなことを……」

別の教師に開放してもらいながら、涙目になって頭を押さえる。

と、ここで、千冬が動き出す。

「山田君。すぐに教室に向かうぞ」

「えっ？」

「おそらくこの状況、打破できるのはあの二人しかいない」

そう言って一気に教室に向かって駆け出す。

「ま、待ってくださ……きゃ！！」

千冬を追って駆け出すも、今度は眼前に飛んできたペイント弾にあたる。

（もし、私の予測が正しければ……）

そんなことを考えながら、千冬は教室に向かって駆け出していくのだった。

数々の罠を避けながら。

余談だが、彼女の避ける罠は、ことごとく山田先生に当たっていくのだった。

「……遅くないか？」

「遅いなあ」

一方、職員室で起こった出来事、そして学園で起こってることなど知る由もなく、1年1組は先生を待っていた。

だが、何時もの時間に来るはずの山田先生も千冬も来ず、誰もが訝しはじめていた。

「一夏、クラス代表として様子を見て来たらどうだ？」

「いやあ、単に職員会議が長引いてるだけじゃねえのか？」

「規則と時間にうるさい師匠が、もうかれこれ１０分も待たせると思うか？」

「……ねえな」

「良いからさっさと行って来い」

「ったく、わーったよ」

そう言って、一夏が席を立ったその時。

「ふみゃ！？」

『！？』

何やらかわいらしいというか、どこかで聞いたことのある悲鳴が聞こえてくる。

「何だ？」

思わず気になり、直人と一夏が廊下を覗き込むと。

「キュウ……」

クリームやらペイントやらが付着した山田先生が伸びていた。

「山田先生！？」

「ちょ、大丈夫ですか！？」

「気絶してるだけだ、心配ない」

山田先生の安否を確認する一夏と直人のもとに、若干肩で息をしている千冬が立っていた。

「ししょ……織斑先生、これは一体」

「桜庭、丁度いいところに来た。これを見てくれ」

そう言って千冬は、先ほど届いた謎のＦＡＸを見せる。

「これは……」

そして、その中身を見た途端、直人の表情が変わる。

「織斑先生。これは一体」

「やはり心当たりがあるか。今朝職員室に届いてたんだ」

「織斑先生」

説明を聞いた後、直人の口から信じられない言葉が出た。

「抜刀、及び発砲許可をもらえませんか？」

「な、直人！？」

武器使用許可を求める直人に、一夏も驚く。

「あまり、校内で流血沙汰を起こしてほしくないんだが……何とかなるのか？」

「あいつがどこにいるのか、大体見当は付きます」

「……解った。但し、被害は最小限にとどめろ。良いな」

「委細承知」

許可をもらうと、直人は教室に戻る。

「真白」

「何？」

「あいつが来た」

「……」

それを聞くと、真白も静かに席を立つ。

「準備は？」

「できてる」

そう言うと、真白の手には二丁の拳銃が収まっていた。

そして直人も、腰に差した日本刀、虎徹と菊一文字を抜刀する。

「いくぞ！　目指すは屋上！！」

「うん」

「待ってろよ！　あんの馬鹿学者ーーーーーーーーーー！！！！」

そう叫び、怒髪天を突く勢いで爆走する直人と、その後ろをついていく真白。

「おっ、おい待てよ直人！！」

そして、その様子に呆気に取られていた一夏だが、何事かと気になり、その後を追いかける。

そして、さっきの叫びを聞いた箒、セシリア、紅葉、そして鈴までもが、一夏とともに、その後を追いかけていくのだった。

「～♪」

一方ここは、ＩＳ学園の屋上。

そこでは、一人の人物が、その様子を携帯端末から覗いていた。

「おっ、いよいよ動き始めたみたいだね♪」

その様子はさながら子供の様でもあった。

「いいよいいよー。さあ、早くここまで来なよ～、楽しみに待っているからさ～」

そう言いながら、その人物は携帯端末を覗き込んでいた。

そしてその頃、直人たちはいまだに学園の廊下を爆走していた。

次々と仕掛けられたトラップが発動し、丸太、弓矢、パイ、吊天井などが、そのたびに襲い掛かってくる。

しかし……

「弧月閃！　断空剣！　紫電一閃！　穿月！　五月雨！」

この通り、次々襲い掛かるトラップはことごとく直人によって粉砕させられていた。

ちなみに、何発か流れ弾が一夏達に襲って来たりもしたが、すべて真白によって撃ち落されていた。

そして目の前には、屋上へと続く扉。

「切り捨て、ごめーーーーーーん！！！！」

そしてそれを、二刀で一気に粉砕する。

「ふー、ふー」

凄い剣幕で直人は目の前を見つめる。

「おい、直人。一体どうしたんだ？」

「！！　そこにいるのは誰だ！！」

一夏が直人の様子を確かめようとする一方で、即座に人の気配を察した箒が直人と同様、険しい顔で目の前を見つめる。

「おーめーでーとー！　さっすが直人。よく僕のお居場所がわかったねー！」

「やっぱりお前か……」

おちゃらけたように言う目の前の人物に対し、直人はいまだに刀を構えたまま、目の前の人物を見つめる。

「いやー、あれだけの罠を突破するとは、やっぱり僕飲み込んだだけの事はあるねー。それじゃ、久しぶりの再会を祝して、あつーいハグをー！！」

「零閃！！」

ルパンダイブで飛んできた人物に、直人は神速の居合で斬りつける。

そして目の目の人物は、綺麗に上半身と下半身が泣き別れて墜落する。

「「「「「ってちょっと待てーーー（待ちなさーーーい）！！」」」」」

そしてその様子に、フリーズしていた一夏達が一斉に突っ込みを入れる。

「ん？　なんだ？」

「何だ、じゃありませんわ！！」

「あんた！　何学校で殺人事件を起こしているのよ！！」

セシリアと鈴にツッコミを入れられても、直人はケロッとしていた。

「二人とも、大丈夫」

「いや、大丈夫じゃないでしょ！！　あんたも何でそんなに落ち着いてるのよ！！」

「あれ、良く見て」

真白に指摘され、全員が先ほどの斬殺体を見てみると。斬られた

体の中から、機械が露出し、そこから火花が散っていた。

「これって、機械、ですよね？」

「って言うか、人形？」

このセシリアと紅葉の言葉で、全員が共通の認識をすることに成功した。

目の前に転がっている斬殺体は、唯の機械人形なのだ。

「いやー、相変わらず鋭い太刀筋だねー、本当に惚れ惚れしちゃう」

そして、屋上の扉がある建物の上に、その人物は移動していた。

「色々聞きたいことが山ほどあるが取り敢えずこっち来い。手足切り落として簀巻きにしてふん縛って師匠の前に突き出す」

「おー、怖。それは勘弁してほしいなー。亀甲縛りだったら、僕は喜んで受け入れるけど」

「よし、突き出す前に、一片斬らせろ。縦に綺麗に真っ二つにしてやる」

「だから、落ち着けって！！」

これ以上この二人に会話させると、さらなる惨劇が待っていそうだったので、直人を押さえこむ一夏。

「直人。こいつ一体誰なのよ？」

とりあえず、目の前の人物の事について鈴が直人に聞くが、それにいち早く、目の前の人物が返す。

「おーい、そこのツンデレぺったんこガール。人に名を聞く前に自分が名乗るのが礼儀って教わらなかったのかい？」

「あんたには聞いて無いわよ！　それと誰がぺったんよ誰が！！」

「そう言う台詞は、そこの金髪ロールのお嬢様か、そこのポニーテールちゃん位になってからいいなさーい」

「なっ！？　き、貴様！！」

「せ、セクハラですわ！！」

目の前の人物の、挑発ともセクハラともとれる発言に、鈴のみならず二人も怒りだす。

しかし、飄々としていて全く悪びれている様子のない相手に、鈴とセシリアはＩＳを展開し始め、箒はどこからともなく竹刀を取り出す。

「お、お前ら落ち着けよ！！　あんたもそれ以上神経を逆なでするな！！」

「ん？　おー……」

今一番まともな一夏が、直人を抑え込みつつ、箒達と謎の人物に自制を促す。

すると、一夏を見るなり、謎の人物が興味ありげに近づく。

「君が、織斑一夏君でしょ？」

「ど、どうして俺の名前を？」

「そりゃあ、束（たば）ちゃんからお話は聞いてるからねー！」

「束ちゃん？　直人、この人誰なんだ？」

訳が分からず、一夏は直人に問いかける。

そして、冷静になった直人も、その質問にため息雑じりで答える。

「こいつの名前は黄原端午。俺の腐れ縁で、広まっちゃいないが世界でも五本の指に入る天才で、混乱と騒動しか起こさないろくでなしの変人のトラブルメーカーのマッドサイエンティストで……」

途中から何やら酷い説明となっているが気にも留めず、直人は首から待機状態の灰桜を取り出していった。

「俺の灰桜（相棒）の製作者だ」

「へー……って」

「「「「「えーーーーーーーーーーーー！！！！！」」」」」

しばらくの沈黙の後、直人、真白を除く五人が絶叫を上げる。

「んで。お前は何しに来たんだ」

「勿論、悪戯を仕掛けるためさ！！」

「よーしよし、せめてもの情けだ。この一刀で斬り伏せてやる」

「と、言うのは8割方の理由。残り2割は、真白ちゃんに用があってきたのー」

「私？」

目の前の人物、端午はそう言って真白を呼ぶ。

「やーやー真白ちゃん。相変わらず白くて小さくてかわいいねー。抱きしめていい？」

「ん、良いけど」

「「「「「良いの（か）！？」」」」」

「では、いっただっきまーす！！」

周りのツッコミなど気にも留めず、端午は真白をムギュッと抱きしめる。

「おー、相変わらずいい抱き心地。このつやつやの髪と白い肌。まるでお人形さんを抱きしめているかのような幸福感。さいこーだよ！！」

かなり危険と思われるカミングアウトに、周りも引き始める。

「ねえ、直人」
「何だ？」
とここで、紅葉が直人に聞いてきた。
「あの人って、もしかしてロリコン？」
「いや、ロリコンじゃない」
「そうなの？」
腐れ縁とはいえ、やはり自分のＩＳの作成者をかばっているのかと思った次の瞬間。
「ロリコンで変人だ」
「……」
「言っておくが、あいつは殺して死ぬような男じゃないぞ。ゴキブリ並みの生命力だからな」
そんな会話の間も、端午は真白の抱き心地を堪能したのだった。
「ふぅ、さて本題だけど。手を出して」
「ん」
そう言って両手を出すと、端午はあるものを手に乗せた。

「これは？」

それは雪の闕所のような形をした、ブローチのようなものだった。

「前からほしいって言ってた。真白ちゃんの専用機♪」

「あっ……」

「「「「えっ！？」」」」

思い出したように言う真白とは別に、一夏と直人を除く四人は驚きの声を上げる。

「ま、初期化と最適化はまだだから、そこは自分でやってね。あ、それと、その子名前がないから、真白ちゃんがつけてあげてね。それじゃ」

「待て」

さも自然な流れで立ち去ろうとする端午を、直人は虎徹を突き付けて止める。

「まだ用件は済んでいない。大人しく捕まって、師匠の洗礼（拳骨か黒出席簿）を受けると言い」

「悪いけど。僕も忙しいから、別にこのまま消えていいよね？　答えは聞いてないから♪」

そう言って、端午はそのまま飛び降りる。

「ちょ！　あいつ正気なの！！」

鈴の叫び声と共に、一斉に下を向くが。

「アーイキャーン、フラーイ！！」

背中からジェットエンジンが吹き出し、そのまま飛んで行ってしまった」

「ちっ、逃がしたか」

「なんつーか、破天荒って言うか、滅茶苦茶な奴だなあ。って言うかあのノリ、どっかで覚えが……」

一夏が何やら思い出そうとしてる傍ら、箒が直人に近づく。

「直人」

「何だ？」

「お前も、苦労しているんだな」

「解ってくれるか。そうだよ、この苦労がわかるのはお前と師匠位のものだよ」

箒からの同情の言葉に、直人はうんうんと頷き、そのまま暫く二人出口の言い合いを始めるのだった。

「～♪」

一方で、真白は真白でご機嫌だった。
まあ、漸く待ちに待った専用機が手元にあるのだから、これで喜ぶなという方がおかしい。

「そうだ、名前無いんだったね。つけてあげないと……」

そう言いながら、真白はルンルン気分でその場を後にしていった。

余談だが、端午が消えたことでＩＳ学園に仕掛けられたトラップはすべて作動しなくなったが、千冬からの指示で、直人と真白がこれの撤去を行われたことは言うまでもない。

「あいつ。今度会ったら１６分割どころか８０分割してやるーーーーー！！！！！」

そんな叫び声が、聞こえたとか、聞こえなかったとか。

第十四話　天才（馬鹿）、来たる！！（後書き）

桜爛の間

作者「と、いう訳で、天才と書いて馬鹿と読む男、黄原端午登場の回でしたー」

直人「あいつ。今度会ったら三枚に卸してサメの餌にしてやる」

作者「君、本当にあいつには容赦ないねー」

直人「当たり前だ！　あいつの所為でどれだけ苦労したと思ってるんだ。今回のことだってそうだ！　後片付けが本当にどれだけ大変だったことか」

作者「でも、心底嫌ってるわけじゃないだろ」

直人「んまあ、灰桜を作ってくれたことに関しては、感謝してるけどな」

作者「さて、今回は私と君の二人だけではないのだよ」

直人「何？」

作者「さあ、いらっしゃーい！」

真白「ん」

直人「真白。アフレコ以来の登場だな」

真白「うん」

作者「さて、まずは『直人の目安箱』、常連の三月語様から、直人と真白に質問が来てるぞ。まずは直人から」

Q1．奏に起きた（恋愛的な）災難で、『これ一番酷いんじゃね？』と思えたのは？

直人「ルティアが酔っぱらった時、出なければ、ラウラと子作りするところだったこと。この二つが同列だな」

作者「ほう」

直人「どちらも甲乙つけがたいが、まああえて言うなら、やはり後者だろうな。高校生ででき婚なんてことになったらまずいし、何より真琴の暴走が怖いからな」

作者「成程、では次」

Q2．朝起きたら部屋の中に猫耳付きの真白がいて『にゃん』と言われたら？

直人「取り敢えず頭を撫でる。そして何があったのか聞く」

作者「猫耳についてはスルーですか」

直人「いや、まず何があったのか気に掛かるのでな」

作者「ほう、んで、次は三月語様の作品、【熾天使を駆る少年】の主人公、奏からだ」

直人「奏から？　どれどれ」

『勉強をしていたはずなのに何をトチ狂ったか突然ポケモンの擬人化ドットを打ち始めた作者をどう思うか？』

直人「奏。その気持ちよく解るぞ。こっちの作者も、テスト期間一週間前だというのに、碌に勉強もせずパソコンにかじりついてばっかりだったからな。その所為で夕食作るのが遅れたり、寝るのが遅れたり、碌な生活送っちゃいないからな」

作者「やめてくれ！　俺のライフはもうゼロを通り越してマイナスだから！！」

直人「だったらもう少しましな生活を送れ」

作者「善処します。さて、次は真白に対する質問だ」

Q1．なぜ直人の髪の毛を手入れするのが好きなのか？また、それは何時頃から？

真白「直人、髪綺麗なのに、自分じゃ手入れしない。そのまま傷んじゃうのは、勿体ないから……」

直人「時期については、俺が代わりに話そう。俺が真白と出会って数か月した時だ。真白は一緒に旅するようになってから本を読むようになったんだが、その日は何故か今まで興味すら示さなかったへ

アースタイル系の雑誌を読んでたんだ。それで、俺が風呂上って髪を拭いていたとき、突然髪をブラシで弄り始めたんだ。それから俺が風呂に上がると毎日髪を手入れするようになってな。ちなみに俺の髪が伸び始めたのもその頃だ、今までは俺が自分の髪切ってもさして気にも留めなかったのに、ある日切ろうとしたら涙目で首を横に振ってくるんだ。切りたくても切れず、今日までこうなったって訳だ」

作者「とのことです。ちなみに、それはいつの話ですか？」

直人「おおよそ、二年と六か月前かな？」

作者「だ、そうです。では次」

Q2．今現在、直人のことをどう思っているか？

真白「？」

作者「ああ、つまり。セシリアや紅葉みたいに恋愛感情を持っているのか、或いは箒や鈴みたいに、友達みたいな感覚かって聞いてるんじゃないか？」

真白「どっちも、ちがう」

作者「じゃあ何？」

真白「何ていうか。一緒にいると落ち着く。なんだか、お兄ちゃんみたいな感じ」

作者「まあ、つまり兄妹みたいな親近感、ってことか？」

真白「うん」

作者「まあ、直人も真白の事妹みたいな感覚で持ってるだろうし、いいかな。じゃ、次の質問」

Q3．通称奏ラバーズ（誰かが一度命名していましたが・・・忘れました）の中で、誰を応援したいか？また、その理由は？

真白「ルティア……」

作者「即答、そんでもって理由は？」

真白「一途なところを見てると。なんだか、応援したくなる。後、どこか私と似てる気がするから」

作者「だそうです。三月語様、いつも質問応募、誠にありがとうございます。次は、『抱腹絶倒！　アフレコ委員会！！』

直人「今回は誰がやるんだ？」

作者「今回は君ともう一人呼んでます。いらっしゃーい！」

紅葉「どうもー」

直人「紅葉か、で、俺は何をすればいいんだ」

作者「気をつけなよ。今回君へのリクエストが多いから。はいこれ、一覧」

直人「おお」

作者「それでは、まずは楚良様のリクエストから」

直人「立ち止まるな。歩き続けろ」

作者「D.Gray-manから、アレンの父、マナ・ウォーカーの台詞です」

直人「これは良い台詞だな。生きている限り、常に歩き続けなければならないからな、人は」

作者「だな、次！」

直人「立って歩け、前へ進め。あんたには立派は足がついてるじゃないか」

作者「鋼の錬金術師から主人公、エドワード・エルリックの台詞です」

直人「これも良い台詞だな。前向きに生きていけってことだな」

作者「本当。楚良様、最高のチョイス、ありがとうございます。次はデュオ様からのリクエストです」

直人「この戦いで死ぬのは俺とここにある兵器だけで十分！」

作者「ガンダムWのデュオの台詞です。送ってくれた作者様と同じですね」

直人「これもある意味良い台詞だな。平和に不要となった兵器や自分達が死ぬのに、他者を巻き込むことを良しとしないわけだな」

作者「なかなかな覚悟と姿勢が現れてますね。さて、直人の活躍はここまで、次は紅葉に行ってもらいたい台詞があります。こもも様からのリクエストです」

紅葉「オッケー」

作者「では、どうぞ」

紅葉「生存戦略、しましょうか！」

作者「これは【輪るピングドラム】というアニメのヒロインの台詞だそうです」

紅葉「ああ、何か明るい感じの台詞。だからあたしをチョイスしたんだ」

作者「はい、作者はこのアニメを知りませんので」

紅葉「えー、どうだったでしょうか？」

作者「さて、当小説に感想とリクエストを送ってくださいました。三月語様、楚良様、デュオ様、こもも様、そして混沌の魔法使い様、ありがとうございます」

直人「それで、まえがきに書いたアンケートってなんだ？」

作者「えー、正確にはアンケートが一つ、募集が二つです。まず作中貰った真白のＩＳの名前を募集したいと思います。それと、肩の部分の武装について、案が二通りありますので、どちらが良いか、応募してください」

直人「おいおい、決めてたんじゃないのか？」

作者「一応はね、でもなんか納得いかなくなってね。この小説を読んでる方々に応募してもらおうかと、ちなみに、名前を付ける際は次の事に留意してください」

1．雪という単語が入る、或いはそれを連想させる単語を入れてください。

2．漢字名、外国語名、どちらでもいいですが、外国語名の場合、出来れば日本語でどう読むのかも明記してもらえると嬉しいです。
（例、ブルー・ティアーズ（蒼い雫）　みたいな感じで）

3．白い機体をイメージしてください。

作者「と、こんな感じかな？　アンケートする肩の武装案は以下の通りです」

1．防御型。ミサイル内臓。エネルギーシールドを張ることができる。出力を上げれば広範囲にエネルギーフィールドを形成して味方を守ることができる。

2．大火力型。エネルギー砲を内蔵。前面に連結、展開することで強力な砲撃を撃てる（コードギアスに出てくるナイトメア、モルドレットのシュタルクハドロン砲みたいな感じ）

作者「ほかにも、「こんな感じにした方が良い」というのがありましたら、遠慮なくご応募ください」

直人「で、もう一つは何だ？」

作者「間もなく、当小説のＰＶ数が五万を超えるのです。それに伴い、何か突破記念をやりたいと思っているのですが、何かやってほしい企画とかありましたら、ぜひご応募ください。今のところ、コラボがやり玉に上がっていますが、コラボ相手もほかの企画も無かったら。普通に座談会になると思います」

直人「ええー、いろいろ我儘の多い作者と思われるかもしれませんが、何卒、ご協力お願いします」

作者「さて、次回はいよいよ小説第二巻の初め、アニメ第五話の話。皆さんお待ちかね、作者も大好きな、あの子が登場します！！」

直人「ＩＳ学園に、再び波乱の予感が」

作者「それでは次回も、お楽しみにー！！」

第十五話　新たな出会い　（義兄の親友）（前書き）

一週またいでの更新、本当に申し訳ありません。

ですが、実家のパソコン二台はもうかなりよぼよぼといっても差し支えないほどで、新しく来たパソコンも、事情により迂闊に使えません。

なので、今後更新が不定期・もしくは金沢に戻るまで停滞の可能性はいまだ払拭されて無い、寧ろ余計に強まった訳です。

こんなリアル駄目作者の書いた作品ですが、今後とも呼んでいただけると幸いです。

さて、アニメ第五話に入るわけですが、これを含めた三話は、アニメの内容を踏襲しつつ「出会い」に重点を置いた話にして行こうと思います。

まずはタイトルにあるように、あの兄妹が登場します。作者の好きなあの子は、残念ながら来週（下手したらもっと先）になります。

第十五話　新たな出会い　（義兄の親友）

「悪いな直人、手伝わせちまって」

「いいさ、どうせ寮に居たって鍛錬ぐらいしかやる事がなかったしな」

疲労の色が見え隠れしながら隣を歩く一夏からの言葉に、直人は何てことないという風に返した。

日曜のこの日、二人は家の様子を見る為に外出許可をもらって織斑宅に戻っていた。

勿論二人の格好はＩＳ学園の制服ではなく、一夏は半袖に短パン姿、直人は上は半袖だが下はジーパン姿で、いつも腰に差してる日本刀は寮においてきてるため、髪の色を除けば何処にでもいる男性に見えた。

「しかしまあ、酷かったなあ。師匠の部屋は」

「千冬姉の前で言うなよ、酷い目に遭うから」

「お前じゃあるまいし、そうそう口を滑らすかっての」

釘を刺すように言う一夏に、直人は手厳しく返す。

この会話からも解るとおり、二人の疲労の原因は一夏の姉にして直人の師、そして二人のいるＩＳ学園の教師、織斑千冬の部屋の掃除である。

実は千冬、普段はあのように凛々しく厳しい人物であるのだが、

私生活では所謂「片付けられない女」なのだ。

というのも、一夏が中学に入るまでは、織斑家の家計は彼女によって支えられており。家事は専ら一夏の担当だった。

このため、学業があまり優秀ではないが家事料理が出来る弟とは対照的に、非常に優れた教師でありながら私生活はてんでだらしない姉が誕生してしまったという事だ。

当然、この辺りの事情は当時武者修行の旅に出ていた直人は知らなかったのだが、織斑宅の掃除中、その辺りの事を聞いた直人は少し呆れながらも納得してしまった。

「でさ、お前が良い場所知ってるって言うからついてきてるんだが、一体何処に向ってるんだ？」

「いいからついてこいよ、もう直ぐだから」

それで現在、織斑宅の掃除を終えた二人は、丁度時間も昼飯時という事で昼食をとろうという事になった。

当初、寮に戻って食堂でとろうと思っていた直人だったが、一夏が「良いところ知ってる」という事で、一夏の導かれるままに移動していた。

「ここか？」

「ああ」

一夏導きの元、二人がやって来たのは、「五反田食堂」と掲げられた暖簾のある店だった。

だが、店の前には「準備中」とかかれた看板が置いてあった。

本当に準備中なのか、或いは日曜なので定休日なのか。いずれにせよ、普通の客ならばこのような看板が置いてある店に入る事は無いのだが。

「おい一夏、準備中って書いてあるんだが」

「大丈夫だよ。ほら、早く入ろうぜ」

心配ないといわんばかりに看板を無視し、店の中に入って行く一夏。

直人も、妙に自信のある一夏の態度が気になりながらその後をついていく。

「お邪魔しまーす」

「ん？　おっ、一夏じゃねえか！」

一夏が店内に入ると、店の中にいた一人の男性が一夏の姿を見て驚きの声を上げた。

男は赤みがかった髪をしており、頭にバンダナのような布を巻いていた。

「よっ、弾。久しぶり、元気にしてたか？」

「よっ、じゃねえよ！　よ、じゃあ！　何か月もメールだけ寄越しやがって！！」

「悪い悪い、こっちも色々あったんだよ」

悪態をついてくる弾と呼ばれた男性に、一夏も親しげに接し、親しげに返す。

「しっかし久しぶりだな。聞いたぜ、あのＩＳ学園に入ったんだって」

「成り行きでな」

「まったく、羨ましいぜ。……ん？　そいつは？」

しばらく一夏と話し合っていると、弾は一夏の後ろにいた直人に気付く。

「ああ、ほら、前に話しただろ。小学校卒業したのと同時に旅に出てた俺の義兄弟だよ」

弾に軽く説明をすると、一夏は直人の方を向いて言った。

「直人。こいつは弾、俺の中学からの親友だ」

「あ、ああ……」

一夏に紹介され、少しぎこちなさげに答える。

「お前が一夏の、話は聞いてるぜ。俺は五反田弾って言うんだ、よろしくな！」

「あ、ああ……桜庭直人だ、よろしく」

しかし、直人のぎこちない様子など気にも止めず、弾は人当たり良く接してくる。

そんな弾に、ぎこちなかった直人も少し和らぎ、挨拶と握手を交わす。

「んで、久しぶりに家に来て、どうしたんだ？」

と、直人との自己紹介を終えた弾は、再び一夏の方を向いて聞いてきた。

「いやさ、久しぶりに家の様子を見に一旦戻ったんだけど、終わったら丁度昼時だったからさ、飯食いに来たんだ」

「おいおい、俺に家にただ飯食いに来たのかよ」

弾の問いかけに出てきた一夏の答えに、再び悪態をつく。

「ま、良いけどな。折角だから部屋来いよ、久しぶりにゲームしようぜ！」

「おお、良いぜ。負けねえからな！！」

久しぶりにゲーム勝負を挑まれ、一夏も望む所と勝負を受ける。

「直人もせっかくだから来いよ」

「ああ、いや、俺はここで待ってるよ」

と、弾は直人も誘うが、直人は一階で待ってると言う。

二人が楽しそうに会話してる様子を見て、自分がいるのはお門違いのような気がして、二人きりを邪魔するのは申し訳ない気がしていたのだ。

「いいから来いよ、色々話してえ事もあるし」

「そうだぜ、遠慮するなよ直人」

しかし、そんな気を知ってか知らずか、弾と一夏は直人を誘う。

二人に誘われては、直人も邪険にするわけにはいかず。

「じゃあ……失礼させてもらう」

と、こうして三人は二階へと上がって行った。

「へー、直人もＩＳ使えんのか」

「ああ、理由は一夏と同じで解らないんだけどな」

弾の部屋に入ると、一夏と弾はさっそくゲームを始め、直人は二人の後ろに座ってその様子を見ていた。

ちなみに二人がゲームに興じている間も、直人と弾の間では、学園での様子や一夏との馴れ初めなどを話し合い、彼の人当たりのよさに直人も初見のぎこちなさは無くなり、すっかり鈴や紅葉と話してるのと同じ感じで話すようになっていた。

「にしてもさ、お前ら以外皆女子だろ。本当に羨ましいぜ、良い思いとかしてんだろうなあ」

「「してねえよ」」

羨望の眼差しを二人に向けながら言う弾に、見事な義兄弟シンクロが炸裂した。

「嘘付け。お前のメールを見てるだけでも、楽園じゃねえか！　俺も行ってみたいぜ、招待券とかねえの？」

「「ねえよ」」

と、一夏を小突きながらの問いかけにまたも炸裂する義兄弟シンクロ。

実際、女性だらけの学園というのは、男にしてみれば正に極楽、楽園、理想郷といっても差し支えないかもしれない。

しかし、現実はそうはいかないもので、周りから見れば羨ましい

限りだが、当の本人達にしてみれば色々困惑したり、目のやり場に困ったりする事のほうが多い。
加えて、あの学園には千冬（鬼）がいるため、正直女性に現を抜かしてる余裕など心身ともに無い。

「でも、鈴が転向してきてくれて、本当に助かったぜ。話し相手少なかったもんな」

「ああ。鈴か、鈴ねえ……」

とここで、ＩＳ学園に転校して来た鈴の事を話題に出すと、弾が何やらにやにやしたような表情になる。

「鈴……か、はぁ」

「ん？　どうしたんだ直人？」

「なんでもない」

そんな中、直人は鈴の名前を呟くと、大きく溜息をする。

クラス対抗戦での一件の後に和解してからは、直人はよく鈴と話すようになった。

無論、あの日の出来事を全く気にしていないといえば嘘になるが、鈴本人が気にしていないといっているので、もう引き摺る事はやめにした。
そこは良いのだが、鈴との会話は、専ら彼女の一夏に対する愚痴が殆どなのだ。
これがまた、話し始めればあーだこーだと文句ばかり言うが、直

人が何かしら意見を言うと、顔を真っ赤にしながら素直じゃない口調で惚気に入るものだからある意味性質が悪い。

そんな愚痴をよく聞かされていただけに、それを思い出して少し気が滅入ったのだ。

まあ、彼が付いた溜息は鈴に対してというよりも、鈴にそれだけ文句を言われておきながら、なおも彼女から好意を持たれ、それに全く気付いてない一夏の鈍感さにたいしてのものであるのだが。

「お兄、お昼できたよ。さっさと食べにきなさ……い、一夏さん！？」

そんな会話をしていると、突然一人の少女がドアを蹴り開けた。弾と同じ赤みがかった茶髪をしたその少女は、弾に昼食ができた事を伝え、そのまま立ち去ろうとするが、部屋の中に一夏がいる事を確認すると、驚きの声を上げた。

「おっ、蘭、久しぶり。邪魔してる」

蘭と呼ばれた少女は、一夏の呑気な返事にも暫く呆然としていたが、やがて自分の格好を認識するや、大慌てで物陰に隠れ、身なりを整えた。

彼女の服装は、タンクトップにショートパンツという姿で、夏の暑さもあり機能性を重視したような格好であったのだが、お世辞にもその格好は、人前に出る格好とはとてもいえなかった。

「え、えーっと……い、一夏さん。き、来てたんですか？」

「今日はちょっと外出。家の様子を見に着た序でよってみた」

「そ、そうですか……／／／／／」

「蘭。お前なあ、ノック位しろ。恥知らずな女だと思われたくな……」

一夏の言葉に頬を赤らめる蘭に対し、弾は先ほどの妹の行為を注意するが、途中で言葉が途絶える。

というのも……。

「何で言わないのよ……」

「い、いや……言ってなかったか？　そっか、そりゃすまなかった。は、ははは……」

顔を羞恥で赤く染めながら、兄に恥かしさのあまり怒りの矛先をぶつける蘭の姿があったのだ。

と、兄妹でこんな会話が繰り広げられていた頃、蚊帳の外の直人はというと。

（はぁ、この子もか……。一夏、何でお前はいつもそうなんだよ……）

蘭の様子から、彼女も一夏にほの字の人間であると気づき、同時にそれに気付かない一夏の鈍感さに再び大きな溜息を洩らすのだった。

そして、一階の食堂に下りてきた男子三人は、そこで美味しくお昼の定食を頂いていた。

「あ、あの……一夏さん。ゆっくりしていってくださいね」

久しぶりに一夏と出会えた事が嬉しいのか、先ほどと同様頬を赤くしながら蘭は言った。

「着替えたんだな。どっか出かけるのか？」

「あっ、いえ。これは、その……」

一夏の指摘したとおり、今の蘭は先ほどの格好ではなく、半そでのワンピースを着ており、上げていた髪を下ろしてストレートヘアーになっていた。

「あっ、ひょっとしてデート？」

「違います！」

格好の変化について、だされた一夏の答えは、即座に否定された。

「なあ、直人」

「何だ？」

「一夏って、学校でもこの調子か？」

そんな一夏の鈍感さを目の当たりにした弾と直人はそんな会話を交わしていた。

「ああ。と言うより、小学校の時より酷くなってる気がするな。コイツの鈍感は筋金を通り越して形状記憶合金でも入ってるんじゃないか？」

「鈴も可愛そうに」

「何の話してんだよ？」

「「なんでもない（ねーよ）」」

二人にそう返され、一夏はただ頭に疑問符を浮べるばかりだった。

「そういえば一夏さん。そちらの銀髪の人は誰なんですか？」

とここで、蘭が直人の事について一夏に聞いてきた。

彼女自身、直人の存在には気が付いていたが、一夏の事に意識が言っていた為、直人の事を聞く暇が無く、直人も特に自分から名乗ろうとしていなかった為、今の今まで話題に出なかったのだ。

「ああ、紹介するよ。前に話した俺の義弟の桜庭直人だ」

「ど、どうも……」

「初めまして、五反田蘭と言います。話は一夏さんから聞いています」

「そ、そうか。なら、これから宜しく頼む」

「はい！」

少し元気目の声に押されながらも、やはり彼女の人当たりのよさに緊張もほぐれ、物の数分で蘭とも親しくなり、それから二人は時間一杯まで五反田食堂で時間を潰していたのだった。

だが次の日、更なる衝撃の出会いがあることと、そこから巻き起こる波乱を、この時の二人は知る由も無かった。

第十五話　新たな出会い　（義兄の親友）（後書き）

桜爛の間

作者「何とか更新できた……」

直人「一週跨いでおいてそれか……」

作者「だってさー、実家のパソコンは要領も一杯のもう既に何時ぶっ壊れてもおかしくないロートルのノーパソと、動作が滅茶苦茶遅いパソコン。新しく来たパソコンは姉から制限を掛けられ使うに使えない、一体これで如何しろと？　下宿先のマイパソコンより遥かに使い勝手悪くて、小説一話書き上げるのに苦労したよ」

直人「そこまで力説するか……だがまあ、確かに今まで使ってた自分のパソコンに比べれば、遥かに使い勝手は悪いようだな」

作者「はい、まあそう言う事なので、今後実家に帰省してる間は、更新が不定期、或いは停滞する恐れがありますので、ご注意下さい」

直人「さて、まずは目安箱から入るか、今回も三月語様から、質問を頂いているな」

作者「いつもありがとうございます。それではまず最初の質問」

Q1．直人から見て（ここ結構重要）ＩＳ熾天使の中で真白の髪の毛弄りをやられそうなキャラは？（結構気にしている・無頓着関係なしに）

直人「そうだな、アイツの髪いじりをされそうなのは……真琴、オリヴィエ、ルティア、沙霧、ロロット、こんな所じゃないか？」

作者「ほうほう、んじゃ次」

Q2．もし背部兵装が追加されるという話になったら以下のうちどれがいいか？

1．ジャスティス系列の『ファトゥム００』ｏｒ『ファトゥム０１』
2．Ｘあるいは ＤＸのような『サテライトキャノン』
3．Ｖ２の『光の翼』

直人「1だな、2と3は燃費が悪すぎてとてもじゃないが俺には扱えん」

作者「だ、そうです。さて、次はアフレコです。今回はこの方達に来てもらいました！！」

紅葉「やっほー、また来ました」

セシリア「ああ、ついに直人さんと同じ場所に……」

一夏「よっ、また呼ばれた」

作者「と、言うわけで、今回は直人とこの三人にやってもらいましょう、はいこれ、それぞれの台詞」

直人「……これは、少し言い難いな」

紅葉「ほうほう、これはこれは」

セシリア「こ、これを言うんですか！」

一夏「なあ、この横線の下になんで……」

作者「はいはい、準備終わったね。まずは紅葉から」

紅葉「オッケー」

紅葉「これだけは覚えておいて。アリスゲームの後は、必ず誰かがいなくなる。二度と、今のようには戻れないことを。」

作者「『ローズメイデン　トロイメント』より、蒼星石の台詞でした。作者は原作知らないのと少し精神的な磨耗により、今回はノーコメントでどんどん進ませていただきます。次、セシリア」

セシリア「あっ、はい」

セシリア「変わったのではなく・・・気付いた、という方が正解かしらね・・・。私が、何をすべきで、何をしたいのか・・・」

作者「こちらも『ローズメイデン　トロイメント』より、真紅の台詞でした。次は直人、二本立てでお贈りするぞ。あっ、一夏はそこに立ってて」

一夏「あ、ああ」

作者「じゃ、どうぞ」

直人「今日からお前は俺の奴隷だ。俺の生徒会で働いてもらう。」

直人「（一夏に向って）お前はサル並だと思っていたが訂正しよう。

・・・ミジンコ並だ。」

作者「これは『いつか天魔の黒ウサギ』から、紅月光の台詞でした」

直人「ちょっと待て作者、俺はこんな酷い事は言わんぞ」

作者「いや、でもさ。折角のリクエストなんだから答えないと」

一夏「ミジンコ……」

直人「ああ、すまん一夏。リクエストとは言え、酷い事言ってしまった」

作者「はいはい、次で最後だから頑張って。あっ、一夏、ちゃんと台詞訂正してある場所読むんだぞ」

一夏「な、何か恥かしいな……」

一夏「俺の命は・・・箒がくれたような物・・・・！箒を救えるなら・・・！彼女が失った9年、この先箒が笑って暮らせるなら・・・！この命！テメェにくれてやる！！」

作者「『いつか天魔の黒ウサギ』から、鉄大兎の台詞を一部偏向していってもらいました」

一夏「／／／

ここで皆さんにお知らせがあります。現在行なっている真白のＩＳの名称応募と武装案アンケートの締め切りを８月３１日までにしたいと思います」

直人「ＩＳの名前は、直接採用されなくても、武装の名称などに使われる可能性もあるので、どんどん応募してくれ」

作者「それと、ＰＶ数五万ヒット記念企画「オリキャラだけのコスプレ大会」への参加者も希望しています。ルールは活動報告をご覧になってもらうとして、駆け込みでも構わないので、参加したい人は織キャラと着せる衣装と元作品、織キャラに言わせたいその元キャラの台詞を書いて、今すぐ応募してください」

直人「さて、まずは五反田兄妹との出会いだったわけだが、次は？」

作者「勿論！　作者も好きなあの子です！！　来週更新できるように頑張ります！！」

直人「それじゃ、また次回」

ＰＶ数５０，０００ｈｉｔ突破記念特別企画　「オリキャラだけのコスプレ大会」

作者「というわけで、この私、エドワード・ニューゲートが書いている当小説のＰＶ数が、なんと五万を越えました！」

直人「描写もつたない作者の作品なのに、これだけの人が見て頂いているとは、本当に感謝のきわみだな」

紅葉「ありがとうございまーす！」

真白「（ペコリ）」

作者「というわけで、日ごろから当作品を見て頂いている皆様への感謝の為に、当企画を行ないたいと思います」

直人「成る程な」

作者「というわけで、ここからは男性部門と女性部門に分かれるので、俺たちはこっちに」

直人「は？　何言ってるんだ？　お前は司会進行だとしても、俺達は傍観者じゃないのか？」

作者「やだなー、何言ってるの？　君たち三人も参加者に決ってるでしょ」

真白「そうなの？」

作者「そうなの」

紅葉「ふーん、ま、面白そうだからいいけど」

作者「というわけで、君は私と一緒にこっち、真白と紅葉はそっちね。既に他の参加者達も待たせてるから早く行こう」

直人「あ、ああ」

真白「じゃあ」

紅葉「行ってきまーす」

作者「はい、というわけで、こちらコスプレ大会男性部門。司会は私、当小説作者エドワード・ニューゲートと……」

一夏「えっと……、原作ＩＳ主人公の、織斑一夏です」

作者「おいおい固いなあ。君それでもクラス代表になった男かい？」

一夏「いや、それとこれとは関係ないだろ？」

作者「ま、良いけどね。俺が大体仕切るから、君は感想以外は適当に相槌でも打っておいてくれ」

一夏「まあ、それで良いなら良いけど」

作者「さて、まずは当コスプレ大会に参加する人物を紹介します。ほい一夏、これが参加者リスト」

一夏「えっ！　俺が読むのかよ！？」

作者「当たり前でしょ。相槌打つだけとは言え、多少は君も司会進行を手伝ってもらわないと」

一夏「解ったよ。じゃあまずは、当小説の看板。鬼の一番弟子にして、俺の義弟、そして至上稀に見る唐変朴、【ＩＳ　桜の花纏う真剣】の主人公、桜庭直人（さくらばなおと）！」

直人「ちょっと待て一夏、何だその紹介文は！」

一夏「い、いや、本当にそう書いてあるんだよ！」

直人「……作者？」

作者「的を射ているだろ？」

直人「失礼な！　って言うか、こんなの師匠に見せたらお前殺されるぞ。それに唐変朴って一夏じゃあるまいし」

一夏「ちょっと待てよ！　それどういう意味だよ！！」

作者「どっちもどっちだ。ほら一夏、ちゃっちゃと進める」

一夏「何か納得いかねえけど。次は当小説の常連、三月語様より、天災のブラコンを姉にもつ女顔ゲーマーにして一夏、直人を越えるキング・オブ・唐変朴。姉と七人のラバーズに振り回される女難尽くしの日々を送る男。【ＩＳ－インフィニット・ストラトスー　熾天使を駆る少年】の主人公、二崎奏（にいさきかなで）！」

奏「突然作者に飛ばされて来たんだが、激しく意見したいな、さっきの紹介には」

直人「よっ、奏」

奏「おお、直人。いつも見てるよ」

直人「俺もだ。お互い、苦労するな」

奏「ああ」

作者「はいはい、友好を深めるのは向こうでやっててね、そこは邪魔になるから。じゃ、どんどん行ってみよう！！」

一夏「えーっと、次はサザンクロス様より、不屈の魂と揺らぐ事なき信念を持つ、人外集団「月光組」の若頭にして天才束、の悪戯の弟子。現在六人の女性と交際中のハーレム野郎。【ＩＳ～インフィニット・ストラトス～　不屈の翼】の主人公、月光夜明（げっこうよあけ）！」

夜明「ちーっす」

直人「よく来てくれた。こんな作者の企画に参加してくれてすまない」

夜明「いいよいいよ。太陽の言葉じゃねえが、実際楽しそうだしな」

奏「しっかし、こうしてみると二人とも結構似てるな」

直人・夜明「「そうか？」」

作者「あー、似てるのはまあ、何と言うか。さ、そんな事より次々」

一夏「あ、ああ。えーっと、次はＤ－５様より、天才の家系に生まれ、天才の義弟として育つ。十人中、否、百人中百人が振り返る天才美少女。【ＩＳ　～インフィニット・ストラトス～　一角獣の輝き】の主人公、篠ノ乃優希（しののののゆうき）！」

優希「僕は男です！！」

作者「はいはい解ってますよ、男の娘ですよね」

優希「うぅ～～～（泣）」

直人「おい、優希を泣かすな。向こうの箒が飛んでくるぞ」

作者「心配御無用。この会場全体を包囲壁で囲ってあるから、いかにバーストモードの箒と言えどそう簡単にはこれない筈だ」

一夏「だ、大丈夫かなあ……」

直人「ほら、優希。こんなパソコンに向うしか能の無い現実駄目人間作者の言う事なんか真に受けるな」

優希「うぅ、はい」

作者「くっ、俺の手で生み出されたくせに容赦ねえ。一夏、次！！」

一夏「逆切れすんなよ……えーっと、次で最後だ。こもも様より、凶鳥の名を継ぐＩＳを扱う少年。冷静な表面の内側に熱いものを秘めるムッツリスケベ野郎。【ＩＳ　～インフィニット・ストラトス～　バニシング・トルーパー】の主人公、クリスこと、クリストフ・クレマン！」

クリス「ムッツリスケベって、唐変朴のシスコンに言われたくないな」

一夏「それ俺か！　俺の事か！！」

作者「まあまあ。とりあえず以上、この五人の参加者で執り行いたいと思います。

直人「皆、こんな馬鹿作者につき合わせてしまってすまない」

奏「いや参加するって決めたのはこっちの作者出しな」

夜明「俺は前から好きにして良いって作者が言ってたしな」

優希「うぅ、僕は悪い予感しかしない」

クリス「天命だと思って諦めろ」

作者「はいはい、じゃあそこにそれぞれの衣装が入った袋があるから、一人ずつ持ってって向こうの更衣室で着替えてね」

直人「えーっと、俺はこれだな。奏、優希、お前達のはこれだ」

奏「おっ、サンキュー」

優希「ありがとうございます」

夜明「んで、俺はこれか。ん？　如何したんだ？」

クリス「いや、なんでもない（これ中身知ってるなんて言ったら何て言われるか）」

作者「そんじゃ、ちゃっちゃと着替えてきて」

直人「はいはい」

ここからは更衣室の様子を音声でお送りします。

直人「何か、俺の更衣室広くないか？」

作者「そんな事無いよ～」

直人「まあ良いが。どれ、俺の服は……ほお、これは俺好みだな。変なのじゃ無くてよかった」

奏「俺のはっと……流石腐っても家の作者だ。俺のつぼをしっかり心得てやがる」

夜明「さーって、俺のは……これって、着るの面倒くさそう」

優希「うぅ～、僕はやっぱりこういうのだよ。何度も言うけど、僕は男だーーーーー！！」

クリス「……」

直人「よし、これで着替え終了……ってなんだお前ら！　ちょっ！　こら、やめろ！　人の髪を勝手いじるなーーーー！！」

作者「ふふふ……」

一夏「（一体何されてんだ？）」

奏「よし、まあ、特に着替えにくいもんでも無いしな」

夜明「これでよしっと。おお、自分で言うのもなんだけど、結構似合ってるな」

優希「うぅ、何で僕ばっかりこんな格好を……」

クリス「後はこれを付けて……っと」

作者「準備できたか？」

直人「ああ」

奏「できたぞ」

夜明「俺も」

優希「僕もです……」

クリス「いつでも」

作者「よし、じゃあまずは直人からだ。頼むぞ！」

直人「ああ、わかったよ。こうなった以上、最後までやらせてもらう」

作者「うむ、よい心がけだ。それでは一夏、カーテンオープン！」

一夏「お、おお。カーテンオープン！」

直人「んで、今更だがこれは何の格好なんだ？」

一夏「黒い着物の上に青い上着を羽織ってて、手に持ってるのは…鍔の無い日本刀？　作者、何なんだ？」

作者「うむ。これはアニメ【ぬらりひょんの孫】の主人公、奴良（ぬら）リクオの格好だ。ちなみに一夏が言った鍔の無い日本刀というのはヤ

クザ用語で長ドスと言うものだ」

直人「また作者が選びそうなものだな」

一夏「じゃあ、その髪型って……」

作者「おお、妖怪の時の髪型を再現してみた」

直人「そうか……だから俺の更衣室は広かったのか、変な奴らが入ってきて髪に何か塗りたくられてこの髪型にされたんだが」

作者「まあ似合ってるんだから良いじゃん。さて、このコスプレ大会では元キャラの台詞をアフレコとして言ってもらいます。直人、その紙に書いてある事を言えよ」

直人「わかってるよ。アフレコならよく言ってるしな、別にやる事自体構わない」

作者「それではアフレコ、どうぞ！」

直人「全ての妖怪は、俺の後ろで百鬼夜行の群れとなれ！」

作者「ＣＭでも使われたキャッチフレーズ。このアニメを知ってる人なら、誰もが一度は聞いた事はあるのではないでしょうか？」

一夏「うわー、髪と服装でスゲー似合ってる」

直人「ああ、自分でも怖いな」

作者「まあ、本当はもう一つ言ってもらいたいアフレコがあるんですが、それはまた別の機会という事で、次、奏！」

奏「おお、良いぜ」

一夏「それじゃ、カーテンオープン！」

奏「うーん、流石俺の作者。何処までも俺のツボをわきまえてやがる」

一夏「黒目のシャツにスパッツ姿。これって……」

作者「言わずもがな【新機動戦記ガンダムW】の主人公、ヒイロ・ユイの格好だ」

一夏「でもアイツ、時と場によって色んな服着てなかったっけ？」

作者「まあ、工作員みたいなもんだったからね。でも一番この格好が印象深い気がしてな」

直人「まあ、流石奏だ、似合ってるな」

奏「おお、ありがとう。お前のそれも似合ってるぞ」

直人「おっ、そうか」

作者「はい、それじゃあアフレコをやってもらいましょう」

奏「あの台詞だな、いつでも良いぞ」

作者「それでは、どうぞ！」

奏「ゼロよ・・・俺を導いてくれ・・・！」

作者「おお、これも有名な台詞だ、これも最早説明要らずだな」

一夏「だな、でもコイツの場合、一番の台詞はあれじゃあ」

作者「まあ、作者様からの希望だから、それを捻じ曲げてまでやるものじゃないでしょ。次、夜明」

夜明「オッケー」

一夏「んじゃ、カーテンオープン！」

夜明「どうだ？」

一夏「赤と黒の外套か、これは？」

作者「【Ｆａｔｅ／ＥＸＴＲＡ】のアーチャーだそうだ。外見だけなら結構似合ってるぞ」

直人「おい、失礼だぞ」

夜明「いいよいいよ、んで、俺のアフレコはこの紙に書いてある事か？」

作者「おお、それじゃどうぞ！」

夜明「Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ.
体は剣で出来ている
Ｓｔｅｅｌ　ｉｓ　ｍｙ　ｂｏｄｙ,　ａｎｄ　ｆｉｒｅ
ｉｓ　ｍｙ　ｂｌｏｏｄ
血潮は鉄で、心は硝子
Ｉ　ｈａｖｅ　ｃｒｅａｔｅｄ　ｏｖｅｒ　ａ　ｔｈｏｕｓａｎｄ　ｂｌａｄｅｓ.
幾たびの戦場を越えて不敗
Ｕｎｋｎｏｗｎ　ｔｏ　Ｄｅａｔｈ.

ただ一度の敗走もなく
Ｎｏｒ ｋｎｏｗｎ ｔｏ Ｌｉｆｅ.
ただ一度の理解もされない
Ｈａｖｅ ｗｉｔｈｓｔｏｏｄ ｐａｉｎ ｔｏ ｃｒｅａｔｅ ｍａｎｙ ｗｅａｐｏｎｓ.
彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う
Ｙｅｔ, ｔｈｏｓｅ ｈａｎｄｓ ｗｉｌｌ ｎｅｖｅｒ ｈｏｌｄ ａｎｙｔｈｉｎｇ.
故に、生涯に意味はなく
Ｓｏ ａｓ Ｉ ｐｒａｙ, ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ ｂｌａｄｅ ｗｏｒｋｓ.」
その体は、きっと剣で出来ていた

作者「同作品の宝具発動時の台詞だそうだ」

一夏「長げー」

直人「舌噛まなかったか？」

夜明「いや」

作者「なら良いけど。次は優希だな、準備は良いか？」

優希「ちょ、ちょっと待ってください。まだ、心の準備が……」

作者「ええい！　後がつっかえてるんだ！　一夏、カーテンオープン！！」

一夏「お、おお。カーテンオープン！」

優希「へ？　うわわ……！？」

優希「うぅ～、あんまりじろじろ見ないでください……／／／／／／」

作者「これは【マクロスF】のヒロイン、ランカ・リーのステージ衣装（星間飛行バージョン）だそうだ」

一夏「い、違和感ねー」

優希「（グサッ）うっ！」

作者「って言うか、似合いすぎ。アンタ本当は性別女じゃないの？」

優希「（グサッグサッ）うぅ！　僕は男です！！」

作者「そんな格好で主張しても説得力無いよ？」

優希「（グサッグサっグサッ）グハッ！？」

直人「おーい優希、大丈夫か？」

優希「うぅ～～～（涙目）」

作者「はいはい、寸劇はそのぐらいにして、ほい、これがアフレコの台詞ね」

優希「……えぇ！？　む、無理ですよ！！」

作者「無理でも言うの！」

優希「うぅ……解りました」

作者「それでは、どうぞ！」

優希「き……キラッ☆……」

作者「……」

優希「うぅ……恥かしい／／／／／／」

作者「……」

一夏「？　作者？」

作者「（プシャアアアァァァァア）」

優希「ヒッ！？」

一夏「お、おい！　大丈夫か！？」

暫くお待ち下さい――（――＾――）――

作者「ふぅ、恐るべき破壊力だった。とりあえず、次で最後だ」

一夏「おお、次はクリスだ、準備は良いか？」

クリス「ああ、こっちは問題ない」

作者「それでは、カーテンオープン！」

一夏「カーテンオープン！」

クリス「っと、どうだ？」

一夏「全身を覆う黒いマントとバイザー、これって？」

作者「【機動戦艦ナデシコ劇場版】のテンカワ・アキトの服装だな。凄い似合ってるじゃないか」

直人「ああ、普段の冷静な所も相まって、中々様になってるぞ」

クリス「そうか？」

作者「はい。それじゃあ、アフレコやってもらいましょう。どうぞ！」

クリス「もう君に、ラーメンを作ってあげることはできない」

作者「劇場版の一幕です。中々切ない場面のようですね」

一夏「ようですねってしらねえのかよ」

作者「スパロボＭＸとＡＣＥ３で何が起こったのかわかるけど、劇場版を見たわけではないので」

一夏「成る程」

作者「と、これで男性部門は終了です」

直人「やっと終わったか」

奏「疲れたな」

夜明「そうか？　俺は中々楽しかったけど」

優希「あの、もう着替えて良いですか？」

作者「そうだね、そんじゃあさっさと着替えてきて」

クリス「ああ」

作者「さて、次は女性部門に視点を移しましょう。是非、お楽しみ下さい！！」

鈴「と、言うわけで、こちらオリキャラだけのコスプレ大会女性部門の会場よ。司会はアタシ、凰鈴音と……」

セシリア「私、セシリア・オルコットですわ。あっ、それと……」

箒「あ、アシスタントの篠ノ乃箒だ。よろしく頼む」

鈴「さて、んじゃちゃっちゃとやるわよ」

箒「その前に一つ良いか？」

鈴「何よ？」

箒「どうして私がアシスタントなんだ？」

鈴「ここに書いてある紙によると、作者曰く「セシリアをアシスタントにすると文句言われるし何を混ぜるか解らないから」だそうよ」

セシリア「失礼な！　私が何か良からぬものを混ぜるとでも！？」

鈴「ちょっ！　アタシに突っかからないでよ！　この紙に書いてあるんだから！！」

セシリア「ふふふ、いいですわ。作者さんには、後でたっぷりとお話してもらいますから……」

箒「しかし、アシスタントと言っても、何をやれば良いのだ？」

鈴「そんな難しい事じゃないわよ。私達が読む紙とか渡してくれればいいから」

箒「まあ、そのぐらいで良いのなら」

鈴「さて、少し脱線しちゃったけど、早速始めるわよ。まずは参加者の紹介から！」

箒「これが参加者のリストだ」

鈴「サンキュー。ええっとまず一人目は、当小説で一番人気の美少女キャラ。雪のように白い肌と髪を持つ無口っ子。【ＩＳ　桜の花纏う真剣】より、風花真白（かざはなましろ）！」

真白「……（ぺこり）」

箒「相変わらず。礼儀正しいな」

真白「うん……」

鈴「ま、もうちょっと愛嬌があれば良いんだけどね。じゃあ次、セシリア宜しく！」

セシリア「わ、私が！？　え、えーっと、当小説ヒロイン候補その一。明るいムードメーカーでありながら、その持ち味を活かしきれてない少女。同じく、【ＩＳ　桜の花纏う真剣】より、秋宮紅葉（あきみやこうよう）！」

紅葉「いやいやいや！　持ち味を活かせないのは作者の所為でしょ！　何私が悪いみたいなこと書かれてるの！」

セシリア「そ、そんな事私に言われましても！」

紅葉「作者、後でお話決定」

鈴「まあ、自業自得ね（作者の）。じゃあ、次行くわよ。次はこの小説の常連、三月語様から二名。まず一人は、序盤から登場の奏ラバーズ最古参。元気一杯だが、現在病化が進行中のアホっ子、【ＩＳ－インフィニット・ストラトス－　熾天使を駆る少年】から、中咲真琴（かさきまこと）！」

真琴「えー！　何その紹介！！」

鈴「全部真実でしょ。この前そっちの小説で公表されたテストの答案、酷かったわよ」

真琴「うっ……」

セシリア「次の方ですが……こんな紹介した怒りますわよね」

鈴「でもやらなきゃなんないのよ」

セシリア「解ってます。もう一人はラバーズ新参者にしてゼロを扱える唯一（？）の存在。理数系最強、でも漢字は壊滅的の自称万年１４２ｃｍ。同じく【ＩＳ－インフィニット・ストラトスー　熾天使を駆る少年】より、ロロット・オルメス！」

ロロット「ちょっと、何その紹介文！　アタシに喧嘩売ってるの！　開けられたいのね、風穴開けられたいのね！！」

セシリア「ち、違います！　これを書いたのは作者で……」

ロロット「問答無用！！」

鈴「ちょっと落ち着きなさいよ！」

ロロット「うっさい、貧乳！」

鈴「（ブチッ）　なんですってーーーーー！！！！」

箒「鈴、お前まで暴走するな！　ロロットも落ち着け！」

鈴・ロロット「「おっぱい魔神は黙ってなさい！！」」

箒「！！？　貴様らそこに直れ！　緋宵の錆にしてくれる！！」

鈴「来るなら来なさい！　衝撃砲でふっ飛ばしてあげるわ！！」

ロロット「全員まとめて風穴開けてあげるわ！！」

セシリア「ちょっ！　皆さん落ち着いてください！　だ、誰か止めてくださーい！！」

直人「お前ら……何やってんだ」

紅葉「あっ、直人」

真琴「かなちゃんも」

奏「おいロロット！　お前人様のトコまで来て何暴れてんだ！？」

ロロット「うるさい！　邪魔するならアンタにも風穴を開けるわよ！！」

直人「箒も鈴も何があったのか知らんが、暴れるのをやめろ！」

箒「斬る！！」

鈴「一気に吹き飛ばす！！」

ブチッ！

紅葉「あっ」

直人「てめぇら……そんなに暴れてえのか……」

奏「なら……望み通りに……」

真琴「か、かなちゃんがキレた」

真白「直人も……」

紅葉「そ、総員退避ーーーーー！！」

「射干玉（ぬばたま）の闇に光一つ…！！」

「天んんんんからぁぁお塩おおおおおっ！！」

ドゴオオォォォォォン！！

三人「「「ギャーーーーー！！」」」

暫くお待ち下さい＞（＿　＿）＜

鈴「えー、大変お見苦しい所をお見せしました」

箒「面目ない……」

セシリア「鈴さん、箒さん、凄いたんこぶが……」

ロロット「いったーーーーー！」

真白「これが……天からお塩」

紅葉「本当に凄ーい」

鈴「もう、気を取り直していきましょう。最後はサザンクロス様より、燃えるような炎髪灼眼と高校生にあるまじきボディラインを持つ少女。背中に漢気の二文字を背負うそこらの男よりも男らしい、

自称夜明の正妻。【ＩＳ～インフィニット・ストラトス～　不屈の翼】より、夕暮太陽（ゆうぐれたいよう）！」

太陽「さっき凄い音と悲鳴が聞えたんだが、一体何が起こったんだ？」

紅葉「知らない方が良いかと。それにしても本当に凄い身体つき、羨ましい……」

太陽「そうか？　私から見れば、お前も十分良い体をしてると思うが？」

紅葉「そうかな？」

ロロット「何アンタ達！　その無駄にでかい脂肪！　あてつけ！　アタシに対するあてつけ！！」

鈴「そうよ！　何でアンタ達そんなにでかいのよ！！」

太陽「別に好きででかくなったわけじゃない」

箒・紅葉「うん、うん」

ロロット「むきー！！　寄越しなさい！　半分でいいから寄越しなさい！！」

太陽「虚刀流奥義　飛花落葉！」

ロロット「へブっ！？」

太陽「生憎だが、私の体を好きにして良いのは夜明だけだ」

奏「見事に決ったな」

直人「流石と言うべきかなんと言うか、それにしても愛されてんな、夜明」

夜明「まあな」

太陽「何だ、来てたのか」

夜明「おお」

真琴「大丈夫？」

ロロット「大丈夫なわけ……ないでしょ……」

鈴「約一名死に掛けてるけど、とりあえずこの五人でやるわよ」

セシリア「衣装はそちらの袋にありますので、手にしたらそちらの更衣室で着替えてくださいね」

紅葉「えーっと、アタシはこれね」

真白「私……これ」

真琴「私はこれで、これロロットの」

ロロット「一体何が入ってるのよ？」

太陽「そして、私はこれか」

箒「更衣室はこっちだ。何かあったら私を呼べ、手伝ってやる」

紅葉「オッケー」

真白「うん」

真琴「はーい」

ロロット「解ったわよ」

太陽「心配するな。お前の手を煩わせないさ」

男性部門同様、更衣室の様子を音声のみでお楽しみ下さい。

紅葉「どれどれ……何これ？　ドレスにしては何か質素と言うか、何と言うか……」

真白「これは……軍の制服みたい……」

真琴「私はっと、何だろう……？」

ロロット「何これ？　制服？　ＩＳ学園のじゃないわね、なんなのよこれ？」

太陽「私は……ほう、これはこれは……」

紅葉「着替え終了っと。うーん、中々似合ってるじゃん♪」

真白「出来た……」

真琴「一応着れたけど……何これ？」

ロロット「サイズぴったりね、でも何なのこの服？」

太陽「ふむ、これは私好みだな。夜明に見せたらなんていうのだろうな」

鈴「終わったー？」

紅葉「終わったよー」

真白「私も……」

真琴「私もー」

ロロット「アタシもよ」

太陽「私も終わったぞ」

鈴「よし、それじゃあまずは真白かいくわよ」

セシリア「箒さん。カーテンオープン！」

箒「解った」

真白「……どう？」

鈴「どれどれ、ＴＶアニメ【機動戦艦ナデシコ】のホシノ・ルリの格好だそうよ」

セシリア「普段下ろしてる髪をツインテールにして、可愛いですわね」

真白「そう？」

鈴「そうよ。さて、そろそろアフレコいきましょうか」

箒「これが台詞だ」

真白「うん……」

鈴「それじゃ、ちゃっちゃとやっちゃって」

真白「バカばっか……」

鈴「ルリが言ってる決まり文句ね。『もうこれ本人じゃないの？』

って思うくらい似合ってたわ」

セシリア「そうですわね」

箒「うむ」

鈴「さて、次は紅葉よ。準備は良い？」

紅葉「いいよー」

セシリア「それでは、カーテンオープンですわ！」

紅葉「どうかな？　似合う？」

鈴「まあ、似合ってるか似合ってないって言えば似合ってるわね。所でこれ何なの？」

セシリア「【ティルズ　オブ　エターニア】の、ファラ・エルステッドの衣装だそうですわ」

鈴「ああー、あの押しの強い子ね。まあ、紅葉のキャラにぴったりじゃない」

紅葉「どうもー。で、アタシのアフレコは？」

箒「これだ」

紅葉「どれどれ……オッケー」

鈴「じゃ、どうぞ」

紅葉「うん、いけるいける！」

鈴「これも決め台詞ね、本当よく似合ってるわ」

紅葉「えへへ」

セシリア「さ、次は真琴さんですわよ。準備は宜しくて？」

真琴「良いよー！」

鈴「それじゃ、カーテンオープン！」

箒「カーテンオープン！」

真琴「どうかな？」

鈴「黒いドレスね。これは元ネタ何なの？」

セシリア「【ローズメイデン】の銀様こと水銀燈（すいぎんとう）の衣装ですわ」

鈴「……ああ、なるほどね。ってことはアフレコも大体予想できるわね」

箒「とりあえず渡しておくか。これだ」

真琴「んい」

鈴「それじゃ、どうぞ」

真琴「ジャンクにしてあげる・・・！」

鈴「元キャラがよく言う台詞ね。ついでに真琴本人も言ってるわよ。詳しくは三月語様の小説【ＩＳ－インフィニット・ストラトス－熾天使を駆る少年】を御参照下さい」

セシリア「次はロロットさんですわね、一体どんな格好なのでしょうか？」

鈴「さあ？　とりあえず開けるわよ。カーテンオープン！」

箒「カーテンオープン！」

ロロット「どう、文句ある？」

鈴「これは【緋弾のアリア】に出てくる学校『東京武偵高校』の制服ね」

セシリア「わざわざロロットさんの身長に合う様に作られているようですわね」

鈴「まあ、着れないよりは良いけどね。箒、アフレコの台詞渡して」

箒「ああ、これだ」

ロロット「これに書いてある事を言えば良いのね」

鈴「そうよ。それじゃ、どうぞ！」

ロロット「アンタ、アタシの奴隷になりなさい！！」

鈴「同作品の主人公、神崎・H・アリアの台詞のようね」

セシリア「ようとは？」

鈴「あたしも知らないのよ。あたし達のアニメ・漫画知識は作者のと同じなんだから」

セシリア「り、鈴さん……メタな発言はちょっと……」

奏「んで、何で俺を指差して言ってるんだ？　ロロット」

ロロット「気分よ気分。こういうのはそれっぽく言ったほうが良いでしょ？」

奏「まあ、そうかも知れねえが……」

真琴「駄目ー！　かなちゃんは私のなのー！！」

奏「ぐぼぉ！？」

直人「奏！！」

鈴「何か事故が起こったみたいだけど、気にせず進めるわよ」

直人「ひどいな」

鈴「気にしてたら何時までも話が進まないでしょ。というわけで、最後は太陽よ」

太陽「私はいつでも良いぞ」

セシリア「それではどうぞ！」

箒「カーテンオープン！」

太陽「ふふん、どうだ」

鈴「【Ｆａｔｅ／ＥＸＴＲＡ】のセイバーの格好だそうよ」

セシリア「本人の髪の色もそうですが、凄く似合ってますわね」

太陽「まあ、元キャラが男装している女性だからな」

夜明「なるほど、太陽にはうってつけってわけか」

太陽「夜明、今夜は覚悟しておけよ」

夜明「……」

鈴「さ、そんなことよりアフレコタイムよ」

箒「これが台詞だ」

太陽「ああ」

鈴「それでは、どうぞ！」

太陽「我が才を見よ！　万雷の喝采を聞け！　座して称えるがよい……黄金の劇場を！！」

鈴「これは宝具発動時の台詞だそうよ」

直人「凄いな、衣装といい台詞といい、ここまで様になってる奴もそうそういないんじゃないか？」

箒「同感だ」

夜明「まあ、太陽だからな」

全員『……納得』

セシリア「さて、これで女性部門も終わりですわ。皆さん、もう着替えてきて結構ですわよ」

紅葉「オッケー」

真白「うん」

真琴「ほーい」

ロロット「解ったわよ」

太陽「もう少し着ていてもよかったんだが、仕方ない」

直人「さて、俺たちは先に出てるか」

奏「そうだな」

直人「じゃ、先に失礼する」

鈴「オッケー」

作者「皆様、お楽しみいただけましたか？　以上で当企画は終……

「「作者ー！！」」な、何だ！？」

ロロット「何よあの紹介文！　アタシに喧嘩売ってるの！　風穴開けられたいの！！」

優希「僕は男です！　女の子じゃありません！！」

作者「煩いなー、これでも飲んでなさい」

優・ロ「むぐぅーーーーー！？！？！？！？」

バタリッ

直人「おい作者！　今二人に何を飲ませた！！」

作者「さて、何でしょうねえ」

奏「おい、これ、酒瓶じゃねえか」

直人「ちょっと待て、この二人が酒飲んだら確か……」

優・ろ「「にゃーん！！」」

奏「ぬおっ！？」

箒「うわっ！？」

直人「奏！　箒！」

夜明「な、何だ？　どうなってんだ？」

直人「優希とロロットはな、酔うと猫っぽくなるんだ」

クリス「何だそりゃ？」

ろろっと「ニャッ！　ニャッ！　ニャッ！」

奏「こ、こら、叩くな！」

優希「うにゃ～」

箒「ど、どうすればいいのだ？」

紅葉「膝の上で甘えるだけだって言うから、とりあえず膝枕してあげたら」

箒「わ、解った……」

優希「にゃ～、ごろごろ」

箒「（か、可愛い……／／／／／／）」

作者「さーて、厄介者が消えたわけで（ポンポン）……なんだ？」

紅葉「作者、ちょっと向こうでお話しようか？」

作者「えっ？　ちょっ、何処へ……あああああああ！！！！」

直人「あー、作者が連行されたので、これで終わりにさせてもらう。
これからも、当小説をよろしくお願いします」

作者「……」

真白「返事が無い……ただの屍みたい」

直人「紅葉、お前何をした？」

紅葉「ん？　何も？」

直人「いや、何もやって無いのにこんなになるわけ……」

紅葉「何も……！」

直人「お、おう……」

ＰＶ数５０，０００ｈｉｔ突破記念特別企画　「オリキャラだけのコスプレ大会」

如何でしたか？　楽しんでいただけたのなら幸いです。

キャラを貸し出していただいた、三月語様、サザンクロス様、こもも様、Ｄ－５様、ありがとうございました。

それと三月語様、Ｄ－５様、勝手にお宅らの小説のネタを使わせていただきました。

もし駄目ならば直ぐに削除いたしますので、お申し付け下さい。

次回の更新はどうなるか解らないので、とりあえず未定と言う事にしておきます。なので来週更新できない可能性もありますので、御容赦下さい。

第十六話　新たな出会い　（金の貴公子）（前書き）

作者「ふふふ、遂に……遂にキターーーーー！！！！」

直人「なっ、何だいきなり！！」

作者「皆様、御待たせしました！　そして私も待ちかねました！
いよいよ、いよいよあの子が登場します！！」

直人「だ、誰だよ、あの子って」

作者「ふふふ、来た来た来た！　遂に来た！！　我が世の春が来た
ーーーーーーーーーー！！！！！」

直人「少し落ち着け！！　車軸の雨！」

作者「グハッ！」

直人「全く。えー、この馬鹿作者に代わり、定時（９時）に更新できなかった事を深くお詫びいたします。それと、今回はパソコンの関係で文章が短く、クオリティが低いと思われるでしょうが、呼んで楽しんでいただけると幸いです。それではどうぞ」

第十六話　新たな出会い　（金の貴公子）

「ふあ～……」

五反田兄妹と友好を深めた次の日。

直人はいつもどおり登校し、席に座っていたが、時々普段はしないはずの欠伸をかみ殺していた。

「どうしたんだ直人？　欠伸なんかして」

「知らん。昨日も定時に寝たはずなんだがな……」

「いつも何時に寝てんだよ」

「7時ぐらいに夕食だろ。8時から9時まで鍛錬して、その後入浴して……大体10時半ぐらいにいつも寝てる」

ここで少し補足を加えるなら、9時半前になると真白が直人の髪の手入れをしにやってくる。

「じゃあ疲れてんじゃねえのか？　俺の訓練にも付き合ってもらってるし」

「俺はそれほど柔じゃねえよ。それより一夏、聞きたい事が二つある」

「何だ？」

話を一旦止めて一夏に向き直ると、その後ろ側に視線を向けて聞

いてきた。

「昨日、箒と何があった？」

「……はあ？」

質問の意図が読めず、思わず一夏はそんな声をあげる。

「いやさ、さっきから箒のお前を見る目が時々違う感じがするからさ、昨日何かあったのかと思ってな」

そう言って直人が再び視線をやると、直人の視線に気付いたのか、こっち側を見ていた箒が慌てて視線をそらす。

昨日、部屋の調整がついたとかで箒が部屋を移動し、晴れて一夏は一人部屋になったのは早朝聞いた。

恐らくその際、何か一夏が失言したのかと思い、聞いてみたのだ。

「いやさ、昨日箒から、今度の学年別トーナメントで優勝したら……」

「ふんふん」

「……付き合ってもらうとか言われてよ」

「ふーん……何？」

一夏の言葉を聞いた瞬間、直人は我が耳を疑った。

「す、すまん一夏、もう一度いってくれないか？」

「だからさ、今度の学年別トーナメントで箒が勝ったら、俺と付き合ってもらうとか言われてさ」

「な、何ー！？！？　お、おわっ！？」

再び聞いた一夏の答えに驚きを隠せず、驚きのあまりそのまま倒れこんでしまう。

後ろには何もなく、そのまま床に頭を打ち付けてしまう。

「だ、大丈夫か！？」

「いてて……それ、本当か？」

「あ、ああ……」

後頭部を押さえながら立ち上がり、直人は事の真偽を確かめる。

特に嘘は言っていないので一夏も肯定の言葉を口にする。

「そっかー、箒がなー……」

普段、男勝りで中々素直になれない彼女の性格を鑑み、改めて驚きの言葉を洩らす。

（いや、でも……コイツの事だからきっと……）

「如何したんだ？」

「いや、なんでもない。それともう一つなんだが……」

そう言うと、直人は周りをきょろきょろすると、一夏と共に頭を

屈めて聞く。

「この空気、何か心当たりあるか？」

「知るかよ」

一夏がそう答えると、二人は揃って、はぁ、と溜息を付いた。

教室に入ってから、クラス内の女子が二人に時々熱視線を送っているのだ。

実はどういうわけか、現在学園内では、「学年別トーナメントで優勝したら、織斑一夏、桜庭直人と付き合える」という噂が広まっていた。

先ほどからその話題で盛り上がっており、先ほどの箒に関する二人の会話も、その喧騒に掻き消されて殆どの生徒には聞えてなかった。

「察するに、箒さんの一世一代の告白を何者かが盗み聞きし、噂として広めたら背びれ尾ひれが付いて直人も巻き込んだ。そんなところかな？」

「そんなところだと思う」

二人の後ろでその会話が聞えていた真白と紅葉を除いては。

「席に着け、ＨＲを始めるぞ」

一組がとある話題で盛り上がっていると、一組担任にして、一夏の姉、直人の師匠である織斑千冬が姿を表す。

するとさっきまで騒がしかった教室が、彼女の鶴の一声……否、鬼の一声によって静まり返り、大人しく自分の席に着く。

「今日は何と、転校生を紹介します！」

教壇に立ってそう言うのは、副担任の山田真耶だった。

（転校生？　またか？）

転校生という単語に、直人はふと疑問が浮かぶ。

先月、中国から鈴が転入してきたばかりだというのに、また転校生が来るのかと、少し疑問に思った。

「……えっ？」

しかし、そんな素朴な疑問も、教室に入ってきた件の転校生を見て吹っ飛び、思わず驚きの声を上げる。

何故なら、入ってきた転校生というのは……

『男』だったからなのだ……

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。皆さん、よろしくお願いします」

一組全員がフリーズする中、転校生、シャルルは礼儀正しく挨拶をする。

「お、男？」

「はい、こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて、本国より転入を……」

『キャーーーーー！！！！！』

「えっ！？」

説明中、教室に響き渡る黄色い声に、思わずシャルルも面食らってしまう。

そして、黄色い声を発した女子一同の興奮は頂点に達していた。

「男子！　三人目の男子！！」

「しかもうちのクラス！！」

「美形！　守ってあげたくなる系の！！」

最早この興奮は留まる所を知らないのではないか？　と、思うくらい騒ぎ立つ女子一同。

まあ、ＩＳ学園、ひいてはＩＳという存在の特徴を考えれば、この興奮も理解できないものではないのだが。

「騒ぐな静かにしろ！」

とここで、鬼教師千冬が一喝し、ようやく静けさを取り戻す。

「今日は二組と合同でＩＳ実習を行なう。全員着替えて、第２グラウンドに集合。それと織斑、あと桜庭」

「はい」

「何でしょうか？」

授業連絡の後、千冬は一夏と直人を呼び、二人もそれに反応する。

「デュノアの面倒を見てやれ、同じ男子だしな」

「あっ、はい」

「委細承知」

二人は特に断る理由もない（あっても抵抗は無駄だが）ので、二つ返事で了承する。

「君達が織斑君と桜庭君だね。初めまして、僕は……」

「ああ、悪い、自己紹介は後回しだ。一夏」

「おお。行こうぜ、女子が着替え始める」

シャルルの自己紹介を遮り、直人が名前を呼ぶと、一夏がシャル

ルの手を引っ張って三人で教室を出る。

「俺たちは、アリーナの更衣室で着替えだ。実習のたびにこの移動だから、早めに覚えてくれよな」

「まあ、そう直ぐに慣れないだろうけど、これからこの三人で移動する事になるだろうから、そう心配するな」

「う、うん……」

廊下を移動しながら一夏が説明し、直人が今後の事を話、心配ないと言う。

だが、当のシャルルは何処か落ち着きがなかった。

「何だ、そわそして。トイレか？」

「ち、違うよ」

と、何かいいかけたその時だった。

「あっ！　噂の転校生発見！」

「しかも織斑君と桜庭君と一緒！」

何処からか噂をかぎつけた他のクラスの生徒達が集まり始める。

「皆、こっちよ！」

「者どもであえであえー！」

「……ここは何時から武家屋敷になったんだ？」

そんな直人のぼやき半分の突っ込みも、どんどん集まってくる女子達の騒ぎ声に掻き消されて行った。

とここで一夏と直人は偶然開いてる横道を発見する。

「行くぞ！」

「おお！」

「う、うん」

直人の言葉を合図に、三人は横道に入ってさっさとアリーナへ向う。

「何で皆あんなに騒いでるの？」

「そりゃ、男でＩＳを動かせるのって、今のところ俺たち三人しかいないからな」

「えっ？　……ああ、そっか」

「とにかく急ぐぞ、一時間目から出席簿は御免被りたいからな！」

直人の言葉に一夏も激しく同意し、三人はそのままアリーナに向って走り去って行くのだった。

「何とか振り切ったな」

「ああ」

ここはアリーナの更衣室。
あの後も他のクラスや上級生の追撃をかわし、何とかこの更衣室に辿り着いた。

「御免ね、いきなり迷惑掛けちゃって」

少し疲れ気味の二人を見て、シャルルが謝ってきた。
あの騒がしさの原因が自分にあると解って、申し訳ない気持ちになっていた。

「いいって。それより助かったぜ。この学園に男二人は辛いからな」

「そうなの？」

「ああ。お前も直ぐに解るよ、あの好奇の視線は結構辛い」

と、経験者二人の体験談を聞き、その時のやつれたような顔を見て、シャルルも苦笑いを浮べる。

「まあ、とにかく、これからよろしくな。俺は織斑一夏。一夏って

呼んでくれ」

「俺は桜庭直人。直人って呼んでくれて構わない」

「うん。よろしく一夏、直人。僕の事もシャルルでいいよ」

と、自己紹介もそこそこに、ＩＳ学園で二人しかいない男子は、新たな男子クラスメートであるシャルルと友好を深めるのだった。

おまけ

着替え中の教室にて。

「うーん……」

「如何したんだ？　紅葉」

「いやさ、あの転校生君の事なんだけど……」

「転校生？　確か、デュノアだったか？」

「うん。何かどっかで聞いた覚えがあるんだよねえ」

「知り合いか？」

「そうじゃないんだけど、デュノアって名前が聞き覚えあって。確か、実家の関係で……（ガクッ）」

「なっ！？　ど、如何した！！」

「御免。実家の事思い出したら、ちょっとあの甘甘空間の事を思い出して、胸焼けが……」

（い、一体どんな実家なんだ……？）

胸を押さえながらｏｒｚになってる紅葉を見て、そう思わずにはいられない箒だった。

第十六話　新たな出会い　（金の貴公子）（後書き）

桜爛の間

作者「何とかできた、そして遂にシャルルが来たー！！」

直人「作者。お前そんな趣味が……」

作者「違うからね！　そっちの趣味はないからね！！」

直人「まあ、そんな事は如何でもいいとして、学校に三人目の男子、少しは俺たちも気が許せそうだよ」

作者「まあ、今はそれで良いだろうけどね」

直人「ん？　何だその言葉、妙に引っ掛るが」

作者「んーや、なんでもない。さて、それより、いつもの目安箱、今回も常連、三月語様から二つ頂いた。まずは一つ目」

『原作にもあった『弾マリオ現象』はあったのか？』

直人「何だ？　この弾マリオ現象って？」

作者「原作で、蘭に睨まれて縮こまってる姿を、一夏があの有名な紅い帽子の髭のおっさんに例えた事を、三月語様が私的に名付けたそうだ」

直人「なるほど、いいえて妙だな」

作者「んで、どうだった？」

直人「縮こまってる風ではなかったが、たじたじだったな。あれだけで解ったよ、コイツは妹に頭が上がらないんだなって」

作者「とのことです。では次」

『『〇〇は俺の嫁』とか言えるものはあるか？』

直人「何だこれ？」

作者「要するに、この子は自分の嫁だ！　って言うほど好きな人とかいるかって奴だな」

直人「奏にとってのルティア（シャワーズ）みたいなものか？」

作者「まあ、そうだな」

直人「いない」

作者「即答かよ」

直人「だってなあ。真白は旅仲間で妹みたいなもんだし、箒、紅葉、鈴は幼馴染、セシリアは仲良くしてもらってるクラスメート、としか思ってないからな」

作者「はあ。とまあ、こんな感じです。三月語様、いつも御質問、ありがとうございます！」

直人「次はアフレコ委員会か、だれがするんだ?」

作者「今回も三月語様からのリクエストで、するのは君だ」

直人「わかった。どれどれ……」

作者「それでは、どうぞ!」

直人「Ｓｔｏｐ ｉｔ，Ｒａｙ・・・ Ｅｖｅｎ ｉｆ ｙｏｕ ａｒｅ ｆａｃｉｎｇ ａ ｂｉｔｔｅｒ ａｓｐｅｃｔ ｏｆ ｌｉｆｅ・・・ Ｄｒｕｇｓ ａｎｄ ｍｕｒｄｅｒ ａｒｅ ｆｏｕｌ ｗｉｔｈｏｕｔ ａｎｙ ｅｘｃｕｓｅ・・・ ｄｅｓｅｒｖｅ ａ ｒｅｄ ｃａｒｄ ｆｏｒ ａ ｌｏｓｅｒ・・・」

（訳：ダメだよ、レイ・・・ たとえどんなに辛く悲しい事があったとしても・・・ 麻薬と犯罪はやっちゃならねー反則（ファール）・・・ みっともねーレッドカードだよ・・・）

作者「【名探偵コナン】のコナンの台詞だそうだ」

直人「英語か……」

作者「うん。マンなら誰でもいいとの事だったんだけど。正直、一夏には無理なんじゃないかと思い。君にやってもらった」

直人「同感だな」

作者「さて、ここでこの小説を呼んでもらってる皆様に最終通告です。現在、真白のＩＳの名前と肩部武装アンケート及びアイデア募集を行なっています」

直人「詳しい事は、第十四話の後書に載っているのでそちらを参照にしていください」

作者「期限は今日中ですので、感想でもメッセージでも、どちらでも良いので御応募下さい」

直人「さて、次回でアニメ六話も終わりか」

作者「おお、そして次回登場はあの眼帯娘。そして、一組の教室で一波乱あり！」

直人「何？　どういうことだ？」

作者「それは次回のお楽しみ！　それではまた次回ー！」

第十七話　新たな出会い　（銀の冷氷）（前書き）

作者「今回でアニメ第五話も終わりです」

直人「それはいいんだが作者、そろそろ夏季休講期間が終わるが、多少は勉強したか？」

作者「……（プイッ）」

直人「目をそらすな！！」

作者「ま、それはさておき、早ければ９月１６日かその前日あたりで我が城（一人暮らし）に戻れるかもしれないので、実家のパソコンでの執筆は、恐らく来週の水曜で終わるかもしれません。そうなれば、この遅いパソコンでの執筆ともおさらばです！　これまでの執筆などで学んだ事を元に、更なる精進をしたいと思いますので、応援、よろしくお願いします！！」

直人「それで、勉強はどうなんだ？」

作者「（プイッ）」

直人「だから目をそらすな！！」

第十七話　新たな出会い　（銀の冷氷）

更衣室で着替えを終えた一夏、直人、シャルルの三人は、他の女子達と共にグラウンドにいた。

二組と合同ということで、当然だが、いつものメンバーに加えて鈴の姿もあった。

「今日から実習を開始する」

『はい！』

千冬のかけ声に、その場にいる全生徒が返事をする。

「まずは実演をしてもらう。凰！　オルコット！」

「「はい！」」

「専用機持ちなら直ぐに始められるだろ、前に出ろ！」

千冬かやお呼びが掛かったのは、代表候補生である鈴とセシリアだった。

「はぁ、めんどいなあ。何でアタシが……」

「何か、こういうのは見せ物みたいで気が進みませんわね……」

しかし、お呼びが掛かった当の二人は、片や面倒くさそうに、片や気乗りしない様子で前に出る。

そんな二人を見て、呆れ気味の千冬が叱咤する。

「お前ら少しはやる気を出せ……あいつらにいいところ見せられるぞ（ボソッ）」

「「っ！！？」」

後半は、当人達にしか聞えない声だったため他の生徒は聞こえてないが、それを聞いた二人の態度は一変する。

「やはりここはイギリスの代表候補生、私セシリア・オルコットの出番ですわね！」

「実力の差を見せるいいチャンスよね、専用機持ちの！」

いい所を見せるチャンス。そういわれた二人は俄然やる気を出す。

現金と言ってしまえばそれまでかもしれないが、気になる相手にいいところを見せたいと思うのは、人間心理として当然である。

まして二人は恋する女子高生、その気持ちは尚更強かったりする。

「うわー。織斑先生、自分の弟と弟子をだしに使ったね」

二人の様変わりした反応を見て、紅葉は千冬が何と呟いたのか容易に想像がつき、ぼそりと呟く。

「ガフッ！？」

刹那、紅葉の眉間に黒い出席簿が炸裂する。

「秋宮、何か言ったか？」

「い、いえ……なんでもありません」

眉間を押さえながら、紅葉は若干涙目になって答える。

その姿に、一夏や直人、箒をはじめとして、その場にいた生徒全員が、「ご愁傷様」という視線を紅葉に送ったのだった。

「それでお相手は？　鈴さんとの勝負でも構いませんわよ」

「こっちの台詞よ！　返り討ちにしてあげる」

「慌てるな馬鹿ども、対戦相手は……」

千冬が大戦相手を発表しようとした、その時……。

「ぁぁぁあああああ！！？」

悲鳴と共に、上空から何かが高速で地面に向ってきてる。

「あれって……山田先生？」

「だね……」

直人が目を凝らしながらポツリと呟くと、紅葉の後ろにいた真白もそう呟いた。

「ど、どいてくださ～～～～～～い！！」

そしてその間も、山田先生は絶賛垂直降下……否、垂直落下中であった。

「なんか、やばそう……」

「三十六計逃げるに如かず！！」

「総員退避ー！！」

真白がポツリと呟いたのを皮切りに、直人はすぐさまその場を離れ（シャルルの手を引くのを忘れず）、紅葉は生徒全員に退避指示を出す。

程なくして、山田先生はそのまま地面に激突し、噴煙が舞い上がるが、幸い巻き込まれた生徒はいなかった。

約一名を除き……。

「ふぅ、間一髪だった」

「ねえ直人。一夏は？」

「……あっ」

シャルルに言われて気づくも、時既に遅しだった。
山田先生の墜落地点、もっと言えば一夏のいた地点には、未だに噴煙がもくもくと上がっている。

「まあ、大丈夫だろう。アイツああ見えて結構タフだから」

少し考える動作をした後、そう結論付ける直人に、シャルルは冷や汗を垂らしながら噴煙巻き起こる地点を見つめる。

しばらくして噴煙が晴れるとその中心地では……

一夏が山田先生を押し倒し、胸を鷲掴みにしているかのような構図ができていた。

「おー、これが世に言うラッキースケベってやつか。いやあ、一夏君同じクラスだと学ぶ事が多いな～（ー∀ー）ニヤニヤ」

「って言うか、あれ確実に山田先生のほうがぶつかったんだよな？だったら普通逆じゃないのか？　何で一夏が上に乗っかってんだよ」

「さあ……」

中心地の様子を見て、紅葉は楽しそうにニヤニヤ顔で呟き、直人は構図が逆になってる事に呆れ顔になりながら呟くと、隣にいた真白が首を傾げる。

一方、注目の的となってる件の二人だが、一夏は困惑した様子なのだが、山田先生はどういうわけか頬を赤くして何かぶつぶつ呟いていた。

「って言うか一夏、何時まで固まってる心算だ！　さっさと退いてやれ！」

「わ、解ってるって！」

暫く硬直状態だったのを見かねた直人が叫ぶと、一夏も再起動して起き上がる。

「いぃちかーーーーーーーー！！」

しかしその直後、怒り心頭の鈴が双天牙月を連結させ、一夏目掛

けて投擲する。

「ってちょっと待て鈴！　お前一夏を殺すつもりか！？」

「鈴なら、やりかねない」

「ってそんなこと言ってる場合じゃないからね！？」

まさかの事態に三人は漫才じみた会話を交わしてる間も、なお双天牙月は一夏目掛けて飛んでいく。

ＩＳ学園で殺人事件発生。

誰もがそう思った瞬間、突如銃の発砲音が聞えたと思ったら、双天牙月が軌道を逸らして地面に突き刺さっていたのだ。

そして、それを実行したのは……。

「大丈夫ですか、織斑君。怪我はありませんか？」

山田先生だった。

「は、はい。ありがとう、ございます」

突然の事に、一夏も驚きを隠せず、御礼もしどろもどろになる。

他の生徒もそれは同じで、普段と違う彼女の一面に、驚きを隠せ

ないでいた。

「山田先生は、元代表候補生だ。あれぐらいの射撃は造作もない」

「む、昔の事ですよ。それに代表候補生どまりでしたし」

愕然としている生徒達に、千冬は山田先生の経歴の一端を口にする。

それに対し山田先生は、謙遜しながらそう言う。

「さて小娘ども、そろそろ始めるぞ」

「えっ？　二対一でですか？」

千冬の言葉に、セシリアが疑問を口にする。

今の話を総合するに、実演はこの三人、しかもセシリアと鈴の二人掛りで山田先生と戦うという事になる。

「いや、流石にそれは……」

「安心しろ、今のお前達ならすぐ負ける」

いくら教員相手とは言え、二対一で戦う事に鈴は抵抗があるようにいうが、千冬がそういったので二人はむっとなる。

「では……始め！」

そして、千冬のかけ声と共に、三人は上空へ飛んでいった

結果だけを述べると、専用機と訓練機、二対一というアドバンテージがあったにも拘らず、山田先生の勝利に終わった。
流石元代表候補生と言うべきなのか、山田先生は二人の攻撃を難なくかわし、二人が衝突した所に一撃を放ち、見事二人を撃墜したのだった。

しかも、撃墜された当の二人はというと、「そっちが悪い！」と、言い争いを始める始末だった。

「不毛だな」

「底が浅い」

「程度が低い」

「醜い醜い」

上から順に、直人、箒、真白、紅葉がそう呟くのだった。

「これで諸君にも、教員の実力が理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

そしていがみ合いを続ける代表候補生二名を放置し、千冬が生徒全員にそう言う。

「次に、グループに分かれて行動してもらう。リーダーは専用機持ちがやる事、では別れろ！」

この号令の直後、一夏、直人、シャルルの所に女子達が集中した為、出席番号順に並ぶよう指示されたのは言うまでもない事だった。

「……どういうことだ」

授業が終わって昼休み、箒は憮然としていた。

授業中、一夏と同じグループになった箒は、その最中に一夏と一緒に昼食をとろうと言った。

無論、一夏にも断る理由がなかったため二つ返事で了承、箒は「よし」っと小さく喜んだ。

ところが、いざ昼休みになってみると、一夏は他の顔見知りメンバーを連れてやって来たのだ。

このため、一夏と箒は当然として、直人、真白、紅葉、セシリア、鈴、そしてシャルルの計八人が集まってお昼を取っていた。

ちなみに現在一行がいるのは屋上、この時間帯は弁当もちの女子がそれなりに集まっている筈なのだが、おそらくシャルル目当てで食堂に集中しているのだろう、屋上はこの八人の貸しきり状態となっていた。

「大勢で食ったほうが美味いだろ」

それでもって、このメンバーを連れてきた一夏の理由がこれだ。

本人に悪気はないのだから余計にたちが悪い。

「それに、シャルルは転校してきたばっかりで、右も左も解らないだろうし」

「そ、それはそうだが……」

そして、一夏があげたもう一つの理由もこれまた理に適っているため、箒はそれ以上何も言えなかった。

「箒、諦めろ。一夏はこういう奴だ」

「解っている。解っているが……」

怒りに震える箒に、心中を察した直人が肩に手を置いて落ち着かせる。

そして彼女の意図を理解した真白とセシリアも申し訳無さそうな視線を送るが、無論、この場に居る誰にも責任はない。

強いてあげるなら、彼女の意図に気付かず無邪気にこういう事をする、一夏の鈍感さだろう。

「えーっと、本当に僕が同席して良かったのかな？」

一方でこの空気を呼んだのか、シャルルがそう聞いてきた。

まあ、顔見知りばかりの面子のなかで、自分だけ今日転校してきたばかりなので、居て良いのか思うのも無理からぬ事だった。

「いやいや、男子同士仲良くやろうぜ。今日から部屋も一緒なんだし」

遠慮がちに聞くシャルルに、一夏は事もなさげに言う。

ちなみにさっき言った部屋割りについてだが、これは教師達の間で長い議題となったのは別の話。

「ありがとう。一夏って優しいね」

そんな一夏にお礼を言うシャルル。

その笑顔に、同性ながらドキッとしてしまう一夏だった。

「うぅ～～～」

「紅葉、大丈夫なの？」

「大丈夫じゃないよぉ……まだ眉間が痛い……」

一方で、授業中に食らった出席簿の痛みが未だに引かない紅葉に鈴が心配する。

「って言うか何なの？　聞えないように言った筈なのに、織斑先生って地獄耳！？」

「かもな」

眉間を押さえながら文句を言う紅葉に、心当たりがあるのか直人はそう呟き、一夏は苦笑していた。

「それより早く食わないか？　あまりもたもたしていると、授業に遅れるしさ」

「うん……」

直人の言葉に真白が同意、他の面々も同じ思いだったため、早速各々が持ってきた弁当を取り出し始める。

「一夏、はいこれ」

「おっ、酢豚だ！」

「そ、今朝作ったの。食べたいって言ってたでしょ」

鈴が持ってきた弁当箱には、彼女の得意料理である酢豚が入っていた。

「直人さん。実は私も、今朝はたまたま早く目が覚めてしまいまして、こういうものを作ってみましたの。よかったら、召し上がってください」

そう言ってセシリアが持ってるバスケットを開けると、その中にはサンドイッチが入っていた。

「ほお、それじゃ、少しもらうぞ」

そう言って直人はサンドイッチを一つ手に取り、それを口に運ぶ。
ところが、それを口にした途端、直人の顔面が蒼白になる。
見た目は非常によいのだが、その味はなんとも形容しがたいものだったのだ。

「如何ですか？　どんどん召し上がって構いませんよ！」

「あ、ああ……また今度もらうよ。ほら、俺も弁当持ってきたし」

しかし、よほど自信があるのか、嬉しそうに言ってくるセシリアに、はっきり「不味い」という事はこの男にはできない。
やんわり断りを入れると、持ってきた弁当の包みを取り出す。

「ん？　何であんた二つも包みがあるのよ？　って言うか、あんた料理できたの？」

するとそれを不思議に思った鈴が聞いてくる。
真白以外の面々も、直人が料理してるイメージが無いため、その疑問に激しく同意していた。

「失礼な！　何時までも昔のまんまだと思うなよ」

しかし、それを心外に思った直人は二つの包みを解く。
一つにはおにぎりが三つ入っており、もう一つには普通に弁当箱が入っていて、中身は鮭の塩焼き、ほうれん草のおひたしなど、和風な料理が所狭しと入っていた。

「あ、あんたこれ全部作ったの？」

「ああ、まあ毎日ってわけじゃないけどな。ほれ、一夏」

「おっ、サンキュー」

その見栄えのよさに一同が驚愕してる最中、直人はおにぎりの一つを一夏に渡す。

「で、でも、味の方は如何かしらね？　直人、一つもらうわよ」

「わ、私も一口宜しいでしょうか？」

「ああ、別に良いぞ」

了承を得て、二人は直人の弁当のおかずを口に運ぶ。

「……お、美味しいですわ」

「ま、負けた……」

二人はその味を認識した途端、何か負けた気がしてｏｒｚとなるのだった。

「おお、直人のも凄いけど、真白ちゃんのも美味しそう！」

「そうかな？」

気落ちしてる二人はさておき、真白の弁当の中身を見た紅葉が再び驚きの声を上げる。

直人のに比べると中身は普通なのだが、玉子焼きに小さめのコロッケ、ブロッコリーにプチトマトと、カラフルで見栄えがよく、栄

養バランスも考えられてる内容だった。

「というか紅葉、お前はそれでいいのか？」

「ふえ？」

一方で、一夏に弁当を食べてもらっている箸が、紅葉の手に持ってるものを見てそう呟く。

というのも、この場に居る八人のうち五人が弁当を持ってきているのに対し、紅葉は購買部で買ってきたパンと、自販機で買った牛乳という、明らかに「それ朝飯だろ？」という声が聞えてきそうなものだった。

「いや、でもさあ、お弁当作ってる暇もないしさ。とりあえず、お腹に入れば大丈夫だと思うから」

「だからってそれはないだろ、いくらなんでも体が持たないぞ。ほれ」

「えっ！？」

本人は大丈夫と言いながらも、流石にお昼がパンと牛乳だけというのは不味いと思った直人は、鮭の塩焼きの身を解して紅葉の目の前に持ってくる。

「ん？　食べないのか？」

「い、良いの？」

「いいに決まってるだろ。ほら」

突然の事態に困惑していたが、紅葉は箸渡ししてきたそれを口に入れる。

「「ああっ！！？」」

とこれに、セシリアと鈴が同時に素っ頓狂な声を上げた。

何故鈴が声をあげたのかというと、実はほぼ同時に、一夏が唐揚げを箒の口に運んでる所を目撃したからなのだ。

「い、いいものだな」

「だろ？　本当に美味いよな、この唐揚げ！」

「唐揚げではないのだが……いいものだ」

一夏に食べさせてもらった事が相当嬉しく、箒の顔は綻んでいた。

「どうだ？」

「お、美味しいよ？」

「そうか、それは良かった」

（うわぁ、直人に食べさせてもらっちゃった……えへへ／／／／／／）

一方の紅葉も、直人に食べさせてもらった事が嬉しくて、若干悦に浸っていた。

それを横で悔しそうに鈴とセシリアが見つめる中、シャルルがこ

こで意図せずして爆弾を投下する。

「あ。これって、日本で恋人同士がやるっていう、「はい、あーん」ってやつなのかな？　仲睦まじいね」

「シャルル、それ今禁句」

「えっ？」

真白がそう言うが、時既に遅し。

「な、何でこいつらが仲いいのよ！」

「そうですわ！　やり直しを要求します！！」

先ほどの爆弾発言に、鈴とセシリアが食って掛かる。

すると、この原因を作ったシャルルが……

「それなら、皆おかずを一つずつ交換しようよ。食べさせあいっこなら良いでしょ？」

このシャルルの妥協案により、その後、屋上の一角で食べさせあいっこが始まったのだった。

余談だが、この食べさせあいっこの際、真白の弁当を食べた一夏とシャルルは絶賛し、箒はその味に驚愕し、鈴とセシリアは再びｏｒｚとなり、紅葉は「今度真白ちゃんに料理習おうかな？」と考えたのだった。

シャルルが転向してきた次の日。

「ええっと……今日も、嬉しいお知らせがあります。このクラスに、また新しいお友達が増えます」

教室に入ってきた山田先生は、新たにやって来た転校生を紹介する。

「ドイツからやって来ました、ラウラ・ボーデヴィッヒさんです」

その転校生、ラウラ・ボーデヴィッヒの姿に、一同は目を奪われていた。

身長はお世辞にも高いとはいえないが、顔は間違いなく美人の部

類に入り、長い銀髪が、よりそれを際立たせる。
だが、クラス一同の注目を引いているのは、彼女の左目を覆う眼帯だった。
この容姿に加え、二日連続の転校生という事で、あちこちで囁き声が聞える。

「挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

「（教官？）」

千冬の言葉に、ラウラは短く呟くが、その際に千冬の事を「教官」と呼んだ事に、一夏と直人が共に疑問を抱いた。
尤も、一夏はその疑問が口に出ていたが。
そんな中、一言で自己紹介を終えたラウラが、そのまま一夏の所にやってくる。
そして、何の迷いもなく、右手を一夏の顔目掛けて振る。

だが、その右手が一夏の頬に当たる寸前、その手は別の手に止められていた。

「……なんだ貴様」

邪魔された事にラウラは邪魔した人物を睨むが、その人物、直人は怒気を帯びた声で返す。

「なんだってのはこっちの台詞だ、いきなり初対面の相手を殴ろうとするなんてどういう了見だ？　それとも、ドイツでは人を殴るのが挨拶なのか？」

その怒気をはらんだ瞳に、教室に居る大半の生徒達は戦々恐々としていた。
その怒気は紛れもなく、クラス代表決定戦の時、一夏を笑った全員に、そしてセシリアに対して放ったそれと同じだった。
セシリアにいたっては、あの時の事を思い出したのか、顔が少し青ざめて震えていた。

しかし、そんな怒気を意にも介さず、ラウラは直人をまじまじと睨む。

「灰色の髪と瞳、つり上がった目つき……そうか、貴様が桜庭直人か！」

「何？　どうして俺の名を……」

知っていると聞こうとしたその時、ラウラに殴られた。
さっきと違って意識が向いていなかったため、防ぐ事もできず、そのまま受けてしまう。

「私は認めない。貴様があの人の弟だと、そして貴様があの人の一番弟子などと、認めるものか！」

一夏に、そして直人にそういった後、ラウラは自分の席に向う。

「おい！　ちょっと待……」

が、直人が殴られて、今度は一夏が黙っていなかった。
ラウラを呼び止め、文句を言おうとしたその瞬間……

教室全体が凍りついた。

「あれっ？　何か寒くない？」

「そうだね、さっきまで涼しかったのに？」

「せ、先生。ちょっとって言うか、かなり寒いです！」

「おかしいですね？　冷房が効きすぎているんでしょうか？」

突然の体感温度低下に、生徒達、そして山田先生が困惑する。

実際は教室の気温は全く下がっていないのだが、クラスに居るほぼ全員が凍えるような、氷点下の中に居るような寒さと冷たさを感じていた。

しかし、一夏と千冬、そして直人は、何故こうなったのか理解した。

そしてそれは、一夏と直人の後ろに居た。

「な……なんだ貴様！」

「……」

それは真白だった。

真白は、一夏が文句を言おうとラウラを呼び止めようとした瞬間、そのラウラを凄まじい怒気と殺気を込めた視線で睨みつけていた。

ラウラも強がって睨み返してはいるが、真白の視線はそんな強がりさえ吹き飛ばしてしまうほどの殺意をはらんでいた。

彼女の殺気に当てられたラウラは、まるで足が凍り付いているかのように動かなくなり、若干ながらそんな真白に恐怖さえ抱き始めていた。

もし、殺気というものが実体を持っていたら、ラウラは間違いなく穴ぼこか、原形も留めないほどに切り刻まれている事だろう。

それほど、彼女の放つ殺気は鋭く感じられた。

「真白、やめろ」

暫く沈黙が続いていたが、やがて直人が口を開いた。

「いや……」

だが、決してその殺意の視線をラウラから放そうとせず、普段なら素直に聞く直人の言葉を拒否する。

「みんなが困ってる」

「でも……」

「俺は大丈夫だ。だからもうやめろ。なっ」

尚も渋る真白に、子供をあやすかのように直人は説得する。

「……解った」

暫く黙っていたが、納得できない思いを持ちつつ、真白はラウラに送っていた殺気を込めた視線を引っ込める。

すると、教室の体感温度も通常に戻ったのだった。

そしてラウラも、動けるようになったと認識するや、早足で自分の席へ向かい、着くのだった。

この日、一年一組に暗黙のルールが出来上がった。

『風花真白を怒らすべからず』というルールが。

第十七話　新たな出会い　（銀の冷氷）（後書き）

桜爛の間

作者「と、言うわけで、実地演習とお昼、そしてラウラ登場の回でした」

直人「定時に更新できなかった事を、心よりお詫び申し上げます」

作者「さて、今回は後半に専ら力を入れました。如何だったでしょうか？」

直人「ボーデヴィッヒだったか？　あいつ、何であんなことしたのか知らんが、墓穴を掘ったな」

作者「確かに、教室全体を凍らせるほどの殺気って、自分で書いといてなんだけど、末恐ろしい子だな」

直人「はぁ、これから如何なっていくんだ？」

作者「さあ？　さて、それでは後書コーナー「直人の目安箱」！
今回も三月語様からいただきました！　まずはこちら！！」

1．奏的な感じで『ポ○モン』が実態・擬人化した時、どんなのがいいか？

1．セイバー（ＦＡＴＥの）的な感じの、『高貴』な性格のハブネーク

2．真白的な感じの『無口』な性格のピカチュウ（ツインテ）

3．幸俚のヴィルミナに代表される、『お嬢』な性格のキュウコン

なお、ここで選択された解答は、次回完全一致な物をお送りいたします

作者「『なお、ここで選択された解答は、次回完全一致な物をお送りいたします』だって」

直人「そうだなあ……真白みたいな感じなら、どう接すれば良いのかわかってるから、2かな？」

作者「との事です。では次！」

2．もし、突然真白が『明日結婚することになった』と言ったら？（のちにウソだと分かったとして）

直人「うーん……多分、驚きのあまり何度も聞きなおすと思うな。嘘だと解ったら脱力するかもな」

作者「怒らないのか？」

直人「怒る云々以前に、１３歳の子供に手を出そうという輩の感性

を疑うな。法律的な事は兎も角として、そいつは社会的に不味い気がするんだよ」

作者「ああ、何となく解るなあ。と、目安箱は今回はこれにて終わり。次は「抱腹絶倒！　アフレコ委員会です！！」」

直人「今回は誰が出てくるんだ？」

作者「えーっとだな……三月語様からのリクエストだ、まず一つは、『寸劇的なものでお願いします』だって。衣装も届いてる」

直人「なんだこりゃ？　って言うか、誰が着るんだ？」

作者「それは……この方たちだ！！」

真白「どうも……」

端午「やっほー！　おっひさー！！」

作者「と、言うわけで、今回は真白と、久々登場黄原端午です！」

直人「霞断月！！」

端午「ギャー！？」

作者「って、登場早々何してるんだ！！」

直人「放せ！　一度こいつを微塵に切り刻まないと気がすまん！！」

作者「ええーい落ち着かんかーーーーー！！！！」

暫くお待ち下さいｍ（＿＿）ｍ

作者「ふぅ、直人を何とか抑えた。さて、着替えも終わったようですし、やってもらいましょう！」

真白「・・・マスター・・・」

端午「ん？」

真白「ビィーム・・・、撃ってくれるかニャ・・・？」

端午「かしこまりニャーっ！！おぶぱっ！！」

作者「えーっと、『カーニバルファンタズム』のネコアルクとネコアルク・カオスだそうだ」

直人「確か、ホームページを見た限りでは、月姫とＦＡＴＥのキャラが登場するＯＶＡだったな」

作者「はい、自分、両方ともウィキで見た程度なので、よくは解っていませんが」

直人「だが、見事な人選だと俺は思うぞ？　こんなキャラ、端午にしかできん」

作者「ええ、我ながら何とネタにしやすいキャラを作ってしまった事だろうか。さて、次は君にやってもらうぞ、はい、衣装」

直人「こ、これを着れば良いのか？」

作者「そうだよ」

直人「わかった」

作者「終わったようなので、それでは始めたいと思います。どうぞ！！」

直人「交わらざりし命に、今もたらされん・・・刹那の奇跡、時を経て、ここに融合せし未来への胎動！　義聖剣！　僕は過去を断ち切る・・・散れ！真神煉獄刹！！」

作者「【テイルズオブデスティニー2】または、【テイルズオブザワールド　レディアントマイソロジー3】に登場する「ジューダス」の秘奥義連続コンボの台詞だ」

直人「奥義が『魔人滅殺闇』、秘奥義が『義憐聖霊斬』『真神煉獄刹』の二つだったな。だからこんな格好に仮面までつけてたのか、最後の最後で壊れたが」

作者「本場でもそうだったからね。でも自分似合ってたぞ？」

直人「そうか？　まあ、自分では柄じゃないって思ってるが」

作者「まあまあ。さて、今回はここまで」

直人「あっ、それと前回まで応募してた、肩武装案のアンケートについて、お詫びがあります」

作者「ええ、私、肩の武装案と明記してたので、誤解してた方も多かったと思いますが、正しく明記すると、左右のアンロックユニットの事でした」

直人「まったく、ちゃんと明記しないから、読者の方々にも迷惑をかけるんだ」

作者「はい、全くです。というわけで、私の説明不足の所為で、皆様に多大な御迷惑をおかけした事を、この場を借りて、お詫び申し上げます」

真白「でも、もう一つ報告があるよね？」

作者「はい、実は次の話から三週間使って、真白のＩＳの名前についてアンケートをとりたいと思います！」

直人「今からでも良いんじゃないか？」

作者「まあ、そうなんですけど、これから書くアニメ第六話分を書いて、次のアニメ第七話でお披露目しようと思ってるから、次の三話分でアンケートしようかと」

直人「成る程」

作者「と、言うわけで、明日この後書コーナーで、真白のＩＳの名前についてアンケートをとりたいと思います。読者の皆々様、こぞって御参加下さい！」

直人「んで、次はアニメの第六話に突入か。ボーデヴィッヒの事も

あるからな、少し不安だ」

作者「その事なんだけど。次回からの三話は、一夏に主点を置こうと思うんだ」

直人「何？　ってことは……」

作者「うん、君の出番を削るかもしれない」

真白「どうして？」

作者「いやさ、ちゃんとわけがあるんだよ。本当は主人公である君を出したいけど。今後の話しの展開を考えると、どうしても一夏に主点を置かないと書けないんだよ」

直人「まあ、何か事情があるならあまりとやかくは言わないが……大丈夫か？」

作者「やれるだけやってみます。それに今はどうかは知らないけど、前に「一夏の影が薄い」っていう感想をもらったからね。ここらで原作主人公として挽回させてあげようかと」

直人「まあ、とりあえず。一夏、しっかりやれよ」

作者「ま、それは兎も角として、早ければ、次のＩＳ更新で、この実家での執筆は一旦終了となります！　それでは、また次回でお会いしましょう！！」

作者「あれっ？　直人は？」

真白「あそこ……」

直人「弧月双閃！　真空破斬！　虎牙破斬！　紅蓮剣！　雷神剣！　鳳凰天駆！」

端午「おっと、よっと、あらよっと。ほらほら、如何したの～？」

直人「時雨蒼燕流、攻式三の型、遣らずの雨！」

端午「おっと危ない」

直人「唸れ！　鳴神！！」

端午「あらよっと♪」

直人「待ちやがれてめえ！　大人しく斬られろー！！」

端午「へっへー、悔しかったら当ててごらーん！！」

直人「やろーテメーぶっ殺ーす！！」

作者「うわー、ひょっとしたら直人が一番のネタキャラになってしまうかも」

真白「そうならないように気をつけてね？」

作者「誠心誠意を持って善処します。まともである彼のキャラを壊すのは、私も忍びないですからね」

第十八話　特訓模様（前書き）

今回はアニメ第六話目に突入。

まずは一夏の訓練模様。

そして後半、ラウラ登場により、アリーナに二次災害発生。

それと、後書コーナーの方で、今日からアンケートを取りたいと思います。

皆様、こぞって御応募ください。

第十八話　特訓模様

ラウラの行動に端を発した、「一組ブリザード事件」（命名：のほほんさん）から暫く経ち、ＩＳ学園は一応の落ち着きを見せ、平穏に生徒達は授業を受けていた。

まあ、平穏と言っても、学園に三人しかいない男子の存在で、十分慌ただしかったりするのだが、それでもそれを除けば、学園に問題らしい問題はなかった。

ラウラと真白の確執を除いては……

あの事件以降、ラウラが一夏と直人に敵意剥き出しなのは言うまでもない。

廊下ですれ違ったりする際は、必ずと言って良いほど敵意むき出しの視線を送るのだ。

しかし、それも一瞬の事だ。

直人と常日頃行動してる真白は両者と一緒に居る事が多いため、必然的に彼女と目を合わせる事も多く、目を合わせた瞬間、初めて

のときと同様、殺気の籠った視線を彼女に送り、周囲一体の体感温度を氷点下まで低下させる。

そしてその視線を感じるや、ラウラはそそくさと必ずその場を早足で去って行く。

それで済む話なのだが、何分これは二人が顔をあわせるたびに起こるので、一夏や直人を始め、巻き込まれた生徒の中には、「地獄を見た……」、「あれが阿修羅を凌駕するって奴なのね」、などとうわ言を呟きながら保健室に運ばれるものまでいたという。

そして土曜日、この日は午後は完全に解放されている為、多くの生徒が実習に利用している。

当然、一夏達も例外ではなく、今日もいつものメンバーで集まって一夏の特訓を行なっていたのだが……

「こう、ズバー！　っとやってから、ガキン！　ドカーン！　という感じだ！」

擬音ばかりの説明をする箒。

「何となく解るでしょ？　感覚よ感覚。　はぁ！？　何で解んないのよ馬鹿！」

考えるな、感じろ！　と言わんばかりの説明をする鈴。

「防御のときは、右半身を斜め上、前方に5度。回避の時は、後方へ２０度ですわ！」

そして理論重視の説明をするセシリア。

三者三様の説明を同時に聞かされている一夏の反応は。

「率直に言わせてもらう……全然解らん！」

三人の全く違う説明を一斉に聞かされているのだ。

聖徳太子ならいざ知らず、一夏の反応は至極当然のものだった。

「何故解らん！」

「ちゃんと聞きなさいよちゃんと！」

「もう一回説明して差し上げますわ！」

しかし、当の三人は自分たちの説明は全く問題ないと思ってるのか、また一斉に説明を再会する。

これの繰り返しだった。

「うーん、こりゃ徒手格闘が得意な三十後半の少佐でも読んだ方が良いんじゃないか？」

「寧ろ、魔弾の二つ名を持つ、二丁拳銃使いの金髪の副官のほうが……」

「いやいや、ここはやっぱり栗色の髪をサイドポニーにした、白い服の戦技教導官でしょ？」

その様子を見ていた直人、真白、紅葉の三人が、知っている人は知っていそうな三人を挙げつつ、同じ説明を繰り返す三人にあきれ返っていた。

「一夏、ちょっと相手してくれない？　白式と戦って見たいんだ」

とここで、一夏に声を掛けたのは、オレンジ色の専用機に身を包んだシャルルだった。

「シャルル！　解った」

無論、一夏も断る理由がないので、快く快諾する。

「というわけだから、また後でな」

そう言って三人から離れ、一夏とシャルルは模擬戦のため配置につく。

「あれって、ラファールか？」

「うん。色とか形とか大分変わってるけど、確かにラファールだね。カスタム機かな？」

シャルルの専用機を見て、直人と紅葉は、一目でラファールと見

抜いた。
確かに機体色、細部の形状などは異なっているが、それは間違いなく、学園でも使われている訓練用のＩＳ、「ラファール・リヴァイヴ」だった。

「直人ー、合図してくれない？」

「ん？　おお、解った」

とここで、シャルルから開始の合図をして欲しいと頼まれ、それを了承するや、手を挙げる。

「二人とも、準備はいいか？」

「おお」

「うん、いいよ」

「それじゃ……始め！」

合図すると、まず一夏が先制攻撃を仕掛けたところから始まった。
それをシャルルは左腕のシールドで防ぐ。

「あの馬鹿、また馬鹿正直に正面から突っ込みやがって」

一夏の動きを見て、直人は溜息を付きながらつぶやく。

白式の武装は雪片二型のみのため、攻撃するためには必然的に近づかなければならない。
しかし、先制攻撃とはいえ、正面から突っ込むのあまりよろしく

ない。
正面からであれば、防御するなり回避するなり、対処は十分可能だからだ。

「あっ、専用機と言えば……」

模擬戦の様子見てる途中、何か思い出したように真白の方を向く。

「真白ちゃん。あの人からもらったＩＳは如何したの？」

「ん？」

紅葉が聞いたのは、以前ＩＳ学園に現れて騒動を巻き起こした、あの黄原端午から受け取った真白の専用機の事だ。

と言うのも、専用機をもらったのだが、真白がそれを展開してる姿を見た事がないのだ。
この前の実習でも、一応専用機持ちにもかかわらず、直人の班でサポートをしていたのだ。

「まだ、初期化（フォーマット）と、最適化（フッティング）が、済んでないから」

「そうなの？」

「うん。今日、時間を見つけて、やろうと思う」

聞けば、機体の情報を確認していたり、一夏の特訓の為に改善点を調べてたりしてた為、初期化と最適化をする時間がなかったんだという。

しかし、そろそろ学年別トーナメントが迫っており、機体の稼動を見る為に、今日中に行なうとの事だ。

「おっ、二人とも飛び始めたぞ」

直人の言葉に二人が振り向くと、一夏とシャルルは空中に飛び出していた。

そしてシャルルが機関銃を呼び出し、それを一夏に向けて放っていた。

これに対し、一夏はその攻撃を防御していた。

「おいおい、こういうときは動き回ってかわすもんだろ。また馬鹿正直に防ぎやがって」

「当たらなければ如何という事はないのにねえ」

直人と紅葉の言葉は尤もだった。

マシンガンなど、連続で弾を発射するタイプは一発の威力が低い為、動き回っていれば当たってもそれほどのダメージはない。

だが、防御に徹しれば当然弾を全て受ける事になるため、必然的に受けるダメージも大きくなる。

次々と襲い掛かる弾丸に、一夏のシールドエネルギーはどんどん削られていく。

「こんのおおぉぉぉぉ！！」

これに対し、一夏も受けっぱなしではなく、どうにかシャルルに斬りかかる。

しかし、シャルルはこれをひらりとかわし、今度はアサルトライ

フルを呼び出し、一夏に向けて撃つ。
ところがこれを、一夏は再び防御の姿勢をとってこれを受ける。

「だから、どうしてそこで防御するんだ？　アサルトライフルはマシンガンより連射性能が低いんだから、動き回ればまず当たる事はないだろ！」

「なんていうか、一夏君って、言動も動きも本当に馬鹿正直だよねえ」

「うん」

そんな言葉の後、シャルルが何かを発射した。
見た限りでは、この前の実習で山田先生が、鈴とセシリアに向けて放った、グレネードランチャーと思われた。

「決ったな」

「決ったね」

「決った」

三人の言葉と同時に、一夏のいた場所で爆発が起こったのだった。

「つまりね、一夏が勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからなんだよ」

「うーん、一応解ってる心算なんだが……」

模擬戦の結果は、まあ言わずもがな、一夏の負けだ。
模擬戦終了後、何故が勝てないのか、その理由をシャルルから教わっていた。

「この白式って、後付武装（イコライザ）がないんだよね？」

「ああ、拡張領域（バススロット）が空いてないらしい」

白式の装備が雪片二型だけの最大の理由。
それは、先ほど言った拡張領域が空いてないため、後付武装が装備できないのだ。

拡張領域（バススロット）とは、先ほど言った後付武装（イコライザ）を装備する為の容量の事で、これがあれば、空いている容量分、後付武装を装備できるのだ。

「一夏、ちゃんと解ってるんだね」

「まあ、あの二つはわりかし早く覚えてたからな。何て教えたんだ？」

「えっ！？　ふ、普通だよ！　普通に教えたんだよ！　あは、あはは……」

直人に聞かれ、紅葉は何故か誤魔化すように言う。
それもそのはず、実際、一夏がまだ何も解ってなかった頃、紅葉がこの二つを何と説明したのかと言うと。

後付武装（イコライザ）の説明

「要するに、ロボットアニメでモブの機体がマシンガンだったりバズーカだったりを装備してる事あるでしょ？　要はああいうのと同じもの。まあ、有態に言えば普通に使われてる武器ってとこね」

拡張領域（バススロット）の説明

「これはね、パソコンとか、ＨＤＤの容量みたいなものね。パソコンは容量があれば色んなものをダウンロードしたりできるし、ＨＤＤも容量があれば録画を溜め込めるでしょ？　これも同じで、容量があいてる分だけ、この後付武装を量子変換（インストール）できるってわけ」

と、このようにたとえ話の交えてのものなので、真白とは違う意味で解り易かったというのは一夏談である。
しかし、こんな説明をしてたといえば、直人に呆れられるのは火を見るより明らかと思い、紅葉は一生懸命はぐらかしたのだった。

「多分だけど、それって単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）の方に容量使ってるからなんだよ」

「ワンオフ？」

「ＩＳが操縦者と最高状態になったとき、自然発生する能力。白式の場合は零落白夜がそれかな？」

「はっはーん。真白と紅葉もそうだけど、お前の説明ってわかりやすいな！」

それはさておき、シャルルは白式の拡張領が空いていない理由と、単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）の説明をする。
その際、シャルルの教え方の上手さに、一夏は絶賛する。

「ふん。私のアドバイスは聞かないくせに！」
「あんなに解り易く教えてやったのに！」
「私の理路整然とした説明に何の不満が！」
が、これに箒たちが不満を投げ掛ける。
彼女達にしてみれば、一所懸命に教えてるのに理解できないと言われたのに、シャルルに対してはこれなのだ。
不満を洩らすな、と言うほうがおかしいかもしれない。
だが、これに直人、真白、紅葉の三人は同じ事を思った。
（（（じゃあお前ら　（皆）は自分の説明で解るのか？）））
セシリアは理論的であるから、まだある程度できるだろう。
だが、箒と鈴は自分たちのやり方で解るのか、と甚だ疑問だ。
解るならそれはそれで問題な気がするが……
「でも零落白夜って、自分のシールドエネルギーまで攻撃に使う滅茶苦茶な能力だぜ」
「織斑先生が使ってたのと同じ能力だよね？」
「ああ。師匠もそれでモンド・グロッソ大会を優勝したそうだし」
そう、この零落白夜は、一夏の姉にして直人の師、織斑千冬が、現役時代使ってたＩＳと同じ能力なのだ。
「確かにシールドエネルギーを使っちゃうのは厄介だけど、シール

ドを無効化してエネルギーに直接ダメージを与えられるんだよ？十分反則だよ。っていうかこれで制限なかったらチートよチート！」

「いや、そこまで言わなくても……」

紅葉の力説に、一夏も直人たちもたじたじだった。

だが、紅葉の言う事も尤もだ。

シールドを無効化してダメージを与える。

絶対防御により搭乗者が死ぬ事はないが、シールドエネルギーを大きく削ぎ落とせるという点では、間違いなく、現段階最大の攻撃力をほこる事は疑いない。

「でも、姉弟だからって同じ能力になるなんて早々ないんだけどなあ……」

「そうだよねえ、何でだろ？」

シャルルの疑問に紅葉も同意し、他の皆（一夏を除く）も「そう言われれば……」的な顔になって考え込む。

「まあ、そこは開発者なりあの馬鹿なりに調べさせればいいだろ。今の課題は、一夏が射撃武装の特性を理解してないって事だろ？」

が、このまま話を続けていては何時まで経っても先にすすまないと思い、直人が話を戻す。

「あっ、そうだね。じゃあ一夏、ちょっと練習してみようか？」

直人の尤もな意見に同調するように、アリーナに降り立った一夏とシャルル。

射撃用の標的が出現すると、シャルルは自分が使ってたアサルトライフルを一夏に渡す。

「他の武器って、使えないんじゃなかったっけ？」

「普通はね。でも所有者がアンロックすれば、登録してる人全員に使えるんだよ」

説明を受け、納得した一夏はアサルトライフルを受け取る。

「構えはこうでいいのか？」

が、今の今まで雪片しか握った事がないため、いきなり不慣れな銃を握ってしどろもどろになる。

「えっと、脇を締めて。それと左手はこっち。解る？」

そんな一夏をシャルルが後ろから構え方を教える。

そうやって教えてもらいながら、一夏は出現した標的にライフルを撃つ。

「どう？」

「おお、なんていうか、あれだな。とりあえず、速いって感想だ」

一通り撃ち終えた後、一夏は率直な感想を伝える。

「真白、これ見て如何思う？」

「うん、初めてにしては、悪くないと思う」

その一方、一夏の射撃成績を見て、直人と真白はそう呟く。
多少逸れた所もあったが、サポートありとは言え、その成績は決して悪いとは言えない。

「直人もやってみねえか？」

「ん、俺か？」

とここで、一夏が直人に振ってきた。

「まあ、別にいいが」

「じゃあ貸してあげるよ」

「いや、これがあれば十分だ」

シャルルがアサルトライフルを直人に渡そうとするが、直人はそう言って、主武装である三日月宗近を見せる。

目の前に射撃用の標的が現れると、直人は宗近を両手に持ち、精神統一するように目を瞑り、息を整える。

「破っ！！」

そして大きく振りかぶり、かけ声と共に一気に振り下ろすと、エネルギーの刃が標的目掛けて飛んで行く。
命中したのは、百点の横、一夏と同じ７５点だった。

その後、現れた標的に同じ要領で放つが、最終結果は一夏と似た

り寄ったりだった。

「うーん、駄目だな。やっぱ距離をとっての攻撃は苦手だ」

乏しくない結果に、直人は乾いた笑いを浮べる。

尤も、これは常日頃から本人も公言してるし、シャルル以外のメンバーも、クラス対抗戦の時の、あの謎のＩＳ二機との戦闘以外はこのエネルギーの刃を使ったところは見たことない。

「って言うかあんた、それなら何でそんな機能つけてるのよ？」

「やっぱりさ、いくらなんでも近接オンリーは不味いだろうと思って、あの馬鹿に距離をとっても攻撃できるようにって提案したんだ。まあ、刀を飛ばしてるから、今にしてみればいらなかったかもな」

鈴からの質問に、直人は理由を説明する。

しかし、実際距離をとっての攻撃は、両肩の装甲に懸架されている四本の刀を飛ばして攻撃してるため、不要だったと、再び乾いた笑いを浮べる。

「ねえ、ちょっとあれ！」

すると、アリーナにいる女子達が騒がしくなっており、全員がピットの方を見上げている。

一夏達もその方向を見上げると、そこには、黒いＩＳをその身に纏ったラウラがそこにいた。

「嘘っ！　ドイツの第３世代型じゃない！！」

「まだ本国でトライアル段階って聞いたけど？」

女子達の囁き声が聞えるが、意にも介さず、ラウラは一夏達の方を睨む。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ……」

「あいつね！　いきなり一夏引っ叩こうとしたって奴は！！」

「……」

一方、セシリアと箒、そして話を聞いていた鈴は、ラウラに敵意をぶつける。

いきなり他者を殴る相手を快くは思わないだろう。

殴られたのが意中の男性ともなれば、尚更だ。

しかし、紅葉はそんな事より、隣の様子が心配だった。

そーっと視線を隣に移してみると、やはり真白が、殺気を帯びた瞳でラウラを睨んでいた。

彼女の周りに吹雪が吹き荒れ始めてるのが見えるのは気のせいだと、紅葉は全力でそう思いたかった。

「織斑一夏、桜庭直人」

「なんだよ？」

「ん？」

一方のラウラは、彼女達の視線を意にも介してない様子で、二人

に対し口を開く。
一方の二人も、あまりにも攻撃的な彼女にいつもと違う、反感を持った目で返す。

「貴様達も専用機持ちか。なら話は早い。私と戦え」

突然、二人に勝負を挑むラウラ。
それに対し、当の二人はと言うと。

「嫌だね、理由がねえよ」

「右に同じく、無益な戦いはしない主義だ」

「貴様らになくとも、私にはある」

二人は戦う理由がないと断るが、それで引き下がる彼女ではなかった。

「アホかお前は。貸切ならいざ知らず、他の生徒も使ってるんだ。こんな所でドンパチやらかしたら他にも被害が出るだろ。周りの迷惑考えろ」

「それに今じゃなくても、もう直ぐ学年別トーナメントがあるんだから、その時で……」

二人は至極真っ当な理由で、あくまで戦わない方針をとる。

このアリーナにいるのが三人なら兎も角、今は大勢の生徒も使っている。
こんな状況で戦えば、たとえ留意して戦ったとしても、巻き込ま

れる生徒が続出するのは明白だ。

それでなくても、もう直ぐ学年別トーナメントが行なわれる。その時に戦う機会が巡ってくだろうから、今ここで戦う必要性は何処にもない。

専用機持ちの中ではダントツで弱い一夏でも、一般生徒に後れを取るとは思えないし、直人は言わずもがなである。

「そうか、ならば……」

すると、ラウラはとんでもない行動に出た。

突如、右肩の非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）に装備されてるカノン砲を起動させ、一夏と直人に向けて発射した。

しかし放たれた弾丸は、一夏の方はシャルルが割って入り防御、直人の方は宗近で真っ二つに両断され、それが届く事はなかった。

「いきなり戦いを仕掛けてくるなんて、ドイツの人は随分沸点が低いんだね！」

「全くだ、頭の中までホクホクのジャガイモなんじゃないのか！」

いきなり攻撃を仕掛けてきラウラに、シャルルと直人は戦闘態勢をとる。

嫌だと言ってるのに言ってるのに、いきなり攻撃を仕掛けるよう相手にニコニコするほど、シャルルもお人好しではない。

「フランスの第2世代型ごときで、私の前に立ちはだかるとはな」

「未だに量産化の目処も立たない、ドイツの第3世代型よりは動けるだろうからね」

「何……！！」

シャルルの挑発に眉をひそめるが、突然、彼女が顔を横に逸らす。

刹那、彼女の顔の側を一発の弾丸が掠めた。

その方角を全員が追って行くと、そこには……。

「外した……」

いつの間にか、シャルルのアサルトライフルを手に取り、射撃の構えを取っている真白がそこにいた。

「あ、あれ？　何時の間に！？」

それを見て、自分の手元を確認してみると、いつの間にかなくなっていた自分のアサルトライフルに、先ほどのラウラへの怒気など吹っ飛び、素っ頓狂な声を上げる。

「貴様……丁度いい、あの時私に恥を掻かせてくれた礼に、先に貴様から始末してもいいんだぞ！」

「やれるならやればいい。今度こそ、頭を打ち抜く！」

双方只ならぬ殺気を出して、カノン砲とアサルトライフルを構える。

その周囲一体は、最早氷点下も越しているのではないかと言うほ

ど、凄まじい冷気が吹きすさんでるようだった。

ちなみに普段と違い、ラウラは真白の殺気に立ちすくんではいなかった。

それほど怒りに震えているのか、はては真白が生身なのに対し、自分がＩＳを展開してる事に優位性を実感しているからなのか。

いずれにせよ、二人は一歩も引かぬ様子で構えを解かない。

「おい、ボーデヴィッヒ」

そんな中、今にも発砲しだしそうな雰囲気の中、突如ラウラを呼ぶ声がする。

ラウラが振り向き、他の皆もその声の方向を振り向くと、そこには、真白と似たり寄ったりの殺気を出しながら、両肩の刀を浮遊させている、直人がそこにいた。

「てめえが俺たちを如何思おうが、そんな事は知ったこっちゃない。認めないというなら、未来永劫そうしてればいい」

淡々と、しかし、怒気強く呟き続ける。

「だが、お前が一夏を、真白を、俺の守ろうとするものを傷付けたりしてみろ……」

「そのごついＩＳごと潰すぞ！！」

肩に装備されてる刀の一本、鬼丸を手に取り、ラウラに切っ先を向けながら放った直人の一言は、その場に居た全員に、恐怖と戦慄を覚えさせた。

その後、この騒動は、監視していた管制官がラウラたちを注意した事で一応の決着を見た。

だが、この時の直人の姿を見て、一夏と箒は恐怖で表情も体も固まり、紅葉と鈴とセシリアは今にも泣き出しそうな顔で互いに抱締めあいながらガタガタ振るえ、シャルルも同様に恐怖のあまり泣き出したい思いだった。

そして、アリーナにいた生徒の9割が、ラウラと真白の絶対零度空間に晒された上に、直人のピリピリどころか突き刺さらんばかりの殺気にあてがわれ、気絶。

保健室はてんてこ舞いとなり、意識を取り戻した生徒たちも……。

「鬼が、鬼が……」

「か、体が、動かない……」

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ……」

と、うわ言を呟きながらガタガタ震える始末で、保健室の先生も、事情を聞こうとした山田先生以下数人の教師たちも、事情を聞くの

は困難を極めたという。

第十八話　特訓模様（後書き）

桜爛の間

作者「恐ろしや恐ろしや……」

直人「おい、今回から一夏主点になるんじゃないのか？　これだといつもと変わってないようだが？」

作者「それはこの次の後半あたりになると思います。今回はシャルルを交えての特訓風景を書きました」

直人「まあ、ここなら俺が排される要素は無さそうだしな」

作者「それでは、後書コーナーに移りましょう。今回は目安箱だけです！　応募者はお馴染み、三月語様からです！　まずは一つ目」

Q1．今まで恐怖を感じたことがあるか？あるとしたらそれは何か？（奏的にはセシリアの料理とオリヴィエの料理、銀化した真琴、とのこと）

直人「恐怖を感じた事か……あるぞ？」

作者「あるのか！？」

直人「俺だって人間だ、恐怖を覚える事ぐらいあるさ」

作者「まあ、そりゃあそうだろうけど。それで？」

直人「小さい頃、まだ箒が転校する前の話なんだが。あるとき、まあ、当時いつもの事なんだが、束さんが師匠にいつもの如く悪戯を仕掛けたんだ。

作者「ああ、あの人ならやりそう。それで？」

直人「その悪戯がまた非情にどうしようもなくてな、いつも被害に遭って拳骨一発で済ませてた師匠も流石に堪忍袋の緒が切れてな、木刀片手に束さんに制裁を下したんだ」

作者「マジっスか！？　いや、それならいつもの事じゃ」

直人「いや、さっき言っただろ、拳骨一発で済ませてたって。その時は凄かったぞ。木刀で何度も何度も叩いて、逃げようとするや顔面にアイアンクローをブチかまして、挙句にボディブローまでかましてたからな」

作者「……」

直人「その時の表情とその行動は今でも覚えてる、って言うか思い出したくない。ちなみにその時一緒に見てた一夏は、師匠のあまりの変わり様に顔が涙と鼻水でぐしゃぐしゃになってて、いつもはしっかりしろと叱咤してた箒もそれを咎めず、一夏を一生懸命慰めていたぞ」

作者「お、恐ろしい一面を垣間見てしまった気がする。つ、次！！」

Q2．奏を見て、見習いたい点・見習いたくない点はどこか

直人「見習いたい点は頭がいい事と、真剣に取り組める事、見習いたくない点は特にないな」

作者「奏が真剣に取り組んでる所ってあったっけ？」

直人「ルシエラと模擬戦する事になったとき、真剣に取り組んでたじゃないか？」

作者「ああ、あの時ね。んで、見習いたくない点がないという事については？」

直人「あいつにそう言うところなんてないだろ？」

作者「まあ、ゲーマーである事がよほどのマイナス点になるとは思えないしな。じゃあ次は、真白に答えて貰います」

真白「うん、わかった」

Q3．真白に質問、ＩＳ熾天使のメンバー（奏含む）で髪の毛を梳いてみたいのは？

真白「奏と、ルティアと、エリィと、オリヴィエと、沙霧と、ロロット」

直人「どうしてだ？」

真白「ルティアと沙霧は、単純に髪質が良さそうだから。他の四人は、ちゃんとした手入れして無さそうだから」

作者「いやー、オリヴィエはちゃんとやってそうだけどなあ」

真白「そうかな？」

作者「ま、そう思ったならそれでいいけどね。さて、今回はアフレコ委員会はお休みです。目安箱と共に、皆様の御応募、お待ちしております」

直人「んで、ここからが本題だな」

作者「おお！　先週の話で放したとおり、この後書コーナー「桜爛の間」で、真白のＩＳの名称を決めるアンケートを取りたいと思います！　候補は次のとおりです」

候補その一：『Ｓｃｈｎｅｅｗｉｔｔｃｈｅｎ（シュネーヴィットヒェン）』（ドイツ語で白雪姫）

候補その二：『雪那（せつな）』

候補その三：『雪颯（ゆきはやて）』

候補その四：『弾丸の吹雪（ブリザード・バレット）』

候補その五：『白き流星（ヴァイス・メテオーア）』

作者「以上の五つです。この中から、真白に似合うと思う名前に一票を投じてください」

直人「投票締め切りは二週間後だから、９月２８日の１１時まで。今すぐ投票するもよし、ゆっくり時間をかけて選んでもオッケーだ」

作者「ここで真白のＩＳについて、少し紹介しておこうと思います」

・射撃戦主体

・基礎カラーは白

・アンロック・ユニットに機能あり

作者「と、こんな感じです。詳しい詳細は、本編での登場時と、いずれまたキャラ・ＩＳ紹介をする時にお伝えします」

直人「って言うか、アンロックユニットに機能ありってなんだ？」

作者「詳細はいえないけど、何か全員のＩＳ見てるとさ、セシリアとか鈴のは兎も角として、ラウラのＩＳのアンロックユニットって、何か機能があるようには見えないんだよ。なんていうか、あのレールカノン砲を装備する為みたいな印象があるんだよ」

直人「まあ、一夏の白式も、見た限りスラスターっぽいけど」

作者「ま、それは兎も角として、皆様の票を、お待ちしております。次回、シャルルのとんでもない秘密が明かされる！！」

直人「なんだ、その秘密って！」

作者「それはまだ秘密。あっ、それと次回の後半あたりから、一夏の方に主点を置きたいと思ってます。なので君の出番は次のアニメ分まで待ってね。

直人「まあ、別にいいが……気になるなあ」

作者「と、言うわけで、次回も楽しみに待っててくださーい！！」

第十九話　真剣の過去（前書き）

えー、皆様にお詫びしなければならないことがあります。

先週の話にも話した通り、アニメ第六話分は直人の出番を減らし、一夏の出番を増やす予定でしたが。

その予定を変更し、一夏の出番は次の話にしたいと思います。

そして今回の話はタイトルを見ていただければ、どういう内容か解るかと。

第十九話　真剣の過去

「すまん皆、迷惑をかけた」

「御免なさい……」

アリーナを出て皆で集合した直後、直人と真白が謝ってきた。

理由は単純、アリーナでのラウラとの衝突の時の事だ。

あの後、管制官に注意されたことで、「興が冷めた」と言って、ラウラはアリーナの中へ消えて行った。

だが、真白と直人の殺気に当てられたアリーナを使用していた生徒たちの大半が気絶し、保健室へ搬送される事態になった。

その後冷静になったところへ、山田先生から何があったのか事情聴取を受けたことで、完全に頭が冷めた二人は、その被害を被ったであろう一夏達に謝罪したのだ。

本来なら、保健室に運ばれた全員に謝罪するべきだろうが、保健室は阿鼻叫喚の事態になっていてそんな余裕はない上に、やっていてはきりがないので、まず彼らから謝ったというわけだ。

「いや、別に気にしてねえよ。な、箒」

「ああ。お前は昔からそうだからな」

「そう言ってもらえると助かる……と言いたいところだが、あそこの三人を見てると、とてもそうは言えないな」

直人の視線の先には、いまだに顔を青ざめて震えている、紅葉、セシリア、鈴の姿があった。
幸い、暫くしてどうにか復活はしたが、やはりアリーナの時の二人の殺気の恐怖が未だに拭えないのか、明らかにその顔には恐怖が浮かび上がっていた。

「三人とも、本当にすまん」

「い、いや……良いんだよ別に」

「そ、そうですわ！　直人さんの怖さは、身に染みて存じておりますし……」

「あ、あれくらいで怖がるほど、アタシは肝が小さくないわよ！　だから心配しなくていいの！」

紅葉とセシリアは必死に気を遣い、鈴は虚勢にもならない虚勢を張っている。
まあ、明らかにおびえているのが目に見えているので、直人はあまり正直に受け止められなかった。

「シャルル、御免。勝手にライフル、使っちゃって」

「い、良いんだよ。それにしてもすごいね。生身で撃つなんて」

真白の謝罪にシャルルは事もなさそうに言い、その一方で、真白が生身でアサルトライフルを撃ったことに素直に感心していた。

「真白は銃火器の扱いが得意なんだ。銃に掛かりゃあ対物ライフルだろうがＩＳのライフルだろうが、何でも使えるぞ」

「そういや。あの人がやってきた時も、すげえ命中率だったよな」

一夏は端午襲来のときの事を思い出していた。

あの時も、一夏達に襲い掛かる罠の数々を、手にした拳銃でものの見事に撃ち落していたのだ。

「それはそうと直人。何故あそこまであいつに敵意をむき出しにしていた。あれではまるで……」

「箒」

箒が何か言おうとしたとき、直人はそれを止めた。

「それ以上は言わないでくれ」

「しかし……」

「解ってるんだ、自分でも。でもな、なぜかあいつを見てると虫唾が走るんだ。どういう訳かな」

そう言うと、直人はそのままその場を去っていった。

「あっ、直人！」

そしてその後を、一夏は追いかけていくのだった。

「なあ、直人。今のどういう意味だよ？」

一夏は直人の言葉の真意を確かめながら、ともに寮への道のりについていた。

「どういう意味って？」

「ラウラって奴の事だよ！　あいつを見ると虫唾が走るって、どういう意味だよ！」

「そのまんまの意味だよ。なんでか知らないけど、あいつを見てると凄くいらいらするんだよ」

「どうしてだよ？」

「俺が知りたいよ」

一夏は納得出来なかったが、当の直人もそうとしか答えられなかった。

実際、直人もどうしてラウラの事でここまでイライラするのか解らず、尚更それでイライラする負の連鎖に陥っていた。

一夏も納得できなかったが、直人の言葉からいらいらしてる感じがわかり、それ以上は追及しなかった。

「それはそうと一夏。ボーデヴィッヒがあそこまで俺達を敵視するのに、何か心当たりはあるか？」

「……ああ」

いらいらしてる自分の気分を変えるため、直人は一夏に、ラウラがどうして自分たちを敵視するのか、心当たりを聞く。

別に本気で当てにしてるわけではなかったが、一夏が肯定の言葉を口にしたため、驚く。

「あるのか？」

「お前はどうしてか解らねえけど。俺の場合、多分……」

「……！！　一夏！」

一夏が理由を言おうとしたその時、直とは何かに気付き、一夏と共に近くの木と茂みに隠れる。

「何だよ直人！」

「あれっ」

直人が指差したその方向には、千冬とラウラがいた。

「何だあれ？」

「何か言い争ってるようだが……」

しばらく二人はその様子を見守っていたが、程なくしてラウラはその場を去っていった。
何があったのか二人はしばらくその場を見つめていたが。

「……そこの男子二人。盗み聞きか？　異常性癖は感心しないぞ」

気づいていたらしく、千冬に呼ばれ二人はぎょっとする。

「な、何でそうなるんだよ千冬姉！」

「学校では織斑先生と呼べ」

異常性癖という言葉に一夏が激しく抗議するが、すぐさま一蹴される。
直人の方も意見したかったが、一夏が先に言ってしまったため機会をなくした。

「下らんことをしている暇があったら、自主訓練でもしろ。このままだと月末のトーナメントで、初戦敗退だぞ」

「解ってるって！」

「桜庭。お前はアリーナで大勢の生徒を保健室送りにした罰として、反省文５０枚を用意しておく、後で来い」

「承知しました」

「なら良い」

それだけ言い残すと、千冬はそのまま立ち去ろうとする。

「なあ！　待ってくれ！」

ところが、その千冬を一夏が呼び止める。

「さっきの、ラウラって奴が言ってた、俺の事……」

「？？」

「千冬姉の弟とは認めないって。あれってやっぱり、俺の所為で千冬姉が、二度目の優勝を逃した事と……」

「終わった事だ。お前が気に病む必要は無い」

一夏の問いかけに、千冬はただそう言う。

直人も何のことかはじめ解らなかったが、話を聞いてる最中で、何の事か解っていた。

そしてそのまま、再び千冬は振り返りもせずに歩いていくのだった。

「一夏」

「ん？」

「それって、お前の誘拐事件の事か？」

「……やっぱ知ってたんだな」

「ああ、どこぞの馬鹿がドイツ軍のメインコンピューターにハッキ

ングしたお蔭でな」

それは、ある意味二人にとって忌むべき事件だった。

第2回モンド・グロッソ大会、まあ当然と言えば当然だが、千冬はその時も決勝戦に上り詰めた。

だが、決勝戦当日の日、一夏が何者かによって誘拐されたというのだ。

どこの組織がやったのかも解らず、謎の多い事件ではあったが、結果から言えば、ＩＳを纏った千冬が決勝戦を放棄し、一夏を救出したことで事件は解決、一夏も怪我はなかった。

だがこれにより、連勝確実と言われた千冬は不戦敗となり、かなり話題となったのだ。

そしてこの事件の際、一夏の軟禁場所に関する情報をドイツが提供し、その見返りとして千冬は、一年間、ドイツＩＳ部隊に教官として赴任したという。

「全部……俺の不甲斐無さの所為なんだよな」

「一夏……」

事件の当事者、そして彼女が二連覇を逃した原因と自覚してるだけに、一夏はひどく思いつめてる様子だった。

「一夏、不甲斐無いのは俺も同じだ」

「だって、俺が誘拐されたのは中学の事だぜ？　その時お前は……」

「いや、知ってたんだ。お前が誘拐されたこと」

「えっ？」

突然の直人のカミングアウトに、一夏も驚きの声を隠せない。

「あの馬鹿、端午がその情報を寄越してな。俺はすぐにでも助けに行きたかったんだ。だけど、その時真白と別で一緒にいた奴に「頭冷やせ」って気絶させられて。気が付いたら、師匠がお前を助けたって」

「……」

「俺の方がよっぽど不甲斐無いよ。お前を守るって誓っておきながら、いざお前の身に危険が起きたらこの体たらくだったんだから」

「直人……」

慰めでもない、正直な気持ちを打ち明け、愁いを帯びた顔をする直人に、一夏はそれ以上何も言えず、唯二人で暫く、その場に立ち止まっていたのだった。

「ねえ、箒さん」

「何だ？」

「直人って、昔どんなだったの？」

一方、ここは食堂。

そこで紅葉は、箒に昔の直人について聞いていた。

鈴とセシリアはまだ来ておらず、真白は現在、自分の専用機の初期化と最適化の為に席を外している。

「何故そんなことを聞く？」

紅葉の質問の意図が解らず、箒は紅葉に聞き返す。

「いやね、直人がボーデヴィッヒさんを見ると虫唾が走るって理由、もしかしたら、その辺りに関係してるのかなって」

「何故そこでそう結びつくんだ？」

箒には全く解らなかった。

直人のいらいらと直人の過去、それが何を意味し、どう結び付くのか、今の説明では見当がつかなかった。

「昔から、似てる二人は喧嘩するって言うでしょ？　同族嫌悪って言うのかな？　それにあの時の直人、ボーデヴィッヒさんと同じ気がしたんだよ。人を寄せ付けない何かがあるって感じ」

「……」

「ねえ？　実際どうだったの？」

紅葉の理由を聞いて、箒はそのまま沈黙した。

確かにあのとき、直人の瞳はラウラのそれと同等、いや、それ以上の冷たいものだと感じた。

彼が発していた殺気は、氷のように冷たく、それでいて、ナイフなどの凶器のように鋭かった。

紅葉自身、そう感じており、それはまるで、氷のように冷たいラウラのそれと同じに感じ得たのだ。

「……実際のところ、私と直人は、始めはあまり仲が良くなかった」

「そうなの？」

「と言うより、前の直人が、あまり一夏と千冬さん以外の人を寄せ付けなかった感じでな。一夏といつも一緒にはいたが、誰も自分に近寄らせようとはしなかった。お前の言った通りにな」

しばしの沈黙の後、箒は過去の自分と直人の関係を語り始める。

日本人でありながら、灰色掛かった銀髪に灰色の瞳、その容姿だけで人からは奇異の目に見られていたが、それ以上に、直人の醸し出していた雰囲気が、何より周りに近寄りがたい印象を与えていたそうだ。

「だから家の道場等で顔を合わせても、会話を交わすことはなかった。喧嘩に発展することはなかったが、それでも、あいつとは仲がいいとは言えなかった」

「でも、どうしてなの？」

紅葉の疑問も尤もだった。

箒の話を額面通りに受け取れば、直人は小学校の頃はかなり冷たかったことになる。

だが、子供でそんな雰囲気を出していたという事は、よほどのことがあったという事ではないだろうか？

その辺りが疑問だった。

「これは、一夏から聞いた話なんだが……」

箒が言うところによると、一夏は直人に、もっと多くの人と仲良くしてほしかった。

だが、あまりにも周りと馴染めてない直人を心配し、一夏は尤も自分に近かった幼馴染の箒に、直人についての事を教えたとのことだ。

そしてその原因は、これから話す、彼の過去にかかわっていた。

「直人は、孤児だったそうだ」

「えっ、孤児？」

「ああ。物心ついた時から孤児院にいて、一夏と出会うまではそこに居たそうだ」

箒によって語られる、直人の過去。

直人は小さいころから孤児院にいた。

親の顔は覚えたおらず、物心ついた時から孤児院に入れられており、そこでしばらくは暮らしていた。

「だが、人づきあいが悪かったうえに、髪と目の所為で、大分いじめを受けていたそうだ。だが、本人はそれを孤児院の従業員に打ち明けず、それに耐えていたそうだ」

「なんで？」

「自分の親が戻ってくると思っていたのか、それとも、相手にする気がなかったのか。いずれにせよ、そんな日々が続いていた」

聞くだけでも哀れとしか言いようのない事ばかりだった。

親の顔を知らず、誰とも仲良くなれず、あまつさえいじめにも合う。

自分だったら絶対に耐えられないだろうなあ、と、紅葉は考えていた。

「だがあるとき、いじめをしてくる子供の一人を、とうとう我慢の限界に来たのか、殴ってしまったそうだ」

「いや、まあ。我慢してれば爆発もするでしょ」

「ああ。その後、事情をよく知らない孤児院の従業員は直人に注意し、その時はそれで収まった。だがその後も、直人に対するいじめは続き、直人が手を上げるたびに、事態も直人もひどくなっていったそうだ」

「どういう事？」

事態が悪くなるというのは何となくわかる。

だが、直人もひどくなっていったというのは、どういう事だろうか？

疑問符を浮かべる紅葉に、箒は事の次第を話す。

「手を上げるたびに職員に注意され、始めは周りも黙っていたそうだが、次第に周りも直人を責めはじめた」

「まあ、理由がどうあれ、手をあげちゃったわけだからね」

「だが、その所為で直人は周りが敵に見えてきたそうで、次第に自分を責める奴らに手を上げるようになり、終いには大人にまで手を上げる相当の問題児になってしまっていった」

「……」

話を聞いて、紅葉は愕然としていた。

「だが、そんなある日、うわさを聞き付けた千冬さんと一夏が、その孤児院を訪れた」

「なんでまた？」

「それは解らない。だが、一夏達が見た時の直人は、今とは全く正反対だったそうだ」

「それって、つまり……」

何となく察しがついた紅葉だったが、その言葉を紡ぐ前に、箒は再び語りだした。

「ああ、あのラウラと同じように、冷たく、近づくものすべてが敵と言った感じだったそうだ」

「……」

やはりと言うべきか、その答えに沈黙するしかなかった。

だが、次の言葉には驚きを隠せなかった。

「そして、二人を見るやいなや、一夏の方に襲い掛かって来たそうだ」

「嘘！？」

「嘘などつくものか。一夏もその時は、ヒヤッとしたと言ってたからな」

今では実の兄弟同然に仲のいいあの二人にそんなことがあったなどと、紅葉は予想だにしていなかった。

それだけに、そんなことがあったのかと、驚きを隠せないでいた。

「だが、一夏に襲い掛かった直人を、千冬さんが拳一発で黙らせたそうだ」

「うわあ……」

一夏に襲い掛かる直人を、腕一本で鎮める千冬の姿を容易に想像でき、紅葉は冷や汗を垂らしながら苦笑する。

「その後、話を聞くために千冬さんはその場を離れ、一夏と直人は二人だけになった」

「それで？」

「しばらくは沈黙が続いていたそうだが、程なくして、直人が泣き始めたそうだ」

「あー、やっぱり痛かったんだ」

「違う」

千冬に殴られた傷が痛かったんだろうという紅葉の答えは箒に否定された。

「一夏によれば、その時の直人は痛みより、自分を救ってくれないことに泣いていたらしい。口々に、「どうして誰も助けてくれないんだ」って、悲痛な声で叫びながら泣いていたらしい」

「……それ、何となくだけど、解るなあ」

思うところがあるのか、紅葉はそう呟く。

「それで、泣いている直人を、一夏が介抱、と言うのも変だが、取り敢えず労わってやったんだ。それが、二人のなれ初めだそうだ」

「ああ、話の流れ的に何となくそんな感じかなって思ってたけど、やっぱり一夏君は優しいね」

「馬鹿なだけだ」

そんな感じに、箒と紅葉は会話を交わす。

「それで、一夏君が千冬さんに、直人を引き取ってほしいとお願い

して、妙に弟に甘い千冬さんは、それをしぶしぶ承諾、以後、織斑家に一人家族が増えたと、そんなとこ？」

「まあ、そんなところだろう。それで、これで何故直人が、あいつに突っかかってるのか、解ったか？」

「まあね」

直人の過去を話し終わった箒は、紅葉に問い尋ねる。

「やっぱりさ、ボーデヴィッヒさんを見て、昔の自分を見てる感じがしてるんじゃないかな？　それで虫唾が走ってると思うんだよ」

「確かに、直人は昔の自分を恥じているようだったからな」

「はあ、解ったのは良いけど、これ、確実にまだ波乱がありそうだよねえ」

「無いことを祈りたいがな……」

あってほしくないと願いながら答える箒だったが、この紅葉の言った一言が後に的中することを、二人はまだ知らなかった。

第十九話　真剣の過去（後書き）

桜爛の間

作者「やばい、後半滅茶苦茶になった感が」

直人「詰め込み過ぎだ」

作者「しかも今回はまた路線変更があったわけだからな、尚更だ」

直人「全く。少しは計画して書け」

作者「すいません。んで、今回は当初の予定を変更し、直人の過去を箒に暴露してもらいました」

直人「と言っても、紅葉に話しただけだがな。しかし作者、何で箒に語らせたんだ」

作者「正直、君の過去を知る人物は三人しかいない。その中で、一番話しそうな人物を消去法で選んだ結果こうなった」

直人「まあそれでも、箒は他人の過去とか秘密をあまりべらべらしゃべらないと思うがな」

作者「ああ、こりゃ今まで書いた中で一番拙いかも」

直人「これに懲りたら、今度からもっと考えて書け」

作者「はい。さて、後書きコーナー「直人の目安箱」、今回も三月語様のところから、エリィが質問を送ってきました！　まずはこちら！」

1．今まで見てきた他の作者さんの所で『これは無いわー』と思った出来事は？（ＩＳ作品に限る）

直人「これ……素直に答えていいのか？」

作者「うーん。いろいろ不味い気がするが、もらった以上はお答えせねば……」

直人「だよな。えーっとだな、【ＩＳ～インフィニット・ストラトス～　不屈の翼】と言う作品に出てくるオリジナルキャラ、夕暮太陽の人外っぷりは無いと思ったぞ」

作者「ああ、納得できる」

直人「特に、『鮮血の陽光（ブラッディサンライト）』と呼ばれる状態の彼女は、末恐ろしいと思ったな」

作者「人にはできないようなことを平然とやってますからねえ。気になったらご覧になってください。ほんじゃ次！」

2．女性陣限定、上記と同じ条件で『〇〇のこの行動が羨ましい』と思ったその行動は何か？

作者「という事で、今回は真白、紅葉、箒、セシリア、鈴の五人に来ていただきました。それでは一人ずつ答えちゃってください」

真白「私は、これって言うのが思い浮かばない……」

紅葉「そうだねえ。【ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉＋ＯＮＥ】の主人公、神薙火蓮（かんなぎかれん）さんかな。スタイルも良いし、良い性格もしてるし、女性として憧れるなあ、ああいうお姉さん」

箒「私は、そうだな……【ＩＳ　四神の少女達】の、東野辰美（あずまやたつみ）だな。武術を収めていて、その腕も凄いが、力をふるう事のなんたるかをわかってるようだからな」

セシリア「【ＩＳ－インフィニット・ストラトスー　熾天使を駆る少年】の沙霧さんですわね。あの積極さが、すこし羨ましいです。少々行き過ぎてるのが玉に傷ですが」

鈴「あたしも真白と同じね、特にこれと言ったやつはいないわ」

作者「とのことです。それじゃ次！」

3．真白に質問、恋をしたいと思うなら、どんなタイプがいい？詳しくよろしく！！

真白「えっと……考えたことない」

作者「直球ですね」

直人「何となくでいいんだぞ？　お前がこういうのが良いって言うのを言えば」

真白「……直人みたいに、優しくて、強くて、何でも受け入れてくれる人」

作者「慕われてますねえ」

直人「ああ、まあな」

作者「さて、次の質問に入る前に、直人にはいったん退場してもらいましょう」

直人「何故？」

作者「良いから良いから。さて、じゃ次の質問！」

4．紅葉に質問、今自分が一番想いを寄せている人物に対して一番言いたい事は？この際はっきり言っちまえ！！

作者「だそうです」

紅葉「えっとね……直人ー。一夏君の唐変木で呆れてるけど、人の事言えた義理じゃないからねー！」

作者「……すっきりした？」

紅葉「まあね。あたし、直人に特にこれと言って不満は今のところないし」

作者「そうですか。さて、先週から、真白のＩＳの名前に関するアンケートを行っています。候補はこちら」

『Ｓｃｈｎｅｅｗｉｔｔｃｈｅｎ（シュネーヴィットヒェン）』（ドイツ語で白雪姫）

『雪那（せつな）』

『雪颯（ゆきはやて）』

『弾丸の吹雪（ブリザード・バレット）』

『白き流星（ヴァイス・メテオーア）』

作者「以上五つです。現在、『Ｓｃｈｎｅｅｗｉｔｔｃｈｅｎ（シュネーヴィットヒェン）』に一票入っております。締め切りは、９月２８日の、夜１１時までです。皆様のご投票、お待ちしております！」

直人「それと、後書きコーナーの質問とアフレコも募集しています。特にアフレコは最近来ていないので、投稿してもらえるとありがたいです。さて、次回は？」

作者「次回こそ正真正銘！　一夏主役の話、ついに、あの子の秘密が明かされます！　皆さん。お楽しみに！！」

ユニーク数１０，０００突破記念コラボ　桜の真剣と白き姫君と一角の少年の珍

遅くなりましたが、ユニーク数、１０，０００突破記念です。

今回は、楚良様の作品【ＩＳ　一角と少年】とのコラボです。

過去の話ではありますが、ある登場人物が、本編に先駆けて登場してしまいますが、それが許せないという方は、何卒お許しください。

それでは、どうぞ楽しんでいってください。

ユニーク数１０，０００突破記念コラボ　桜の真剣と白き姫君と一角の少年の珍

一期一会

一生に一度の出会いや機会という意味のことわざである。

もとは茶道に由来する言葉で、「あなたとこうして出会っているこの時間は、二度と巡っては来ないたった一度きりのものです。だから、この一瞬を大切に思い、今出来る最高のおもてなしをしましょう」という意味が込められた言葉である。

世の中、この一期一会という事はかなりある。

たった一度の出会い、また会えるかもしれないし、もう二度と会えないかもしれない。

だからこそ、偶然だろうが必然だろうが、人と人との出会いは大切にしていかなければならないのだろう。

そしてこれから話すお話も、ひょっとしたらまた会えるかもしれない……でももう二度と会えないかもしれない……そんな出会いが生み出した物語。

これは桜庭直人が、ＩＳ学園に入る前のお話。

「ふぅ、やっとついた」

「うん……」

灰色掛かった銀髪と瞳をした少年、桜庭直人と、彼の後ろをついてく、透き通るような白い髪をした少女、風花真白は、お互いにそ

う呟く。

直人はとある事情により、故郷である日本を離れ、世界中を旅して回っており、かれこれ二年近くたつ。

真白はその旅の途中で出会った少女で、始めは直人に対しても無表情だったが、今では普段は無表情だが、直人の言う事には受け答えし、僅かながら笑ったりするなど、年頃の女の子らしい一面を見せるようにもなっていた。

そして二人は今、ヨーロッパ主要国の一つ、フランスに来ていた。

「さて、まずは宿探しでもするか、と言いたいところだが……」

何はともあれ、まずは宿泊先を探そうというきわめて建設的な意見を言って、いざその行動を始めようとするが。

この時、二人はある問題を抱えていた。

「この国のお金、ない……」

「そうなんだよなあ」

そう、この二人はフランスの通貨を持ってない。

なのでどうにかしなければ、宿泊どころか、今夜はフランスの町で野宿という事にもなりかねない。

野宿は別に今に始まった事ではないが、なるべく町ではそれは避けたかった。

「適度にバイトでも探して稼ぐか」

「うん」

とりあえず尤も建設的というか、真っ当な方法を選び、二人は歩き始めるのだった。

しかし、早々都合よく仕事など見つかる筈もなく、二人はかれこれ数時間町を彷徨っていた。

「如何したもんかなあ……」

公園の一角に腰を下ろし、直人は困った顔をする。

仕事がなければ金は手に入らない、金が手に入らなければ宿はとれない。

既に公園の時計は１０時を指していた。

「いっその事何処かの家に、『今晩泊めてもらえませんか？』って頼み込もうか？」

「望み薄、だと思う……」

「解ってる、解ってて無い物ねだりで言っただけだ。気にしないでくれ……」

ここまでくると形振り構っていられない。
直人はそんな気持ちで言った一言だったが、見事に真白に現実味を帯びた言葉を言われて撃沈する。
そうこう悩んだり考えたりしてる内に、時間はどんどん過ぎて行く。

「あー、駄目だ。全くいい案が思い浮かばん！　本当に如何したものか……」

「直人……」

「なんだ？」

「そろそろお昼」

真白が指差した時計の時刻はすでに１２時前を指していた。

「そんなことといっても、金がないんじゃあなあ……どっかに賞金首でもいないかなあ？」

「そんな都合よくはいないんじゃ……」

また無い物ねだりを言う直人に、真白が再び現実味ある言葉を突きつけようとしたその時。

「～～～」

「「ん？」」

気が付くと、十数人の男たちに、二人は囲まれていた。

「～～～～～」

何か喋っているが、生憎フランス語なので、来たばかりの直人はよく解らない。

「なんだって？」

そこで直人は、ほぼ全ての世界言語に精通している真白に、目の前の男たちが何と言っているのか尋ねる。

「私を誘ってるみたい」

「軟派か」

何と言ってるのか真白伝いで知るや、直人は呆れて溜息をつく。何処の世界にも、可憐な花に虫はたかるものなのである。

「阿呆らしい、構ってられるか。行くぞ、真白」

「うん」

軟派してくるチャラ男達に目もくれず、直人は真白と共にその場を立ち去ろうとする。

だが、チャラ男たちは真白を呼び止めようと、無理矢理その手を引っ張る。

（……一発灸をすえるか）

チャラ男たちの行動に直人が灸をすえようと行動を起そうとしたその時。

「ん？」

突如、真白の手を掴んでいる男の手を別の手が掴んだ。

全員が視線を追うと、その先にいたのは、一人の真白と同い年ぐらいの男の子だった。

「～～～～」

当然その子も、フランス語で男に話しかける。

「何て言ったんだ？」

「『人の嫌がる事をしてはいけないって教わらなかったんですか？』だって」

真白が聞いた彼の言葉は、どうやら男たちを注意するもののようだ。

しかし、相手が子供と言う事あって、男達は邪険にあしらおうとする。

「～～～～」

「『そんな事やってると本当にもてませんよ』だって」

直人が顔を向けると、真白は言葉を翻訳する。

すると、男の一人が無理に子供を引き剥がそうと、肩に手をかけ

る。

すると、突然肩に手をかけた男が転倒した。

その理由は簡単、子供がその男の足を払ったのだ。

すると、周りにいた男達は殺気立ち、その内の一人がその子に殴りかかる。

が、その拳がその子にとどく事はなかった。

何故ならその手は、直人がつかんでいたからだ。

「真白」

「何？」

「コイツらにフランス語でこう伝えてやれ」

「『子供に手を出していいのはおいたが過ぎたときだけだ』ってな」

そういった直後、直人に手をつかまれた男は、綺麗に宙を舞った。

「はぁ、はぁ、ここまで来れば大丈夫か？」

「うん」

公園でチャラ男たちを数分でのしたが、その後我に返り、このままだとまずいという考えに至り、例の少年の手を引っ張ってここまで逃げてきた。

「あー、悪いな。何か巻き込んじまって」

「？？」

直人は少年に向き直り、謝る。

しかし、少年は直人の言葉がわからないらしく、首を傾げる。

「ああ、解らないか。真白、通訳頼む」

「うん、解った」

直人に頼まれ、真白は先ほどの言葉をフランス語で少年に伝えようとする。

すると……

「ああ、大丈夫ですよ。気にしないでください」

「おっ、日本語！」

突如少年が日本語で喋ってきた為、直人は驚きの声を上げる。

「なんだお前、日本語話せたのか？」

「はい。ちょっと知ってる人に日本人がいますので」

「そうだったのか。まあ何にしても、巻き込んで悪かったな」

「いえいえ。僕は当然のことしただけですから」

改めて頭を下げる直人に、少年は謙遜してそう答える。

そして改めて、直人は少年を見てみる。

琥珀、と言っていい感じのオレンジ色の髪。
瑠璃色の瞳に、女の子と見違えるほどの顔立ち。
着ている服が男ものでなければ、二人も女の子と間違えていたかもしれない。

「そうだ、自己紹介がまだだったな。俺は桜庭直人。コイツは風花真白。一寸した事情で、世界中を旅してる」

「僕はアルフォンス・ラプラス。親しい人は「アル」って呼びます」

「アルか、いい名前だな。俺の事は直人でいいから」
「はい！」
二人は自己紹介を終えると握手を交わすのだった。
「そうだ、直人……」
「なんだ？」
「お昼ご飯……」
「あっ……」
とここで、真白の言葉で、直人は目前の問題を思い出す。
「どういうことですか？」
「実は……」
直人はアルに、今の自分たちが置かれた状況を話す。
自分たちがフランスに着たばかりでお金がない事。
仕事を探したが早々見つかる筈もなかった事。
如何したものかと公園で悩んだが、結局いい案が思い浮かばず、
路頭に迷ってた事等を話した。
「そうなんですかあ」
「そうなんだよ。何処かに賞金首でもいないもんかなあ？」

「直人。それは……」

「ああ、解ってるよ。でもここまで来ると無い物ねだりでも愚痴を言わずにはいられないだろ？」

また真白に現実的な言葉をいわれそうになるが、直人はそれを遮る。

解ってもこの状況、愚痴の一つでも言わなければそのまま気分が参ってしまいそうなのだ。

しかし、そんな二人に手を差し伸べてくれる人物が、今日の前にいた。

「じゃあ二人とも。丁度僕もお昼食べようと思ってたところでしたし、奢ってあげますよ」

それを聞いた途端、直人は鳩が豆鉄砲を食らったような表情になる。

まさかあって数分しか経たない相手から、このような優しい言葉を掛けられるなどとは思いもしなかっただろう。

「い、いいのか？」

「はい。助けてもらったお礼もしたいですし、それに、困ってる人を放っては置けないでしょ？」

「アル……」

理由を聞いた後、直人はアルの肩に手を置き、こういった。

「その優しさ、何時までも忘れないようにな」

「あっ、はい」

突然真剣な顔でそういわれたため、アルも少しきょとんとしてしまう。

「そ、それで、如何するんですか？」

「まあ、金がないのも事実だし、情けないけど、ここはお言葉に甘えよう。真白もいいか？」

「うん」

とりあえず二人はオッケーをだす。

そして、アルが行きつけのお店に案内してくれるとのことで、直人は重ね重ね申し訳なくなり「この埋め合わせは滞在中必ずする」と言ったら、「期待してますよ♪」と、ちょっと悪戯っぽく言われたという。

「「……」」

とりあえず、アルの行きつけの店だというレストランで昼食を取っていた直人と真白だったが、眼前に写る光景を見て唖然としていた。

「ん？　どうしたんですか？」

「お前……よくそんなに食えるな」

そう、このアル、かなりの大食いだったのだ。

身長は真白と差して変わらないはずなのに、その小柄な体に反して食べる量がすごかった。

とにかくメニューを片っ端から注文し、しかも一人前ならともかく、一人で二人前とか三人前とか平気で頼み、次々と平らげていってるのだ。

「あはは。ほかの人にもよく言われます。自分では普通だと思ってるんですけどね」

「まあ、成長期だからかもしれないが、腹壊すなよ」

直人がそう言った矢先に、アルは料理を食べ終えてしまった。

しかも……

「おかわりください！」

「まだ食う気か！？」

この店の主人は気前がいいらしく、アルのおかわりに応じてくれた。

そして再び出されたおかわりを、さっさと自分の胃袋に収めてしまうアルを見て、直人はそれだけでお腹がいっぱいになりそうだったと言う。

「ところで、お二人はこれからどうするんですか？」

アルが一通り食べ終わるのを待ってると、そのアルからそんなことを聞かれた。

「取り敢えず、しばらくはフランス国内に滞在する気だが、何分金がないからな、どこかで稼がないといけないが、どうしたもんだろうか」

「うん……」

直人の言葉に真白が頷く。

二人は今回フランスに来たばっかりで金がなく、これでは宿も取れない。

「って言うか、二人はどうやって来たんですか？」

「どうやってって、普通に歩いてきてだが」

「えっ？」

その言葉に、さしものアルも言葉を失う。

普通ならパスポートなり、ビザなりを持ってたりするものではないのか？　という当然の疑問が浮かんできた。

「いや、日本から出るときは知り合いに手引きしてもらって中国に入って、後は自分の足で歩いている。ちなみに真白はその旅の途中で出会ったんだ」

そう言って彼女の頭を撫でる直人。

真白はそれが気持ちいいのか、抵抗もなくそれを受け入れる。

「い、一体、何のために？」

直人の旅が尋常ならざるものであることを確信したアルは、旅の目的を聞く。

「自分を鍛えるためだ」

「えっ？」

返ってきた答えに、アルは首を傾げる。

「俺さ、日本に義兄が居てな。旅に出るとき、そいつと約束したんだ。「お前の剣に恥じない位強くなって、必ず戻ってくる」ってな」

「……」

「それでな、自分を鍛える……正確には、自分を見つめ直すために旅してるんだ。日本に留まっていたって、結局は「井の中の蛙」止まりだからな。だから世界中を旅して、自分の強さがどこまで通用するのか旅してるんだ」

「ああ、だからそんなものを持ってるんですね」

そう言ってアルが指差したのは、腰に差してある二本の刀だった。

「ああ。まあ、こいつは俺の魂って言うか、とにかく、こいつのおかげでいろいろ助かった事例もあるし」

そんな感じで話していたが、暫くして、話は元に戻っていた。

「んで、金が無い件だが、何時までもアルに世話になってるわけにはいかないしな」

「僕は別に構いませんけど？」

「いや、お前は良くても、なんていうか、俺のプライドが許さないって言うか……」

人の世話になりっぱなしなのは自分の信条に反するのか、直人も顔を渋らせる。

「でも……お金がないなら……いつまでもこのままだよ？」

「だよなあ。どこかに仕事でもあればいいんだが……」

真白の言葉に、直人もそう言って考え込む。

しかし、仕事などそうそう見つかるはずもないので、考えても良い案は浮かばなかった。

「あっ、だったら……」

するとここで、アルがこんなことを言ってきた。

「ちょっと僕の手伝いをしてくれませんか？」

「……何故こうなった？」

「さあ？」

「何でしょう？」

店のカウンターに隠れながら、直人は聞くが、真白とアルは知らないといった風の返事をする。

二人が隠れてるカウンターの向こう側には。

「～～～！！」

「何て言ってるんだ？」

「『隠れてないで出て来い！』だそうです」

「ハチの巣になるって解ってて、誰がのこのこ出るかっての」

銃を手に持った男たちが怒ったようにそう言うが、のこのこ出ればどうなるか目に見えているため、当然三人は出てこない。

こうなったのは、今から一時間ほど前にさかのぼる。

「はい、直人さん」

「あいよっ！　真白！　これは二番テーブルのお客に」

「うん」

三人は先ほどとは別のレストランでバイトをしていた。

アルは調理場で料理を作り、それをウェイターの直人と真白がてきぱきとテーブルに運んでいた。

アルは良く、こう言ったレストランで配膳や料理の手伝いを受けることがよくあるそうで、ほんらいは配膳の役をするはずだったそうだ（なぜかミニスカのメイド服であったが）。

だが、配膳役は直人と真白が受け付け、アルは調理場に回り、即席とは思えない見事なコンビネーションで、次々と客の注文を捌い

て行った。

しかも、直人も真白も、必ず美が付く良い顔立ちをしている。そんな二人がウェイターともなれば、客からの評判も良く、店は通常より客が多く舞い込み、パンク寸前の状態だった。

だがそこへ、突如銃を持った三人組が現れ、銃をぶっ放しながら客たちを脅迫する。

見たところ、手に大きな袋のようなものを持ってることから、強盗か何かだと思われる。

多くの人々が、その様子におびえ、男たちの言うとおりにしているのだが、その状況でも活動し、尚且つ黙って見過ごせないのが直人である。

配膳用のお盆を犯人の一人に投げ、それが見事に男の一人の頭に直撃する。

その後、真白と共に流れるような動きでカウンターの裏側に隠れ、現在に至るのだった。

「外はすでに警察が包囲してるだろうから、逃げ場はいのになあ」

「そうだね」

男たちは尚も騒ぎ立てる。

「取り敢えず、武器を持ってきましたよ」

「おっ、サンキュー。気が利くな」

「いえいえ。それより、銃を使うんですか？」

「はっ？」

アルが持ってきた刀を受け取ると、直人はアルの質問に疑問符を浮かべる。

アルはもう一つの手に、銃が収まったホルダーを二丁分持っていた。

「ああ、それは俺じゃなくて……」

そう言ってる間に、そのホルダーをさっさと受け取ったのは。

「こいつだ」

真白だった。

「えっ？」

「真白は銃の腕がいいんだ。そこらの軍人やスナイパーより段違いだぞ」

直人が説明してる傍らで、真白は拳銃をホルダーから抜き、弾を確認する。

「えっ？　それを撃つの？」

「うん」

アルが驚くのも無理はなかった。

何故なら真白が今握ってる銃は、威力が高いが、反動が大きいことで有名な自動拳銃、「デザートイーグル」だったのだ。

「さてと、アル、お前戦えるか？」

「ええ、銃器類は一応」

「そっか。じゃあ真白、何か貸してやれ」

「うん。はい」

そう言って真白は、もう片方のホルダーから、「ベレッタＭ９２」をアルに貸してあげる。

「さて、敵は三人か。二人とも、俺が切り込むから、後ろから援護頼む」

「うん」

「はい」

そう言って相槌を打つと、直人は刀を鞘から抜くと、そのままカウンターを飛び出す。

「！！」

すぐさま男たちは銃口を向けるが、発砲はできなかった。

「っ！？」

「！！？」

銃の持ち手に、真白とアルが撃った弾丸が命中し、男三人は手に持ってた銃から手を放す。

「まず一人！」

そして一気に懐に飛び込んだ直人は、まず一人目の腹を峰打ちする。

「二人目！」

そのまま流れるような動きで後ろを取り、二人目を手刀で黙らせる。

「おっと！」

しかし、最後のリーダー格がその隙に落とした銃を手に取って発砲する。

だが、それをひらりとかわし、そのまま一気に近づく。

「これで、止め！！」

そして最後の一人を、そのまま柄頭を腹に打ち込み、気絶させる。

「ふぅ、鎮圧完了」

そう言い終わると、直人は手に持ってた刀を鞘に納める。

「お見事」

「いやなに、旅してるとこういうことが多いからな。それに、剣術には自信があるんでね」

アルに褒められ、直人はなんてことないように答えるが。

「直人、今、不味いんじゃ」

「……あっ」

よくよく考えてみれば、自分たちは思いっきり銃を発砲したり、刀を振り下ろしたりした。

一応急所は外したし、峰打ちもした。向こうも武器を持っていたので、使用に関しては正当防衛が成り立つかもしれない。

だが、武器を持っていることに関しては不味い、警察から詰問されたら、変な疑いを掛けられかねない。

「三十六計逃げるに如かずだと思うやつ。挙手」

直人の言葉に、真白とアルは一も二もなく手を上げる。

「よしっ、逃げるぞ」

直人の言葉と共に、裏側から三人はその場を後にするのだった。

警察が突入したのは、その数分後だったという。

「悪い。一度ならず二度も巻き込んじまって」

「いえ、気にしないでください」

レストランでの騒動後、どうにかして逃げ出した三人は、町のはずれにいた。

衣装などはさっさと着替えて、今はさっきまでの私服になってる。

その衣装はアルが「後日お店に返しておきます」、とのこと。

「それにしても、もういっちゃうんですか？」

「ああ、あんな騒動を起こした後だからな、ここに留まってたら、色々不味いだろ？」

事情を話せばわかるだろうが、流石に武器を持ち、それを発砲、或いは抜刀したことに関しては大勢証言者がいるので言い逃れはできない。

警察に捕まって厄介になる前に、さっさと町を出ることにしたのだ。

「でも、今から別の町に言ってたら、確実に今日は野宿になりますよ？」

「まあ、仕方ないさ。それに、野宿には慣れてるし」

そう言いながら、直人はポケットに手を突っ込み、あるものを渡す。

「これは？」

「さっきのバイト代、なんか逃げ際に店長が渡してきた。あっ、お前と真白の分はポケットに忍ばせておいたから」

そう言われて二人が確認すると、確かにポケットに入ってた。

「んで、これは俺と真白の食事代の分。受け取ってくれ」

「そんなの別に気にしなくていいのに」

「いや、そうもいかない性分でな。貰ってくれ」

そう言って、アルの手に代金を渡す。

「？　あの、それは？」

するとアルの目に、あるものが映った。

それは、三日月の形をしたネックレスだった。

「ああ、これか？　ちっと知り合いが作ったもんでな」

「知り合いが？」

「ああ。どうしようもない馬鹿だが、頭だけは良くてな」

そう言うと、そのネックレスを服の中にしまう。

「さてと、見送りはここまででいいよ。世話になったな、アル」

「ありがとう」

「いえ、それよりも……」

二人がこれから出発しようとすると、アルが一つ聞いてきた。

「また、会えますかね？」

「どうだろうな。でもま、会えたら嬉しいな。今度はもっといろんな話とかしたいしな」

「僕も、また会えると嬉しいです！」

「そうか。ま、取り敢えず、今はさよならだ。じゃあな！」

そう言って、直人と真白は、アルに見送られながら、町を後にするのだった。

「ただいまー」

「おかえり～！」

その夜、アルは一人の人物の所に戻っていた。

「アッ君どこ行ってたの～！　お腹すいたー！　早く何かつくってよ！！」

「はいはい。何が良い？」

「アッ君が作るものなら何でも～！」

アルと親しそうに話す人物は、もしこの場に直人がいたのなら、恐らく驚くこと間違いない事だろう。

「じゃあ、今日はシチューにしようか。直ぐ作るからもうちょっと待っててね」

「はーい！」

赤っぽい髪をして、頭に兎耳のカチューシャを付けた人物、格好は一言で表すなら、不思議の国のアリスである。

ある意味奇抜と言うか、一般の人なら理解を絶するであろうその衣装に身を包んでる人物の名は……

「はい、出来たよ。束姉」

「わーい！　いただきまーす！！」

この世界にある種の変革をもたらした、ＩＳの開発者、「篠ノ之束」その人だったのだ。

「うんうん！　やっぱりアッ君の作る料理は最高だねえ！」

「束姉、たまには自分で作ろうよ」

「嫌だ、興味ないし面倒くさい」

アルの作ったシチューを食べながら、駄々っ子のような返事をする。

呆れる人も多いかもしれないが、これが篠ノ之束という人物なのだ。

「あっ、そういえば今日。不思議な人に出会ったんだ」

「不思議な人？」

「あのね、灰色っぽい髪をした、腰に刀を差した人と、後、真っ白な髪の、僕ぐらいの女の子」

其れを聞いた途端、束はその手を止めた。

「ねえアッ君。その灰色の方って、名前言ってなかった？」

「うん。桜庭直人って言ってたよ。名前からして、日本人かな？」

アルの答えを聞いた途端。束の態度が変わった。

「おお！　アッ君！　直君に会ったの！！」

「えっ？　知り合いですか？」

「知り合いも何も、直君はいっ君の義理の弟、そしてちーちゃんのお弟子さんだからね。ああ、懐かしいなあ！」

「いっ君って、もしかして、束さんが言ってた。あのブリュンヒルデの弟さん？」

「うん、そうだよー」

アルは呆気に取られていたが、同時に納得した。

普段、束は結構排他的で、興味のある人物以外には徹底して冷淡な態度を取る。

その束が、興味を持ったばかりか、ここまで狂喜乱舞したのだ、彼女を知るものなら、びっくりするのも無理からぬことだった。

しかし、その人物が、その興味のある人物の身内という事で、アルも納得する。

「ねえねえアッ君。直君は今どこ？」

「あっ、もうこの町を出て行っちゃいましたけど？」

「えー、残念。久しぶりに直君の髪で三つ編みとかポニーテールとか、色々したかったのに……」

「あ、あはは……（良かった、知らせなくて本当によかった）」

ぶうたれながら呟く束に、アルは冷や汗を垂らす。

「まあいいや、直君にはきっとまた会えるだろうし、その時にしようっと」

「あはは、あっ、じゃあ僕、あの子の所に行ってきます。おかわりはあるので、自由にとってください」

「はーい」

そう言って、アルは一旦その場を離れるのだった。

途中、その後ろから「あっ、アッ君と一緒に着せ替えショーとかいいかも♪」と、言う言葉が聞こえたのを全力で無視することにした。

目的地に向かいながら、アルは、直人の事を考えていた。

「直人さんの首に掛かってたの、本人ははぐらかしていたけど。あれは間違いなく、ＩＳだ」

アルは直人が首から下げていたネックレスが、ＩＳの待機状態だとすぐに見抜いていた。

それと同時に、直人と言う人物について、解ったこともある。

ＩＳは本来、女性にしか扱えない。

だから待機状態の物を男性が持っていても、それは宝の持ち腐れだ。

ましてや、ＩＳは操縦者と共に成長するものなので、それはなおさらだ。

ならばなぜ彼が持っているのか、答えは簡単だ。

直人が、「男でＩＳを動かせる」という事だ。

「ふふ、驚いたなあ。まさか僕以外で、ＩＳを動かせる人がいたなんて……」

嬉しそうに言いながら、アルは目的地にたどり着く。

そこには、鎮座する。一体のＩＳが置かれていた。

「もしＩＳを持っているのなら、またあの人に会えるかもしれない。ううん、きっと会える」

アルは嬉しそうに、そして真剣な眼差しで、開いたディスプレイを見つめながら呟く。

「束姉の言葉じゃないけど、僕も、またあの人に会いたいなあ」

アルは直人に興味を持った。

それに、真白の事も非常に気に入った。

だが違いを挙げれば、彼がＩＳを動かせる男性であることにではない。

彼と言う、人柄に興味を持ったのだ。

「そのためにも、早く君を完成させてあげるね」

「一角」

そう呟きながら、アルはディスプレイを叩き、目の前のＩＳ「一角・零式」の調整を始めるのだった。

ユニーク数１０，０００突破記念コラボ　桜の真剣と白き姫君と一角の少年の珍

桜爛の間　特別編

直人「何だ？　この特別篇って？」

作者「今回は後書きコーナーは無し、その代わり、スペシャルゲストに登場していただきます」

直人「スペシャルゲスト？」

作者「それは……」

アル「やっほー」

直人「おっ、アル」

作者「ちょっと、紹介もしてないのに出てこないでよ！」

アル「あなたがもったいぶらすのが悪いです」

作者「くっ、生意気な……と言う訳で、今回は特別ゲストとして、【ＩＳ　一角と少年】の主人公、アルフォンス・ラプラスこと、アル君に登場していただきました」

直人「よろしくな！」

アル「はい！」

作者「さて、今回は直人の過去話と言う形でコラボしましたが、ところどころ、一角と少年の設定も流用させてもらいました」

直人「って言うかこれ、下手したらアルの本編参入フラグとも受け取れるんだが」

作者「そんなつもりはないし、そう言う予定もないけど、要望が強かったりしたら、考えるかも？」

アル「この人いつもこんな感じですか？」

直人「ああ、しかもいまだに本編、一文字も執筆してないんだ、いくら記念で初のコラボだからって、すこしはそっちにも振れって話だよな」

作者「いやあ、大学の後期講習が始まって、色々疲れたりしてさあ、なかなか手につかなかったんだよ」

直人「少しはやる気を出せ」

アル「楽しみにしてる人たちに失礼ですね」

作者「むぐぅ、二人が酷い……そんなこと言うやつらには、こうしてやる！」

ボフン！！

直人「うわっ！」

アル「何々！？」

作者「ふっふっふっ、さあ、二人の勇姿（？）を、ご覧あれ！！」

直人「おい、作者、一体何をし……ってアル！　なんだお前その恰好！！」

アル「そう言う直人さんも！！」

今の二人の格好。

直人→和服だが、肩の部分が着崩れて露出、胸元も結構あいている。

アル→ノースリーブにへそ出しの、フリフリ満載のメイド服。

作者「ふふふ、私を怒らせるとこうなるのだ、理解したかな？」

グリッ

チャキッ

作者「あり？　なんで君たちは刀を首筋に突き付けて銃を頭にめり込ませているのかな？」

直人「地獄がみてぇか？」

アル「少し頭、冷やそうか？」

作者「えっ、いや、ちょ、ちょっと待……」

あーーーーー。

直人「ふぅ、うちのバカ作者がすまん」↑着替えました。

アル「いえいえ」↑右に同じ。

直人「さて、作者も言っていたが、今回は俺の過去話で、そこにアルに参加してもらったわけだが」

アル「一体、お二人はどんな旅をしてきたんですか？」

直人「ああ、色々あったぞ、中東で武装グループに襲撃されたり、アフリカで夜中にライオンに襲われかけたり、イタリアでマフィアの抗争に巻き込まれたり」

アル「……壮絶ですね」

直人「まあ、良い修行にはなったけどな」

アル「それにしても、真白ちゃんって、デザートイーグル使うの？」

直人「まあ、普段はベレッタと並んで使ってるけどな、まあ拳銃だろうとスナイパーライフルだろうと、あいつに銃火器持たせたら、まず右に出る奴はいないな」

アル「す、すごいね……」

直人「まあな。さて、今回はここまでだが、最後にアルと、アルが主人公の小説、【ＩＳ　一角と少年】について、軽く説明しておくか。

アルフォンス・ラプラス。

楚良様の作品【ＩＳ　一角と少年】の主人公。
琥珀色の髪が特徴の男の娘。
性格は優しいが、怒らせるとシャルロットより怖いとは一夏談。
ＩＳは「一角・零式」

【ＩＳ　一角と少年】

作者は楚良様。
ストーリーは当小説と同様、アニメ準拠、途中からは原作とオリジナル展開。
ヒロインはシャルロット、他にもオリキャラが二名登場してます。

直人「うーん、ネタバレ感があるが、取り敢えずこんな感じか」

アル「そうだね」

直人「ええ、楚良様。もし不快でしたら、この部分は削除したいと思いますので、遠慮なくお申し付けください。ああそれと、真白のＩＳの名称アンケート、今回の予定変更に伴い、一週間延ばすことにしたそうだから、まだ投票してない人は、早めに投票をお願いします」

アル「さて、そろそろお開きだよ？」

直人「そうだな。次回は本編に戻るそうだ。俺は一切内容を知らされてないんだが……」

アル「まあまあ。それじゃ、またねー！」

第二十話　明かされる貴公子の秘密。（前書き）

皆様、大変お待たせいたしました。

本編、これでアニメ第六話分の終了です。

結局、これを作り上げた時、すでに夜中の3時を過ぎていたりしますが、必死に頑張って書いたので、どうか読んでください。

第二十話　明かされる貴公子の秘密。

日も傾きかけてきたころ、一夏は寮の部屋に戻ってきた。

だが、その顔は浮かなかった。

「……」

その理由は、ラウラが異様に自分を狙う理由と、寮に戻る前の直人の事だ。

あのラウラが自分を執拗に付け狙うのは、自分が誘拐された所為で千冬が大会二連覇を逃した事が許せないからだ。

それについては、本来は誘拐した方が咎められるべきだろうが、当時、助け出されるまで何もできなかった弱い自分を、一夏自身も許せないので、それについては甘んじて受け入れるつもりだ。

だが、その時旅に出ており、何も知らないと思ってた直人が、実は自身が誘拐されてたのを知っていたことについては、本当に驚愕した。

それについて、初め聞いたときは驚きを隠せなかったが。

（助けようとして気絶させられて止められたって言うけど……よく考えてみたら、寧ろその方が良かったのかもな）

直人は去り際に、「今さら言い訳になる」、と言っていたが、直人の事をよく知ってる一夏は、それが言い訳ではなく、事実だという事は解っていた。

それに、良くも悪くも、小さいころから直人は、一夏や千冬の為に自分の身を顧みず、相手に突っ込むことが多かった。

時としてそのために、ぼろぼろになることも少なくなかった。自分の事を思ってくれるのは嬉しいが、そんな姿を見るたびに、一夏は守られるだけの自分に、少なからず悔しさを感じるのだった。

（本当にあいつは、無茶ばっかりするしな。俺の事思ってくれるのは嬉しいけど、少しは人の気も知ってほしいよ）

恐らく、あの時の事を直人は、自分以上に悔んでいるのだろう。一夏としては自分の所為だから気にしなくていいと言いたいが、自分の落ち度に関してはかなり頑固になる直人の事だから、口で言っても早々受け入れられないだろう。

「明日あたり会ったら、ちっとど突いとくか」

いつもそうなのだ。

直人が何一夏関連で気に病んだりすると、いつも一夏はちょっと頭をど突く。

それで完全に気が収まるわけではないのだが、それでも、一夏が「気にするな」と言うと、直人もそれに従って気にしないようにする。

これが、この義兄弟のいつもだったりするのだ。

「良し、そうするか。三年ぶりだから、加減とか考えておかねえと」

いつしか一夏の頭の中は、さっきまでの暗い思考から、直人を如何ど突くかの方に神経がいっており、顔も自然といつもに戻っていた。

「ん？」

とここで、部屋のシャワールームの方から音が聞こえてるのに気付く。

自分は今ここにいるので、シャワーを使ってるのが誰なのか、すぐに察しがついた。

ルームメイトのシャルルだ。

そう察した一夏は、荷物を置き、ベッドに腰掛けるが、ここであることを思い出す。

「あっ、そうだ」

そう言って一夏は、棚からボディーソープを取り出し、浴室の脱衣所に入る。

この行動からも解る通り、今ボディーソープは切れているのだ。

「シャルル。ボディーソープ切れてるだろ？　替えの……」

そのことをシャワーを使ってるであろうシャルルに伝えようとする一夏だが、途中で言葉が途切れる。

と言うのも、一夏が入ってきたのとほぼ同時に、シャワールームから……

一人の「女性」が、出てきたからだ。

「……うわっ！！」

しばらく沈黙していたが、やがて裸体を見られてることに気付いた女性が、顔を赤くして自分の体を隠す。

「えーっと……これ……ボディーソープ」

「う、うん……有難う」

暫くして一夏が再起動し、ボディーソープを渡すが、両者とも、

その動きは非常にぎこちなかった。

「ああ……じゃあ、それじゃあな」

「う、うん……」

そうやって目の前の女性と会話しながら、一夏は浴室を出る。

だが後になって、混乱していた頭を整理し始める。

先ほどの女性は、この状況で考えるにシャルルだろう。

顔立ちや髪は似ていたし、何より胸元に、依然見せてくれた待機状態のＩＳがあった。

だが、シャルルは「男」の筈だ。

先ほどシャワーを浴びていた人物には、まぎれもなく、女性特有の膨らみがあったし、体つきも女性ぽかった、と言うよりそのものだった。

どういう事か、正直見た時はいろいろ衝撃的だったため考える暇がなかったが、冷製になって考えられる答えは、恐らくひとつ。

そうこう考えてるうちに、浴室からシャルルが現れる。

姿はジャージで、普段は束ねてる髪もほどいているが、やはり膨らみはあった。

そしてお互いベッドに腰掛けているが、先ほどの衝撃的な出来事からか、会話は無く、沈黙が部屋を支配していた。

「あ、あのさあ。お茶淹れようか？」

「う、うん……もらおうかな……」

やっと絞り出した会話もそんな感じだった。

そんなこんなで、一夏はお茶を淹れ、それをシャルルに渡す。

「はい」

「あ、ありがとう」

だが、シャルルが湯飲みを受け取ろうとした瞬間だった。

「！！」

「お、おい！」

一夏と手が触れた瞬間、思わずびっくりしたシャルルはお茶をこぼしてしまう。

そしてこぼれたお茶は、そのまま一夏の手に掛かってしまう。

「うわっ！　あちち……」

「あっ！　御免！」

びっくりしながらも、二人はすぐにキッチンの水道で一夏の腕を冷やす。

「大丈夫？　ちょっとみせて！　あぁ、赤くなってる」

自分が原因である為、シャルルは特に必死だった。

「本当にごめんね！」

「いやあ、大したことない、って言うかその……当たってるんだが」

すぐに冷やしたので大したことないと言うが、今の一夏には別の問題があった。

そう、当たってるのだ。

一夏の腕に、シャルルの女性特有の膨らみが……

「えっ？　……っ！？」

すぐにその言葉の意味を察し、胸のあたりを腕で隠すようにしながら、一夏から離れて後ろを向く。

「……一夏のエッチ」

「何でだよ！！」

シャルルの抗議の目と共に言われた言葉に、一夏も激しく抗議するのだった。

「で。なんで男のふりなんかしてたんだ？」

落ち着きを取り戻した後、一夏はシャルルから事情を聴いていた。

シャルルが女性であることは先ほどのごたごたで解ったが、その理由については図りかねていた。

「実家から、そうしろって言われて」

「お前の実家って、確か、デュノア社の」

シャルルの実家、デュノア社は、フランスのＩＳ開発企業である。

世界第三位のシェアを持つ企業で、今ＩＳ学園で訓練機として使われている機体「ラファール・リヴァイヴ」を開発した会社でもある。

「そう。僕の父がそこの社長。その人からの直接の命令でね」

「えっ？」

一夏はますます解らなくなった。

実家からの命令という事で、ＩＳの試験運用とか、そう言う関連の用事であろうという事は容易に想像がつく。

だが、何故男装する必要があるのだろうか？

そういうのが目的なら、普通に女子として送っても、何ら問題ないのではないか？

ますます疑問を浮かべる一夏だったが、次のシャルルの言葉に驚愕する。

「僕はね一夏。父の、本妻の子じゃないんだ」

「えっ！」

その言葉が意味するところは一つだった。

彼女は、デュノア社社長の、愛人の子、という事だ。

それからシャルルは、自分の身の内を、少しずつ明かしていった。

彼女がデュノア社に引き取られたのは、二年前。

それまでは父とは別々に暮らしていたのだが、彼女の母親が亡くなった時に引き取られた。

そして、検査の過程でＩＳ適正が高いことが解り、非公式にテストパイロットを務めていた。

だが、父と話したのはたったの二回、話をした時間は、一時間にも満たないという。

「その後すぐにね、経営危機に陥ったんだ」

「えっ？　でもデュノア社って、量産機のＩＳのシェアが世界第三位何だろ？」

「うん。でも、結局リヴァイヴは第2世代型なんだよ」

そう、幾らシェア第三位と言っても、デュノア社が作ってるラフ

ァール・リヴァイヴは、後期に開発された第2世代のＩＳ。
セシリアのブルー・ティアーズ、鈴の甲龍、そして今日見た、ラウラのシュバルツェア・レーゲンに代表されるように、現在世界ではＩＳの開発は第3世代型が主流になっているのだ。
彼女たちこのＩＳ学園にいるのも、機体のデータ収集が目的だったりするわけだ。

「あそこも、第3世代型の開発に着手はしているんだけど、中々形にならなくて、このままだと、開発許可がはく奪されてしまうんだ」

「それとお前が男のふりをしてるのと、どう関係があるんだ？」

ここまで来ても、まだ一夏には解らなかった。

この場に直人、或いは紅葉が居れば、恐らく理由も理解できたかもしれないが。
そしてシャルルは、自分が男装して、この学園にやってきた、真の目的を話す。

「簡単な話だよ。注目を浴びるための広告塔。それに、同じ男子なら、日本に出現した特異ケースと、接触しやすいからね。その使用機体と本人のデータを手に入れられるかもって」

ここまで彼女が話したことで、漸く一夏も、彼女の男装の理由、ひいては、それを指示したデュノア社の意図も理解した。

「そう、君と直人のデータを盗んで来いって言われてるんだ。僕はあの人にね」

それを聞いて、一夏は顔をしかめる。

それは彼にとって、どうしても納得できないことがあるときの顔だった。

「はぁ、本当の事を話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、今まで嘘をついてて御免」

真実を打ち明けたことで、気が楽になったシャルルは、話を聞いてくれた一夏にお礼するとともに、今まで彼をだましていたことを謝罪する。

目的が目的とはいえ、自分にこうまでよくしてくれた人物を騙すのは、やはり心苦しかったのだろう。

「……良いのか？」

「えっ？」

「それで良いのかよ！　いや、良いわけない！」

「い、一夏!?」

だが突如、一夏の感情が爆発した。

しかしそれは、今まで自分をだましていた、彼女に対するものではなかった。

「親がいなけりゃ子供は生まれない。そうだろうさ。でもだからって、何でもして良いって理由にはならないだろ！」

「一夏……」

そう、彼の怒りの理由は、彼女にこんなことを強いる、彼女の親に対するものだった。
そして、シャルルが本当の事を話したからなのか、一夏もまた、自身に関するあることを打ち明けた。

「俺と千冬姉も、両親に捨てられたんだ」

「えっ！？」

「俺の事はいい、別に会いたいとも思わない。それに、あいつに比べたら、俺はまだいい方だ」

「あいつって、直人の事？」

ここで一夏は、自分と千冬が、両親に捨てられたことを話すとともに、直人を話の引き合いに出した。

「ああ。あいつは……物心ついた時から孤児院にいて、髪と目の所為で苛められて、誰にも助けてもらえなかったんだ」

「えっ！？」

「俺と千冬姉が初めて会った時には、孤児院でも手を焼く問題児になってて、誰彼構わず襲っていたんだ」

「……」

シャルルから離れた後、一夏は直人の過去を話す。
あまりに今とかけ離れているその話に、シャルルも驚きを隠せな

かった。

「でも、あいつは本当は助けを求めていた。自分を一人にしてほしくなかったんだ」

「何でそう言えるの？」

「初めて会った後、あいつ、俺に襲ってきたんだけど、千冬姉に一発殴られて、そのまま動かなくなった。その後二人っきりになった時、あいつは泣きながら言ったんだ。「どうして誰も助けてくれないんだ」って」

「……」

「両親に捨てられても、俺にはまだ千冬姉がいたから、寂しさとか、辛いとか、そう言うのはあまりなかった。だけどあいつは一人だった。気の許せる奴も、頼れる大人もいなかった。その所為であいつは、俺以上に辛い思いをしてきたんだ。だから、俺がこいつの最初の理解者になろうって、その時子供ながらに思ったんだ」

「それで、直人を引き取ったんだ」

「ああ、必死に千冬姉に頼み込んだよ。何度も駄目だって言われても、必死に頼み込んでな。とうとう千冬姉も根負けして、一緒に暮らすようになったんだ」

「そうだったんだ」

両親に捨てられたことについては、一夏には千冬がいたから、寂しさはあまりなかった。

だが、直人は親兄弟がおらず、孤児院でずっと孤独な毎日を送っていた。

そして、髪と目の所為で虐めを受け、周りの大人にも助けてもらえず、自分をいじめる相手に手を出したことで、その孤立をさらに深めていった。

織斑家に来るまで彼は、自分を救ってくれる人物、自分を助けてくれる人物に会うことなく、ずっと孤独の中で生きてきた。

そんな彼に比べれば、自分はまだ恵まれてる方だと、一夏は思ったのだ。

「それで、お前はこれからどうなるんだ？」

と、自身と直人の事を一通り話し終えた一夏は、シャルルに、今後どうなるかを聞く。

「どうって……女だってことがばれたから、本国に呼び戻されると思う。その後は解らない。良くて牢屋行きかな」

理由がどうあれ、性別を偽って、本来は男子が入ることを許されない学園に潜入したのだ。

代表候補生の資格をはく奪されるのは当然としても、このままでは彼女が刑務所行きになるのは明かだった。

「だったらここに居ろよ！」

しかしそんな事、当人に非がないのに、親の都合で彼女が投獄されるなど、一夏が許せるはずもなかった。

「俺が黙っていればそれで済む！　もし仮にばれても、お前の会社

は手出しできないはずだ！」

そう言って一夏は荷物を漁り、生徒手帳を取り出す。
そして、そこに書かれている、あることを口にした。

「ＩＳ学園特記事項“本学園に在籍する生徒は、在学中において、ありとあらゆる国家、組織、団体に帰属しない”つまりこの学園に居れば、少なくとも三年間は大丈夫ってことだ。その間に何か方法を考えよう」

これこそが、彼が強気な理由だった。

ＩＳ学園は、地理上日本に存在するものの、日本を含め、あらゆる国家や組織などの干渉を受けない、と言う国家規約がある。
無論、完全に外部からの干渉を遮断することは不可能だが、それでもこの学園に居れば、デュノア社もフランス政府も、強引な方法で彼女の身柄を拘束することはできないのだ。

「よく覚えてたね。特記事項って、全部で５５個あるのに」

しかしシャルル本人としては、一夏がその特記事項を憶えていたことに驚いていた。
さっき彼女が言ったように、学園の特記事項は全部で５５個、そのすべてを憶えることは至難の業と言っても良いのだ。

「こう見えても勤勉なんだよ、俺は」

と、本人は言うが、実際のところは、この特記事項は直人に仕込まれたものだったりする。
直人曰く「覚えておいて益はあれ損はない」と言うので、完全に

記憶するまで、徹底的に仕込まれたのだ。

「一夏……庇ってくれて、ありがとう」

「ああ、いや……！」

シャルルにお礼を言われ、少し照れるが、ここで彼はあることに気付く、と言うか、気づいてしまう。

「胸！　胸が見えそうだって！」

「えっ？　……！！」

一夏に言われ、シャルルは再び自分の胸を隠す。

「そんなに気になる？」

「当たり前だろ！」

唐変木だ何だと言われているが、一夏だって健全な男子高校生。異性の体にまったく興味がないわけではないのだ。

「……ひょっとして、見たいの？」

「えっ！？」

「一夏のエッチ」

「何でだよ！　なんでそうなるんだ！」

だがそれを、あらぬ意味に受け取られたらしく、そんなことを言われ、思わず狼狽する。
しかしそこへ、外部から声が聞こえる。

「一夏ー、いるー？　一緒にご飯食べに行くわよー！」

その声は鈴だった。

その声を聴いた途端、一夏はシャルルをベッドに入れ、その直後に鈴がノックもせずに入ってきた。

「何やってんの？」

「い、いやあ、シャルルが風邪っぽいって言うから、布団を掛けてやってたんだ」

一夏の嘘に合わせて、咳をする真似をするシャルル。
今鈴に、彼女が女だとばれるわけにはいかない。
その為、苦し紛れではあったが、そう嘘をつくしかなかった。

「ああ、日本に来たの初めてだもんね。慣れないこと多くて疲れがたまったってわけか」

「そ、そうみたいなんだよ！」

「御気の毒に。あっ、一夏借りてくけど良い？」

「ごほっ、ごほっ、ど、どうぞ」

「良し！　じゃあ行くわよ！！」

「えっ！　あっ、おい！」

こうして鈴に引っ張られ、一夏は部屋を出て行った。

「な、何をしている！」

「何って、これから一緒にご飯食べに行くところだけど？」

食堂へ向かう途中、廊下で箒と紅葉に出くわした二人。

箒の質問にあっけらんと答える鈴だったが、問題はそこではなかった。

「だからと言って、何故腕を組んで密着する必要がある！！」

そう、今の鈴は一夏の腕に密着しているのだ。

腕を組むだけならまだ良いだろうが、流石にこれは許容しかねるようだ。

いや、前者もある意味譲りがたいだろうが。

「良いじゃない別に、幼馴染なんだし。それにセシリアが言ってた

わよ、「男性が女性をエスコートするのは当然です」ってね」

「どっちかって言うと、俺がされてるような……」

実際、そうなのかもしれないが。

「あれ？　シャルル君は一緒じゃないの？」

「えっ！　あ、ああ、何か、風邪を引いたらしくてな。今部屋で寝込んでるよ」

「そっかあ、慣れない異国暮らしで疲れちゃったんだね。後でご飯持っててってあげなよ」

「あ、ああ、そうだな」

シャルルがいないことに疑問を呈した紅葉に、一夏は少しドキッとした後、先ほどと同じ嘘をつく。

紅葉は（嘘とは言え）、それで事情を察し、後でご飯を持ってってあげようという事になった。

「そんなことはどうでも良い！　とにかく、私も付き合おう。今日の夕食は少々物足りなかったからな」

「良いの？　アンタさっき紅葉と食ってきたんでしょ？　太るわよ」

そんな紅葉と一夏の会話を無視し、箒は自分も付き合うと言ってくる。

しかし、せっかくの二人きりを邪魔されたくなく、鈴はそう言って箒をけん制する。

「心配は無用だ。これで居合の練習をして、カロリーを消費するからな」

「って、真剣だろそれ！」

そう、箒が持ってる包みから取り出したのは、一本の真剣だった。

「で、では……参るとするか」

「ちょっと、何やってるのよ！」

何をやってるかと言えば、鈴が組んでる腕と反対の腕に、箒も腕を組ませてきたのだ。

「男が女をエスコートするのは当然なのだろ？」

「待てよ二人とも、こんなの歩きづらいだけ……」

と、一夏が言った瞬間。両脇から抓られた。

「いてぇ！！」

「この状況で、他に言う事は無いのか！」

「全くあんたは、少しは自分が幸福だって自覚しなさいよ！」

そう言って、三人はそのまま食堂へと向かっていくのだった。

「あ、あはは……一夏くーん。そのうち君、冗談抜きで後ろから刺

されるかもねー……」

一夏の唐変木ぶりと、彼に次々降りかかるであろう女難の日々を予想しつつ、紅葉はそう呟くのだった。

「た、ただいま……」

「あっ、おかえり。どうしたの？」

「……気にしないでくれ」

しばらくして、トレイを持って一夏は部屋に戻ってきた。

その際、なぜか顔が青ざめてるようだったが、食堂で何があったのか、敢えて多くは語る必要は無いだろう。

「飯貰ってきたぞ」

「あ、ありがとう。いただくよ」

そう言って布団から出て、ご飯を食べようとするシャルルだった

が……

「っ！！」

ここで彼女は、非常に不味いことになったと気付く。

献立は焼き魚定食だが、そこに問題があるわけではない。

問題は、食事と一緒に載ってる、「あるもの」だ。

「どうした？」

「う、ううん」

そう言ってシャルルは割り箸を割るが、歪な形に割れる。

そして、ぎこちない動きで食事をとろうとするが、なかなかうまくいかない。

これを見て、一夏はすぐに解った。

「箸苦手なのか？」

「練習してはいるんだけどね」

そう、彼女は橋が苦手なのだ。

まあ、フォークやスプーンが基本の西洋人にとって、箸は使い慣れない事この上ないだろう。

いろいろあったとはいえ、一夏はそのことをすっかり失念してしまっていたのだ。

「悪かった、フォーク貰ってくるよ」

「えっ！　良いよそんな！」

一夏がフォークを貰ってこようとするが、自分の為に色々苦労してもらってるからか、シャルルは遠慮がちにそう言う。

それを見て、一夏は彼女に言った。

「シャルルはもう少し、人に甘えることも覚えた方が良いぞ。そんなに遠慮してばっかじゃ、損するって」

一夏にそう言われ、シャルルは少し考え込むように黙り込む。

別に謙遜が悪いわけではないが、彼女は事あるごとに自分を押し殺して、他人に迷惑を掛けないようにしている。

それはある意味では美徳とも言えるだろうが、あまり遠慮しすぎるのも、一夏にとっては見過ごせないのだ。

我儘になれとは言わないが、困ってる時に、遠慮せずに助けを求めるのは、何ら恥ずべきことではないのだから。

「最初は、俺に頼ることから始めたらどうだ？」

無論、いくらルームメイトとは言え、あって数日しかしてない相手に甘えるというのも、土台無理な話だ。

そこまでいかずとも、初めは自分に頼ることから始めればいい。

一夏はそう考えていた。

「じゃ、じゃあ……あの……」

「ん？」

その言葉に、何か言いづらそうにしながらも、意を決して、彼女はとんでもない一言を言うのだった。

「……一夏が食べさせて」

「……えっ？」

「甘えても良いって、言ったから……」

これはある意味、一夏にとって予想外だった。

確かに甘えた方が良いとは言った。

自分に頼ることから始めた方が良いとも言った。

だがまさか、自分に食べさせてほしいと言うとは、一体だれが想像できただろうか？

少なくとも、人の好意に全く気付かないこの唐変木に、そんなこと想像できるわけもないだろう。

「駄目？」

しかし、その一方でシャルルも、上目遣いで、捨てられた子犬のような目で一夏を見つめる。

その結果は……

「よ、良し。男に二言は無い！」

折れた。

別に頼れと言ったのは自分なのだから、それを反故にする気はさらさらないのだが、彼女の目を見て、断れるほどこの男は冷たくな

い。

むしろ、そんな人物は人の皮をかぶった鬼だと言いたい。

「じゃ、じゃあ……行くぞ。えーっと……あーん」

「あーん」

それはさておき、一夏はシャルルに言われた通り、箸に焼き魚の身を掴み、それをシャルルの口に入れる。

さながら、雛鳥にご飯を分け与える親鳥のようだった。

「美味いか？」

「うん。美味しい」

「そうか、良かった」

「その、次はご飯が良いな」

「おっ、飯か。よし来た、待ってろ」

そう言われて、手慣れた手つきで箸でご飯を掴む一夏。

その時シャルルが、これまでの社交辞令ではない、心から笑っていたことに、彼は気付くことはなかった。

「良いか？　あーん」

「あーん」

こうして、しばらくの間、寮部屋の一角で、甘い展開が繰り広げられることとなったのだった。

第二十話　明かされる貴公子の秘密。（後書き）

桜爛の間

作者「終わった……やっと書き終わったよ。ええ、今日は諸事情により、代わりに原作主人公、織斑一夏を呼んできました」

一夏「よ、よろしくー」

作者「さて、ついに美少年シャルル、その秘密が明かされたわけですが」

一夏「本当にびっくりしたぜ。まさか女だった何てな」

作者「それは同感。はっきり言って作者も、初めて見た時は男の娘にしか見えなかったし」

一夏「おい、字違ってねえか？」

作者「いえ、合ってますよ？　しかし、確かに親だからと言って、子供に何でも強いていいって言う理由にはならないよね。作者も虐待事件とかニュースで見ると、くだらない良いわけで容疑を否認する親に憤りをよく覚えます」

一夏「へー、意外と良心的なんだな」

作者「以外は余計です。さて、ＩＳ一の甘々シーンをどうにかして入れたわけですが」

一夏「甘々って……ただシャルルに飯食わせてただけだけど？」

作者「そんなこと言えるのは君だけだよ。まあ、こんな描写も拙い作者ですから、うまくできてるかどうかわかりませんが。さ、気を取り直して、「直人の目安箱」からだ」

一夏「おお、どんな質問なんだ？」

作者「その前に、さっさと呼んでおくか。皆さーん、出てきてくださーい」

直人「おお」

紅葉「やっほー」

一夏「直人に紅葉？」

作者「ああ、質問は二人に来たからね。まあ、君にかわりに答えてもらっても良いんだけどね」

一夏「俺がここにいる理由って……」

作者「まあまあ。さ、まずは一つ目！」

1．（直人・紅葉別々に答えてもらいます）
沙霧の様な女の子が突然現れて、直人に『好き』と出会い頭に告白されたら？

直人「……ありえないだろ？」

作者「そうですか？　まあ、取り敢えず答えちゃってください」

直人「うーん……まずどうして好きなのかを問うな。いきなりそんなこと言われても、困惑するだけだろ？」

作者「ご尤も、それで紅葉は？」

紅葉「私も、その子と直人に、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩするよ？」

作者「……今紅葉の後ろに何か見えた気がしたが、気のせいという事にしておこう。んじゃ次！」

2．お気に入りのお茶（↑ここ重要）は？

作者「です」

直人「何で茶の所が重要なんだ？」

作者「まあ良いじゃん、さっさと答えちゃって」

直人「やっぱり緑茶だな。日本人と言ったら緑茶だろ？　後は番茶だな。茶は別にウーロン茶だろうとほうじ茶だろうと何でも飲めるが、一番好きなのと言われたらこれだな。ちなみに真白は紅茶が好きだ」

作者「はい。質問をくれた三月語様、本当にいつもありがとうございます。次は「抱腹絶倒！　アフレコ委員会！！」です！」

直人「今回はどんなアフレコなんだ？」

作者「今回は結構来てるぞ。まずは直人から」

直人「どれどれ……おお、これ位なら良いぞ」

作者「それでは連続で言ってもらいます。どうぞ！」

直人「礼を言う」

直人「たとえ普通は気絶する程のキズでも、おれは倒れちゃいけねェ。たとえ普通は死んじまうほどのキズでも、おれは死んじゃいけねェ。普通じゃねェ”あいつ”に勝つためには、普通でいるわけには、いかねェんだ！！！」

作者「両方とも、超人気漫画。【ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ】のゾロの台詞です。前者がアラバスタで、Ｍｒ．１との戦いに勝利した時、後者が、恐らくはっちゃんとの戦いの最中の台詞かと」

一夏「何だろう。すげえ違和感ねえ」

紅葉「だよねえ」

作者「じゃあ次は、全部一夏に言ってもらいます」

一夏「えっ？　俺？　……なあ、なんで俺こんなに台詞多いの？」

作者「何しろ今日は一夏の活躍補完の話だったからね、君に良い台詞を回したわけ。つべこべ言わずにさっさと準備してきなさい」

一夏「解った解った」

作者「それでは、どうぞ！」

一夏「これは命を誓う旗だから　冗談で立っている訳じゃねェんだぞ！お前なんかがへらへら笑ってへし折っていい旗じゃないんだぞ！！」

一夏「人はいつ死ぬと思う・・・?心臓を銃で撃ち抜かれた時・・・
違う。猛毒のキノコスープを飲んだ時・・・違う!!!・・・人に
忘れられた時さ・・・!!!!」

一夏「どんな船でも・・・・・・造り出す事に”善”も”悪”もね
ェもんだ・・・!!この先お前がどんな船を造ろうと構わねェ!!・
・・だが生み出した船が誰を傷つけようとも!!世界を滅ぼそうと
も・・・!!生みの親だけはそいつを愛さなくちゃならねェ!!!
生み出した者がそいつを否定しちゃならねェ!!造った船に!!!
男はドンと胸をはれ!!!!」

作者「これらすべてＯＮＥ　ＰＩＥＣＥからの台詞です。最初のは、ご存知主人公ルフィの台詞。二番目はチョッパーの恩人、Ｄｒ．ヒルルクの台詞。三番目は伝説の船大工と言われるフランキーの恩師、トムさんの台詞でした」

紅葉「どれもこれも良い名言よねえ」

作者「はい。しかし、最初はともかく、やはり一夏では役不足感が……」

一夏「じゃあ何で言わせたんだよ！」

作者「正直良い人選がいなかったから。としか言いようがないな」

一夏「……」

作者「さてと、今回も質問とアフレコ、双方にリクエストをくれた三月語様、本当にありがとうございます。他の皆様も、疑問に思ったことやアフレコなどがあれば、どしどしご応募ください」

直人「さてと、何度も言っているが、今日の夜１１時に、真白のＩＳの名前のアンケートは終了だ」

作者「いやあ、それがですね……」

紅葉「どうしたの？　なんか問題でも」

作者「……これを見れば解るよ。これは現在までのアンケートを集計した結果です」

1. 『Ｓｃｈｎｅｅｗｉｔｔｃｈｅｎ（シュネーヴィットヒェン）』　２票
2. 『雪那（せつな）』　２票
3. 『雪颯（ゆきはやて）』　２票
4. 『弾丸の吹雪（ブリザード・バレット）』　０票
5. 『白き流星（ヴァイス・メテオーア）』　０票

作者「という結果だ」

直人「これは……」

紅葉「見事に別れたねえ」

一夏「だな」

作者「ええ。しかしこのままだと、非常に困った話になるんですよ。真白のＩＳの名前お披露目は再来週の予定なんですが。このままだと非常に困ります。そこでもし、今日の夜１１時までに新たな投票が無かったら……」

直人「無かったら？」

作者「２週間の空きを使って、決選投票を行いたいと思います！なのでまだ投票してない皆様。どうか投票、よろしくお願いします！」

直人「ちなみに決選投票はいつまでだ？」

作者「今日の夜１１までが締め切りで、開始時間は明日の昼４時から、１０月１８日の火曜、夜１１時までとします。もし決選投票になったら、再びご投票、お願いします」

直人「さて、次はアニメ第七話。ブルーデイズ／レッドスイッチの話か」

作者「はい。ラウラとの確執、それが一気に表面化する話だと思ってください」

紅葉「つまり、直人と真白ちゃんがさらにブチ切れる話と？」

作者「はい。それでは次回も、頑張って更新しますので、応援、宜しくお願いします」

第二十一話　怒れる真剣、黒き雨と激突す（前書き）

今回はアニメ第七話　「ブルーデイズ／レッドスイッチ」の回、名前通り、直人とラウラが再び対峙します。

しかしそこに、意外な乱入者が姿を現す。

真白のＩＳの名前アンケート、来週の火曜、夜１１時までですので、まだ投票してない人は、投票御早目にお願いします。

第二十一話　怒れる真剣、黒き雨と激突す

一夏が、シャルルの秘密を知ったその翌日。
徐々に近づく学年別トーナメント。
それに伴い、クラス内も、「例の噂」で持ちきりだった。

「そ！　それは本当ですの！？」

「嘘ついてんじゃないでしょうね！」

「本当だってば！　この噂、学園中で持ちきりなんだって！」

それは、『今月の学年別トーナメントで優勝すると、織斑一夏、桜庭直人と付き合える』という噂の事だ。

そして当然、この話を聞いたセシリアと鈴も食いついてきた。

「それは、お二人も承知していますの？」

「それがね……どうも本人たちはよく解ってないみたい」

「どういう事？」

「女の子の中だけの取り決めってことみたいなのよ」

そんな風に噂の事で持ちきりとなっていると……

「おはよう」

「何を話してるの？」

そこへ、件の噂の中心人物その一である一夏と、シャルルがやってきた。

突然二人に声を掛けられ、セシリアと鈴以外の女子たちは蜘蛛の子を散らしたように逃げていく。

「じゃあ。あたし、自分のクラスに戻るから」

「そ、そうですわね。私も自分の席に戻りませんと……」

そう言って、鈴とセシリアもそそくさと逃げていく。

「何なんだ？」

「さあ？」

まるで自分たちを避けるかのようなその行動に、二人は何故かと首を傾げるのだった。

実際は、男子の二人（一人本当は女子だが）に聞かれたら不味いと思っただけなのだが、そんなことは露知らない二人なのだ。

「ん？」

「あっ……」

そしてそこに、少し遅れて、件の噂の中心人物その二、直人が教室に入る。

だが、一夏の顔を見た途端、かつて鈴に対してと同じように、ど

こか気まずそうな顔をして目をそらす。

「……」

そんな直人に、一夏は無言で近づき。

「……うりゃ」

「がっ!?」

突如、直人の額を、裏拳で小突く。

その様子に周りが呆然とする中、意外と痛かったのか、直人は小突かれた額を押さえる。

「っ……」

「痛かったか？　久しぶりだから、やっぱ加減が利かねえな」

「って、いきなり何するんだ！」

当然、いきなり裏拳をされた直人は、いつも通り飄々と言う一夏に声を荒げる。

「何って、昨日のやり残し」

「やり残しって……」

あっけらかんとばかりにそう言われたため、直人も思わず拍子抜けする。

「昨日の話はこれで終わり、だからもう気にするなよ」

それで直人も、一夏の言わんとすること、先ほどの裏拳の意味も理解した。

昨日の話、自分が一夏が誘拐されてたのを知っててそれを助けに行けなかったことだ。

思えばよく、自分はこうやって一夏に小突かれ、その都度「もう気にするな」と言われたことを思い出す。

一夏が気にするなと言ったから、なるだけ気にしないようにしてたが、それはもう昔の話。

しかも今回は理由もそうだが、その後に生じた結果、ひいてはそれによる余波の事もあり、元の性格と相まって、そう簡単にはできない。

「だけど……」

「あの時の事は、助け出されるまで何もできなかった俺も悪いからさ、お前がそんなに気にすることじゃねえよ」

そう言って、直人の肩に手を置く。

「千冬姉の言葉じゃないけど、終わった事だし、何時までも気にしたって仕方ねえだろ？」

「一夏……」

「その代わり、もし俺が不味いことになったら、その時は頼むぜ」

その言葉に、直人の中で、何かが吹っ切れる感じがした。

「当然だろ。あんな思い、もうこりごりだしな」

そう言う直人の表情は、さっきまでの暗い感じはなく、いつも通り、いや、それ以上に晴れ晴れとした感じだった。

「ありがとう一夏、本当にお前には、気づかされてばっかだな」

「そんなことねえよ。でもよかった」

その様子を見てた周りの女子たちは、「あれが男同士の友情かぁ」と、良いものを見たような表情で、その様子を見守っていたのだが……

「親睦を深めあってるところ悪いが……」

そこへ、鬼教官がやってきた。

「さっさとどけ、そして席に就け、馬鹿者共」

今日も今日とて、出席簿の綺麗な音が炸裂するのだった。

「うーん、厄介なことになったねえ」

「……他人事だな」

「いや、実際私から見ればそうでしょ？」

「それはそうかもしれんが……」

授業が終わって休み時間に、箒と紅葉は屋上にいた。

箒が校内に流れてる噂について悩んでいると、紅葉がそこへやってきて、なぜそうなったのか、紅葉が推測する理由を説明していたのだ。

説明を一通り聞き、さらにはこのことで真剣に悩んでる自分の横で、まさに他人事の様に言う紅葉に、はぁとため息をつく。

「何故だ……一夏と付き合えるのは私だけの筈なのに。それに、何故直人まで巻き込まれているんだ！」

「噂って言うのは伝言ゲームみたいなものだからね。尾鰭背鰭が付くのは仕方ないよ」

「しかし！！」

自分の告白が（かなり間違っているが）、噂と言う形で広まってしまったことに加え、そこに直人が知らぬ形で巻き込まれてしまったことに、箒はどこかいたたまれない気持ちになる。

しかし、紅葉の言うとおり、噂と言うのは、えてして尾鰭背鰭が付くもの、つまり、大げさに伝わるものだ。

何らかの形で、そう言う形になってしまっても、何ら不思議ではないと言えばそうなのだ。

「まあまあ。要は学年別トーナメントで勝てばいいんだしさ、そんな深刻になることもないでしょ」

「そ、そうだな！　優勝さえすればいいんだ！　元々、そう言う約束だしな！　うむ！」

紅葉の的を射た発言に、箒も俄然やる気を出す。

問題はいろいろ山積みだが、それはさておくとして、優勝さえすれば良い、そうすれば何の問題はない。

だが……

「？　……どうしたの？」

「い、いや……なんでもない」

「何でもないって顔じゃなかったよ。それに、目もどこか迷いがあった」

いきなり紅葉に真顔でそう言われたため、箒も思わずたじろぐ。

この紅葉、意外とこういう風に鋭いというか、どこか油断できないところがあったりするのだ。

「『心に迷いや慢心があれば、それは目に見える形となって現れる』、うちの馬鹿姉貴の受け売りだけどね」

そう言われ、箒はそのまま黙り込む。

確かに今自分は、あることで悩んでいた。

しかし、自分では平静を装ってたつもりだったが、別の意味で驚きを隠せない。

「まあ、無理に聞き出そうって言うんじゃないの。話したくないならそれで良いけどね。それじゃあね」

そう言って、紅葉は、その場を何事もなかったのかのように去っていく。

「……心に迷いがあれば、目に見える形になる……か……」

その言葉を反芻しつつ、箒はしばらく、屋上で一人立たずものだった。

「あら？」

「ん？」

一方、ここアリーナに、二人の人物が足を運んでいた。

鈴とセシリアだ。

「早いのね」

「てっきり私が一番乗りだと思っていましたのに」

「あたしはこれから学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「私も全く同じですわ」

その会話の後、二人の間に火花が散る。

元々、不仲と言うほどではないが、あまりそりが合わず、加えて負けず嫌いの二人だが、今回の学年別トーナメントに関する噂が、二人の間の火花をさらに激しくしていた。

「何？　あんた直人じゃ飽き足らず一夏まで手に入れようっての？　これだから貴族のお嬢様は欲張りなんだから」

「あら？　鈴さんも幼馴染のお二人を手に入れようとしてるのでは？　『二兎を追うものは一兎をも得ず』という言葉を知りませんの？」

無論、心から思ってるわけではなく、ある意味牽制と言うか、暗に、「一位は譲らない」、と言う意思表示なのだ。

しかしその時、鈴があることに気付く。

「あっ、でもさ。こういう場合どうなの？」

「何がですか？」

「さっきの噂を聞く限りだと、優勝したら一夏と直人と付き合えるって言ってたけど、優勝者って一人よね？」

「ええ。ん？　とすると……優勝者は必然的に、どちらかを選べるわけですか？」

「そうなるわよね。普通に考えれば」

そう、噂では、『一夏、直人と付き合える』という話だが、どちらと付き合えるか、両方と付き合えるかまでは明言されていない。優勝者は一人なのだから、一般的に考えれば、その優勝者は必然的に、どちらかを選ぶことになるはずだ。

しかしそうなると……

「残った方って、どうなるの？」

「それは……2位の方と付き合う、ってことになるのではないかと……」

断言ができるわけではないが、普通に考えれば、残った方は2位の人物とくっつくことになる。

本当にそうなるかどうかはいまだ解らずじまいだが、この考えに至った二人は、同時に、ある事を思いつく。

「……セシリア。少し提案があるんだけど」

「奇遇ですわね。私も同じことを考えていましたの」

そう言うと、二人は同時に切り出した。

「直人あげるから、あたしに1位を譲って！」

「一夏さんを差し上げますので、私に一位を譲ってください！」

何ともしょうのない提案である。

「何よ！　あんたの狙いは直人でしょ！　だったら1位ぐらい譲りなさいよ！」

「鈴さんこそ、一夏さんと一緒になりたいんでしょ！　なら順位など関係ないのではないのですか！」

どっちもどっち、どちらかが妥協すればそれで済む話なのだが、そりの合わない上に負けず嫌いの二人に、相手に頭を下げるなど、まずできるはずもなかった。

「大体！　何であんたが1位って決まってるのよ！」

「当然ですわ！　私は一夏や直人さんと同じく、入試で教官を倒したんですよ。つまり、1位になってもおかしくないと思いますけど！」

「あたしだって。初めに受けていればそれぐらいできたわよ！」

龍虎……基、狐と狸の化かし合いにしか見えないこの争い、しば

らく二人は言い争っていたのだが……

「解った！　じゃあこうしましょう！　ここで勝った方が1位になるってことで！」

「よろしくてよ。まあ、私が勝つのは目に見えてますけど」

「その言葉、そっくりそのまま返してやるわ！」

結局、今この場で戦い、勝った方に1位を譲るという事になった。

「あれ？　それってある意味八百長じゃね？」と言う疑問が浮かんできそうだが、生憎二人にそこまで考えてる余裕はない。

二人はＩＳを展開、そして、今まさにぶつかり合おうとした。

その時……

「「！！？」」

突如二人の間を、一発の砲弾が掠め、着弾点に爆風が巻き起こる。

二人が砲弾の飛んできた方向を見ると、そこにはドイツのＩＳ「シュヴァルツェア・レーゲン」を纏うラウラ・ボーデヴィッヒの姿があった。

「どういうつもり！　いきなりぶっ放してくるなんて、良い度胸してるじゃない！！」

何の勧告もなく、いきなり攻撃されたことに鈴は怒りをぶつける。

しかし、そんな鈴の言葉を意にも介さず、ラウラは冷ややかに二人を見つめる。

「中国の甲龍に、イギリスのブルー・ティアーズか……ふん、データで見た時の方が、まだ強そうではあったな」

「何、やるの？　態々ドイツくんだりからやって来てボコられたいなんて、大したマゾっぷりね。それとも、ジャガイモ農場じゃそう言うのが流行ってるの？」

「あらあら鈴さん。こちらの方は、どうも共通言語をお持ちで無いようですから、あまり苛めるのは可愛そうですわよ」

見下したような態度で言ったラウラの一言に、鈴とセシリアも、お返しとばかりに挑発的な言葉を放つ。

それでなくとも二人は、自分の思い人を打とうとした、或いは打ったこのラウラに、良い感情など持ち合わせているはずもなかった。

だがそんな二人を知ってか知らずか、ラウラはさらに挑発的な言葉を放つ。

「貴様たちのような者が、私と同じ第3世代機の操縦者とは……数だけが取り柄の国と、古いだけが取り柄の国は、よほど人材不足と見える」

その言葉に二人がカチンときた傍ら、二人のＩＳのハイパーセンサーが、『最終安全装置解除』と言う表示を映すが、今の二人にそこまで気にする余裕などない。

「この人、スクラップがお望みみたいよ！」

「そのようですわね！」

怒りのボルテージが溜まりつつあった二人だが、自分の国を馬鹿にされたことで、その怒りはさらに溜まる。

「ふん。二人がかりでどうだ？　下らん種馬二匹の為に張りあうメスどもに。この私が負けるものか」

種馬とは言わずもがな、一夏と直人の事だろう。

この言葉が、二人の怒りの炎に、油どころかガソリンを注ぎ込んだ。

「今何て言った？　アタシの耳には、どうぞ好きなだけ殴ってくださいって聞こえたんだけど！！」

「この場にいない人間の侮辱までするなんて、その軽口、二度と叩けなくして差し上げますわ！！」

ついに、二人の我慢も許容値の限界に達する。

「とっとと来い」

「「上等　（ですわ）！！」」

その言葉と同時に、二人は一気に襲い掛かるのだった。

「一夏、今日も、特訓するんだよね」

「ああ。トーナメントまで、日がないからな」

「それでなくても師匠から、このままだと予選敗退だって言われてるしな」

「うんうん。一番頑張った方が良いよねえ、一夏君は」

一方、一夏、直人、紅葉、シャルルの四人が、仲良く並んで特訓の話をしていた。

間近に迫る学年別トーナメント。

結果を残すためにも、使える時間は特訓に回しておきたい。

一夏の言葉に続く形で直人、紅葉が言った言葉に、一夏もシャルルも苦笑していた。

すると……

「第３アリーナで代表候補生三人が揉めてるんだって！！」

そう言いながら走る女子を何人か見かける。

「……三人とも、何だろうな。俺、すっごく心当たりがあるんだが」

「俺も……」

「私も……」

「僕も……かな？」

嫌な予感を覚えた二人は、直ぐさま第３アリーナへと駆け出す。

アリーナの観客席につくと、そこには既に結構な数の女子が集まっていた。

そしてよく見える場所に四人、そこに遅れて箒もやってくるが、その突如、アリーナの方で爆発が起こる。

爆風が晴れるとそこにいたのは、予想通りと言うべきか、セシリアと鈴、そしてラウラだった。

「やっぱり……」

「あいつら……一体何やってんだ！」

予感的中とばかりに渋い顔をする紅葉の隣で、少し苛立ちを隠せない直人。

そんなことは露知らず、ラウラと対戦中の二人の一方、鈴が甲龍の目玉武器、衝撃砲「龍砲」を発射する。

しかし、発射された弾丸は、ラウラが腕を突き出すと、何かに阻まれたように、彼女の目の前で爆発した。

「龍砲を止めやがった！　何だあれは！！」

「……ＡＩＣ」

「あれが……」

「そうか！　あれを装備していたから、龍砲を避けようともしなかったのか！」

「……」

龍砲の弾が止められたことに驚く一夏の横で、シャルル、紅葉、箒が思い思いの言葉を口にする。

しかし、直人はただ黙りこみ、その様子を見守っていた。

だが心なしか、その表情には怒りの気が見え隠れしていた。

「ＡＩＣ？　なんだそれ？」

「シュヴァルツェア・レーゲンに搭載されている、第３世代型兵器だよ」

「正式名称はアクティブ・イナ―シャル・キャンセラー、頭文字をとってＡＩＣって呼ばれてる。ＩＳの基本システムの一つ、ＰＩＣの発展型で、相手の動きや攻撃を、強制的に停止させることができるの」

「そのため、慣性停止能力とも言われている」

一夏の問いかけに、シャルル、紅葉、箒が順に説明する。

シャルルと紅葉は、ともにＩＳ関連の企業出身という事もあり、箒も、姉がＩＳ関係者と言うだけあって、流石と言える説明をする。

だがそんな説明に、「ふぅん」と、あまり感心してないような返事をしながら、一夏は再びアリーナの方に目を向ける。

「解っているのか！」

「今見た。それで十分だ」

その返事に箒が語調強く聞くが、一夏はただ一言そう言って、真剣なまなざしで、戦いの行く末を見守る。

しかし一方で、戦いは更に苛烈さを増していった。

二対一と言う状況にありながら、ラウラは鈴とセシリアの攻撃をものともせず、二人を圧倒する。

だが、それはある意味当然かもしれない。

二対一、という状況とはいっても、二人は特に連携などは意識し

ておらず、いわゆる、「各々が勝手に攻撃を仕掛けてる」状態なのだ。
いくら数の上で有利でも、それを分散させてしまえば、その有利を自ら捨てることになる。
しかも、甲龍の龍砲は、ＡＩＣとの相性が悪く、それがこの状況に拍車をかけていた。

やがて、ラウラは鈴の足に絡ませたワイヤーブレードを使って二人をぶつけ、そのまま地面に叩き付ける。

しかし、尚も龍砲を撃とうとする鈴に対し、レールガンを使って龍砲を破壊するが、その隙にセシリアが、腰部のビットからミサイルを発射する。

至近距離なら、流石に反応的ないと考えての行動だったのだろう。

だが、ラウラは無傷だった。

実際はダメージを受けたのかもしれないが、深刻なほどではないという事なのだろう。

その後は、ラウラのワンサイドゲームとなった。

二人の首にワイヤーブレードを絡ませて引き摺り込み、徹底的に攻撃を与えた。

いや、それは最早、戦いと呼べるものではなかった。

「ちょっと何あれ！　完全にやりすぎじゃん！！」

「酷い！　あれじゃシールドエネルギーが持たないよ！！」

その様子に、紅葉もシャルルも声を荒げる。

しかし、二人、いや、この場にいる誰もが、そんなことを着に掛ける余裕はない。

何故なら、このまま続けば、もっと危険なことが待っているからだ。

「もしダメージが蓄積して、ＩＳが強制解除されれば、二人の命に関わるぞ！」

箒の言うとおり、このままの状態が続けば、二人は怪我どころか、命の危機にさらされてしまう。

そうなれば、二人がどうなるかなど、考えただけでも恐ろしい事だった。

「あんな……」

「直人？」

「あんなのが……あの人の教えた力だって言うのか」

しかし、ここで一夏は、直人の様子がおかしいことに気付く。

肩を震わせ、顔を俯かせていたが、明らかに怒ってる様子が目に

見えて解ってた。

「あんな暴力が……あの人の力だなんて言わせない。言わせてたまるか！！」

そう叫んだ刹那、光に包まれた直人は、そのままその場から姿を消す。

「何っ！？」

そして突然、ラウラが驚きの表情を浮かべる。

何故なら、彼女の目の前で逆リンチされていたセシリアと鈴はいなくなり、さらに、右肩のレールカノンが、真っ二つに斬られ、切られた砲身の下部が、地面に鈍い音を立てて落ちたのだ。

そして、ＩＳを纏った直人が、二人を抱きかかえ、アリーナの隅に居たのだ。

「二人とも、大丈夫か？　しっかりしろ！」

「うぅ……直……人？」

「直人……さん？」

「良かった。命に別状はないな。後で保健室に連れてくから、少しここで待っててくれ」

そう言って二人を下ろすと、直人は再びラウラに向く。

「おい、ボーデヴィッヒ」

「！？」

一方のラウラは、突然の事で困惑してたところへ、突如として、自分が目の敵にしている直人に声を掛けられ驚く。

何故あの二人があそこにいるのか。

何故レールカノンが斬られているのか。

何故、あの男がいつの間にアリーナにいるのか。

困惑する要素はかなりあるが、それでも顔をいつも通りの冷たい表情に変え、ラウラも直人の方を向く。

「俺言ったよな。俺の事をどう思おうと、何て言おうと勝手だが、俺の仲間に、友達に、大事な奴に危害を加えるなら、そのＩＳ事潰すって」

「だ、だから何だと言うのだ！」

虚勢にも思える言葉だったが、直人の言葉は、今まで誰もが感じたことのないような殺気を放っており、ラウラでさえ、少し恐怖を

感じた。

だがそれが、逆に思考を冷静にさせたらしく、今までの疑問が、すべて直人がやったことだと考えがまとまるのに、そう時間はかからなかった。

「なのに俺の幼馴染とクラスメイトをこんな目に遭わせて。覚悟はできてんだろうな？」

「ふん。それがどうした？」

殺気をビンビンに放ち、ラウラにドスのきいた声で放つ直人に対し、ラウラはいつも通りの、見下したような冷たい態度で対抗する。

「先ほどのスピードと、そいつらを助けると同時に、レールカノンを切り裂いた動きは認めてやる。だが、所詮はスピードだけが取り柄の欠陥機。その上、そんな雑魚の為に感情的になるとは。所詮貴様も、私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、有象無象の一人に過ぎん！」

「なら、その有象無象に斬られるてめえは、それ以下ってことだな」

「何？」

ラウラは先ほどの動きを称賛しつつも「取るに足らない」と決めつける。

しかし、その直後、取るに足らないと決めたその相手から、自分は有象無象以下だと言われ、眉をひそめる。

「貴様ごときが手に持つ鈍で、私を斬れると思っているのか？」

「俺には聞こえるぜ。てめえのすすり泣く声がな……」

すでに直人の方は、ラウラと争う姿勢を見せている。

右手に三日月宗近、左手に、肩に懸架されてる四本のうちの一本、「童子切安綱」を持ち、二刀流の構えを取る。

「面白い。貴様がここにいるという事は、あの男もいるんだろ？ちょうどいい。その減らず口を叩けなくして、奴への見せしめにしてくれる！」

「御託はいいから……さっさと来い！」

ラウラはその言葉と共に、両手にプラズマ手刀を展開、既にキレていた直人も、二刀を構え突撃する。

しかし、二人の刃が交わろうとした瞬間……

二人の間で、大きな爆発が起きた。

「！？」

「何っ！？」

突然の事に驚き、二人は距離を取る。

一体誰の仕業なのか、二人はしばらく、爆発の起きた地点を見守っていたが。

「直人……下がって」

「っ！！」

突如声が聞こえ、直人もラウラも、アリーナにいた全員が、その声の発生源の方に顔を向ける。

そこはピットの上、そしてそこには……

「その女の相手は……私がする」

純白、という言葉が似合いそうな、白いＩＳに身を包んだ、真白の姿があった。

第二十一話　怒れる真剣、黒き雨と激突す（後書き）

桜爛の間

作者「ブルーデイズ／レッドスイッチに突入！　直人と一夏の和解（って言うほどの物でもない気がしますが）、ラウラＶＳセシリア＆鈴、そして、直人とラウラの対峙と、真白の登場でした！」

紅葉「一夏君と直人のあれは、うん、良かった。あれは見ててすごく良かった」

作者「うまくできてるかどうかは、正直自信ありませんが」

紅葉「でも、あそこで現れた織斑先生に「ＫＹ？」って心で思ったら、いきなり出席簿が飛んできた」

作者「それはそれは」

紅葉「織斑先生って、テレパシーの持ち主じゃないの？」

作者「うーん。思ったり思わなかったり」

直人「それ、間違ってないかもな」

紅葉「うわっ！？　直人居たの！？」

直人「ああ。だがなぜか作者から、「序盤はあまりしゃべらなくて良い」って言われてたからな」

作者「いやあ。今回は序盤から君を出すのは、憚るべきかなって思って。っとそんなことより、後書きコーナー行くぞ！　まずは「直人の目安箱」、三月語様からのご質問だ！！」

1．直人に

　テイルズ系の剣技が使えることは度々見ているので分かりますが、大体、ということは魔王爆炎槍（ＴＯＩＲルカ追加技）とか熱波旋風刃、閃空翔裂波とかも使える、ということですか？魔王灼滅刃とか神裂閃光斬とかも・・・？

直人「まあ、使えないこともないな。ただし、剣の動きだけで、炎とかそう言うエフェクトは出ないから、完全にできるとは言えないがな」

作者「そうだね。強いて人離れしてる点を挙げるとすれば、居合で鎌鼬みたいな斬撃を飛ばせることかな？」

直人「斬撃って言っても、要は少し鋭い風を起こせるだけだ。蝋燭の火位は消せるが、人を斬れるほどの殺傷性は無い」

作者「だそうです。さて、ここで一旦君には退場してもらいます」

直人「何？　どういうことだ？」

紅葉「良いから良いから」

作者「さて、直人が居なくなったところで登場してもらいましょう。どうぞ！」

セシリア「いきなり呼ばれましたが、一体なんですの？」

作者「今回は目安箱に、君宛の質問があったからね。それを答えてもらうよ」

2．セシリアに
前回の質問1で、（直人が好きだとお見受けしますが）同じ条件で貴女はどうしますか？

作者「恐らく先週の後書きコーナーで答えた、『沙霧の様な女の子が突然現れて、直人に『好き』と出会い頭に告白されたら？』って言う質問の事だと思うんだが」

セシリア「それはもちろん。直人さんとその方との関係を『包み隠さず』お話してもらいます♪」

作者「え、笑顔で怖いこと言うなあ……じゃあ次は、「抱腹絶倒！　アフレコ委員会！！」今回は女性陣に頑張ってもらいましょう。では参加者、カモーン！」

真白「来た……」

鈴「久しぶりね。こっちで出るのは」

作者「本日は真白、鈴、セシリア、そして紅葉に行ってもらいます。はい、これそれぞれの台詞ね」

紅葉「ふむふむ」

セシリア「えっ!?　こ、こんなことを……／／／／／／」

鈴「……ねえ、これ喧嘩売ってんの？」

真白「……解った」

作者「それではまず、トップバッターはセシリア！」

セシリア「えっ!?　わ、私ですか!?」

作者「ちゃっちゃと言っちゃいなさい。楽になるぞ？」

セシリア「うぅ……解りました」

作者「それじゃ、どうぞ」

セシリア「私は直人さんがいればいいんです・・・」

作者「【うたわれるものらじお】より、柚木さんの一言でした」

紅葉「元の作品でヒロインを演じてる人だね」

作者「ほかにも、リリカルマジカルの風の癒し手さんとか、「腸をぶちまけろ！」の人とかね」

セシリア「／／／／／／」

鈴「良かったわねえセシリア。告白できて（ー∀ー）ニヤニヤ」

セシリア「り、鈴さん！！」

作者「はいはい。じゃあ次は鈴ね」

鈴「えっ？　あたし！？」

作者「はい」

鈴「……どうしても？」

作者「どうしても」

鈴「……解ったわよ！　やればいいんでしょ、やれば！！」

作者「はい、ではどうぞ」

鈴「ちっちゃくないわよ！！」

作者「【ｗｏｒｋｉｎｇ┐！】で種島ぽぷらがよく言う台詞だそうです」

紅葉「作者、一応知ってるよね？」

作者「真面目には見ていませんが。ＢＳ１１で、あれの後に、ぬら孫　千年魔京やってるんだもん」

鈴「って言うか何コレ！　作者！　あんたあたしに喧嘩売ってんの！！」

作者「いや、真白はとてもこんな可愛く言いそうにないし、ラウラなんて論外だったから……」

鈴「くぅ……」

作者「じゃあ次は真白ね」

真白「うん、わかった」

真白「・・・私は一発の銃弾。銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない・・・。・・・ただ、目的に向かって飛ぶだけ」

作者「【緋弾のアリア】より、レキが敵を弾く時の癖で言う台詞だそうです」

鈴「似合ってるわね」

セシリア「そうですわね」

真白「そうかな？」

作者「元を見てないから何とも言えないけど。次は紅葉ね」

紅葉「ほいほーい」

紅葉「二次元が初恋じゃダメですか！？」

作者「【うたわれるものらじお】より、これは三宅さんの台詞です」

紅葉「何だろうね。これを言った人、本編ではかなりの真面目キャラを演じてる筈なのに……」

作者「まあまあ、アニメのキャラ＝声優さんって訳じゃありませんから。それじゃあ最後は、また真白にやってもらいます」

真白「また？　良いけど……」

作者「それじゃ最後、どうぞ！」

真白「……好きって言ってにゃん♪」

作者「【うたわれるものらじお】で、柚木さんが言った一言、その二です」

紅葉「真白ちゃん……可愛い♪」

真白「そう？」

作者「はてさて、これで一体何人の人がハートキャッチされたのやら。ではいつもながら、質問とアフレコ、随時募集しております！」

紅葉「それと重大発表、真白ちゃんのＩＳの名前決選投票は、来週火曜、夜１１時をもって、締め切りとさせていただきます」

作者「現在四表集まっておりますが、まだ投票してない人がいましたら、ぜひ、ご投票お願いします」

紅葉「お願いしまーす！」

作者「そして次回は、乱入した真白が、ラウラと派手にドンパチやらかします！　真白のＩＳの初お披露目、そしてＶＳラウラ、果たしてどうなるのか、次回も頑張って執筆したいと思います！！」

第二十二話　暴風雪、黒き雨を凍てつかす

「真白……」

ラウラの暴虐に激昂し、刃を交えようとした直人だったが、真白の介入によって止められる。

だが、その場にいた誰もが、今の真白の姿に驚愕している。

ラウラのシュヴァルツェア・レーゲンと対極をなすような、それでいて、一夏の白式よりも輝かしさを放つ、純白の装甲に身を包む。

脚部と、左右の楯の様な形状をした非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）は、直線の多い、角ばったデザインをしており、ＩＳとしては珍しいと言える、重厚なフォルムをしていた。

そして両肩には、二つのガトリング砲が装備されていた。

「もしかしてそれが……」

「雪颯。端午が作ってくれた……私だけの専用機」

ゆっくりとピットからアリーナへと降りながらも、真白はラウラに対し、殺気と軽蔑の入り混じった視線をぶつける。

そして、一旦視線を直人に移すと、真白は言ってきた。

「直人は二人をお願い。こいつは、私がやる」

真白は、直人に鈴とセシリアを任せ、自分がラウラを倒すと言ってきた。

これに直人は難色を示すが、それ以上に不味いことになったと思っていた。

（真白のやつ……相当怒ってる）

元からラウラに敵愾心全開の真白ではあったが、今回の彼女の行動が、その怒りをさらに増幅させたのだろう。

今までにない冷たい感じが、アリーナ全体を支配していた。

尤も、観客席のあたりはまだそんな感じがないころから、これでもまだ抑えているのだろう。

「ふん。さっきの雑魚共も二人がかりだったんだ、お前たちも二人がかりできたらどうだ？」

しかしこのラウラ、火に油を注ぐのがお上手なご様子。

先ほどの二人を挙げ、直人と真白に二人がかりで来るように言ってくる。

「直人が手を掛けることはない。貴方なんて……私一人で充分」

「何だと……言ってくれるな」

しかし、真白は自分一人で充分だと言い、それにラウラも反応する。

「……あんまりやりすぎるなよ」

すっかり怒りが収まった……というより、興が冷めた直人はそう呟くと、再びアリーナの隅、鈴とセシリアの所に向かう。

「後悔するぞ」

「それはこっちの台詞」

一言そう言うと、真白の両手に光が集まり、武器を形成する。

光が収まると、右手には、銃口が二つ存在するライフル。

左手の下部には、大型の対物ライフル（アンリマテリアルライフル）が装備されていた。

「貴方は倒す。私の手で！」

「やれるものならやってみろ！」

こうして、黒と白は対峙するのだった。

「ありゃあ、完全にキレてるな……」

一方、アリーナの隅から、ピットの方に移動した直人は、その様子を見ていた。

気を失っていた鈴とセシリアはピットの中に搬送し、休ませてあ

る。
いくら隅の方とはいえ、二人がもし戦いを始めれば、アリーナに安全な場所など存在しなくなるため、当然の判断である。
「しっかし端午のやつ、相変わらずとんでもないもん作るなあ……」
真白のＩＳ、雪颯を見て、直人はその開発者である黄原端午の事を浮かべあきれ返る。
いまのところ、装備だけで見れば中、遠距離型であることは一目瞭然だが、唯装甲の厚いＩＳ、言う訳ではないだろう。
「「「「直人！！」」」」
とそこに、一夏、箒、紅葉、シャルルがやってくる。
「おお、皆。丁度いい、二人を頼む」
「う、うん」
直人に言われ、紅葉とシャルルが二人に駆け寄る。
「うわぁ、酷い……」
「私、先生呼んでくる！」
「うん！　お願い！！」
二人をシャルルに任せ、紅葉は先生を呼びに駆け出して行った。
命に別状はないとはいえ、怪我をしているので、至極当然の行動である。

「直人。あれが真白のＩＳか？」

その一方、ピットでアリーナの様子を見つめる直人に、一夏と箒が近づき、一夏が直人に聞いてきた。

「みたいだな」

「だが、なんだあのＩＳは？　あそこまで装甲を厚くする必要があるのか？」

箒の疑問は当然だった。

無論、装甲を厚くすれば、その分操縦者を守ることができるので、その点で言えば、普通は理に適ってるように見える。

だが、ＩＳには操縦者を守る不可視のシールドと絶対防御があるため、物理シールドを装備する以外で装甲を厚くするのは、はっきり言って機動力の低下でしかなく、デメリットにしかならない。

なのに、その装甲を敢えて厚くしてるのだ、何か目的、或いは機構があって、そのような仕様にしたと考えるのが妥当だ。

「まあ、それは見てれば解るだろう。マッドサイエンティストの変態だが、あいつの作るものは、どれも一流だしな」

「本当に、あの人には容赦ないんだなあ……お前」

「その言葉……少しわかる気がするな」

苦笑する一夏と、思い当たる節がある箒の言葉をよそに、直人はアリーナをただじっと見つめるのだった。

一方、アリーナにいる二人は、いまだににらみ合いを続けていた。

お互い、相手の出方を窺っているのだ。

（先ほどの攻撃……そして手持ちの武装……あれらを見ても、奴のＩＳは射撃主体のようだな）

ラウラは真白の出方を窺いつつ、先ほどの行動から、ＩＳの特性を冷静に分析する。

（先ほどのせいでレールカノンを失ったが、戦闘に支障はない。それに射撃主体なら、奴の弱点は接近戦の可能性が高い。ならば……）

そう思った刹那、ラウラは一気に動き出した。

両手にプラズマ手刀を展開し、一気に真白と距離を詰める。

「……」

ところが、真白はそれを避けようとしない。

「余裕だな。だが、もらった！！」

動こうとしない真白をむしろ好都合とばかりに、プラズマ手刀を交差状態から放つ。

しかし、その刃は通らなかった。

「何！？」

ラウラのプラズマ手刀は、いつの間にかライフルから変わっていた、一本のダガーによって防がれていた。

「何時の間に……」

「貴女が私の武装を見て、接近戦を仕掛けてくることは容易に想像できた。それなら後は動きだけみれば、それを捌くのは容易」

真白は、自分のＩＳと先ほどの攻撃から、ラウラが自分を射撃戦主体と位置づけ、接近戦を仕掛けてくることを容易に想像していた。

それでも、プラズマ手刀を手に持ってるダガー一本で防いでることに、ラウラは驚きを隠せない。

できないことはないだろうが、やるには相当の技量が必要になる。

それを目の前の敵は、いとも簡単にやってしまったのだ。

「ん！！」

「くっ！！」

真白はダガーに力を籠め、ラウラを弾く。

そして間断を置かず、左腕のアンチマテリアルライフルを三発放つ。

「そう言えば貴様は見てなかったな、この停止結界を！」

ラウラは右手を突き出し、ＡＩＣを使ってライフルの弾丸を止める。

すると真白は、再びダガーから銃口が二つあるライフルに持ち替え、下の銃口から三発の弾丸が発射される。

「無駄だと言っている！」

ＡＩＣの絶対性を知っているラウラは、そのまま防御できると思っていた。

だが、弾の軌道を見て、その考えは一瞬で崩れ去った。

「！！？」

気付くも時すでに遅し。

真白の放った弾丸は、先にＡＩＣによって止められていたアンチマテリアルライフルの弾丸に、吸い込まれる様に命中したのだ。

すると、止められてた弾丸と、先ほど放たれた弾丸は、一斉にラウラの目前で爆発した。

「くっ！！」

ＡＩＣによってダメージは無いが、目の前の爆風によって視界を奪われる。

そして爆煙が晴れると、目の前に真白はいなかった。

「……」

ハイパーセンサーを使って、すぐさま真白の位置を特定しようとするが。

「ここ……」

声の下方向は、ラウラの真後ろだった。

そしてそう言った刹那、両肩のガトリング砲が回転し、火を噴いた。

ラウラは初弾を何発か受けたが、すぐさま回避行動をとって距離を取る。

「良い気になるな！」

そしてワイヤーブレードを発射し、一発は真白の足に絡まる。

「捕まえた。終わりだ」

ラウラは余裕の表情でいた。

真白をとらえ、後は再び距離を詰めるだけだと思っていた。

「……あなたがね」

「何？」

しかし、実は真白にとっては、この状況は全く逆だった。

左腕のライフルをしまうと、空いた左手で、足に絡まったワイヤーブレードを引っ張ったのだ。

「何！？　くっ……」

一瞬ワイヤーを引かれ、倒れそうになったが、すぐさま体勢を立て直し、負けじとワイヤーを引っ張る。

「無駄……」

すると今度は、右手にライフルを持って、ラウラに向かって斉射して来た。

「くっ！　動けないと知っての攻撃か、だが私の停止結界の前では……」

無意味と言おうとしたが、その言葉を繋ぐことはできなかった。

「……」

「のわっ！」

突如、真白は引っ張っていたワイヤーを手放した為、ワイヤーを

引っ張っていたラウラは、そのまま後ろへ転倒してしまう。

その結果、ＡＩＣが突如として解除され、足元を狙うように撃ったライフルのエネルギー弾が命中する。

「逃げる暇も与えない！」

そう言うと、真白は両手の武装と、両肩のビームガトリングを一斉に掃射して来た。

そしてラウラの転倒したところに、放たれたエネルギー、実弾、双方の弾丸が、まるで雨霰の如く降り注いだ。

「なめるなーーーーー！！」

しかし、その攻撃を掻い潜り、ラウラがプラズマ手刀を展開して距離を詰めてくる。

「あきらめの悪い……」

そう言うと、ラウラの攻撃をかわし、その勢いを利用した回転蹴りをお見舞いする。

「くぅ！！」

何とか防御したラウラだが、そのまま距離を離されてしまう。

「これで……終わり！！」

すると今度は、左右の非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）の裏側と、脚部の装甲から、

四発の大きめのミサイルが発射される。

「くっ、無駄だ！　すべて薙ぎ払う！！」

そう言ってプラズマ手刀を再び展開、そのままミサイルを切り落とそうとするが、変化はふいに訪れた。

ミサイルは突如、先端部分が外れ、その中から、無数の小型ミサイルが一斉に襲い掛かってきたのだ。

「これは……多弾頭ミサイル！？」

いくらのラウラでも、襲い掛かる無数のミサイルをすべて払うことは不可能だった。

その結果ラウラは、襲い掛かる無数のミサイルの嵐にさらされる羽目になったのだった。

「くっ！　おのれ！！」

ミサイルの猛攻が止んだと思った、次の瞬間だった。

「がっ！？」

突如、胸のあたりに衝撃が走る。

そこには、一発の弾丸が命中していたのだ。

「まだ……終わらない！」

そう言うと真白は再び、左手のアンチマテリアルライフルを立て

続けに放つ。

一発目は先ほどの胸部への攻撃、二発目は右のわき腹、そのまま腰部、左のわき腹に立て続けに命中する。

ミサイルの猛攻の次に襲ってきた精密射撃に、ラウラはＡＩＣの展開が間に合わず、そのまま食らい続けた。

「今度こそ、終わり！！」

そう言うと、ライフルから再び弾が発射され、それは、先に撃った四発の弾とを繋ぐように、ラウラの腹部に直撃する。

その時にできた形は、さながら十字架のようだった。

「ぬわっ！？」

そして最後の弾丸を受けたラウラは吹っ飛ばされ、そのまま地面に倒れこむ。

「はぁ……はぁ……」

地面に倒れこんだラウラは、衝撃を受けていた。

（負ける？　この私が……負けるだと！？）

そのまま倒れこんでるラウラに、真白は静かに近づく。

そして、アンチマテリアルライフルの銃口をラウラの額に突き付け、呟いた。

「貴女は直人を傷つけただけでなく、直人を怒らせた。直人の敵は、私の敵……だから、許さない！」

底冷えするような声で、凍てつくような、それでいて怒りを内包した瞳でラウラを見つめつつ、真白は言葉をつづけた。

「この至近距離じゃ、自慢のＡＩＣだって間に合わない。いくら絶対防御でも、この距離で攻撃を受ければ、どうなるか知ってるよね？」

「くっ！！」

ラウラは悔しさと受け入れ難い現実に顔をしかめ、真白を睨みつける。

確かにこの至近距離では、ラウラがＡＩＣを展開するより早く、真白がライフルの引き金を引く方が早いだろう。

いかに絶対防御で守られているといっても、至近距離で対物ライフルの攻撃など受ければ、唯では済まないのは明白だった。

だがこの時、それらの要素を考えるあまり、彼女は気付かなかった。

真白の瞳の色が、蒼く変化していることに。

「ここで、あの二人を傷つけたこと、そして直人を怒らせたことを大声で悔いれば、この位で済ませてあげる」

「ふざけるな！！」

冷たく言い放った真白の勧告に、ラウラは声を荒げる。

「私は、負けられない。貴様にも……あいつらにも……他の誰にも……負けるわけにはいかない！」

「……？」

その時、真白は何かを感じ取ったようだが、すぐさまさっきまでの冷たい表情に戻り、ライフルの引き金に指を掛ける。

「それじゃあ……バイバイ」

そう言って、引き金を引こうとした、その瞬間……

「……！！」

「！！？」

突如、左手に持ってた真白のライフルが宙を舞い、鈍い音を立てて地面に落下したのだ。

そして、それを行った人物は、今、ラウラと真白の間に割って入っていた。

「やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

その正体は、ＩＳも展開せず、ＩＳの近接用ブレードを持っていた、千冬だったのだ。

「あっ……」

その一瞬で、真白は、今まで自分がやってたことを思い出し、愕然とする。

「模擬戦をやるのは一向に構わん。だが、アリーナのバリア破壊に加え、生徒が一人殺されそうになったとあっては、教師として黙認するわけにいかんだろう」

「……」

千冬の言うとおり、アリーナのバリア破壊に加え、目の前で生徒が殺害されようとしていたとあっては、学園の教師として、黙ってみているわけにはいかなかった。

バリア破壊は直人の仕業だとしても、自分のやろうとしていたことに、真白は俯き、黙り込むしかなかった。

「この戦いの決着は、学年別トーナメントで付けてもらう。良いな？」

「教官がそうおっしゃるなら」

「……はい」

千冬の問いかけに、ラウラと真白は同意し、ＩＳを解除する。

「ピットの上で見ている連中も、それで良いな？」

そう言いながら千冬は、ピットの上にいた五人にも問いかける。

「あ、ああ……」

「教師には『はい』と答えろ。馬鹿者」

「！？　は……はい」

まず最初に答えたのは一夏だが、答え方が不味かった。

すぐさま千冬に睨まれ、遠くであるにも関わらず、気圧されてしまう。

「それが妥当ですしね、俺は異存はありません」

「僕もそれで構いません」

「異議なし」

「……」

そして一夏に続き、直人、シャルル、紅葉と肯定の言葉をつづける。

箒は黙ったまんまであったが、特に異論はなかった。

「ではこれより、学年別トーナメントまでの、私闘の一切を禁止する。解散！！」

こうして千冬の一言により、このアリーナの騒動は一応の決着を見るのだった。

第二十二話　暴風雪、黒き雨を凍てつかす（後書き）

桜爛の間

作者「えー、まずはアンケートの結果を発表したいと思います。約三週間の予選投票と、二週間に及ぶ決選投票の結果、次のようになりました」

1. 『Ｓｃｈｎｅｅｗｉｔｔｃｈｅｎ（シュネーヴィットヒェン）』　２票
2. 『雪那（せつな）』　０票
3. 『雪颯（ゆきはやて）』　３票

作者「と言う訳で、劇中で明かしましたが、真白のＩＳの名前は、「雪颯（ゆきはやて）」に決まりました。まず、名前を募集していただいた、三月語様とサザンクロス様。そして、この度の投票にご協力いただいた

皆様方、本当に、ありがとうございました！！」

直人「んで、今回の話は、真白とボーデヴィッヒの対決だったわけだが」

作者「マジで真白無双な話になってしまった。装備自体はこの話以前から決めていたが、皆さんいかがだったでしょうか？」

直人「肩のガトリング砲に、エネルギーと実弾の両方を打ち分けるライフル、そして狙撃用のアンチマテリアルライフル。極めつけに足とアンロック・ユニットから発射する多弾頭ミサイル。見事なまでに射撃戦特化の機体にしてくれたな」

作者「真白のＩＳのコンセプトとして、「吹雪の如き猛撃」というのを考えていたので、それに射撃が得意と言う性質を合わせた結果、このようになりました」

直人「まあ、それはさておき、師匠の介入で、どうにかこの騒動は収まったわけだが、学年別トーナメント、一体どうなるだろうな？」

作者「それはお楽しみってことで。それでは後書きコーナーに参りたいと思います。まずは「直人の目安箱」から、三月語様から、全員への質問です！」

全員に、です。

自分が求める理想の彼氏ｏｒ彼女像は？

作者「ええ、これについては私が一人一人に聞いてきました。その結果がこちらです」

直人・一夏↓考えたこともない。

真白↓まだよく解らない。

箒・鈴・シャルル↓一夏

紅葉・セシリア↓直人

作者「まあ、簡潔に言えばこんな感じです。一応ラウラにも聞いてみたんですが、「下らん」の一言で一蹴されました」

直人「だろうな」

作者「では次、「抱腹絶倒！　アフレコ委員会！！」です。今回はこの二人に来てもらいました」

紅葉「またまた登場！　ブイ！」

箒「いきなり呼ばれたんだが」

直人「今回は紅葉と箒か」

作者「そ、三月語様のご指名だから、はいこれ」

紅葉「どれどれ……」

箒「ふむ……」

作者「それではまず紅葉から、どうぞ！」

紅葉「はぅ～、真白ちゃんかぁいいよ～！お持ち帰りぃ～☆」

作者「【ひぐらしのなく頃に】より、レナの台詞です」

直人「いかにも紅葉が言いそうなセリフだな」

作者「そのまま真白を本気でお持ち帰りしそうですね。では次、箒！」

箒「ひれ伏すがいい、鬼ヶ淵（おにがぶち）の末裔たちよ！」

作者「【ひぐらしデイブレイクＰＯＲＴＡＢＬＥ】より、条件を満たして勝利した際の、羽入の台詞だそうです」

直人「これは箒より、ボーデヴィッヒの方が良いんじゃないか？」

作者「あの子呼んだらここが修羅場になるよ、それに、似合ってるから良いじゃん」

直人「まあ、そうだが……」

作者「さて、本日はこれにてお開き！　次回はこの騒動の後の話、直人は一体誰と組むことになるのか！？」

直人「何？　真白じゃないのか？」

作者「それは来週になってからのお楽しみ！　それではまた次回！！」

第二十三話　学年別トーナメント、開幕！（前書き）

作者「今回で、アニメ第七話分終了だ」

直人「あのアリーナでの一件の後の話だな」

作者「そして学年別トーナメントの話です。あと紅葉がちょっと乙女です」

直人「おい。それどういう……」

作者「それではご覧ください！」

第二十三話　学年別トーナメント、開幕！

アリーナでの私闘事件から、すでに日は暮れ、夕方になっていた。

ここ保健室では、ラウラとの模擬戦で負傷した、鈴とセシリア、そして、二人の様子を見に来た一夏、直人、シャルル、紅葉、真白の計七人がいた。

「……」

「……」

しかし、包帯を巻かれたけが人二人は、どこか不機嫌そうだった。

「別に助けてくれなくて良かったのに……」

「あのまま続けていれば、勝ってましたわ」

加えて助けてもらった身の上なのに関わらず、強がりまで言う始末だった。

「お前らなぁ……直人が助けなかったら、もっとひどいことになってたかもしれねぇってのに……」

「まぁいいが、大事に至らなくて本当によかったよ。俺としては」

そんな二人に一夏は呆れ、直人も呆れつつ、ほっと胸をなでおろす。

直人自身、二人のこういう態度にはもう慣れっこだったし、それ

より、命に別状がない事の方が、良かったのだ。

「二人とも無理しちゃって」

「うんうん」

そう言ったのは、飲み物を持って戻ってきたシャルルと紅葉だった。

「はっ？」

「無理って？」

「二人とも、好きな人に恥ずかしいところ見せたから、恥ずかしいんだよねえ」

「気持ちはわかるよ。私もあんなとこ見られたら、恥ずかしいもんねえ」

「「ん？」」

ひそひそ声で一夏達には聞こえなかったが、シャルルと紅葉は二人にそう言ったのだ。

だが、そんなことを言ってしまえば……

「な、なななな、何を言ってるのか、全然わからないわね！！」

「べ、べべべ別に、私無理なんてしていませんわよ！！」

図星を突かれ、大慌てで顔を真っ赤にして否定しながらも、二人

が持ってきた飲み物を飲み始めるが……

「そもそも、何でラウラとバトルすることになったんだ？」

「だな。何か気に障る事でも言われたのか？」

そう一夏と直人が聞いてきたため、二人はそろってむせ返ってしまう。

まあ一夏にしても直人にしても、何故二人がラウラとバトルすることになったのか、最初からその場にいなかったために知らず、聞いてくるのは当然と言えば当然だ。

「けほっ！　けほっ！　え？　い、いや、それは……」

「何と言いますか……その……けほっ！　けほっ！　女のプライドを侮辱されたから……ですわね」

「「はぁ？」」

二人の答えは曖昧というか、とにかく、一夏と直人は、それを聞いて益々首を傾げた。

しかし、それで解った人物がここに二人いたりする。

「ああ。もしかして、二人とも一夏と直人の事……」

「そう言う事か。照れることないのに……」

「「わーーーーー！！」」

シャルルと紅葉が何か言おうとした瞬間、二人が大慌てで二人の口を塞いできた。
当然、鈴は一夏、セシリアは直人の事で怒ったのだが、二人の目の前で知られるのが相当恥ずかしいようだ。

「あんた達って本当に一言多いわね！！」

「そ、そうですわ。全くです！！」

「やめとけってお前ら、傷が悪化するぞ」

「そうだぞ！　さっきからけが人のくせに、動きすぎだぞ」

そう言って、一夏が鈴の、直人がセシリアの肩に手を置いた瞬間

……

「「ひぎゅう！？！？！？」」

二人に激痛が走り、奇声を上げながら、怪我を押さえながら蹲ってしまう。

「ほら見ろ。言わんこっちゃない」

「馬鹿だなあ、無理するなって」

「馬鹿って何よ馬鹿って！　この馬鹿！！」

「お二人の方こそ、大馬鹿ですわ！！」

「バーカバーカ、馬鹿義兄弟！！」

「「……何なんだよ」」

痛みに悶える二人を、直人と一夏は咎めるのだが、言い方が不味かった。

当の二人に、逆にものすごい剣幕でそう言われ、二人は頭をかきむしるしかなかった。

「直人……」

「ん？」

とここで、真白が直人のズボンを引っ張り、直人を呼ぶ。

「……御免なさい」

「何だよ急に」

「今日の事……その……怒りを抑えられなくて……」

おそらく先ほどアリーナで、ラウラを殺しかけたことだろう。

彼女はあの時、怒りで我を忘れ、危うく引き金を引くところだった。

もし千冬が介入しなければ、取り返しのつかないことになっていただろう。

「別にいいって、俺だって、怒りで自分を見失うこと位あるさ」

「でも……」

「だったら、もうしないようにすればいいじゃないか。だからそんな顔するな」

「……うん」

直人に励まされ、真白はそう呟く。

「何？　何があったの？」

「一体何のお話をしていますの？」

とここで、気絶していた鈴とセシリアが興味を持つ。

「ああ、実は……」

それを、アリーナの様子を見ていた一夏が、伝えようとしたその時。

突如、何か地響きが聞こえてくる。

棚を見てみると、薬の入った瓶がカタカタと揺れ、今にも落ちそうだった。

「何？　地震？」

「いや、何か音が近づいてきてるような気が……」

直人が嫌な予感を思い浮かべていると。

『織斑君！』

『桜庭君！』

『デュノア君！』

突如保健室に、多数の女子がなだれ込んできたのだ。

「な、何なんだ！？」

「知るか！　ってか、ちょっと落ち着けって！！」

突然の事に困惑する三人、直人がなんとかその場を収めようとする。

「ど、如何したの皆？」

『これ！！』

そう言って見せてきた一枚の紙を、三人は貰って読んでみる。

「何これ？」

「学年別トーナメントに関する紙か？」

「えーっと……今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的

な模擬戦闘を行うため、二人組での参加を必須とする。なお、ペアができなかった者は、抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは……」

「とにかく！！」

最後まで読もうとした一夏だったが、一人の女子の声で中断させられる。

だが、その説明で直人は、この場にいる全員の目論見を理解する。

「私と組もう、織斑君！」

「私と組んで、デュノア君！」

「桜庭君！　一緒に組もう！」

要するにこういう事なのだ。

全員、学園に三人しかいない男子　（一人女子）と組もうと言うのだ。

しかも、全員専用機持ち、となれば、一般生徒とのアドバンテージは高いし、もし仮に専用機持ちと当っても、勝てる見込みはあると考えたのだろう。

しかし……

「皆悪い！　俺はシャルルと組むから、諦めてくれ！」

一夏は、シャルルが女であることをばれると不味いと感じ、咄嗟にそう言った。

「まあ、そう言う事なら……」

「まだ桜庭君が残ってるし」

「ほかの女子と組まれるよりは良いし」

「男同士ってのも絵になるしね」

一夏の言葉に、皆あっさりと諦めたのだが。

『と言う訳で桜庭君！　私と組んで！！』

当然、その分直人に殺到するわけである。

（一夏ーーーーー！！！！）

（す、すまん……）

一夏の方を見た直人の目がそう訴えるのを、一夏は心の中で合掌するしかなかった。

「み、皆。悪いが俺は真白と「出ない」……え？」

「私……出ない。棄権する」

直人は咄嗟に真白と組むと言おうとしたのだが、真白の言葉で、その計画は崩れ去る。

真白が棄権すると言ったのを、直人だけでなく、その場にいた全員が驚いていた。

「な、何でだ？」

「ちょっと用事ができたから……」

そう言って、真白はさっさとその場から離れて行ってしまう。

「以外ー」

「でも、まあ、でなくてよかったかも」

「今日の真白ちゃん、すごかったからねえ、出られてたら絶対優勝確実だよねえ」

しかし、真白がいなくなったことを、結果的に他の生徒たちは喜んだ。

今回のアリーナでの戦闘を見て、とても勝てないと、悟ったからだ。

しかし……

『さあ桜庭君！　私と組んで！！』

（ちょっ！　誰か助けてくれーーーーー！！！！）

その一方で、女子たちの攻勢はなお激しさを極め、直人は本気で心で助けを求める。

しかし、地獄に仏とはこのことか、直人に救いの手が伸びる。

「残念。直人は私と組むから」

突如、紅葉がそう言ってきたのだ。

「ええーーーーー！！」

当然、他の女子からブーイングが殺到するが、紅葉は気にせず話を続ける。

「御免ねー。でもさ、直人の動きについてこれるのって、真白ちゃんと専用機持ちを除けば、いつも見ている私しかいないでしょ？」

「そ、それは……」

実際、直人の灰桜のスピードは、とても訓練機では追いつけない。それでは連携どころか、むしろ足手まといになりかねない。

「だから、ここはあきらめて、ね？」

紅葉がそう言うが、「はい、そうですか」とあきらめられない。

うーんとぐずる女子たちに、紅葉は最終手段に打って出る。

「その代わり、もしトーナメントで私たちが優勝したら、@クルーズのパフェ、好きなだけおごってあげる！」

『じゃあよろしくね！！』

紅葉のこの一言に、女子一同はさっさと退散していくのだった。

「……紅葉。お前策士だな」

「褒め言葉として、受け取っておくよ♪」

「でも、大丈夫なの？　さっきの見る限り、２０人ぐらいはいたよ？」

「良いの良いの、いざとなったら実家に請求書おくるから」

『……』

紅葉のこの言葉に、その場にいる全員が固まる。

「い、良いの？」

「あの万年新婚夫婦には、これ位が良い仕置になるし」

（（（（一体どんな両親なんだろう……））））

そんな風に直人達が、紅葉の両親について疑問を持っていると……

「一夏！　私と組みなさいよ！　幼馴染でしょ！！」

「直人さん！　真白さんの埋めた穴は私で埋めます！　ですから私と組みましょう！！」

鈴とセシリアが、自分と組め！　と要求してきた。

「おいおい、お前らその怪我で出る気か！？」

「こんなの怪我したうちに入らないわ！」

「代表候補生をなめてもらっては困りま……」

直人の問いかけに、二人は大丈夫だと言うが。

「えいっ」

突如、紅葉がどこからともなく取り出した一冊の書物の背表紙で、二人の肩を強くたたくと。

「「っ！？！？！？！？」」

当然叩かれた二人は痛がり、再びその場に蹲る。

「ほらあ、やっぱり」

「お前らなあ、怪我してる状態で出たって、どうせ全力何て出せないんだから、無理するなって」

「それだけではありません」

直人の咎めに続いて声を出したのは、保健室にやってきた山田先生だった。

「お二人のＩＳ、ダメージレベルがＣを超えています。トーナメント参加は、許可できません」

「あちゃー、やっぱりですか。あの様子からして、その位はいってると思ってましたが」

山田先生が言うには、二人のＩＳはダメージが酷く、トーナメントに参加させるわけにはいかないとのことだ。
紅葉もあの時の様子から、ダメージが酷いと一目で解っていたので、「やっぱりか」という顔でつぶやいた。

「そんな！　あたし、十分に戦えます！！」

「私も納得できませんわ！！」

「駄目と言ったら駄目です！　当面は修復に専念しないと。後後、重大な欠陥が生じますよ？」

山田先生にそう言われ、二人は納得いかなかったが、こればっかりは引き下がるしかなかった。

これは、ＩＳの基礎理論に書かれてることだが、ＩＳは、操縦者の癖や、それまでの戦闘経験等を学習していき、それが一定値にたまれば、二次移行（セカンド・シフト）と呼ばれるパワーアップを行う。

だがその経験には、損傷時の起動も含まれているのだ。
その為、ダメージが低いならまだいいが、大きな損傷をした状態で起動させたりすれば、不安定な状態での特殊エネルギーバイパスを構築し、逆に平常時の稼働に悪影響を及ぼしてしまう。
要するに、骨が折れてるのに無理に動かすと、変な形にくっついてしまうのと同じ原理だ。

その為、ダメージレベルがＣを超えた状態での稼働は、ＩＳにとっても、また操縦者自身とってもデメリットでしかない。

まして直人や真白のように、個人が開発したものならともかく、鈴とセシリアの機体は、国が莫大な時間と予算を掛けて作製し、サンプリングの為に預けた大事な機体。

もしこれに欠陥を生じさせるようなことになれば、二人は代表候補生失格という事なのだ。

国の代表候補生と言うのは、それだけ責任重大なのだ。

「まあ、仕方ないよな。安心しろ、二人の仇討はしてやるから」

「何か、あたしたちが死んだような言いぐさね」

「そんなつもりはないんだが……」

単なる言葉のあやだったのだが、鈴にジト目で見られたため、直人もそう弁解する。

「うぅ……直人さんと一緒に出られないのは非常に不本意ですが、ここは仕方ありませんわね。その代わり！！」

「解ってますって、ちゃんんと敵討ちはしてあげるからさ」

セシリアも、自分が一緒に出られないのが悔しくも、仕方なく紅葉に譲るしかなかった。

「一夏！　あんた絶対に勝ちなさいよ！！」

「解ってるよ。ラウラには絶対負けねえ！」

「あいつもそうだけど、直人にも！！」

「はっ、何で？」

「何でって、たまには直人に勝ってみなさいよ！　義弟に負けてばっかりで、恥ずかしくないの！？」

「そう言われると、何かきつい……」

一方鈴は、優勝者が一夏と直人、どちらかと付き合えるという話を考え、一夏を取られることを阻止するため、一夏に絶対優勝するように言う。

「……ふむ、それも良いな。一夏、最後まで勝って、決勝でぶつからないか？」

「直人まで……まあ、お前と一度本気でやってみたいとは思うけど……」

鈴の言葉に便乗し、直人がそう言ってくる。

一夏も、別に義兄の面子とかそんなものじゃなく、自分の今の力が、どこまで直人に通用するのか知りたかった。

勝てるとは思ってないが、せめて驚かせるぐらいはしてやりたいのだ。

「良し。それじゃあ決勝戦まで上がってくるの、期待してるからな。後二人とも、お大事に」

そう言って直人は振り返ることなく、保健室を後にするのだった。

「私もこれから色々やることがあるから、それじゃあねー！」

紅葉もそれに続き、保健室を出て行くのだった。

「あっ、そうだ紅葉」

「ん？　何？」

寮に戻った直人は、ラウラとどう戦うかを、真白の戦闘の様子を思い出しながら構築していた。

そこへ紅葉がやって来て、風呂上がりだったという事もあり。

「髪梳かせて！！」

と言われた。

今回はなぜか真白が来ず、そのまま自然乾燥させていたのだが、取り敢えず減るものでもないとオッケーを出す。

そして髪を梳かれながら、直人は紅葉に何か言おうとした。

「遅くなっちまったけど。あの時助けてくれて、ありがとうな」

「良いって良いって、あたしが言ったことも事実だしね」

「って言うか、お前だってそうだろ」

「うーん。取り敢えず、あたしは援護射撃に徹するってのは如何かな？　どうせ灰桜のスピードに合わせようとしたら、第２世代型じゃ持たないもんね」

「正論だな」

直人は保健室で、自分を助けてくれたことを感謝しつつ、紅葉と共に対ラウラ戦の作戦を練る。

「取り敢えず、ボーデヴィッヒは確実に俺を狙ってくる。これはまず決定事項だな」

「加えて、味方との援護は絶対考えてないだろうしね。あの性格だし、今回の事で、一人でも事足りるって思ってるでしょうからね」

「となれば、まずペアの方を倒して、二対一に持ち込むか」

「でもさ、ＡＩＣは如何するの？　あれ結構やばい装置だよ？」

作戦は大方固まってきたが、やはりラウラのＩＳについてるＡＩＣがネックになる。

相手の動きを強制的に停止させるあの装置を攻略しなければ、いかに直人と言えど、恐らく勝機は無い。

「だが普通に考えれば、あんな反則的な代物を無条件で使えるとは思えない。何か弱点でもあればいいんだが……」

「まあ、そこは戦闘中に見つけるしかないかな。真白ちゃんとのあれは、どう見ても真白ちゃんのワンサイドゲームだったしね。はい、終わったよ」

「おっ、サンキュー」

作戦会議をしてる間に、直人の髪を梳くのが終わった。

「直人って結構髪さらさらだったんだね。ちょっと新鮮」

「それは良いから、取り敢えずどうする。このまま作戦会議としゃれ込むか？」

「いや、いいよ。色々こっちも準備あるし、そろそろ就寝時間だからさ。それじゃあね」

そう言って、紅葉は手をひらひらと振って去ろうとする。

「あっ、そうだ」

すると突然、直人の方に向き直ってきた。

「ねえ、直人」

「何だ？」

「あの……そのね……」

どこか言いづらそうにもじもじさせながら、紅葉は意を決して言うのだった。

「もし……もし今回のトーナメントで、一緒に優勝したら……／／／／／／」

「おお」

「わ……私と付き合って！！」

「……はい？」

突然そう言われ、直人も一瞬ぽかーんとなる。

「こ、答えは優勝した時にでも聞かせてもらうから！　そ、それじゃあね！！」

そう言って速足で去っていくのだった。

「……」

その後直人は、しばらくそのまま呆然とするだけだった。

そして、その後、部屋を出た紅葉はというと。

（つ、ついにやっちゃったーーーー！！　箒さんと同じになっちゃったけど……で、でも、優勝したらどっちかと付き合えるって言うし、色々申し訳ないけど、この絶好の機会、逃すわけにはいかないもんね！！　で、でも……もしそのままオッケーとか出されたら……／／／／／／」

（想像中）

「キャー！！　どどど、如何しよう！！　私、まだ心の準備とかーーーーー！！！！！」

部屋に戻る途中、そんな風にキャーキャー騒ぐ紅葉が目撃され、その後、話を聞いた寮長に拳骨をお見舞いされたのは言うまでもない。

そして、待ちに待った学年別トーナメント当日。

「しっかし、すごいなこりゃ」

「全くだ」

シャルルの着替えを待ってる二人は、ディスプレイを見て、感嘆の声を上げていた。

というのもこのトーナメントに各国の政府関係者や研究員、企業関係者などがやって来ているからだ。

「三年にはスカウト、二年には一年の成果の確認に、それぞれ人が来ているからね」

そこに、着替え終わったシャルルがやって来る。

「ふぅん、ご苦労なこったな」

「と言っても、俺達には否が応でも注目が来るとは思うがな」

直人の言葉も尤もだ。

本来なら、入ったばかりの一年は、上位入賞者にでもならなければ注目はされない。
だが、一夏と直人は、男でＩＳが動かせるという特異上、たとえ負けたとしても、ほしがる連中はごまんといるだろう。

「それはそうと、真白はどこに言ったんだろうな？」

「さあ？　何か気になることがあるって言ってたが、一体何なんだか」

実はあのアリーナの一件から今日に至るまで、真白の姿を誰も目撃していないのだ。
一応千冬と山田先生が、「ある事情により公欠」と言っていたが、詳しい詳細までは教えなかった。
何か機密にかかわる事なのだろうかと、噂が実しやかに囁かれたが、真相を知るものは、少なくとも生徒の中にはいなかった。

「まあ、あいつの事だから大丈夫だとは思うけどな」

「直人って、真白の事結構信頼してるよね」

「そりゃあ、一緒に旅をしてきた間柄だし、それにこういうこと、ちょくちょくあったからな」

「そうなのか？」

「まあな」

直人が言うには、真白が突然姿を消すことはよくあったそうだ。
だが暫くすると、まるで何事もなかったかのように帰ってくるた

め、直人も別段咎めたりはしないのだ。

「それより、問題は対戦表だ。一回戦でお前たちと当るとか、勘弁してほしいな」

「それもそうだな。決勝で戦うって約束したしな」

二人はそう軽口を叩いているが、シャルルには、二人が気になっていることが一つ思い浮かんだ。

「二人はボーデヴィッヒさんとの対決だけが気になってるようだね」

「えっ？　あ、ああ。まあな」

「二人の前で、敵討ちするって言ってしまった手前、破ったりしたら何て言われるか……」

実際はほかにも気になることはあったのだが、取り敢えず、二人の優先順位としては、やはりラウラとの対決が、この場では最優先なのだ。

「感情的にならないでね。ボーデヴィッヒさんは恐らく、現時点では一年の中で、直人と真白ちゃんに匹敵するくらいの強豪だと思うから」

「悪いシャルル。あいつと一緒にしないでくれ。虫唾が走る」

「あっ、御免」

「解ればいい」

途中、シャルルはラウラの実力を解りやすく言うが、その際、一緒にされた直人が不快な顔をする。
シャルルはすぐさま謝り、直人も特に咎めることはしなかった。

「おっ、出たぞ、対戦表」

とそこへ、学年別トーナメントAブロックの対戦表が現れる。

しかし、そこにある対戦カードの組み合わせを見て、一夏とシャルルは驚きを隠せず、直人は……

「なあ、二人とも」

「何だ？」

「何？」

「これ、何か仕組まれてるんじゃないかって思うの、俺だけか？」

「……俺もそう思う」

「……僕も」

直人が指差した、一回戦の対戦カードは。

桜庭　直人&秋宮　紅葉

ＶＳ

ラウラ・ボーデヴィッヒ&篠ノ之　箒

何と、一回戦から因縁の相手と当ることになってしまった。

しかもその隣に、一夏達のペアと、別のペアとのバトルになっていた。

そして、この対戦表を見た、女子更衣室の箒と紅葉は。

（……最悪だ）

「最悪なんですけど……」

と、それぞれの感想を言っていた。

波乱の学年別トーナメントが、今、始まろうとしていた。

第二十三話　学年別トーナメント、開幕！（後書き）

桜爛の間

作者「と言う訳で、紅葉と組むことになり、いきなり初戦でラウラと当ることになってしまったわけだが」

直人「んで、結局鈴とセシリアはなんでラウラとバトルすることになったんだ？」

作者「君と一夏には一生解らないかと……」

直人「？？？」

作者「んで、学年別トーナメントを棄権したうえ、行方をくらました真白ですが、後一、二話したらひょこっと学園に戻ってきますので、ご心配しないでください」

直人「そう言えば、外がやけに騒がしいと思ったら、あれ紅葉が騒いでたのか。何騒いでたんだ？」

紅葉「えっ！？　えっと、そのお……い、色々だよ！　い・ろ・い・ろ！！」

直人「そ……そうか」

作者「やれやれ……さて、それでは今回も恒例の、「直人の目安箱」いってみよう！！」

1．真白と真琴、戦ったらどっちが勝つと思う？

作者「三月語様の所の奏からの質問だ」

直人「そうだなあ……どちらも射撃重視だが、真白の方はナイフがあるから一応接近戦もできないことはない。とはいえ、あまり使わないだろうから、これは大したアドバンテージにはならないな」

作者「ふむふむ」

直人「それに、ワンオフ・アビリティーが無いから、その意味では真琴に一日の長があるだろうな、でも真白の狙撃能力はすさまじいからな、そう言った意味では甲乙つけがたいが、狙撃能力だけに絞れば、真白に軍配が上がるだろうな」

直人「だそうです。では次」

2．もし自分が好きな人が悪魔・妖怪の類だったら？

ＰＳ　悪魔・妖怪って結構種類多いから、一般的に有名な吸血鬼・

夢魔・猫又で考えてね？

作者「これは同じく三月語様の所のエリィの質問だ」

直人「恋愛云々なんてのは、あまり考えたことないからよく解らないが……取り敢えず好きになった奴、大切な奴は守る。俺はそれだけだ」

作者「それが悪魔・妖怪の類でも？」

直人「人と少し違うからと言って拒絶していたら、そいつが可哀そうだしな、人ひとり取ったって、全く同じ奴なんて誰一人いないんだから」

作者「成程……ちなみに真白を悪魔・妖怪の類に例えると？」

直人「雪女。その辺りが妥当だろ」

作者「だそうです。今回は応募がなかったため、「抱腹絶倒！　アフレコ委員会！！」はお休みします。皆さん。どうかこの後書きコーナーにご応募お願いします！！」

直人「おいおい……」

作者「さて、次回はアニメ第八話の始まり。初戦から当たることになったラウラと直人ですが、果たしてどうやってラウラと渡り合う

のか、直人と紅葉の活躍を、お楽しみに！！」

ＰＶ数　１００，０００ｈｉｔ記念特別企画　爆笑！　失笑？　作者笑点！！

作者「えー、皆さんこんにちは。当小説【ＩＳ　桜の花纏う真剣】もこの度、ＰＶ数が１００，０００を突破いたしました！」

わーーーーー！！！！

作者「まだ描写も拙く、読みにくいところ、つまらない所もあると思われますが、こんな青二才の作者の作品を読んでいただき、誠に感謝に絶えません。そこで、今回はＰＶ数１００，０００突破を記念した、特別企画を執り行いたいと思います！！」

パチパチパチパチ……

作者「ええ、それでは、今回の企画の参加者の皆様方からのご挨拶からどうぞ！」

直人「ちょっと待て作者」

作者「はい？」

直人「この紙に書かれてることを言うのか？」

作者「そうだよ。ほら早く」

直人「……解ったよ。えー……名乗りを上げるもおこがましいが、名乗ってあげましょう、我が呼び名。我こそは、世界最強ブリュンヒルの弟子にして、その弟を守る剣なり！　桜庭直人です」

作者「はい、よくできましたー」

直人「これ、お前が書いた紹介文だろ……」

作者「中々よくできてるでしょ？」

直人「ふざけるな！！」

作者「はいはい、そう言うルールなんだから、文句言わないの。それじゃ、次の方どうぞ」

奏「俺だ、えーっと……そろそろメガネをかけようか迷っている、二崎奏です」

作者「はい、ありがとうございます」

直人「いやいやいや、それ奏のじゃなくて、作者（三月語様）の心境だろ」

作者「黙らっしゃい!!　例え心境であろうと、作者様の書いた答えはお前たちの答え!　それが、この場の掟だ!!」

直人・奏「理不尽だ!!」

作者「理不尽結構。では次の方」

優希「どうも【IS～インフィニット・ストラトス～　一角獣の輝き】の主人公一（？）篠ノ之優希です。
　ここ最近女装やら、幼児化やら、ケモミミ化とかあって忙しいけど人こと言わせて貰います!!

僕は男です!!

はいっそこ!え?って顔しないの!!最初っから言ってますけどみんな信じてくれないからこの場を借りて言いました!いいですね!!」

作者「えぇ~~~~」

優希「そこも何でそんな顔するんですか!!　僕は男です!!」

作者「はいはい、男の娘、ですよね」

直人「あまり苛めてやるな、可愛そうだから」

奏「そうそう」

作者「はいはい。ま、優希君がどんな目に遭ってるかは、当該作品を見ていただくとして、次！」

アル「馬鹿は死ななきゃ治らない。僕はちょっぴり天才男の娘。大天才、篠ノ之束の助手、アルフォンス・ラプラスです！」

作者「以上四名でこの企画を行います。ええ、ではまず座布団十枚のキーワードは……」

直人「ちょっと待て！！」

作者「何？」

直人「何だよキーワードって！　それ完全に、あの長寿番組のパクリじゃねえか！！」

作者「ちょっとしたお茶目だ、そうムキになるな」

奏「ちなみにそれが本当だったら、座布団十枚を獲得したらどうなるんだ？」

作者「優勝したキャラの作者様に、直人を好きにいじっていい権利を差し上げます。女体化するも、獣っ子にするも、どうぞご自由に……」

直人「暁光一閃！！」

スパアァァアンン！！

作者「と、言うのは冗談で……」

直人「ちっ、かわしたか」

作者「まあ、特にご褒美はありません。と言うかこういう競う形にしたら、贔屓してしまいそうなので」

優希「成程」

作者「と、言う訳で、今回は私が提出した問題に作者の皆様が考えてくれた答えを、君たちの答えとして発表してもらう！！」

直人「果てしなく不安だ……」

奏「俺も……」

優希「僕も……」

アル「同感です……」

「それではまず最初の問題！！」

理解できなくとも、必ず守らねばならないＩＳ学園の規則。

その中でも、何を差し置いても絶対守らねばならない、『鉄壁』

と呼ばれる規則があるが、それは一体どんな規則？

直人「初っ端から恐ろしい答えが来そうな問題だなあ」

作者「まあ、問題の事はさておき、まずは直人に答えてもらいましょう！！」

直人「出だしから俺か！？」

作者「当然です。さあ、さっさと出しなさい！！」

直人「何か仕切ってるけど、俺のだす答えって、要するにお前の考えた答え何だからな？」

作者「私は何にも知りませ～ん」

直人「……こいつ」

作者「さっ、さっさと出しなさい」

直人「解ったよ」

↓所持品に刀剣を持っているもの、又は剣道部に所属するものは週に一度、織斑先生の特別実習に参加しなければならない（さぼったりしたらその夜、鬼がやってくる）

奏「それって……千冬さん直々の……」

優希「それ以上は言ってあげないでください」

直人「ちなみにこれで剣道部に所属するものの中には、この実習の日の翌日以降、一度も遅刻しなくなったりしたものもいるそうだ。」

アル「あっ、あはは……」

作者「よし、じゃあ次は奏！」

奏「俺！？」

作者「そうだよ、早く言っちゃいなよー」

奏「はいはい。さて、あの馬鹿作者はどんな答えを……」

直人「どうした？」

奏「本当にこれ言うのか？」

作者「何が書いてあったか知りませんが、言うんですよ？」

奏「……解ったよ」

↓校内外における不純異性交遊厳禁（ただし同性との交遊は認める）

直人「同姓との交友は認めるって……優希とかアルとかだったら、きっと腐女子共が騒ぎそうだな」

優希「言わないでください。想像したくありません」

アル「……（ブルブルブル）」

作者「アル君は想像してしまったようで」

奏「おーい、戻ってこーい」

作者「さ、次は優希君の番だよ。男の娘としての答えを見せなさい」

優希「どんな答えですか!?　後僕は男です!!」

作者「良いからさっさと言う！　出ないとこのミニスカメイド服を着せるぞ!!」

優希「理不尽!!」

↓　鈴の前で胸の話をすること無かれ。

直人「規則？　暗黙のルールの間違いじゃあ……」

奏「事実だがな」

アル「鈴姉、胸の事になると人が変わるから」

奏「オリヴィエもな、あれはマジで阿修羅をも凌駕してるんじゃないかって思う位だ」

作者「ううん、でも気づかないうちにこんな規則ができていても不思議じゃないかも、無論、鈴が卒業するまででしょうが、最後はアル！」

アル「あっ、はい」

↓一年に一度、必ず写真撮影会がある（コスプレ他あり）

直人「何だろう……俺寒気がしてきた」

奏「俺も……」

優希「僕は世界の変態達の声が聞こえたように気が……（ガタガタ）」

作者「うーん、それも良いな、でも楯無さんが生徒会規則で作りそうな気がしなくもなかったり。それでは次の問題に移りましょう」

昔、二人の姉の関係から、幼いころより親交のあった、織斑家と篠ノ之家。

しかし、両家の間には、絶対守らねばならない暗黙のルールがありますが、それは一体どんなルール？

作者「と、言う訳で、トップバッターは奏！」

奏「何！　俺か！？」

作者「はい、さっさと言いなさい！　でないとルティアと沙霧にこの日本酒を送るぞ！！」

奏「解った！　解ったからやめてくれ！！　あとが面倒だ！！」

→中学卒業までの恋愛行為一切禁止

直人「いかにも師匠が設けそうなルールだな、あの人なんだかんだ言って、一夏に対しては過保護だからな」

優希「箒姉が哀れに見えてきたよ……」

アル「？　？？」

作者「ああ、そうか。アル君の所の一夏は女の子なんだっけ」

アル「あ、はい」

作者「ま、それはさておき、次は優希君！」

優希「はい」

↓空中コンボは三回まで

アル「何これ？」

優希「これは母さんや箒姉、千冬さんがヤリ過ぎないようにように作られたルールなんです。破ったらご飯抜きになります」

奏「成程なあ……」

直人「師匠なら三回でも十分オーバーキルのような気がしなくもないんだが……」

優希「確かに……」

奏「同感……」

作者「あっ、ちなみにまだまだ答えがある場合は答えてもらいますからね、と言う訳で、優希君次！」

優希「はいはい」

↓真剣のレンタルは七泊八日で千円、料金は賽銭箱に

直人「真剣レンタルって、緋宵か？　緋宵なのか？」

優希「さあ？」

奏「つうか、誰がレンタルするんだよ？」

優希「中学生の千冬がよく借りていました、何に使ったかは秘密らしいですけど」

直人「使う用途が一つしか思い浮かばないのは俺だけか？」

奏「いや、俺もだ」

アル「僕も……」

作者「ううん……さて、じゃあ次で優希君の答えは最後だ、ではどうぞ！！」

↓篠ノ之神社の敷地内では英語は禁止である

優希「このルールがあったせいで、束姉はよく叩かれていました」

直人「ありえそうだな……」

アル「束さん、英語交じりで喋るのが習性になってるからね」

作者「よし、これで優希君分は終わり、次はアルだ！」

アル「ぼ、僕ですか！？」

作者「早く言っちゃいなさいよ。楽になるよ」

アル「は、はい」

↓敵を騙すにはまず味方からとかいうので、家族を騙しても構わない

アル「だから束さん、結構騙しまくってたそうです。その都度、千

冬さんに制裁を喰らってたらしいですけど」

優希「束姉……」

直人「天才であることには違いないんだがなあ……いかんせんあの言動とかが……」

奏「家の馬鹿もだけどな」

作者「はい、アル君、お疲れ様。最後は直人！」

直人「はいはい……」

↓一夏、箒が剣道の修行中は、直人を束の所に置くべからず

奏「一体束さんに何されたんだ？」

直人「聞かないでくれ……」

作者「直人の黒歴史は、ご要望があれば追々話すとして、では次の問題！！」

どんな学校にも必ずあるであろう七不思議。
では、このＩＳ学園にある七不思議とはどんなもの？

直人「どんな話題が出てくるのか、これは少し興味があるというか、気になるな」

作者「では、トップバッターは優希！！」

優希「えっ！？　は、はい！」

↓時折学食に出る、食べたら綺麗な川が見える料理。（セシリアの料理）

直人「セシリア……」

アル「あの料理にはそれだけの殺傷能力があるってことですか？（ブルブル）」

奏「あっても不思議じゃないな」

作者「さて、トップバッター優希君の答えはまだまだ通付くよ、それじゃあ次！」

↓学生のリストに存在しない、金髪の絶世の美少女。（女体化優希）

直人「苦労してるなあ」

奏「大変なんだなあ」

アル「同情します」

優希「皆……」

作者「いっそ性別とか変えてそのままでいたら？」

直人「ツバメ返し！！」

作者「ぎゃ、ギャグだよ～、ギャグだってばー！」

直人「お前の冗談は3割だけだろ」

作者「つ、次！！」

↓どんなに強く叩いても折れ曲がらない織斑教師の出席簿。

直人「あれは確かに凄い」

奏「トランスフェイズ装甲でででもできてるのかって思うな」

優希「いや、もっとそれ以上に固いものかと……」

アル「本当に何でできてるんだろう？」

作者「きっと、永遠の謎なんだろうなあ……それじゃサクサクいきましょうか！！」

↓山田教師の成長し続ける胸。

奏「あの大きさだけでも信じられねえのに、まだ成長してるのか？」

優希「人体の不思議だね、これはいろんな意味で」

アル「でもこれ、鈴姉が知ったら怒り狂うだろうなあ」

直人「全く持って同感だ」

作者「それじゃ次！」

→夜遅くに聞こえる男の悲鳴。（一夏の悲鳴）

直人「お前の所の一夏は不憫でならないな」

優希「そうかな？」

直人「そうだよ」

奏・アル「？？？」

作者「ほんじゃ次

↓生身でＩＳを圧倒する女生徒。（箒バーストモード）

直人「あれを見るたびに、箒がどんどん人外と化してくのがよく解るよ」

優希「言い返せない。箒姉、少しは自重しようね？」

奏「人外？」

アル「箒ちゃんに一体何が？」

作者「知りたい人は【ＩＳ～インフニット・ストラトス～　一角獣の輝き】をご覧ください。では次でラスト！！」

↓寮に出現する謎の三匹の猫。（猫パジャマを着た、優希、シャルロット、ラウラの三人）

作者「さあ、子猫好きの奏さん。これを見たらどうなります？」

奏「……」

直人「ドンマイ、奏」

作者「さて、次はアル君です！」

アル「あっ、はい」

↓7月7日の夜7時に第7アリーナで訓練すると7人の影に襲われる

直人「おっ、中々それっぽいな」

優希「そうですね」

奏「真琴とルティアあたりが騒ぎそうだな」

作者「うーん、これはなかなかいいアイデアですね。座布団一枚上げたいぐらいです。さて、次は直人」

直人「おお」

→深夜0時に、廊下に出てると、時々全身真っ白の小さい幽霊に出くわす。

奏「それってもしかして……」

作者「言うな、解っても言うな。言ったらこの酒マジでルティアと沙霧に送る！」

奏「わ、解ったよ」

作者「それじゃあ次！！」

↓朝４時６分に真白の部屋の前を通ると、時々発砲音が聞こえる。

奏「一体何が？」

直人「さあ？」

作者「ちなみにこの時偶然通りかかった山田先生が部屋の中を大急ぎで確認したが、何も異常はなかったとのこと。では最後は奏！」

奏「おお」

↓家庭課室の不快臭・・・昼や深夜、家庭課室から悪臭が漂っている。

↓原因：料理が苦手な生徒が料理室で料理（化学兵器）を作っているから

直人「誰がやったのか一目瞭然だ」

優希「ですね」

アル「化学兵器って……（ブルブルブル）」

作者「……次」

↓トイレで聞こえる叫び声・・・夜トイレから謎の叫び声が聞こえる

↓原因：身長が小学生並みな生徒が『ちっちゃくないもん！！』と叫んでいるから

奏「これも誰がやったのか一目瞭然……とは言えないか」

直人「お前のとこ、そう言うやつ多いからな」

優希「そうなんですか？」

作者「そう言う意味ではアルも言いそう」

アル「言いませんよ！？」

作者「さて、次で最後の御題だ！！」

学園最強の鬼教師、織斑千冬。
誰もが畏れ、憧れる彼女だが、私生活はかなりだらしない。
一夏でさえ手を上げる、彼女の私生活での困った行動とは？

作者「最後のトップバッターはアル君に頼みます」

アル「えっ！？　ぼ、僕！！」

作者「そうだよ、早く言っちゃいなさい」

アル「うぅ、緊張する……」

↓酒を飲みすぎて、深いところにあるスイッチが入ったら物凄い勢いで甘えてくる

直人「ああ、確かにそう言うところもあったりなかったり……」

奏「……想像できねえ」

作者「ある意味酒を飲んだ優希みたいな感じかな」

優希「言わないでください……」

作者「次は直人ね」

直人「ああ、解ったよ」

作者「すっかり何も言わなくなったね」

直人「もう諦めたよ」

作者「それじゃ、どうぞ」

→千冬の部屋を掃除しても、千冬が返ってきたその翌日には魔窟と化してしまっていること

優希「……確かにこれは一夏でも降参しそう」

奏「哀れだな」

アル「大変そう……」

作者「では次」

↓風呂上がりだとタオル一枚で平然と部屋を歩き回る

直人「もう目のやり場に困るのなんのって……そのくせ見たら見たで制裁を受けるし、そんな事する位なら最初からそんな姿でいないでください！　って話だよ」

アル「苦労してるんですねえ……」

作者「本当に、では次奏！」

奏「おお」

↓料理が出来ない

直人「まあだからこそ、一夏が良い主夫になれる技術を身に着けたわけなんだがな」

奏「まあな」

優希「そうだよね」

アル「へ～」

作者「これで終わりだからサクサク行きましょう。では次！」

↓掃除が出来ない

直人「せめてこれ位はできてほしいな」

奏「滅多に入らねえけど、時々一夏から部屋の掃除を手伝わされることあんだよなあ」

優希「僕も……」

アル「一夏も、織斑先生が結構だらしなくて困ってるって言ってたなあ……」

作者「それでは次！」

↓洗濯が出来ない

直人「洗濯機もまともに使えなかったな」

奏「一夏によると、一度洗濯機の周囲一帯が泡だらけになって、掃除に苦労したって言ってたぜ」

優希「大変だなあ……」

直人「あれ以来織斑家では、『師匠を洗濯機に近づけるべからず』って言うルールが出来上がったな」

作者「では次で奏分は最後です！」

→秘蔵写真集（一夏の）を見て悶絶している

全員「……」

作者「ある意味恐ろしいですね」

直人「時々一夏が悪寒が走るって言ってたけど、これが原因か？」

奏「かもな……」

優希「僕も時々そんな感じがするけど、もしかして箒姉や束姉が……後で問い詰めよう」

アル「僕はもう孤児の筈なのに、悪寒を感じるのはなんでだろう……」

作者「では最後、優希君です！」

優希「はい」

↓寝相が悪く、朝目覚めるとブリッジをしていたりする。

優希「初めて見たとき、すごく奇怪極まりなかったです」

直人「凄いな、師匠」

奏「すげえ」

アル「凄いです……」

優希「でもあれが序の口だったり……」

直人「それどういう意味だ？」

優希「それは僕の口からはとても……」

作者「何やら恐ろしい一面を見てしまったところで、本日はこれにてお開きです。また、次の機会にお目にかかりましょう！！」

全員「もうまっぴら御免だ（です）！！」

PV数　100，000hit記念特別企画　爆笑！　失笑？　作者笑点！！

いかがだったでしょうか？

自分のキャラの言動と言うか、喋り方などに不満がある人は遠慮なく申してください。

それと、とっくに過ぎたのに、今の今まで投稿できなかったことを、深く、お詫び申し上げます。

楽しみにしていた皆々様方、誠に申し訳ありませんでした。

第二十四話　激突！　黒き雨ＶＳ灰色の桜！！（前書き）

アニメ第八話分の始まりです。

学年別トーナメントの一回戦から当たることになった因縁の二人。

相手の攻撃や動きを止めるＡＩＣを搭載するラウラのシュヴァルツェア・レーゲンに、直人と紅葉はどう対抗するのか！？

第二十四話　激突！　黒き雨ＶＳ灰色の桜！！

学年別トーナメント第一回戦から、会場は沸き立っていたが、それと同じくらいの緊張感が、アリーナと観客席を支配していた。

それもその筈、第一回戦の対戦カードは……

「一回戦から当たるとは、手間が省けたというものだ」

現在学年最強の一角と名高いドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィッヒと……

「それはこっちも同じだ」

同じく、学年最強と言われる一夏の剣、桜庭直人。

これまで幾度と無く一夏と直人を敵視して来たラウラと、そのラウラの行動に、憤りを覚え、一度はわずかなりとも矛を交えた直人。

まさに、因縁の対決であった。

「貴様の次はあの男か、ならば貴様を倒し、今度こそ見せしめにしてくれる」

「そんなに寝言を言いたいなら眠らせてやる。ごちゃごちゃ言わずに来い」

「言ってくれるな……」

既に始まる前から敵意全開の二人。

アリーナに流れる空気は、絶対零度を通り越して永久凍土を作りそうな勢いだった。

「貴様は……」

「ここで……」

「「叩き潰す！！」」

二人の声に同調するかのように、試合開始のブザーが鳴る。

それと同時に、灰桜の全てのスラスターを展開し、超高速でラウラに近づき、宗近を振り下ろす。

「ふっ」

しかし、その動きをあらかじめ予想していたのであろう、ラウラは不敵に笑い、右手を突き出す。

「……！」

その瞬間、手に持った刀も、それを振り下ろそうとした腕も止まってしまう。

シュヴァルツェア・レーゲンの特徴ともいえる第３世代武装、『ＡＩＣ』だ。

「開幕直後の先制攻撃、解りやすいな」

「それはどうも、以心伝心で、何よりだ」

そう言う直人に、ラウラは非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）に装備されたレールカノンの照準を直人に向ける。

「……」

まさに絶体絶命、しかし、直人の顔に動揺や焦りなどはなく、不敵に笑う。

「……！？」

しかし、攻撃しようとした刹那、ラウラに四本の刀が襲ってくる。

突然襲ってくるそれをラウラは難なくかわすが、そのためにＡＩＣが解除され、直人が一旦距離を取ることを許してしまう。

そしてラウラを襲った四本の刀は、再び、灰桜の両肩の装甲に装備される。

「そんな装備があるって解ってて、何も考えず突っ込むと思ってたのか？」

「貴様……」

「さて、今度もかわせるか！！」

そう叫ぶと再び四本の刀を飛ばし、再びラウラに向かって突っ込む。

「ふっ、同じことを！」

対するラウラは、今度はワイヤーブレードを射出する。
それで直人を捕え、動けなくしようという算段だろう。

だが突如、直人は目の前から消える。

「何！？」

突然の事に驚くラウラだったが……

「呆けてる場合か！」

突如、直人の声がラウラの後ろから聞こえる。
振り向くとそこには、宗近を振り下ろさんとする直人がいた。

「もらった……！？」

そして今まさに振り下ろさんとしたが、突如入った横槍を防ぎ、再び距離を取る。

「私を忘れてもらっては困る」

その横槍を入れたのは、ラウラとペアを組むことになった箒だった。

「直人。お前との実力差は百も承知だが、私にも引けない理由があ

るのでな！」

「うわ、戦いにくいなあ……」

闘気を漲らせながら刀を構える箒に、直人はそう毒づく。

（どうしたもんかな……ボーデヴィッヒの事だから二人掛かりってことはないだろうが、もしこのまま二人纏めてレールカノンで、ってことも考えられるな……）

箒を蹴散らすのは、技量で言えば造作もない。

しかし、あまりやりすぎたことはしたくないと考えてる上に、彼女がここまで闘志を滾らせる理由も解ってるだけあって、本気を出すわけにはいかない。

しかしそんな時、とんでもない光景を目にする。

「おいおい、あいつ本気か！？」

それは、自分と箒が斬り合ってる最中だと言うのに、プラズマ手刀を展開したラウラが近づいてきたのだ。

戦い方を見ても、彼女は箒を唯の雑魚、或いは捨て駒と思ってるだろうが、それにしたってこれはいきなりすぎる。

流石に直人も不味いと思ったが、それはすぐに杞憂に終わる。

「一対一の勝負じゃないって、忘れたの？　ドイツの代表候補生さん！」

その声と共にラウラを攻撃したのは、両手に二丁の拳銃を構える紅葉だった。
突然の襲撃にラウラは回避行動をとり、減速する。
そこから紅葉は箒に向けても拳銃を撃ち、攻撃に気付いた箒は直人と距離を取る。

「直人。こっちはお任せ！」

「すまない。箒の相手は任せるぞ！」

二人が会話を交わす傍ら、ラウラは今度は紅葉に狙いを定める。

「よくも邪魔をしてくれたな！」

レールカノンを発射しようとするが、その前方を、エネルギーの刃が横切る。

「お前の狙いは俺だろ。お望み通り一対一で勝負してやるんだ、こっちに集中しろ」

「……良いだろう、雑魚はいつでも潰せる。先にお前から始末してやる！」

「やれるものなら……やってみろ！！」

そう叫ぶと同時に、二人の刀とプラズマ手刀が交わるのだった。

「うわー、凄い殺気。あれ中に割って入るとかどんだけ命知らず？って話だよねえ」

「よそ見してる暇があるのか！」

「おっと！」

箒を引き離した後、こっちにまで伝わってくるような殺気を放ってぶつかるラウラと直人を見て思わずつぶやく紅葉。

しかしその刹那、対戦相手の箒が斬りかかってきて、それを紙一重でかわし、距離を取る。

「うーん、久しぶりに家の倉庫から引っ張り出してきたけど、動きは良好ね」

距離を取りつつ紅葉は、自身の纏ってるＩＳの動作を確認する。

彼女が身に纏ってるＩＳは、秋宮重工製第２世代型ＩＳ『秋時雨（あきしぐれ）』である。

汎用性を主体として作られ、拡張領域（バス・スロット）の多さを利用した多様性を重点に置いた機体性能で、防御面では打鉄に劣るも、その他の性能では勝っており、かつて打鉄と、次期量産機候補として競い合った。

だが、僅差で敗れ、さらに同様のコンセプトで性能面でも優秀なラファール・リヴァイヴの登場により、少数生産に留まった機体である。

紅葉はＩＳ学園への入学の際、次期後付武装（イコライザ）の試作機のデータ収集という目的のため、本社の倉庫で眠っていたこの機体を引っ張り出してきたのだ。

それは自社の製品であるという理由もあるのだが、もう一つ、理由があったりするのだが、それは別のお話。

「さてと、それじゃあ続けますか」

「ああ、ここで負けるわけにはいかないのでな！」

「一夏君との交際が、掛かってるもんねー」

「なっ！？」

いざ勝負と言う矢先、紅葉に茶化され、赤面する。

しかもその隙を狙って、紅葉は両手に持ってる拳銃を乱射する。

先ほどの茶化しに加えこの攻撃、完全に虚を突かれた箒は、とにかく攻撃をかわし、その結果、さらに距離が開く。

「くっ、卑怯だぞ！」

「動揺する方が悪いの。それよりそんなこと言ってる暇あるの？」

叫ぶ箒をしり目に、紅葉は右手の拳銃を収納（クローズ）すると、今度はマシ

ンガンを呼び出し、それを乱射する。

しかし、箒も負けておらず、間断なく襲ってくる弾丸を掻い潜り、手に持ってるブレードを振り下ろす。

「もらった！」

「おっと！」

しかし、紅葉もそれを、左手の拳銃の銃口下部についてるナイフで受ける。

「やっぱ張り切ってるねえ、おお怖い怖い」

「そう言うお前も、直人と一緒になりたくて張り切ってるんじゃないのか？」

「にゃっ！？」

戦闘中にも関わらず、軽口を叩きながらブレードを受け止める紅葉。

しかし、箒からっ先のお返しとばかりに、自分が言ったことと同じことを言われたため、顔を真っ赤にして猫みたいな声を出して驚く。

しかし、それが不味かった。

その為手に込めてた力が抜け、結果、箒に押しこまれてしまい、ブレードが命中する。

その結果、シールドエネルギーを消費させられてしまったのだ。

「うわ、結構やられた。ちょっと今の卑怯だよ！」

「油断大敵だ」

一度距離を取った紅葉はそう抗議するが、箒は紅葉が言ったことを要約して返す。

自分も一度使った手であるため、紅葉もそれ以上強く言えなかった。

「……まあ良いか。動作確認も一通り終わったし、そろそろ本気でいきますか！」

しかし、今までは機体の動作確認を兼ねた準備運動だった。

そう宣言すると、両手に光の粒子が集まり、棒のようなものを形成していく。

そして光が弾けると、柄の部分が赤い十文字槍を両手で握っていた。

「さてと、こっからは銃器類は一切なし。正真正銘の真剣勝負といきますか！」

槍を時には両手で、時には片手で振り回すと、それを両手で持ち、先を箒に向ける。

「……面白い」

紅葉の宣言に、箒もブレードを構える。

そして両者がしばらくにらみ合った後、金属同士がぶつかりあう音が聞こえたのだった。

「はぁ！！」

「何の！！」

一方、直人とラウラの戦いも激しさを増していた。

近接戦では直人の方が力量高く、見事な剣捌きを披露していた。しかし、ラウラもそれを自身の持つ技術でカバーし、好勝負を演じていた。

「ふんっ！！」

「！！？」

しかし斬り合ってる最中、ラウラが再びＡＩＣを発動、直人の動きを止める。

「甘いな！」

しかし、直人は再び四本の刀をラウラ目がけて飛ばす。
その結果、再びそれを避けるためにラウラはＡＩＣを解除せざるを得なかったが、この時、再度ＡＩＣを発動し、刀の一本、数珠丸を止める。

「ふん！」

そしてそれを右手で掴むと、ＡＩＣを解除して左手で別の部分を持ち、真っ二つに折ってしまう。

「マジか！？」

まさか動きを止めて折られるなどと思ってなかったのか、直人は思わず驚愕の声を上げる。

「これで残る刀は、その手に持ってるのを含めて四本。貴様の持ってる鈍など、所詮はこの程度という事だ」

「鈍かどうかを判断するのは、早計じゃないのか？」

「ほざけっ！！」

そう言った刹那、レールカノンが発射される。
それに対し直人も、エネルギー刃を飛ばし、レールカノンの弾を破壊する。

「……（紅葉の奴、うまくやってるのか？）」

しかし、思わず紅葉の様子が気になり、ふと視線を紅葉の方に向

ける。

「よそ見をするとは余裕だな！」

しかし、その隙を逃すラウラではなかった。

プラズマ手刀を展開し、直人に襲い掛かる。

「おっと！！」

しかし、直人もそのプラズマ手刀を、残る三本の内の一本、大典田を左手に持ち、その攻撃を間一髪で防ぐ。

「あっぶねえ……」

「雑魚の事を気にするなど、私も舐められたものだ」

「さっきから聞いてりゃ雑魚雑魚って、お前はそれしかいう事がないのか？」

「ふん。あんな二人、雑魚で充分だ」

その言葉に、直人は再び怒りが溜まる。

「お前、『慢心こそ我が敵』って言葉を知ってるか？」

「何？」

「知らないなら、知っておいた方が良いぞ」

そう言った瞬間、再び超高速でラウラに接近する。

「!?」

「これからな!」

「くっ!」

ＡＩＣ展開が間に合わず、プラズマ手刀で受けようとするが。

「何!?」

斬りかかると思った刹那、直人は刀を手放していた。
そしてそれを左手で素早く持ち替え、再び斬りかかる。

「くっ!?」

流石にこれは防げず、反応するのも遅かったため、刃はラウラに当たり、シールドエネルギーを削る。

「……浅かったか」

しかし、攻撃は深く入ってなかったと判断し、そう呟く。

「貴様、よほど私を怒らせたいようだな」

「先に怒らせたのはお前だ、御相子だろ!」

そう言った矢先、再び二人は刃を交えるのだった。

「はっ！　よっ！　とあっ！」

「何の！」

そして、紅葉と箒の武闘合戦も、ヒートアップしていた。

槍の利点であるリーチの長さを利用し、鋭い突きや横払い、さらに回転を加えての攻撃などを繰り出す紅葉。

しかし、流石箒と言うべきだろうか、それらの攻撃をブレード一本で見事に捌き、攻撃を防いでる。

「さっすがあ、斬りこんでるこっちの槍が折れちゃいそう」

「これだけの攻撃を繰り出しておきながら、よく言う！」

まさに一進一退、お互いの技量が互角であるかを示すような戦いだった。

「でも、早く直人の所に行かないといけないからね、悪いけど、ここで終わらせるよ！」

そう言って、槍を右手で持ち、それを思いっきり箒目がけて振り

下ろす。

「何の！」

無論、それを後ろに下がって避けるが、紅葉の攻撃はこれだけではなかった。

「あらよっと！」

槍を地面の深々と刺したと思ったら、槍の石突の部分に手を置き、片手逆立ち状態でそのまま箒の方に倒れこみ。

「そーれ！」

「何！」

そのまま箒目がけて踵落としを喰らわせる。

「がっ！」

そんな攻撃を仕掛けてくるとは思ってなかった箒は一瞬油断してしまい、そのまま踵落としを喰らってしまう。

「まだまだ、これからが本番！」

しかし、さらにこれでも終わりではなかった。

地面に差して槍を引き抜き、そのまま箒目がけて鋭い突きをかます。

「手応えあり！　いっけーーーーー！！」

そして手応えを掴むと、そのまま背中のスラスターを展開、その勢いのまま箒をアリーナの壁に叩き付ける。

「よっと。ちょっとやりすぎたかな？」

勝つためとはいえ、少しやりすぎた感があるのか、頬を掻きながら様子を窺う。

「ま、まだだ！　まだ……」

箒はまだ闘志を見せるが、打鉄から白い煙が立ち上り、そのまま動かなくなってしまう。

同時に、箒の目の前に、『戦闘続行不能』と書かれたディスプレイが映される。

「……ここまでか」

「御免ね、ここで負けるわけにはいかないんだよ、特にあの代表候補生さんにはね」

槍を収納（クローズ）しながら呟くと、スラスターを展開し、直人とラウラの戦う激戦区へと向かうのだった。

第二十四話　激突！　黒き雨ＶＳ灰色の桜！！（後書き）

桜爛の間

作者「初めはラウラの暴走寸前まで書くつもりでしたが、予定を変更し、箒ＶＳ紅葉を書いてみました。自分ではなかなかの好勝負を描けたと思うんですうが、いかがでしょうか？」

直人「しかし、紅葉機体なんて持ってたのか？」

作者「ああこれ、もとは学園のラファール辺りに、今回使用した武装をインストールして使わせようと思ったんだけど、何かしっくりこないと言うか、そう言うのってありなのかな？　って疑問に思って、そこで重工の設定を利用して、かつて作った古い機体に乗っけて使おう！ってことになった」

直人「あっそ……」

作者「さて、ではいきましょう後書きコーナー！　まずは「直人の目安箱！！」今回は久しぶりに、楚良様からも質問を頂きました！！」

直人「ああ、アルの所の」

作者「はい！　では始める前に、質問に答えていただく方々を紹介しましょう」

真白「ん」

紅葉「やっほー！　今回大活躍しました！」

一夏「よっ、何か久しぶりに呼ばれた気がするな」

作者「と言う訳で、現在蒸発中の真白と、本日大活躍の紅葉。そして当小説で影が薄いとか言われた一夏をお呼びしました。では早速言ってみましょう！！」

楚良様から

1．真白の好みのタイプ（詳しく）

真白「解んない。そう言うの、考えたことないから」

直人「基本的に他人にあまり関心を示すことないからな、お前は」

作者「だ、そうです。では次」

2．直人へ。自分のＩＳが『灰桜』とは全く別のＩＳならどういうＩＳがいいか。

直人「そうだな……まず基本として近接型、そんでもってスピードが速ければ何でもいいぞ？」

作者「そう言う意味では、原作では白式が適当かな」

直人「言われてみれば」

一夏「俺よりうまく扱いそうだな……」

紅葉「それ同感～」

作者「それでは次は、当小説の常連、三月語様より！」

直人・紅葉・一夏に
『次のうち、自分が最も使えそうだと思う武器は？
1．方天画戟（属性・槍）
2．アロンダイト（属性・剣）
3・デスサイズ（属性・鎌）』

直人・一夏「2」

紅葉「1かな？　でも方天画戟とかハルバートみたいな複数機能のある武器って、いろんな局面に使える反面、かなり修練しないと扱えないんだよね」

作者「はい、まあある意味予想通りかもしれませんが。では次「抱腹絶倒！　アフレコ委員会！！」です。まずは三月語様の応募から、

では今回やってもらう方に来ていただきましょう」

セシリア「突然呼ばれたんですが、一体何でしょうか？」

紅葉「セシリアちゃん？」

作者「これに、直人を、後直人には、この後の楚良様のリクエストにも答えてもらうから」

直人「解った」

作者「ではセシリアよ、ここに書かれてる台詞を言ってくれ」

セシリア「解りました」

セシリア「太くて大きなお魚ソーセージだと思います」

作者「【ぶるらじW第3回　～TGS2011ぶるらじW公開録音すぺしゃる～の近藤さんの台詞だそうです」

一夏「ああ、魚肉ソーセージの事か、あれ確かに美味しいよな」

作者「いや、違うと思うぞ」

直人「じゃあどういう意味なんだ？」

紅葉「私の、と言うより、女性の口からはとても……／／／／／／」

作者「ま、それはさておき、次は直人だぞ」

直人「解った」

作者「それでは、連続してどうぞ！」

直人「てめぇ！！馬鹿か！！」

直人「見せてやるよ、蒼の力を！　恐怖を教えてやる…　地獄はねぇよ、あるのは無だけだ…　これが…蒼の力だ！」

作者「どれも【ＢＬＡＺＢＬＵＥ】のラグナ＝ザ＝ブラッドエッジと言うキャラの台詞です。私元は知らないですけど」

直人「随分口が悪いと言うか、凄い台詞を言うもんだな。この元キャラは」

作者「じゃあ次でラスト、さっさとやっちゃって」

直人「はいはい」

直人「千魂冥烙！一夜に千の死をもたらす冥府の蛇よ！その顎（あぎと）で、全ての魂を喰い尽せ！」

作者「【ＢＬＡＺＢＬＵＥ　ＣＯＮＴＩＮＵＵＭ　ＳＨＩＦＴ】の

キャラ、ハザマの台詞です」

一夏「直人ならこういうこと言いそう。なんていうか、時代考証的な言葉遣いを」

直人「そうか？」

作者「さて、これで三月語様のリクエストは終わりです。次は楚良様のリクエストです。まずは直人から」

直人「おお」

直人「お前みたいな甘いやり方は嫌いだが・・・口したことを守らないやつはもっと嫌いだ！！」

作者「D，Ｇｒａｙ－ｍａｎのムッツリ剣士、神田ユウの台詞です」

直人「一夏がくじけそうになった時言ってやろうか？」

一夏「そうならないようにするよ」

直人「良し、それでこそだ」

作者「さて、次のリクエストですが、ビデオに撮ってあるのでそれを公開しましょう」

紅葉「何でビデオ？」

作者「ここに呼べない人だったからです。それではどうぞご覧下さい」

ラウラ「まさに至れり尽くせりの万能兵器、ということですか」

直人「……そう言う事か」

紅葉「確かに呼べないよねえ。まあ読んでも来なそうだけど」

作者「と言う訳で、千冬さんにも協力してもらいました。映っていませんが、この台詞は千冬さんに向かって言っています」

一夏「おいおい」

作者「ちなみに元ネタは、【魔法戦記リリカルなのはＦｏｒｃｅ】のチンクの台詞だそうです」

直人「ああ、あのボーデヴィッヒそっくりの」

紅葉「本当によく似てるよねえ、髪の色と言い眼帯と言い」

作者「装備してる目は逆ですけどね。さて、これで今回はおしまい。これからも質問とアフレコを募集していますので、よろしくお願いします！」

一夏「んで、次回はどうなるんだ？」

作者「次回は学年別トーナメントの後編、そして、直人のあるものが切れます」

直人「あるもの？」

紅葉「何？」

作者「それは次回のお楽しみ！　それでは次回も頑張って執筆したいので、よろしくお願いします。

第二十五話　真剣、キレる

「くっ……」

「どうした？　さっきまでの威勢はどこに行った？」

「うるせえ」

紅葉が箒を撃破したころ、直人はラウラと激しい戦いを演じ、今は距離を取って様子見をしている。

しかし、状況はあまり芳しくなかった。

これまでの打ち合いで、自分の動きや手の内を解って来たのか、スピードで翻弄しても、ラウラはそれに対応して防いだりかわしたりするようになっていった。

そればかりか、自分が距離を取っての戦闘が苦手であると理解し始め、攻撃をプラズマ手刀による近接戦から、レールカノン、ワイヤーブレードを使った中、遠距離戦に移行して来た。

これにより、直人は反撃もままならぬ状態となってしまった。

並外れた機動力のおかげで直撃はしてないが、時々に掠り、徐々にシールドエネルギーを削られていく。

自慢の四刀も、ＡＩＣを警戒して迂闊に攻撃に使えない。

先ほども、攻撃に使用し、同時に斬りかかったものの、攻撃をかわされた上に、鬼丸を破壊されてしまった。

（腐ってもあの人の教え子って事か。一体どうすれば……）

自分一人での相手に限界を感じ始めた直人は、手詰まり感により焦り始めていた。

「戦いの最中に考え事とは、甘く見られたものだ！！」

しかし、その一瞬のすきを見逃すラウラではなかった。

どう打開するかを考えてる直人に向かって、プラズマ手刀で斬りかかってきたのだ。

「しまった！？」

気づくも時すでに遅し。

かなり懐深くまで入られてしまい、攻撃も防御も間に合わない。

「もらった！！」

そして好機とばかりに、両手のプラズマ手刀を振り下ろそうとした。

その時……

「！？　ちっ！」

突如、ラウラ目がけて銃撃が炸裂する。

突然の横槍に、ラウラは攻撃を中断して直人から距離を取る。

「お待たせー！」

横槍を入れたのは、箒を撃破した紅葉だった。

「助かった。一人じゃ限界があったからな」

「それはどうも」

「一応聞くが、箒は？」

「今休憩中」

そう言って向く紅葉の視線の先には、動かなくなったＩＳを纏う箒の姿が。

「流石と言うべきか？　ま、それはさておき、ここからが本番だ！」

何はともあれ、紅葉が参戦してくれたことで、先ほどまでの焦りも消え、宗近を握る手にも再び力が入る。

「有象無象が一人増えたところで、私とシュヴァルツェア・レーゲンの敵ではない。貴様ら如き、一人ずつ叩き潰す！」

「やれるものならやってみろ！」

「世間ではそう言うのをやられフラグって言うんだよ！」

ラウラの叫びに叫びで返すと、直人は童子切を左手に持ち、再び二刀流で攻める。

しかし、すでに動きを見切っていたラウラは、それを一通り避けると、ＡＩＣで動きを止める。

「残念だったな」

そう言って、レールカノンの照準を直人に向ける。

勝利を確信し、笑みを浮かべるが、次の直人の一言に、その余裕も崩れ去る。

「忘れたか？　お前は一人だが、俺達は……」

「「二人なんだぜ（よ）？」」

そう言った刹那、紅葉が手に持ったマシンガンでラウラのレールカノンを破壊する。

その爆発で気を取られ、ＡＩＣが解除されてしまう。

「思った通りだ。ＡＩＣの弱点見破った！」

「停止結界の弱点だと！？」

動けるようになった直人の言葉に、ラウラは驚きを隠せない。

そして直人は、ＡＩＣの弱点を、刀を突きつけながら説明する。

「ＡＩＣはセシリアのブルー・ティアーズと同じで、使用するためには停止させる対象に意識を集中させねばならない。つまり……」

「多対一の戦闘には向かないってこと！！」

直人の言葉に続くように、紅葉が言いながら拳銃を乱射する。

これは戦闘中に直人が気付いたことである。

アリーナ私闘事件での様子と、これまでの戦闘の様子から、ＡＩＣの弱点に気付き、最初の攻撃と今回の攻撃を持って、確信に至った。

紅葉はこの攻撃の前に、直人にプライベートチャンネルで知らされたのだ。

「ほらほらどうしたの！？　このままだとやられちゃうよ！！」

「くっ！　調子に乗るな！！」

右手に拳銃、左手にマシンガンを持って連射してくる紅葉に、激昂したラウラがワイヤーブレードを射出する。

「おっと……きゃ！？」

一発目をかわすが、二発目に当たってしまう。

「紅葉！」

「よそ見をしてる場合か！！」

「くっ！　ぬあっ！？」

紅葉が吹っ飛ばされたのを見て、思わず直人の注意がそれてしまう。

その一瞬のすきを狙ったラウラの蹴りが炸裂し、直人は大きく吹っ飛ばされる。

「これで、終わりだ！！」

体勢を崩して吹っ飛ばされた直人に止めを刺さんと、ラウラはプラズマ手刀を展開して突っ込む。

「まだだよ！」

しかし、復帰した紅葉がラウラ目がけて突っ込む。

それに気づいたラウラはワイヤーブレードを射出するが、その時、信じられないことが起こった。

紅葉が突然加速して、弾丸のように突っ込んできたのだ。

「瞬時加速（イグニッション・ブースト）だと!?　データにはなかったぞ!!」

「そりゃあ初めてだし、一夏君が練習してたのを見よう見まねでやってるだけだもんね!」

そう、紅葉が使ったのは、瞬時加速（イグニッション・ブースト）なのだ。

データにない戦法を使われ、ラウラは激しく動揺する。

紅葉は直人達と共に、一夏の特訓に当然付き合うことが多い。

一夏の訓練は様々だが、その中に、瞬時加速（イグニッション・ブースト）の練習も当然ある。

実は紅葉のそれは、一夏がその特訓でやってる瞬時加速を、見よう見まねでやってるだけなのだ。

なので純粋な意味では一夏のそれより劣ってる可能性はあり、加えてぶっつけ本番での使用だったが、ラウラの動揺を誘うには十分だった。

「くっ!　だ、だが、所詮は付け焼刃。私の停止結界の前には……がっ!」

動揺しながらも、真正面から突っ込んでくる紅葉をＡＩＣで捕えようとするが、その瞬間、背中に衝撃が走る。

「どうした！　お前の本命は俺だろ！！」

振り向くとそこには、宗近を振り下ろした直人だった。
めったに当たらないエネルギー刃を、ラウラの意識が紅葉に向いたのを機に飛ばし、見事に命中させたのだ。

「この、死にぞこないがーーーー「どこ見てるの？」……！？」

後ろから攻撃されたことに激昂し、直人に襲い掛かろうとするラウラ。
しかしそこに、紅葉が懐に飛び込む。

そこには、脇に抱えるように持った、バズーカのような形状のロケットランチャーの砲口が、ラウラを捉えていた。

「ｆｉｒｅ！！」

掛け声とともに引き金を引き、砲弾は至近距離で命中する。

「まだまだ！」

爆風を利用して一旦距離を取った紅葉だが、再びスラスターを展開する。
そして両手で保持してたバズーカを収納（クローズ）し、代わりに箒との戦いで使用した十文字槍を展開（オープン）する。

しかし、ラウラに突き刺さる直前。刃が縦に展開し、その間に、エネルギーが収束し始める。

「ま、まさか！？」

「今さら気づいても遅いっての！！」

ラウラがその機構に嫌な予感を覚えるも時すでに遅し。

紅葉が叫ぶと同時に、十文字槍から極光が放たれ、ラウラを包み込みながらアリーナの壁に叩き付ける。

「はぁ……はぁ……や、やったー！」

息を切らしながらも、ラウラを倒したことに興奮し、紅葉が声高らかにしつつ、槍を上に突き上げる。

「あれだけの連続攻撃、流石に奴も無事でいる筈……」

自分と紅葉の見事なコンビネーションによる連続攻撃。

あれだけの攻撃を撃受ければ、倒せてなくても、ほぼ敗北は確実だろうと思いつつ。壁に叩きつけられた、ラウラの様子を窺う。

しかし、異変は突如として訪れる。

「あああああっ！！！！」

「な、何だ！？」

「何！？　何が起こってるの！？」

突如、悲痛とも取れる叫び声を上げるラウラ。

直人と紅葉がその様子に驚愕していると、その異変はさらに進んだ。

突如、ラウラのＩＳが形を変え始めたのだ。

装甲は黒く濁ったような色をしつつも、まるで溶解した鉄のようにドロドロになっていき、ラウラを包み込む。

そしてそれはやがて、人のような形を成していくのだった。

「あ、あれは……」

だが直人は、そのＩＳだった泥人形のようなものの手に持ってる、「あるもの」を見て愕然とする。

「あれは……雪片！？」

そう、その手に持っていたのは、まぎれもなく雪片。

千冬が持ち、一夏に継承された武器、そのものだったのだ。

「まさか、ＶＴシステムか！！」

「ＶＴシステム！？　あの開発はおろか、研究さえ中止されてるっ

て言う!?　何でそんなものが!?」

「俺が知るか!　そんなことより、放っておくと不味い。直ぐにあいつを止め……」

直人がとにかくＩＳだった泥人形のようなものを止めようと言おうとするが、突然その直人の近くに、その泥人形が近づく。

「なっ!?」

突然の事に驚くも、すぐさま肩にマウントしていた童子切と大典田を射出し、泥人形の一撃を防がせるが……

バキッ!

「なっ!?　がっ!?」

雪片もどきの一撃を止めることは適わず、二本の刀は折れてしまう。

そしてそのままの勢いで、振り下ろされた刃は直人を直撃する。

シールドエネルギーが二桁まで削られ、直人はその場に倒れ伏す。

「直人!!」

紅葉が驚き、直人を助けようと接近する。

「馬鹿っ!　来るな!!」

しかし、直人はそんな紅葉に来るなと言う。

しかし、少し遅かった。

「グフッ！？」

泥人形が振った雪片もどきは紅葉を直撃し、紅葉はそのままアリーナの壁に叩きつけられる。

そのまま倒れこむと同時に、ＩＳが解除された。

「紅葉！！」

心配して紅葉の名を叫ぶが、意識を失ってるのか動く気配がない。

そしてその間も、泥人形は直人に近づく。

（この姿、そして今の太刀筋。間違いない、こいつは……）

直人が悔しそうな顔で、目の前の泥人形の事を分析してる間に、泥人形は雪片もどきを大きく振りかぶる。

（くそっ！　体が動かない……こんな奴に……）

立ち上がる闘志、戦う意志はあるのに、体が思ったように動いてくれない。

そうこうしてる間に、泥人形は雪片もどきを直人目がけて振り下ろす。

しかし、その刃が届くことはなかった。

「大丈夫か！　直人！！」

「い、一……夏？」

振り下ろされた刃は、ピットで待機していた筈の一夏が防いでいた。

「お、俺の事は良い。それより紅葉だ！」

何とか立ち上がるが、自分より紅葉の方が心配でならなかった。

「大丈夫。気絶してるだけだよ」

だがその心配に、同じくアリーナに降り立っていたシャルルが答えてくれる。

「そっか、良かった。シャルル、悪いが紅葉の事は任せる」

「うん、任せて」

そう言うと、直人は残った最後の一本、宗近を手に持つ。

「うわっと！？　この！」

一方で、泥人形と鍔競り合いを演じていた一夏は、そのまま泥人形に押し負けてしまう。

しかし、とっさに反撃を繰り出し、泥人形はそれを避けるために

距離を取る。

「一夏、こいつは……」

「解ってる」

直人が何か言おうとするが、一夏はそれを遮る。

「あれは、千冬姉の技だ。千冬姉だけのもんだ。だから……」

「そうじゃねえ」

珍しく憤っている一夏は、明らかに平常ではない、怒りを露わにした状態で言う一夏の言葉を、今度は直人が遮る。

そして、その次に言った言葉に、一夏は耳を疑った。

「あいつは……俺が斬る！」

「なっ！？　何言ってんだよ！？」

突然のそう言われ、一夏も食い下がる。

「お前の怒りは尤もだ、あれは師匠だけの技、それをあんな張りぼてで使われてるのが、そしてそれを強さだと勘違いしてるボーデヴィッヒが許せないんだろ。だがそれは俺も同じだ！」

「そりゃそうだろうさ。でも、俺だって引き下がらねえ」

「いや、引き下がってもらう」

そう言って、前に出ようとする一夏を宗近で制する。
しかしこの時、怒りで我を忘れていた一夏だが、直人の雰囲気を見て、一瞬寒気を感じる。

「悪い、一夏。お前に斬らせてやりたいが、もう俺、聞こえちまったんだよ」

「な、何が……」

直人の言葉に問いかける一夏だが、後になって「聞かなきゃ良かった」、と思った。
何故なら、今の直人は一見すると冷静に見えるが、一夏は知っていたのだ。

直人が冷静に見えるときは……

「緒の切れる音が」

本気でキレてるのだという事を。

「……」

一夏は完全に絶句してしまっていた。

この時の直人は、冷静で、とても怒ってるようには見えない。

しかし、その内では、激しい怒りのボルテージが溶岩のごとく煮えたぎっているのだ。

「こいつだけは、俺の手で叩っ斬る。そうしなきゃならないんだ！」

そう言い放つと、尻ずぼみしている一夏をよそに、一歩、また一歩と泥人形に近づく。

泥人形も直人を視認し、雪片もどきを構えて来る。

「それがお前の憧れなのか？」

そんな泥人形に……いや、正確には、その泥人形の中に包まれたラウラに向かって、直人は言葉を放つ。

「それがお前の求める強さなのか？」

言葉を続け、そのまま泥人形に近づく。

「そんな張りぼてを身に纏ってまで、お前は……」

言葉を続けるが、そこへ泥人形が雪片もどきを振り下ろす。

しかし、その刃を、宗近を一閃させることで弾く。

「そこまでして、あの人になりてぇのか！」

その叫びと同時に、一瞬体勢を崩した泥人形が体勢を立て直し、再び襲い掛かってくる。

しかし今度は、それを真正面から受け止め、防ぐ。

「あの人に少しでも近づきたいなら……」

そう言った刹那、宗近に力を込めて一気に押し出す。

すると、泥人形はそれに圧倒され、体勢を崩す。

「いい加減、自分の間違いに……気づきやがれーーーーー!!」

そして叫びと共に、宗近で泥人形を縦に斬る。

その結果、泥人形は紫電を走らせつつ、動きを止める。

しばらくして、直人が斬り付けた場所が割れ、その中から一人の少女が現れた。

ラウラだ。

「おっと」

倒れこむラウラを、宗近を収納（クローズ）して両手で抱きかかえる。

その時の彼女の表情は、どこか弱弱しく見えた。

「……ちっ、少しは折檻してやろうと思ったんだが。こんな顔されちゃあ出来ねえよ」

ラウラの表情を見た直人はそう言って、もう一度ラウラの顔を見ながら言う。

「まっ、今回はこの位にしておいてやる。後はあの人に、こってり絞ってもらうんだな」

そう言うと、まるで安心させるかのように、その頭を撫でるのだった。

第二十五話　真剣、キレる（後書き）

桜爛の間

作者「今回は学年別トーナメント後半戦、ラウラの暴走と、直人ブチ切れの回でした」

直人「久しぶりだぜ、緒の切れる音が聞こえたのは」

作者「上手くかけたかどうか不安ですが、直人は本気でキレると、一見冷静になりますが、胸の内では怒りがぐつぐつと、噴火寸前の溶岩のごとく煮えたぎってます。では、後書きコーナーに行きたいと思います。まずは「直人の目安箱」から、最初の質問はこちら」

Q1．紅葉へ
もし直人が異形の存在となってしまったとしても、想い続けることが出来ますか？

紅葉「異形って……もしかして、妖怪とか、お化けとか……キュゥ……（ドサッ）」

直人「ちょっ！　紅葉！？」

作者「ありゃりゃ、気絶しちゃった。ええ言っておきますと、紅葉は怪談と暗いところ、それとそれらを連想させる、幽霊、妖怪の類が苦手です。さっきみたいに気絶するほどに。と言う訳で、回答者が気絶してしまったため、次の質問に行きましょう」

Q2．直人・一夏へ
自分のＩＳがガンダムタイプのものだったとしたら、どのガンダムが良いか、逆にどのガンダムはダメか？

直人「そうだな……俺は近接戦主体型が良いからな、アストレイレッドフレームとか、エクシアとか、その辺りが良いかな？　一夏はそうだな、クロスボーンＸ３辺りが良さそうなんじゃないか？」

一夏「そうか？」

作者「で、逆は？」

直人「やっぱりバスターとかケルディムみたいな、遠距離使用型は駄目っぽそうだな。良く言っているが、俺は射撃は苦手だし、そっちは大概真白に一任してるからな」

一夏「俺もかな？」

作者「だそうです。本当に似たもの義兄弟ですね、この二人。では次は「抱腹絶倒！　アフレコ委員会！！」です。今回は一夏と直人に参加してもらいます」

一夏「えっ？　俺これだけ！？」

直人「こんなセリフ、俺のキャラじゃない気が……」

作者「文句言わずにさっさとやる。ではどうぞ！」

直人「目覚めてくれ、ダブルオー・・・。ここには、Ｏガンダムと・・・エクシアと・・・！俺がいるっ！！」

作者「【機動戦士ガンダム００　ｓｅｃｏｎｄ　ｓｅａｓｏｎ】の、ダブルオーガンダム起動時の刹那の台詞です」

直人「すごく、俺のキャラじゃない気が……」

作者「そんなことないと思うけど、では次は、一夏と直人に言ってもらいます」

一夏「世界が我らを否定するから！」

直人「我らが世界を滅ぼすのだ！！」

作者「【機動新世紀ガンダムX】の、カテゴリーFことフロスト兄弟の台詞です」

一夏「カテゴリーF？」

作者「ああそれは、カテゴリー「老けてる」の略で」

直人「違う！　ｆａｋｅのFだ！！」

作者「冗談だよ冗談。さあ、じゃあ直人に最後のこれやってもらうよ」

直人「はいはい」

直人「再びジオンの理想を掲げるために！星の屑成就のために！ソロモンよ！！私は帰ってきた――――！！」

作者「ソロモンの悪夢こと、アナベル・ガトーの台詞です。旧ソロモンで行われた観艦式に、ガンダム2号機に搭載された核弾頭を発射する際の台詞です」

一夏「直人にすげー似合ってる気がするなあ」

直人「あの人、「南無三！」とか言ってたしなあ……」

作者「さて、今回はここまでです。次回はこの事件の後日談、そして皆さんお待ちかね、真白が帰ってきますので、お楽しみに！」

第二十六話　白き少女の秘密、そして……（前書き）

書き忘れたことがあるので、更新後ですが載せておきます。

今回は文字数が１０，０００を突破しました。

かなり長いと思われるでしょうが、そこを留意して読んでいただければ幸いです。

本当に、すいません。

第二十六話　白き少女の秘密、そして……

「……！！」

日も落ちかけた夕暮れ時、ラウラは目を覚ました。

「私は……」

ぼやけてる思考を覚醒させながら、何があったのかを必死に思い出そうとする。

だが、どれだけやっても、記憶がすっぽり抜け落ちていた。

トーナメントで、直人と紅葉のコンビネーションに敗れ、それでも負けるわけにはいかないと力を欲した。

そこから先の事は全く覚えておらず、気がつけば、保健室のベッドで寝かされていた。

「一体、何があったのですか？」

「一応重要案件の上、秘密事項なのだがな……」

ラウラの問いかけに答えたのは、彼女のベッドの近くの椅子に腰かけていた、織斑千冬だった。

「ＶＴシステムは知っているな？」

「ヴァルキリー・トレース・システム……」

千冬の問いかけに、ラウラは驚いた様な表情で、そのシステムの正式名称を言う。

ヴァルキリー・トレース・システム。通称「ＶＴシステム」

ＩＳの世界大会、モンド・グロッソ大会の各部門優勝者の動き、戦闘方法を解析・データ化し、トレースするというシステムである。しかしこのシステムは、アラスカ条約によって、いかなる国家や組織、企業であっても、研究、開発、使用など全てを禁止されている禁断のシステムである。

「それがお前のＩＳに積まれていた」

それを聞いても、ラウラは外の景色を見ながら、黙ったままだった。

それを気にせず、千冬は話を続ける。

「操縦者の精神状態、蓄積ダメージ、そして何より、操縦者の意志……いや、願望と言うべきか。それらが揃うと発動するようになっていた」

「私が……望んだからですね……」

そう呟くラウラの手には、自然と力がこもっていた。

あの時、ＶＴシステムが発動する直前、確かに彼女は望んだ。

勝利を得ることを、力を欲するのを……

織斑千冬になることを……

「ラウラ・ボーデヴィッヒ！」

「は、はい！」

そんなことを考えてる時、突然千冬に名前を呼ばれる。

そして、こんなことを質問された。

「お前は誰だ？」

「私は……」

なぜかそこで止まってしまう。

自分の名前、識別名称を言えば済むはずなのに、なぜかそれができない。

「誰でもないなら丁度いい。お前はこれから、『ラウラ・ボーデヴィッヒ』になればいい」

「えっ？」

それはどういう意味か、聞こうとした時だった。

「何時までそこにいるつもりだ？　盗み聞きとは感心せんな」

突如、保健室の扉に向かって千冬がそう言うと、保健室の扉が開く。

「立ち聞きしてた訳ではありません。空気を読んで、入らなかっただけです」

そしてその前にいたのは、小さめの紙の箱を持った真白だった。

「全く。トーナメントを棄権したばかりか、こんな紙を残して授業をさぼりおって」

そう言って千冬が懐から取り出した紙には、「一身上の都合で、数日授業を休みます。お叱りは後程」と書かれていた。

「詳しくいう訳には、いきませんでしたし、無言で休むのもいけま

せんでしたから」

「全く……その上、失踪する前日に、必要な手続きを全て山田君に渡していたとあっては、流石にこれ以上は何も言えんか……」

真白の抜け目なさに、千冬は最早呆れるしかなかった。

「お詫びと言っては何ですが、バウムクーヘンを作ったんです。いただきますか？」

「後にしよう。これから色々忙しいのでな」

「そうだろうと思って、寮長室の冷蔵庫に入れておきました。後部屋の掃除も」

「……」

「余計な事を言うな」的な視線を送るが、当の真白はどこ吹く風だった。

「はぁ……まあいい、ボーデヴィッヒと話したいことがあってここに来たんだろう。私は仕事に戻るから、後は二人で話せ」

「はい」

そう言うと真白が保健室に入り、入れ替わるように千冬が保健室を去ろうとする。

「ああ、それから」

とその時、突如歩みを止め、ラウラの方を向いてこう言った。

「お前は私にはなれんぞ」

そう言って去っていくのだった。

「……見かけによらず、ずるいお人」

そう言うと、先ほどまで千冬が座っていた椅子に、今度は真白が腰掛ける。

そして近くの台に箱を置き、箱を開けると、そこには見事なバウムクーヘンを乗せた更が二つあった。

「食べる？」

「……頂こう」

真白の問いかけに、ラウラも自然体で答える。

ついこの間まで、敵意を燃やし、激しい対抗心を持って居た筈なのに、今は自然とそんな感情も起こらない。

ラウラが是と答えると、真白は箱から一皿台に置き、ラウラの上半身を起こすのを手伝う。

動くたび、筋肉と打撲による傷が悲鳴を上げるも、何とか起こすことに成功し、テーブルに置いた皿をラウラに渡し、箱の中のもう一皿を自分の膝元に置く。

「……美味い」

「そう、良かった」

受け取ったフォークを使い、皿に乗ってるバウムクーヘンを一切れ口に入れると、ラウラは率直な感想を述べ、それを聞いた真白も微笑しながら一切れ口に入れる。

そして、身体を起こしてもらうのを助長してもらったことと、その味の美味しさも相まって、密かに燻っていた敵意と対抗心が、さらに消えていく感じがした。

「……それで」

「それでって？」

そんな中、手元に持ってた皿を近くの台に置くと、ラウラは真白に問いただした。

「先ほど教官が、私に話があると言っていたな。いったいその話とはなんだ？」

その言葉に、真白も「ん」と口を閉じる。

別にごまかしたりするつもりはないものの、先ほどの行動程度では、誘導されないと悟ったのだ。

しばらくの沈黙の後、真白の口から出た言葉に、ラウラは耳を疑った。

「遺伝子強化素体、識別番号Ｃ‐〇〇三七、個体識別名称、ラウラ・ボーデヴィッヒ」

「！！？」

それは紛れもなく、自分の事。

本来なら決して公開されることのないはずの、自分の素性を表す言葉だった。

「何故知っている！？」

いつもの冷静さを失い、真白に問い詰める。

一方の真白は、どこか申し訳なさそうにしながらも、いつも通りの口調で話す。

「私と直人の知り合いに、馬鹿だけど頭のいい人がいるの、その人、ハッキングの技術にも優れてて、よく他国の情報を、覗き見てるの、勿論、ドイツの事も」

「……国際クラスの犯罪者だな」

「全く持ってその通り」

全世界規模での犯罪行為を行ってると言うその馬鹿（端午）の事を聞き、嘲笑気味に言うラウラの言葉に、真白も否定せず答える。

「では、トーナメントを棄権して行方をくらましたのは……」

自分の事を知るためか？　と聞こうとしたが、それより早く、真白が首を横に振る。

「貴女の事は、向こうについてから知った、私が雲隠れしたのは、別の理由」

「別の理由？」

「うん、でも、今は言えない」

真白の言葉に、ラウラは食いついてくると思いきや、「そうか」と言うと、あっさり手を引く。

真白の目が、それを拒んでいることを、ラウラは感じ取ったのだ。

「それで、そのことに何か苦言を呈するために、私とここに残ったのか？」

そのことについてはさておき、ラウラは、自分の生まれについて、何か言いたいことがあるのかと聞いてくる。

彼女自身、自分の出生について何か思うところがあったわけではないが、一般的に、こういった事が、決して世間から褒められるものではないことは自覚していた。

遺伝子をいじくって、戦うための存在として生み出す。

それが世間では、「非人道的行為」として非難されるという事を知っていた。

しかし、真白は再び首を横に振る。

「貴女に、知ってもらいたいことがあるの。だから……ここに来た」

「私に知ってもらいたいこと？」

ラウラの復唱に頷くと、真白はゆっくりとまぶたを閉じる。

そしてそれが開かれたとき、ラウラは驚きに満ちた表情をする。

何故なら先ほどまで金色だった真白の瞳が……

蒼く変色していたのだから。

「貴様、その眼はまさか！？」

ラウラには、その眼に一つ心当たりがあった。

ＩＳとの適合性向上のために処置される、擬似ハイパーセンサー。これを移植することで、脳への視覚からの情報伝達を飛躍的に向上させ、ＩＳ戦闘の主体である、超高速戦闘下での動体反射を向上させることができると言う代物だ。

ラウラもまた、自身の左目にこれを処置しているのだが、彼女はこれを快く思ってない。

理論上、不適合のリスクなどありえないはずなのに、彼女はこれを処置した結果、左目が金色に変色し、機能のオンオフが利かない制御不能状態となってしまったのだ。

その結果、彼女はあらゆる訓練で後れを取ることになり、結果、「出来損ない」の烙印を押されてしまった。

自信を奈落へと落とした、まさに元凶と呼ぶに相応しいからなのだ。

「まさか、お前も……」

過去はさておき、ラウラは変色した、そのサファイアかラピスラズリを思わせる綺麗な蒼い瞳を見ながら、真白の言いたいことに、何となく予測がついた。

「私は、物心ついた時から、とある国の研究機関にいた」

そのラウラに答えを提示するかのように、真白は静かに淡々と、だが、どこかもの悲しそうに、自分の事を話し始める。

「親兄弟がいたのかも、どこの生まれなのかも、何も解らない。あなたと同じように、人工子宮で生み出された可能性もあるけど、それを示すだけの記憶もない。本当に……何も解らない。ただ解ってるのは、物心ついた時からその研究機関にいて、最強のＩＳ操縦者……ううん、最強の兵士として、身体を弄られていたこと、それだけ」

「最強の……兵士？」

真白の言葉に、ラウラが疑問を呈し、真白はその疑問に答えるように、続きを話し続ける。

「ＵＭ（ウルティマス・ミレス）プロジェクトと呼ばれてたその計画は、あらゆる武器を操り、あらゆる技術を使い、たった一人で戦場を掌握し、不利な戦況を覆す。まさに最強にして究極の兵士を生み出すためのプロジェクトだった」

真白の話に、ラウラはただ耳を傾け、話を遮ろうとせず、話を聞き続けた。

「その為に私は、感覚、運動など、あらゆる神経を強化させられ、筋肉もそれに追随するように強化された。その一環として、様々な種類のナノマシンも打ち込まれた。その上、あらゆる武器は戦闘技術、火薬の調合法や拷問の術、情報戦のノウハウまで刷り込まれた」

「では、その眼も」

ラウラの問いかけに、真白はゆっくりと頷く。

「尤も、何故こうなったかは、私にも、当時の研究員たちにもわからなかった。理論上体への変化なんてないはずのものだったし、目の色が変わった以外は、他に見当たる変化もなくて、結局放置することになったんだけど」

真白が言うには、瞳の色、詳細に言えば、虹彩の色が変化した以外は特に何もないとのこと。

そう言うと、真白は話を続けた。

「でも、その研究は、あの白騎士事件を機に、さらに酷くなった」

その言葉に、ラウラは一瞬身を強張らせる。

「ＩＳの登場により、その性能に着目した研究機関は、今までのそれに加えて、ＩＳ操縦者としての技術も刷り込み、さらにＩＳの性能を引き出せるように、さらなる実験と改造を加えて行った」

「一体、何をされた？」

思わず、興味本位で聞いてみるラウラ。

不謹慎だと思ったが、この時の真白の顔が、何時にもまして暗く見えたので、思わず気になってしまったのだ。

「聞きたい？　……ううん、知らない方が良い。聞いたらきっと、貴方は後悔すると思う。今まで自分が受けてきた訓練が、子供の遊

びに思えてしまう位に」

「そ、それほど酷いのか？」

ラウラの疑問に、真白はこくんと頷き、ラウラもそれ以上は聞かなかった。

「私は、そこにいるのは嫌だった。でも反抗はしなかった。どうしてだと思う？」

「何故だ？」

真白に聞かれても、真白の心情を知る筈もないラウラには解る筈もなかった。

真白もそれを予想してたのか、何も言わず、続きを話し始めた。

「私には居場所がなかった。初めに言ったように、私には家族がいたのかもわからない。だから、仮に反抗して施設を出られても、私には頼るところ何てない。だから嫌だけど、そこに留まるしかなかった」

今まで見たこともないほど暗い顔をしながら、真白は自分がそこにいた理由を話す。

決して良いとは言えない環境だったが、彼女には、両親の記憶も何もなく、自分の生まれさえ知らない。

そんな彼女が外の世界に出たところで、身を寄せられる場所がないことなど明白だった。

「でもある日、二年ほど前に、そんな私を、一人の剣士が、助けて

くれた」

「……桜庭直人、奴の事か？」

ラウラはその一言で、誰の事なのかすぐに解った。

本当なら、名を出すのも腹立たしかったはずだが、なぜか今は、そんな気も起きなかった。

「そう、一本、たった一本の刀で、直人は私のいた世界を、微塵に壊してくれた。そして私を見つけて、「どうしてこんなところにいるんだ？」って聞いた」

真白の話を、ラウラは唯静かに聞いていた。

「私は「ここ以外に居場所が無いから」と答えた。事実その通りだったし、他に答えようもなかった。でもそう答えたら、直人は私に、こう言ったの」

居場所ってのは、与えられたりするものじゃない。きっかけで与えられたとしても、そこを本当に居場所にできるかどうかは自分次第なんだ。こんなところで生気のない顔してる暇があったら、自分で自分の居場所を探すことだ。もし探し方がわからないって言うなら、俺がその居場所を与えてやる。後は、自分でものにするんだな。

「居場所は……自分で探すもの……」

真白が言った、直人の言葉を、ラウラは思わず反芻する。

「そう、そして直人は、私に居場所と名前をくれた。晴天の日にちらちらと舞降る雪、「風花」のように、綺麗で、純真な子に育ってほしいと言う、願いを込めて」

「それが、お前の名か……」

ラウラの言葉に、真白はこくんと頷く。

さっきまでの暗い顔と違い、この時の顔は、とても嬉しそうだった。

「直人は私に居場所をくれた。でも、今いる場所は、直人が与えてくれたものだから守るんじゃない。私が守りたいから、守るの」

「そうか、だからお前はあの時、私に挑んできたのか」

「頭に血が上って、やりすぎたと、今は反省してる。でも、私にとっては、それだけ大切なものだから」

真白にとって、直人の存在は掛けがえのないものなのだ。

自分に居場所を与えてくれたから。

自分に名前をくれたから。

居たくもなかった世界を壊してくれたから。

そして何より……自分が居場所にしたいと、守りたいと願うから。

「だが……私は……」

真白の話を一通り聞き終えたラウラだが、その顔はどこか浮かなかった。

それは、自分が自分でない気がしていたからだ。

ＶＴシステム発動時、彼女は、自身の尊敬する人物に、織斑千冬になろうとした。

これまで、その目標だけを標に生きてきた。

だが今は、自分が何者なのか、その答えも解らず、また、自分だと言える勇気もなかった。

あの時千冬に「お前は誰だ？」と聞かれた際、「自分はラウラです」と、言えなかったのが、その証拠だった。

「織斑先生も言ってた。少なくとも三年は、この学校に在籍しなければならない。その間に答えを見つければいい、答えは自分じゃなきゃ見つけられないけど、周りは頼めば助けてくれる。勿論、私も」

そう言うと、真白は食べ終えた皿を箱に戻し、部屋を出ようとする。

「お皿は怪我が治ったら、返してくれればいいから。それじゃ」

「待て」

そう言って去ろうとした真白を、今度はラウラが呼び止める。

「私も、一つ聞きたいことがある」

「何？」

「あいつの……桜庭直人の強さは、一体何なんだ？」

ラウラは真白に、直人の強さを聞く。

今までは自分の方が上だと自負してたが、自信を喪失してたことと、「ある事」で、その強さが何なのか、知りたかったのだ。

そんなラウラに、真白は、こう呟くのだった。

「……決意と、信念。一言でいえば、強くありたい、そして、誓いを果たそうとする意志」

そう言うと、真白は以後、振り向きもせず、その場を去っていった。

「決意と……信念……」

意味を理解できなかったラウラだが、なぜか、頭に掛かった靄が、晴れるような感覚がした。

（そうか……そうだったんだな）

この時彼女は、なぜ自分が負けたのか、直人の強さの理由が何のか、その一端に触れることとなった。

（私は……）

それと同時に、ラウラは、自身のある気持ちを、理解する。

だが、自然とそれに悪い気はせず、そしてこれまた自然と、普段の彼女からは想像もつかない程、少女らしい微笑が、零れるのだった。

「いっつつ……」

「大丈夫か？　直人」

「ああ、何とかな……」

一方、こちら食堂では、一夏、直人、シャルル、紅葉の四人が集まって夕食を取っていた。

身体に走る激痛に顔を顰めつつ、あの泥人形　（元シュバルツェア・レーゲン）に斬られた右肩を押さえる直人に、一夏が心配して聞いてみる。

絶対防御のおかげで本当に斬られたわけではないのだが、それで

も擬似的とはいえ、ＩＳ専用の武装で斬り付けられたのだ。
外的衝撃まで防げるわけではないため、実際は鉄の塊が打ち付けられたのと同じ感覚だ。

「でも良かったよ、二人とも大した怪我じゃなくて。外で見たときは、一瞬最悪の予感がしたから」

「大げさだなあ。この位、ここじゃよくある事でしょ？」

その横では、二人の様子をアリーナの更衣室で見てて、ハラハラしたシャルルがそう言い、紅葉が手をひらひらとしながらそう返す。
ちなみに彼女の頭には包帯が巻かれているが、怪我自体は蜂谷（こめかみ）を少し切った程度で、出血の量も、すり傷と大差ない程度の軽傷だった。

「うーん……っ！！　こりゃあしばらく右腕は動かさんほうが良いかな？　下手に動かすと、肩に悪いしな」

「そうだね。絶対防御があるからと言っても、受けた衝撃や痛みまで防ぐわけじゃないからね」

「無理して尚更ひどくなったら、本末転倒だからな」

シャルルと一夏に言われ、直人も「仕方ないか」と呟く。

「それにしても、中止になっちゃったね。トーナメント」

「無理もないよ。条約で禁止されてるシステムの存在が明らかになって、しかもそれが起動して暴走したんだ。中止にせざるを得ないよ。学園も、ドイツ軍に問い合わせないといけないしね」

「尤も、研究施設には、今頃でっかい花火が打ちあがってるんじゃないか？」

「「「でっかい花火？」」」

「いや、こっちの事だ、気にするな」

直人の言葉に三人は疑問符を浮かべるが、直人は暗に「すでに研究施設は壊滅してる」と言っていたのだ。

自分の知る、二人の天災の仕業によって。

「唯、個人データは取りたいから、一回戦は全部やるそうだよ？」

「ふぅん……ん？」

シャルルの言葉に、ラーメンを啜りながら相槌を打っていると、一夏は何かに気付く。

それにつられ、三人もその視線を追うと、その先にいたのは……

「優勝……チャンス……消えた……」

「交際……無効……」

「うわあああああん！！」

すごく落胆したかと思いきや、いきなり大声を上げてそのまま去っていく女子たちだった。

「何なんだ、あれ？」

「さあ？」

唐変木義兄弟は首を傾げるが、その様子を見て、紅葉も少し落胆する。

（はぁ、そうだよねえ。トーナメント中止ってことは、交際のチャンスも無くなったわけだもんねー。あーあ、せっかくのチャンスだったのに……）

そう、女子だけの取り決め、優勝したら一夏、直人と交際できるというあの噂も、トーナメントが中止になったのでは、最早無効も同然だろう。

それに、トーナメントの前日のあの約束も、当然無効になってしまったと、それを考えると、落胆はさらに大きくなった。

「あっ」

「ん？」

と今度はシャルルが何かに気付き、全員でその視線を追うと、今度はどこか落ち着きのない箒の姿があった。

「……あっ」

すると、何かを思い出したようなしぐさをした後、一夏は席を立ち、箒に近づいて行った。

「そう言えば箒。先月の約束な……」

そして次の言葉に、その場にいた全員が耳を疑った。

「付き合っても良いぞ？」

「えっ……」

「おお！！」

「なにっ！？　つつ……」

一夏の発した答えに、シャルルはどこかさみしそうな、紅葉は「これはこれは！？」的な顔をしてにやにやし、直人は思わず驚き、肩の激痛に、かつての鈴、セシリアと同じ状態になる。

「な、何！？」

「だから、付き合っても良いって……」

「本当か！　本当に本当なんだな！？」

「お、おお……」

そして、答えを待ち焦がれていた当の本人、箒もまた、驚きを隠せなかった。

驚きのあまり、一夏の胸ぐらをつかみ、自分の所に引き寄せて聞いてきたほどだ。

「何故だ！？　ん……理由を聞こうじゃないか」

冷静さを取り戻し、掴んでた胸倉を話すと、一つ咳払いしたのち、一夏に問う。

「幼馴染の頼みだからな、付き合うさ」

「そうか！！」

「買い物くらい」

そう言った刹那、一夏の顔にすさまじいストレートパンチが炸裂するのだった。

「そんな事だろうと思ったわ！！」

そしてパンチを喰らわせた箒は、その場に倒れこむ一夏の腹に、さらに蹴りをかまし、一夏の呻き声を無視して、不機嫌な顔でその場を去っていった。

「箒さん、可愛そう……」

「何でだ、なんでお前はいつもそうなんだ……」

「一夏って、わざとやってるんじゃないかって思うときがあるよね」

腹を押さえながら蹲る一夏を見て、紅葉、直人、シャルルはそう呟くのだった。

「あっ、約束と言えば……紅葉、お前がトーナメントの前日に言ってたあれ」

「ふにゃ！？」

とここで、直人も紅葉との約束を思い出し、紅葉に聞いてみる。
突然聞かれたため、紅葉は猫っぽい悲鳴を上げながら振り向く。

「もしかしてあれ？　買い物の事じゃなかったか？　それとも、どっか行きたいところがあったとか？」

「えっ？　……う、ううん。全然間違ってないよ！　いやあ、じつはちょっと色々買うものがあってさあ！！」

「そっか、俺も丁度食材でも買ってこようかと思ってたからさ、じゃあ今度、一緒に」

「う、うん！　日にちはまた後で！！」

と、こっちは先ほどの二人のようにはならず。「買い物」と言う形で決着した。

（はぁ……直人も直人だよ。一夏君の周りの事には機敏なのに、どうして自分の事になるとこう……はぁ）

しかし、一夏にも負けず劣らずの直人の唐変木ぶりを見て、紅葉は二度ため息を漏らすのだった。

「織斑君！　桜庭君！　デュノア君！　朗報ですよ！！」

とそこに、山田先生がやってきた。

「今日は大変でしたね。桜庭君と秋宮さんは大丈夫ですか？」

「はい。ちょっと激痛がしますけど、後は別に」

「私もかすり傷ですので、心配いりません」

山田先生に身体の傷具合を聞かれ、二人は感じたままを正直に話す。

「それで山田先生、どうしたんですか？」

「あっ！　そうでした！　実はですね、三人の労を労う場所が、ついに解禁になったんです！」

「「「「場所？」」」」

四人がはもると、山田先生は、その答えを言った。

「男子の、大浴場です！！」

このＩＳ学園には、当然大浴場もあるのだが、一夏と直人、そしてシャルルは使用出来なかった。

無論、同い年の女子と入るわけにはいかなかったからなのだが、常々入りたいと、一夏は不平を漏らしていたのだ。

なのでこれを聞いた瞬間、一夏はすごく生き生きとした顔になった。

「ああ、先生。俺は今日シャワーでいいですので、二人を先に入れ

て来てください」

その横で直人は手を上げてそう言ってきた。

「えっ？　直人入らねえのか？」

「解禁になったなら、今はいることもないだろうしな。それに、今日は疲れててとても入る気になれないんだ。悪いが、俺は一足先に、部屋で休ませてもらう。じゃ」

そう言って、直人は一人、部屋に戻っていくのだった。

「つつ……」

部屋に戻った直人は、いまだに痛む右肩を押さえながら、直人は今回の事を思い返す。

その中で、ある一つの事に気がいく。

（別に通信とかしたわけじゃないよな……でも、俺は確かに会話したんだよな、あいつと……）

直人は、通信をしたわけではないのに、なぜかラウラと話した感じがしていた。

しかも、あの時、ラウラと通信をしてたかと、事情聴取で千冬に聞いてみたところ「そのような痕跡はなかった」と言われた。

でも、確かにラウラと話した感じはした。

何故なら、彼女の声ではっきりと、こう聞かれたのを覚えているからだ。

何故、お前はそれほど強いんだ？

今までの記憶の中で、彼女と出会った時は、必ず罵声かにらみ合いばかりで、そう言ったことを聞かれた記憶は、あの時を除いて、ただの一度もなかった。

「……後であいつに聞いてみるか、ＶＴシステムの研究施設がどうなったかを問い詰めるついでに」

そう呟くと、突如、ドアをノックする音が聞こえた。

「開いてるぞ」

そう言うと、部屋にその人物が入ってきた。

真白だ。

「直人……」

「何時ものあれだろ。好きにしろ」

「聞かないの？」

「聞いたら答えてくれるか？」

そう言うと、真白は黙り込んだ。

「言いたくないなら聞かない。大体察しもつくしな。でも、話す気になったら、話してもらうぞ」

「うん……」

そう頷くと、真白は手に持った櫛で、直人の髪を梳き始めるのだった。

「……直人」

「何だ？」

すると、真白が直人に、ある事を聞いてきた。

「今日……一緒に寝ていい？」

「はっ？　何で？」

「何となく、そんな気分だから……」

その答えに、直人は少し呆れる。

「……駄目？」

だが、振り返った時、その寂しげで、懇願するような瞳に、この男がはっきり「ＮＯ」とは言えなかった。

「……好きにしろ」

そう言うと、梳き終わった髪を少し整え、壁にもたれ掛ろうとした時だった。

「ベッドで寝よう」

「おいおい」

「お願い……」

また真白に、捨てられた子犬のような目をさせられ、折れた直人は、真白の言うとおり、この日はベッドで一緒に寝たのだった。

「えーっと……今日は皆さんに転校生を紹介します」

次の日、教室に入ってきた山田先生は、どこか気まずそうと言うか、困った顔をしていた。

そして、山田先生に言われ、その転校生が入ってきたが、その転校生と言うのは……

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めて、よろしくお願いします」

今まで男子として、クラスと接していた、スカートを穿いたシャルルこと、本名、シャルロット・デュノアだったのだ。

「えーっと……デュノア君は、デュノアさん、という事でした」

「「……はっ？」」

「えっ？」

「嘘～！！」

シャルルこと、シャルロットの正体に、直人と箒が見事なシンクロを発動させ、真白は目をきょとんとさせ、紅葉は驚きを隠せず声を上げるのだった。

「えっ！？　デュノア君って女！？」

「おかしいと思った。美少年じゃなくて、美少女だったわけね！」

「って織斑君！　同室だから知らないってことは！！」

「ちょっと待って！　昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！？」

そして周りのクラスメイト達は騒ぎ立てるが、四人目が大浴場の

事について触れた時だった。

「一夏ーーーーー！！！！」

そこへ、教室の壁をぶち壊して、鬼のような形相の鈴が、修復が完了したばかりの甲龍を纏って乱入して気た。

衝撃砲は、発射準備が完了しており、今まさに放たれようとしていた。

「えっ！？　ちょっと待て！！　これ死ぬ！　俺絶対死ぬー！！」

「って、これ完全に俺も巻き添え食うよな！？　落ち着け鈴！　俺一応怪我人だから！　ってか、頼む！　ちょっと待てーーーー！！！！」

一夏と直人の叫びもむなしく、衝撃砲が放たれる。

生身の二人、かなり近い距離だったためＩＳ展開で防御することもできず、そのまま見るも無残なミンチに……

「「……あれ、死んでない？」」

ならなかった。

生を実感した二人が、そのまま目を開くと……

「「ラウラ　（ボーデヴィッヒ）！！」」

そこにいたのは、鈴と同じく、予備パーツで修復された、シュバルツェア・レーゲンを身に纏ったラウラだった。

おそらく、ＡＩＣを使って、鈴の衝撃砲を防いだのだろう。

「た、助かった～」

「どういう風の吹き回しか知らないが、取り敢えず助かったよ。ありが……」

一夏が緊張の糸が切れてへたり込み、直人がラウラにお礼を言おうと、した、その時……

「んぐっ！？」

一年一組に、衝撃が走った。

何があったかと言うと、ラウラが直人の胸倉を掴み、自分の元に引き寄せ……

キスしたのだ。

「な、ななっ！？　お、お前何を！！？」

突然の事に、直人は思わず取り乱す。

「お、お前は私の嫁にする。決定事項だ！　異論は認めん！！」

『ええぇーーーーーーーーーー！？！？』

「……はっ？　嫁？」

突然のラウラの嫁宣言に、クラスは再び絶叫し、直人は思わず呆けてしまう。

「一夏ーーーーー！！」

「ちょっ！　落ち着けって鈴！！　これには訳が……」

「問答無用ーーーーーー！！！！」

その横では、一夏が鈴に追い回されていたが、今の直人には、それを気にするだけの余裕がなかった。

「えーっと……おい、嫁ってのはどういう……！？」

直人がラウラに真意を聞こうとしたその瞬間、何かさっきのようなものを感じ、一瞬顔を引っ込める。

すると、青白いレーザーが、自分の目の前を通過し、黒板に穴をあけたのだ。

ゆっくりと顔をレーザーが飛んできた方向に向けると、そこにいたのは……。

「直人さん♪　私、少しお伺いしたいことがありまして。ええ、突然ですが急を要しますの。おほほほほ……」

長大なレーザーライフルを構え、ニッコリ笑顔　（ただし、目は笑っていない）のセシリアが、そこに立っていた。

直人は何か言いたかったが、すでに話を聞いてくれる様子はない。なぜなら彼女の頭に、血管マークがあるのを見てしまったから。

「三十六計逃げるに如かず！　一夏、逃げるぞ！！」

「おわっ！？」

命の危機であると判断し、一夏の首根っこを掴み、窓へ向かう。窓から飛び出し、敷地内であるが、ＩＳを展開して逃走しようと言うのだ。

お叱りを受けるは百も承知、しかし、このままでは命の危機である。

しかし、それを妨げる、二人の修羅がいた。

「一夏。どういう事か説明してもらうぞ！！」

片や日本刀を構えるポニーテールの侍。

「直人ー。ちょっとＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしようか？」

片や、十文字槍を構える短髪の槍術使い。

「ほ、箒……」

「こ、紅葉。頼む、少し落ち着いて話を……」

「うん、だから言ってるでしょ？　Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしようって♪」

「いや、だから、そうじゃなくて……うぉあ！？」

「直人！？　……のわっ！？」

直人の言葉に耳を貸さず、紅葉の鋭い突きが炸裂する。

そしてその隣でも、直人を心配する一夏に、鋭い剣閃が襲い掛かる。

それを間一髪でかわしたが、その一撃で、直人は理解した。

あの一撃は、傷　（右肩）狙いだと。

「一夏！　少し我慢してくれよ！！」

「へっ？　うお！？」

直人が一言そう言うと、一夏の首根っこを再び掴み、大きく後ろにジャンプする。

そして、鈴の衝撃砲を足場にして、廊下方面へ跳躍、そのまま着地と同時に二人で廊下へと逃げ込むのだった。

『待てーーーーー！！！！』

そして二人の後ろから追いかけてくる、四人の修羅。

直人は走りながら、そして一夏は首根っこを掴まれながら、今の気持ちを叫びに込めるのだった。

「不幸だーーーーーーーーーー！！」

「何故だーーーーー！　何故こうなるんだーーーーーーーーーー！！！！」

その時の叫びは、ＩＳ学園全体に響き渡ったという。

第二十六話　白き少女の秘密、そして……（後書き）

桜爛の間

作者「と言う訳で、今回は真白の過去話と、カオスの回でした。そして直人、見事にラウラフラグを立てたわけですが」

直人「地獄がみてぇか？」

作者「ちょっ！　何物騒なこと言って刃物をこっちに向けてるのですか!?　ちょっとそこの人達も見てないで助け……」

紅葉「少し頭、冷やそうか？」

作者「あんたもですかーーーーー!!??」

しばらくお待ちください＞m（＿＿）m＜

一夏「ええ……作者が何かとんでもないことになったので、ここからは俺が司会を務めたいと思います。まずは、「直人の目安箱」から、常連の三月語様より、頂きました」

Q1．直人・真白・紅葉・一夏に目の前にピチューがいたらどうする？
1．とりあえず立ち去るまで見守る
2．捕まえる
3．お持ち帰りぃ～☆

直人「ピチューって、あの電気鼠の進化前だろ？」

一夏「ああ、あっ、俺1」

直人「右に同じく」

真白「2かな？」

紅葉「勿論3！」

一夏「だそうだ。ちなみに真白、何で2？」

真白「えっと……一緒に居れば役立ちそうだから。その時々にもよるけど」

一夏「……次」

Q2．紅葉に
妖怪・お化けの類が苦手、との話ですが、悪魔はダメなのでしょうかね?ヴァンパイアとか夢魔とか・・・

紅葉「ああ、それは平気。ＲＰＧで出てくるようなものはね、大体ゲームでやってるから見慣れてるの。尤も、実物を見たら、その限りじゃないかもだけど」

一夏「じゃあ次」

Q3．男子勢に
女の子が男に絡まれていた!相手は屈強でとても勝ち目がない・・・。立ち向かう?逃げる?

一夏・直人「立ち向かう」

紅葉「おー、これは二人にとっては愚問だったかな?　今回の質問はこれで終わり、次は「抱腹絶倒!　アフレコ委員会!!」　今回は以前もらったものの、タイミングの関係でお蔵入りしてた、三月語様のリクエストを昇華いたします。やってくれのは、こちらです!」

シャルロット「ど、どうも……」

一夏「シャルロットか、一体どんな台詞を言うんだ?」

紅葉「これです。はい」

シャルロット「あっ、ありがとう……うん、解った」

紅葉「それでは、どうぞ!!」

シャルロット「今の私の胸では、あなたの心臓が鼓動を打っている・・・。ただ一つのあたしの不幸は、あたしに青春をくれた恩人に、『ありがとう』を言えなかったこと・・・。それが言いたくて、それだけが心残りで、この世界に迷い込んだの・・・」

紅葉「この台詞は、【Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！】の登場人物、かなでちゃんの台詞だそうです」

直人「何故だ？　全く違和感がない」

一夏・真白「うんうん」

シャルロット「そ、そうかな？」

紅葉「まあまあ、んじゃ、次行ってみよう！」

シャルロット「命をくれて・・・本当に・・・ありがとう・・・」

紅葉「同じく、【Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！】のかなでちゃんの台詞です」

直人「何か、哀愁漂う台詞だな」

一夏「それに、シャルロットが言うと、すげーその感じがしてくる」

真白「（こくこく）」

紅葉（えーっと、これ、最後に（中の人ネタ）って書いてあるけど……場の雰囲気を壊すのもあれだし、良いかな）

シャルロット「それで、これで終わり？」

紅葉「うん。えー、他の皆様も、質問やアフレコがありましたら、どんどんお寄せください」

直人「んで、次はどうなるんだ？」

紅葉「次は原作第三巻、アニメの第９話から最終話までをやるんだけど、その前に間に話を挟むらしいわよ？　何をやるかは書いてないけど」

直人「それって未定って事か？」

紅葉「さあ？」

直人「ま、何はともあれ、今回はここまで、皆さんのご感想、お待ちしております」

第二十七話　真剣と尾行者と雅な姫君　（前編）　（前書き）

今回は都合により、短く切って前後編に分けさせていただきます。

今回はタイトル通りです。しかし、今後の話に登場する予定のオリキャラを登場させます。

第二十七話　真剣と尾行者と雅な姫君　（前編）

「ふん！　ふん！　……っ！！」

日曜の朝、刀の素振りをしていた直人だが、右肩に走る激痛に顔を顰め、素振りを中断せざるを得なくなる。

「まだ治らないか。いい加減腕が鈍るのも勘弁してほしいんだが……傷が治らない以上、仕方ないか……」

右肩に目立った傷はないが、その痛みの原因は解っている。

一昨日行われた学年別トーナメントで、紅葉とペアを組み、ラウラ・箒組を追いつめた際に殺どうした、ＶＴシステムによるシュバルツェア・レーゲンの暴走、その際に受けた一撃が、思いのほか効いているのだ。

絶対防御のおかげで腕が斬られることはなかったが、ＩＳの装甲も鉄であり、裂傷はなくとも、鉄で叩かれるのと同義なのだ。

ましてそれが、動きだけとはいえ、自分が師と仰ぐ人物の攻撃となれば、その力強さは計り知れない。

保健教員の話によれば、後遺症になるような傷ではなく、しばらく安静にしておけばいつも通りになるとのことだが、少なくとも療養期間中は、いつも通りの鍛錬ができないのだ。

それでもできる限りはやっておきたいと、ここ数日は無理しない程度に鍛錬をしていたのだが、やはり本格的な鍛錬に戻るには、ま

だ傷は酷かったのだ。

「……」

刀を鞘に納める直人だが、その顔は浮かなかった。

傷の所為とはいえ、今までできたことができないという事も理由の一つだが、この前の謎のＩＳ事件と今回の事件で、一つ思う事があるのだ。

（俺……弱くなってんのかな？）

この前の謎のＩＳとの戦いだって、今までなら反撃される可能性を考慮して武装を潰せば、最後の最後でしっぺ返しを食らうことなどなかった。

なのに、起動を停止したと思った瞬間に気を抜き、手痛い反撃を受けた。

そして今回のＶＴシステムの事件でも負傷した。

相手が自分の師と同じ動きをしていたが、それは逆を言えば、旅に出るまでは見てきた動きなのだ、十分対応できるはずだった。

なのに、あの場では不覚を取り、傷を負わされた。

いつも見てきた動きだと言うのに、反応が遅れ、この様である。

寧ろ、ある程度実力に覚えがあるものなら、気にするなと言う方が無理なのかもしれない。

「それとも、自惚れてんのかな……俺？」

そんなやな事ばかりが頭をぐるぐる回っている。

「……はぁ」

しばらくその場に立ち尽くし、ふぅとため息を付き、自分の部屋に戻っていくのだった。

「「あっ」」

それからしばらく時間が経ち、今は午前１０時ごろ。

本日は日曜の為授業はなく、寮は大勢の女子学生でごった返すほどだ。

そんな中、ある人物のいる部屋の前で、セシリアと紅葉はばったり出くわした。

「これはこれは紅葉さん。おはようございます」

「おはようセシリア、相変わらず早起きさんで、よろしいことで」

出会ったからには挨拶するのが礼儀。

二人は一見すると爽やかに挨拶をするが、心中では抜き差しならなかった。

「それで、一体何のようでこちらにいらしたのですか？」

「いやあ、直人の怪我の様子が気になったものでねえ。ほら、ペアを組んだ間柄だし、その場にいたわけだからきになってねえ」

「奇遇ですわね。私も直人さんの怪我の具合が気になって、もし酷ければ私が手当てをして差し上げようと」

「そうかそうかー、でもそのためには保健室に包帯とか貰ってこないといけないよねー」

「あら、そうでしたわね。私としたことがうっかりしていましたわ」

この会話からも察せる通り、今二人がいるのは１０２６号室前、つまり、直人の部屋だ。

学年別トーナメント以来、怪我をした直人に対し、この二人とある一名が、こうして直人のけがの手当てを巡って、火花を散らしているのだ。

「じゃあさ、あたしが残って様子を見てるからさ、セシリアちゃん包帯とか保健室から貰ってきてくれないかな？」

「いえいえ、私が直人さんの様子を見ておりますので、紅葉さんもらってきてくれませんか？」

手当と言っても、必要なものが無ければできないため、お互いに保健室から貰ってきてほしいと頼む。

（うぅ～、二人っきりになれる上に、実家から持ってきた救急セットが役立つかと思ったのに……余計な邪魔が～……）

（昨日チェルシーから教わったという手当の仕方。今こそ実践しようと思っておりましたのに……）

笑顔で、しかし内心では険しい顔で、お互いを威嚇ｏｒ牽制する二人。

「何やってんだ？」

とそこへ、一夏がやってくる。

「あら一夏さん。おはようございます」

「おお一夏君。おはよう」

「おお、おはよう。で、直人の部屋の前で何やってんだ？」

二人が何やら黒いオーラのようなものをぶつけながら互いに向かい合っていた（睨み合っていた）のを、一夏は事も無さげに聞いてみる。

「えっとね、直人の怪我が酷くなってないか心配で」
「それでお見舞いに参りましたの」
「そうだったのか。でもさ、今直人は部屋にいないぜ」
「「へ？」」
一夏の言葉に、二人は間抜けな声を出す。
「えーっと、一夏君。それどういう意味？」
「いやさ、さっき帰りに、私服姿で学園の外に出て行く直人を見かけてさ、あの様子だとどっか出かけるんじゃないかな？」
「どっかって、どちらに？」
「さあ、そこまでは？」
それを聞いた瞬間、二人の行動は素早かった。
「こうしちゃいられない！　早く探さないと！！」
「そうですわね！　まずは着替えなければ！！」
そう言って二人は自分の部屋に戻っていってしまう。
「……何なんだ？」
そう呟いた後、そのまま自分の部屋に戻ろうとすると……

「ん……おわ！？」

直ぐに先ほどの二人が神速と呼ぶにふさわしいスピードで一夏の目の前を疾走していった。

「……本当に何なんだ？」

その様子に周りは唖然とし、一夏は唯そう呟くしかなかった。

「何か久しぶりだな、一人で外を歩くの」

一方、一夏の言った通り、直人は一人でモノレールに乗り、町の方に出ていた。

今の服装は学園の制服ではなく、以前、織斑家に掃除で来た際に着ていた、白地のTシャツにジーパン姿である。

「何時までも部屋の中にいたんじゃあ悪い考えしかめぐってこないしな、たまには外に出歩くのも悪くないだろ。一夏達を呼ぶのも悪いしな」

今回街に出た目的は、何を隠そう気分転換だ。

碌に鍛錬もできず、これまでの事で、少し暗い気分になっていたのを、食堂で一夏に指摘され、「気分転換でもして来れば？」と助言されたのだ。

しかし、一夏も付き合うと言った際には「自分の問題だから」と言ってそれを断った。

「ま、良いよな。たまには一人で歩いても」

とはいうものの、実際のところ、特に予定もないため、町に出たは良いものの、どこを回ればいいのかなど解らない。

「……まあ、その辺を適当にぶらつくか。別に今欲しいものとかあるわけじゃないしな」

そう言って、直人は歩を進めるが、この時彼は気付かなかった。

その様子を、物陰から見つめている影に……。

「うーん……いないねー」

「どこに行ったのでしょうねえ？」

一方、同じくモノレールに乗って街に繰り出した紅葉とセシリアだが、肝心の直人の行方はいまだ知れなかった。

二人も学園の制服ではなく、私服姿である。

セシリアは青いワンピース上のスカートに、半そでの白い上着姿で、貴族の霊場と言うだけあってか、どこか気品あふれる雰囲気があり、耳には待機状態のＩＳである、蒼いイヤーカフスがあった。

一方の紅葉は、赤地にロゴがプリントされた半そでのシャツに、膝丈ほどの短パンを穿き、腕には腕時計とアクセサリーの腕輪をつけ、活発な印象を受ける。

「ところでさセシリアちゃん。どうして一緒に行動してるのかな？別れて探したほうが見つけやすいと思うけど？」

「紅葉さんこそ、どうして私から離れようと致しませんの？」

しかしこの二人、さっきから別れて探そうと言っているのに、未だに二人一緒に行動して探しているのだ。

「いや、ほらさ、よくよく考えてみたらさ、こんな人通りの多い街中で迷子になったら大変じゃない？　いやさ、私と一緒にいるのが嫌だって言うなら考えなくもないけど」

「いえ、別に嫌と言う訳ではありませんが……そうですわね、良く考えてみれば、不逞の輩に襲われないと言う保証もありませんしね。街中でＩＳなど稼働させたら、それこそ、織斑先生にどんな折檻を喰らうか……」

二人はそれぞれ、何故離れないのか？　と言う疑問に対し、尤もらしい事を言う二人だが、心中は違った。

（（もし一人になって、直人　（さん）と会って、抜け駆けでもされたら……））

そう考えると、とても相手を一人にはできなかったのだ。

「じゃ、じゃあ……このまま二人で探そうか？」

「そうですわね」

という事で、お互いをけん制しつつ、直人探しを続ける二人なのだった。

一方の直人はと言えば……

「うーん……あんまり町の方は出歩かなかったが、唯歩いてるだけでも、これはこれで新鮮なものだな」

本当に文字通り、唯町を散策していた。

「まあ、見知らぬ土地を踏むのは、旅でもよくあった事だが、ここはまたそれとは違う驚きでいっぱいだな」

まあ、並んでる町のほとんどが、女性向けの店だったり、女性受けを狙っての商売をしてる店だったりするのだが、そこはまあ目を瞑っても良いだろう。

「さてと、とはいえこのままぶらぶらするのも飽きてきたな、どっかの店に立ち寄ってみるか」

そう言って、どこの店に入ろうか散策してる時だった。

「おっ！　いい姉ちゃんだな！」

「本当だ、綺麗な顔してんなあ」

「ん？」

ちょうど目の前に、数人の男性が女性に寄って集ってるのを見つける。

「なあなあ姉ちゃん、あんた今ひとり？」

「良かったら俺達と一緒に来ない？　いい店紹介してやるからよ」

いかにも月並みな口説き文句、典型的な軟派のようである。

「ややわあ、これが噂の軟派ってもんかいな。せやけど残念でしたなあ、うちは今友達待たせとんねん。そういう訳やから、御引き取り願いましょか」

一方の口説かれてる女性はと言うと、その場の面子に比べれば、明らかに場違いともいえる服装だった。

女性の服装を一言で表すなら、和服。

薄紅色の浴衣を京紫色の帯で締め、手には日よけの為であろう傘を持っていた。

「お！　もしかして京都出身？」

「良いなあ、その言葉遣い良いねえ！」

「大丈夫大丈夫！　すぐに戻ってくれば大丈夫だって！」

「そないなこと言われてもなあ。ほな、何ならぶぶ漬けでも食べは

りますか？」

「ぶぶ漬け？」

「何だそれ？」

「漬物か？」

（……まあ、普通に言われても解るわけはねえよな）

ぶぶ漬けの言葉を、直人は一瞬で理解したのだが、目の前のチャラ男達には、当然わかる筈もなかった。

「まあとにかく。うちはここを動き訳にはいきまへんので、御引き取り願います」

「そんなこと言わずにさあ！」

そう言って、チャラ男の一人が女性の腕を掴もうとしたその時。

「いてっ！！」

突如、チャラ男は腕を引っ込める。

よく見ると、手の甲の部分には血が滴っていた。

「解らへんようなら教えたりますわ」

そして、女性の手には、どこから出したのか、扇のようなものが保持されていた。

「うちは忙しいけん、持てない軟派しとらんで、はよ帰りって言ったんどす」

「ってー、このアマ！！」

しかし、手を斬られ逆上したチャラ男は、そのまま女性に掴みかかろうとするが、それを身を翻すようにかわし、男の額に先ほどの扇を叩き付ける。

「いってー！」

「こいつ、付けあがりやがって！」

「おやおや、馬脚を現しましたなあ。そんなんじゃもてませんえ？」

「うっせー！！」

そう言って別の男が殴ろうとした時だった。

「あのさ……」

「ああん！」

突如声を掛けられ、殴ろうとした男が振り返ったその瞬間。

「大の男が寄って集って軟派して、それで失敗して逆上って、大人げないと思わないわけ！！」

直人の、激しい左ストレートが、炸裂するのだった。

第二十七話　真剣と尾行者と雅な姫君　（前編）（後書き）

桜爛の間

直人「ああ、今回は作者は休みだ」

紅葉「何で？」

直人「体調不良らしい。熱はないんだが、頭痛と鼻水が止まらないそうだ」

紅葉「それって風邪じゃん」

直人「どうだろうな。だから今回は俺達だけでやることになった」

紅葉「じゃあ、前書きのオリキャラ云々の話は？」

直人「それも休みだそうだ。体調が回復したら活動報告にアンケート共に載せるそうだ」

紅葉「まあ、仕方ないよね。それじゃサクサク言っちゃおうか。まずは目安箱から！！」

Q1．直人に
もし自分が『世界の破壊者』という存在になった時、どうしたいか？

直人「どうもしない。そもそもなってどうしろと？」

紅葉「うーん……新しい世界を創造するとか？　いやむしろ、再生者とか名乗る奴らに喧嘩売って、「光になれー！！」とか叫ぶ？」

直人「どこの勇者王だ！」

紅葉「ほんじゃ次！！」

Q2．真白・紅葉に
今迄で最も恥ずかしい『直人の前で見せてしまった』痴態は？
（例：下着のまま部屋の中をうろうろしていたのを見られた）

真白「解んない」

直人「まあ、恥じらいとかが無いわけじゃないんだが、まだそう言うのが解らないんだ。勘弁してくれ」

紅葉「えーっとですね。クラス対抗戦の少し後に、箒さんを部屋に呼んで雑談してたんですけど、話がいつの間にか胸の話題になってね、ふざけ半分で箒さんの胸を弄ろうとしてたら、いつの間にかその……／／／／／」

真白「上半身が服も下着も肌蹴て、その姿を直人と一夏に見られた」

直人「……あの時は本当にすまん。知らなかったとはいえ」

紅葉「ううん、良いんだよ。でもすっごい恥ずかしかった／／／／／／」

真白「ちなみにその後、一夏は箒に半殺しにされたらしい……」

紅葉「次！」

Q3．直人・真白に
過去、自分が一番力を渇望したその瞬間は？また、そうなった経緯は？

直人「うーん……悪いがこれはパスしてもらっていいか？　あんまりこういう、後書きコーナーで言うには、少し重すぎるからな」

真白「私は……特にない。もとからそう言う力みたいなのはあったし、直人に危害を加えた相手には、即座にそれ相応の報復をしてたから……」

紅葉「な……何をやったの？」

直人「聞かない方が良いぞ」

紅葉「じゃ、じゃあ、次は「抱腹絶倒！　アフレコ委員会！！」今回の参加者は、こちらの方々！！」

一夏「よお！」

セシリア「呼ばれてきましたが？」

鈴「今度は何させるつもりよ？」

直人「おお、一夏と第一巻登場メンバーか」

紅葉「箒さんはいないけどね、んで、今回はリクエストが二つあるの。まずは一夏君、これやって」

一夏「おお、何かここでアフレコやるのも慣れてきちまった」

直人「安心しろ。俺なんていっつもやられてるからとっくにだ」

紅葉「はいはい、愚痴はそこそこにね、ではどうぞ！！」

一夏「悲しさが人を救うとは限らない・・・それでも！」

一夏「信じる・・・！自分のなすべきと思った事を！」

紅葉「ええ、三月語様からのリクエストで、機動戦士ガンダムＵＣの主人公、バナージの台詞でした」

直人「ふうむ、今までのと比べると、かなりあっている気がしたな。と言うより、一夏なら原作でも言いそうだ」

一夏「そうか？」

紅葉「まあ、そう言う事にしておきましょう。次回は直人、一夏君、セシリアちゃん、鈴ちゃんの四人に言ってもらうよ。それではどうぞ！！」

直人「我が剣に切れぬ物なし！」

セシリア「我が銃に貫けぬ物なし！」

鈴「甲龍に潰せぬ物なし！」

一夏「最後が納得いかねぇ…。」

紅葉「アルカイナ様からのリクエストで、テイルズオブジアビスの有名な勝利台詞の寸劇です」

直人「配役は俺がガイ・セシル、セシリアがナタリア・R・K・ランバルディア、鈴がアニス・タトリン、そして一夏がルーク・フォ

ン・ファブレか」

一夏「本当に最後は納得いかねえ……」

鈴「何よ！　なんか文句あんの！？」

直人「そういう訳ではないが……」

紅葉「ま、何はともあれ、今回はここまで、次回の後編をお楽しみに！！」

セシリア「そう言えば、タイトルには尾行者とありますけど、話を見る限りでは、私と紅葉さんはどちらかと言うと、探索者ですよね？」

紅葉「ああ、それね、何でも次回、その尾行者が出てくるそうだよ。誰かは多分、解るんじゃないかな？」

第二十八話　真剣と尾行者と雅な姫君　（後編）　（前書き）

注、感想で地の文での補足説明がくどいとの指摘を頂いたので、指摘のあった部分を一部修正しました。

第二十八話　真剣と尾行者と雅な姫君　（後編）

「ふぅ、片付いた。大丈夫か？」

和装の女性に集っていた軟派たちを一蹴した直人は、当の軟派に絡まれていた女性に声を掛ける。

「ええ。危ない所を、有難うございました」

「危ないところねえ……見たところ、中々の使い手のようだったけど？」

「おやま。お解りになりましたか？」

お礼を言う女性だが、直人は目の前にいる女性が、唯物でないことを先ほどの様子から推察していた。

「さっきの男どもの手を、すり抜ける軽やかな動きを見ればな。それにその手に持ってる扇、鉄扇だな」

「おや、そこまでお解りになりますか？」

「普通の扇にしては音が鈍かったからな。とすれば、その扇は木製じゃない。それに、さっき打たれた男の額傷をみればうまく加減されているが、もっと固いもの、そう、鉄で殴ったような後ができてたからな」

「おやおや、中々できる人どすなあ」

口元を手に持ってる鉄扇で隠しながら、ほほほと軽く笑う。

「しかしそう言うあなたも、唯喧嘩が強いだけやないやろ？　片手間でこの人数を倒すなんて、相当の使い手やろ？」

「いやいや、少し腕に覚えがあれば、この程度は造作もないよ」

「それに、この人たちを倒す際の足捌きも、唯の喧嘩やにしてはできてましたからなあ。あの動きは剣道、或いはそれに類する剣術系の武道を習っていると見受けられますが」

「……そこまでわかっちまうか」

「これでも、武芸を会得しておりますさかい」

しかし女性の方も、直人の動きから、直人が剣術の類を会得していることを見抜く。

「申し遅れました。私、鷹司史江（たかつかさふみえ）と申します」

「桜庭直人だ。まあ、名前だけならテレビで話題になったから知ってると思うが」

「生憎と家は古い家柄でして、あまりテレビとかに関心を持ちまへんので」

正直軽々しく名前を出すなと千冬さんから言われてたのだが、名前を名乗られた手前、名乗らないわけにはいかない。

と言う訳で律儀な直人は名を名乗ったのだが、相手の女性、鷹司

史江の家ではテレビを見ないのか、そう言う。

「そうか、それなら良いんだ。まあとにかく、ああいう輩もいるから気をつけなよ。それじゃ」

「おや？　どこかに行く予定でも？」

「いや、そういう訳じゃないんだが、これ以上ここにいる理由もないしな」

自己紹介も済んだところで、立ち去ろうとする直人だが、史江はそれを引き留める。

予定が無いのも事実だが、ここにいる理由もさしてないのもまた事実。

その為ここに留まってても意味はないのだ。

「それでしたら、ここで会ったのも何かの縁、折角ですから、私にこの街を案内していただけへんやろか？」

「えっ？　でも誰か待たせてるんじゃないのか？」

「おや、話を聞いとったんどすか？」

「あんな喧騒があったら、嫌でも聞こえると思うが？」

直人に特に予定が無いと知るや、史江は彼に、街を案内してほしいと頼んでくる。

しかし先ほどの軟派との話から、彼女は誰かを待っている様子な

ので、悪いのではと思う直人。

「それなら心配いりまへん。あの子なら、私がどこにいるか見当つくでしょうから」

「はあ……」

「ええからええから、取り敢えずどこかでお茶でもしましょか？」

「えっ？　お、おい……」

こうして直人の手を取り、史江は直人の手を引きながら、街の中へ消えていくのだった。

「……むっ！！」

「？　どうかしましたか？」

「何か……直人が女の子と良い感じになってる気がした！」

「そ……その根拠は一体何処から？」

「私の女の勘がそう告げている！！」

一方、直人を捜索している紅葉とセシリアだったが、突如、紅葉が何か閃いたような仕草をした後、根拠もないことを呟いたので、思わずセシリアは呆れる。

「大丈夫！　私の女の勘は結構鋭いから！！」

「いえ、そう言う問題では……はぁ……」

どこから湧いてくるのか、自信満々で言うものだから、思わずセシリアはため息をつくのだった。

「とはいえ、その肝心の直人は今どこに……」

「この際ですから、携帯電話に掛けてみましょうか？」

「でも、確か直人が旅に出たのって小学校卒業後すぐって言ってたよね？　持ってるのかな？」

「言われてみれば……」

考えてみれば、当てもなく捜したところで見つかるはずもない。

そこでセシリアが、携帯に掛けてみようと言ったのだが、直人が旅に出た時期を考え、持っていないのでは？　と言う疑問が浮かび、断念する。

「しかし……考えてみれば直人さんは、そんな早くから、世界中を

周っていたんですよね……」

「そう言われると凄いよね。一体何がそうさせたのかな？　今度一夏君に聞いてみようか？」

「そこは織斑先生の方がよろしいのでは？」

「そんな畏れ多い事、セシリアちゃんできるの？」

「……できませんね。すいません」

しかし二人は、小学校を卒業してすぐに旅に出たことについてふと考える。

紅葉の言葉にセシリアは、師である千冬の方が良いのでは？　と言うが、とても二人にそんな勇気などない。

「ま、それはさておき、早く直人を捜さないと……ん？」

「どうしました紅葉さん……あら？　あの人は……」

直人の話もそこそこに、再び当の直人を捜索し始めた二人だが、そこで、ある人物を発見するのだった。

一方、史江に集る軟派共を直人が一蹴していたころ、その様子を物陰から見つめる一人の人物がいた。

「ふむ……あの程度の屑ども造作もないか、流石は私の嫁「「何やってるのかな（ですか）？」」……ん？」

その人物は直人が軟派共を倒すところを見て流石と褒めるが、その時、後ろから声を掛けられる。

振り向くとそこに居たのは、直人を捜索していた紅葉とセシリアだった。

「何だ、お前たちか」

「何だって、あっさり言うねー」

「一体ここで、何を企んでいるのですか、ラウラさん？」

そう、二人が見つけた人物とは、かつて二人、そして直人とも矛を交えたドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィッヒであった。

紅葉とセシリアはかつての因縁から、喋りは一見普通ながらも、明らかに彼女を警戒していた。

「そう警戒するな。今のところ、お前たちに危害を加えるつもりはない」

「信じられるものですか！」

「あんなことがあった手前、その言葉は説得力ないって」

「……そうか」

実際のところ、もうラウラに彼女たちや、直人、一夏に対する敵意は既にない。

しかし、先月の態度や、起こした事が事だけに、セシリアも紅葉も、その言葉を鵜呑みにできない。

とくにセシリアに至っては、プライドの高さと、二対一という優位状況にありながら負けたという事から、それは尚更であった。

しかし、あまり気にしてないのか、ラウラはそう言い流し、改めて物陰から様子を見る。

「で、一体ここで何をしているの？」

「見ての通り、嫁の行動を調べているのだ」

「嫁って……直人さんのことですか？」

「他に誰がいる？」

「「……って、え！？」」

ラウラのその言葉に、二人は素っ頓狂な声を上げ、ラウラと同様、物陰からその様子を見ると、直人が史江と話をしているところが見えた。

「こ、紅葉さんの女の勘が本当に当たりましたわ……」

「うわーお、直感的に悟ったのに、まさか本当に当たるとは……」

その様子を見て、紅葉の女の勘が当たっていたことに、セシリアも、当の紅葉も驚きを隠せない。

「って言うかラウラちゃん。もしかしてずっと直人の行動をストーキングしていたの！？」

とここで紅葉、ある意味この場で最も重要なことに今さらながら気づく。

直人の行動を監視している、つまり、今まで直人を尾行していたという事なのだ。

「嫁の行動を把握するのは当然だ」

「ストーカーは犯罪だよ」

「あまり褒められたことではありませんわね」

しかし、事も無さげに言うラウラに紅葉とセシリアはただ呆れるが、それよりも、今直人と話をしている史江の方が気になるのだった。

「あの女性の方は一体誰ですか？」

「先ほど雑魚の男どもが寄って集っていたのを嫁が蹴散らしたのだ」

「ほおほお、流石は直人、右腕を負傷していてもそこらの喧嘩屋じゃあ相手にならないと」

ラウラの説明に納得しながらも、紅葉は史江を見つめる。

（それにしてもあの子、綺麗な黒髪だなあ……）

直人と仲良くしてる様子を見ながら、彼女の夜のように綺麗な髪に見惚れ、同時にふと思う。

（そう言えば、セシリアちゃんもロールにしてるけど、あれストレートにすれば結構長いよね。ラウラちゃんは……ただ無造作に伸ばしてるだけか。でも直人って、もしかして髪の長い人が好みなのかな？）

そう思いながら、ふと、短髪にしてる自分の紅葉色の髪を弄りながら思う。

（私も髪、長くしようかなあ……）

そんな風に思っていると……

「ああーーーーー！！」

「ん？　何？　どうしたのセシリアちゃん。そんなに大声出したら直人に見つかっちゃ……ああーーーーー！！！！」

突如、セシリアが大声を出したので、セシリアを注意しながら何事かと直人の方を覗き見て、紅葉も大声を上げる。

二人は史江が直人の手を取って街中に引っ張っていく姿を見たのだ。

「い、今の見た？」

「見ましたわ」

「今のはどう見ても……」

「繋いでましたわよね、手を……」

そう二人で認識した瞬間、二人の中に焦りのようなものが生まれた。

「セシリアちゃん！」

「紅葉さん！」

ガシッ！！

「「追いかけよう（ましょう）！」」

新たなライバルの出現。そう予感した二人は、そのままラウラの尾行に同行することとなったのだった。

「……」

そんな二人を無視して、とうの第一尾行者であるラウラは、どこか羨ましげな眼差しで、史江を見つめていたのだった。

そしてここは、街のとある喫茶店。

「はぁ、美味しいお茶どすなあ」

「あ、ああ」

どこかで一服しようという事になった直人は、史江に引っ張られるまま、この喫茶店で茶を啜っていた。

「それにしても、やっぱり都会っちゅうんはえらい人が多いんどすなあ。直人はんがいらっしゃらなかったら、ほんま迷子になるところでしたわあ」

「俺としては、あんたのその行動力と方向音痴が心配でならないよ」

「よお言われますわ。これでも気を付けているんどすがなあ」

「右と言われて左へ進む奴なんて初めて見たぞ」

尤も、連れまわされた直人の方は、すっかりぐったりしていた。

と言うのもこの史江、その物腰に反して行動力がすごいのだが、とてつもない方向音痴であることが解ったのだ。

先ほども言われた通り、右と言われて左に突き進み、街の地図を見せながら目的地を示しても、同じところをぐるぐる回って、直人の案内でやっと到着するほど。

終いにはコンパスを取り出して、「北はどっちだ?」と直人が質問したら、こともあろうに南を指し示す始末。

これで疲れるなと言う方が、土台無理な話だろう。

肉体的にも精神的にも。

「ところで直人はん。少しよろしおすか?」

「ん……何だ?」

はぁ、と呆れながらお茶を一口啜っていると、史江から言葉を掛けられる。

「直人はん、何か悩んでることでもあるんどすか?」

「はあ? まあ、あんたのその方向音痴について、今は悩んでいるが」

「そうやなくて、何か気に病んでることでもあるんやないか?」

そう言われ、彼女が何が言いたいのかを理解する。

「……どうしてそう思う？」

「んー、何となくと言うのもなんか変やろうから、取り敢えず直人はんの目がそう言ってるような気がした、とでも申しときましょか」

「……」

「助けてもらった恩もありますし、うちで良ければ、相談に乗りますえ？」

「……」

黙ったままの直人だったが、しばらくしてお茶の入ったカップを置き、口を開く。

「なあ」

「ん？」

「俺って……自惚れてるように見えるか？」

「？　どういう意味どすか？」

直人はＩＳ学園の事をはぐらかしつつ、これまで起こった事、その時の自分の事などを、虚実織り交ぜて史江に話す。

事が事だけに、本当なら喋ってはいけない事なのだが、そこは直人、見事に重要部分を隠して話したのだった。

「成程、そないな事が」

「正直、自分の強さはある程度解っているつもりだ。だけど、「自分ならもっとできた」、「自分ならやれたはずだ」って思うのは、自分を過大評価してる気がしてならないんだ」

「ふむふむ」

「それで時々、自分は弱くなったんじゃないか？　って思うようになって……自信が持てなくなってきてるんだよ」

「……」

「……って、何話してんだろうな、俺」

一通り話した後、直人はそう呟くのだった。

「あって数時間しかしてない相手に、自惚れてるかどうか聞くなんて、おかしいよな。悪い、忘れてくれ」

直人はそう言って、再びお茶を飲み始める。

その時、さっきまで黙ってた史江が口を開く。

「うちが思うに……」

「ん？」

「直人はんは三年間、世界中を修行で飛び回っていたんどすよな？」

「ああ」

「その時、直人はんの周りに、誰かおらんどしたか？」

「そうだなあ、途中でとんでもない馬鹿と、頼れる仲間に出会ったな」

言わずもがな、真白と端午の事である。

「じゃあ、その人達を守る事とかあったんどすか？」

「ないな、二人とも色んな意味で逞しいからな。ま、おかげで色々助かったりもしてたが」

そこまで話すと、史江は次の言葉を繰り出した。

「それってつまり、直人はんに守るものができたって事やないやろか？」

「えっ？」

「いやな、今までは守る必要が無い仲間がおったから、一人でも十分動けた。せやけど守るものができたら、どんなに強い人でも、それを守るために、動きとか神経とか意識せなあかんから、どうしても一人で動いとるときに比べて、弱く感じてしまっとるんやないやろか？」

「……あっ」

この言葉で、直人はふっと思い出した。

確かに、謎のＩＳとの戦いが終了した時、相手が動かなくなったことを確認した後、一夏や鈴は無事かという事に意識が行った。

この前の学年別トーナメントでも、ＶＴシステムの発動に驚いていたが、それとは別に、パートナーであった紅葉の事が気に掛かっていた。

暴走したＩＳが、彼女を襲う事も考えられるからだ。

その為に、自分の方に向かってきても、対応できなかったのだ。

（……そうか、守るものができた……か）

その答えを聞いた瞬間、心の中の靄が晴れた感覚がし、同時に、嬉しくもなった。

（そうか……何悩んでたんだろうな、俺）

それと同時に思い出したのだ。

何のために、あの旅をしていたのか。

何のために、強くなろうとしたのか。

（そうだったな、俺は強くなって、一夏と自分の守りたいものを守るために、あいつの剣になるって決めてたんだったな。だったら、守るものができて、寧ろ喜ぶべきところだろうに……）

その瞬間、直人は少し自分が恥ずかしくなった。

（なのに、真白に頼ってたこともあったってのに、自分の強さを見誤ってた。情けないなあ……）

「……はあ、俺もまだまだ修行不足って事か」

「ん？」

「いや、気にするな。しかしありがとうな、お蔭で悩みが解決したよ」

「そおどすか、お役にったてて何よりどす」

話してよかったと、直人は史江に礼を言う。

「ほな、それじゃあそろそろお暇致しましょう……ふあ！？」

「危ね！」

とここで、史江が席を立とうとしたその時、彼女の手がテーブルから滑ってはずれ、転びそうになる。

しかし、それに早く気付いた直人が間一髪の所で彼女の体を支える。

「大丈夫か？」

「う、うん、有難うな」

「いや、今度から気をつけろよ」

「はい♪」

その後会計を済ませ、二人は店を出て行く。

なおこの瞬間、別の席のとある席の三人からどす黒いオーラが漂っていたため、店員はその席に近づけなかったというのは別の話。

「今日はほんまに、有難うな」

「いや、俺も良い気分転換ができたし、礼を言うのはこっちの方だよ」

それからしばらくして、すっかり日も落ちかけていた。

「またお会いしましたら、その時はよろしゅうお願いします」

「俺なんかで良ければ、別にいいが、その前にその方向音痴、直してくれよ」

「善処します」

「じゃあな鷹司「史江」……えっ？」

「名前で呼んでくださいな。私だけ直人はんの事名前で呼んでいるのは、不公平どすから」

「そうか？　俺は別に名前でも苗字でも良いんだが……ま、別にいいが」

帰ろうとした矢先、史江に「名前で呼んでほしい」と言われ、少し困りながらも、こほんと咳ばらいをする。

「じゃあ、また今度な、史江」

「はい、直人はん♪」

そう言って今度こそ、直人は寮への道筋を急ぐのだった。

「ふふふ、今日はほんま、ええ事あったわ♪」

そして一人になった史江は、そう言ってにこにこと笑っていた。

「お嬢様！！」

するとそこへ、彼女を呼ぶ声があった。

振り向くとそこには、彼女と同じ黒髪の、鋭い目つきの女の子がいた。

「おやまあ、やっと来ましたか」

「おやまあ、じゃありません！　お嬢様、一体何処に……」

史江に怒ろうとしたその時、史江は手に持ってた鉄扇を、少女の口に添え、喋りを中断する。

「あかんで、二人っきりの時は名前でって言うとったやろ？」

「……はい、史江様」

「相変わらず固いなあ、飛鳥ちゃんは。ま、そう言う真面目なところ、うちは好きやで」

「は、はあ……って、そんな事より！！」

朗らかに微笑む史江に、飛鳥と呼ばれた少女は再び怒りをあらわにする。

「私はちゃんと待っているようにと言ったはずです！　それなのに知らない土地をふらふらと、史江様にもしものことがあったら、私は先代やあなたの母上に、合わせる顔がございません！！」

「そんなに怒らんでも、無事やったからええやないの。それに、思ってたより早く、例の人物と接触できたんやさかい」

そこまで言うと、史江の表情はにこにことしながらも、どこか真面目な雰囲気を纏っていた。

飛鳥もそれを察してか、元々の真面目な顔が、さらに引き締まる。

「例の人物……では……」

「うん、近いうちに、また顔を合わせることになるかもなあ。準備の方は如何なっとるん？」

「は。何時でも準備はできておりますが、まだ様子を見たいため、時期を待つようにとの、本家から」

「そうなん？　しゃあないわな。ま、向こうには17代目殿もおるやろうし、向こうから何の音沙汰もないと考えると、まだその時やないっちゅうことやな」

「でしょうね。しかし、よろしいのですか？　幾ら旧知の仲とは言え……」

「かまへんかまへん。あの子は信頼できる子や、ちょお度が過ぎるところはあるけどな」

ほっほっほと軽く笑いながら史江は歩きだし、飛鳥はその後ろをついていき、月夜に照らされながら、二人は夜の街を歩いていくのだった。

「えーっと確か宿泊先は、この角を左やったな」

「お嬢さ……史江様、そちらは右です」

「……で、なんで俺はこんな事になってるんだ？」

一方、こちらはＩＳ学園の寮の一室……基、直人の部屋である。

部屋に戻って疲れを癒していた直人だったが、突如紅葉、セシリア、ラウラの急襲を受け、瞬く間に、椅子に縛り付けられてしまったのだ。

そして、その直人の目の前には……

「知らないって、幸せだねえ」

「そうですわね、おほほ……」

「いくら気づかなかったとはいえ、私の見てる前で浮気とは、感心せんな」

急襲して来た件の三人が、阿修羅の如きオーラを纏っていた。

「お、おいお前ら、一体何をする気なんだ？　ってか、俺なんかしたか？」

いつもの直人ならもう少し強気に出られるのだろうが、生憎と今の三人には、どうしてもそれができない。

それすら許さない程、今の三人のオーラは怖かった。

「さてと二人とも、そろそろ刑を執行しようか？」

「そうですわね」

「異議なし」

「ちょ、ちょっと待て！　何だ刑って、待てって！　俺はまだ納得してな……」

「「「答えは聞いていない！！」」」

「理不尽だ！！」

黒いオーラを纏ったまま近づいてくる三人に静まるよう頼み込むが、最早彼の言葉で止まるものでもない。

「お、おい！　そこで見ている四人！！　頼む！　こいつらを止めてくれ！！」

今の三人に理屈は通用しないと悟った直人は、部屋の外でこの様子を見ている四人、一夏、箒、鈴、シャルロットに助けを求めるが……

「すまねえ直人、今の三人を止められる自信がねえ」

「助けてやりたいのはやまやまだが、なぜか、体が動くことを拒んでいる……」

「あんたあたしに死ねって言うの！　今関わったら確実にこっちが地獄行きよ！！」

「御免直人。助けてあげたいのはやまやまなんだけど、なんでか今の三人に近づかない方が良いって……」

「白状者どもー！！」

頼みの綱も絶たれ、最早叫ぶしかできない直人であった。

そして……

「さあ直人さん。お仕置きの時間ですわよ？」

「月夜ばかりと思うなよ」

「少し頭、冷やそうか？」

「ちょっ！　ちょっと待……」

その夜、一人の悲鳴が、木霊したと言う。

オマケ

ちなみにこの頃、真白は如何していたかと言うと……

「ん～、まっしーのケーキ、美味しい～」

「有難う。まだあるから」

「わーい！」

突如部屋に押しかけてきたのほほんさんに、出来立てのケーキをごちそうしていたのであった。

第二十八話　真剣と尾行者と雅な姫君　（後編）　（後書き）

桜爛の間

作者「ストーカー行為は、ストーカー規制法違反と言う立派な犯罪ですので、絶対やらないようにしましょう」

直人「おい作者……」

作者「さて皆さん。今回はいかがでしたでしょうか？　楽しんでもらえたなら幸いです」

直人「と言うか、明日課題提出があるのに、一文字も書いてないだろ、大丈夫なのか？」

作者「うっ……」

直人「……（射抜くような視線）」

作者「え、えーっと、今回登場したオリキャラは今後登場予定ですが、今の段階ではまだ出番はありません！！」

直人「しかし史江か、あの動きからして只者ではないことは解っていたが、一体彼女は何者なんだ？」

作者「まあ、多分多くの方は、ある人物の関係者だと解るでしょうが、今のところ、明かす予定はありません。それでは行きましょう、まずは「直人の目安箱」から！」

直人と真白の初恋の相手って誰ですか？

作者「これはグラムサイト2様からの質問です」

直人「いない」

真白「（こくん）」

作者「あらまストレートに」

直人「実際、そう言うのを意識する暇もなかったし、そもそも俺なんか好きになる奴がいるのか？」

真白「私も同じ、それに、直人が傍にいてくれれば、今はそれで良いから」

作者「だそうです。では次は、常連三月語様から」

Q1．女性陣に
青鬼（ホラーゲームのフリーソフトです）を最後までプレイしきる自信がありますか？もしくは、実況動画を最後まで見きれる自信はありますか？

ラウラと真白以外「「「「「ない！！」」」」」

真白「やったことないからわかんないけど、コツを掴めば、多分できると思う」

ラウラ「ホラーゲーム等より、もっと恐ろしいものを知っているからな。別にやるのも見るのも造作もない」

作者「とのことです。では次！」

Q2．オリキャラ勢に
　無人島に行った時、何か一つ持っていけるとしたら、何を持っていく？（物・人は問いません）

直人「刀」

真白「銃」

紅葉「うーん、人ならやっぱ直人かな？　んで、物だったら救急セットかな。やっぱり怪我した時を考えないと」

作者「とのことです。質問はこれまで、では次は「抱腹絶倒！　アフレコ委員会！！」です！　今回は直人と一夏に参加してもらいます」

直人「おお」

一夏「今度は何を言うんだ？」

作者「こちらです」

直人「ふむふむ……」

一夏「よし、覚えた」

作者「それではまず、一夏からやっていただきましょう！！」

一夏「みんなはこんな俺をずっと助けてくれた・・・みんなのためにも負けられないっ！いや、俺という存在にかけて負けない！」

一夏「もう、バカでいいよ。バカな事しちゃったんだから、もっとバカで通してみる」

作者「どちらもアルカイナ様からのリクエストですが、まずはアルカイナ様に、感想返信が遅れたことを、この場を借りて、お詫び申し上げます」

直人「上がテイルズオブジアビスのルーク、下がテイルズオブイノセンスのルカの台詞か」

作者「どちらも主人公、それも何か大きな失敗をした後のようですね」

直人「持ってるくせに最近全然やってないからな」

作者「……すいません。では次は直人にやってもらいます！　まずはこちら！！」

直人「降りて来いよど三流ー格の違いを見せつけてやるよ！！」

作者「グラムサイト2様からのリクエストで、鋼の錬金術師の主人公、エドワード・エルリックの台詞です」

一夏「すげえ似合ってるな」

直人「そうか？」

作者「うん、直人は元キャラが元キャラだけにすごく言いそうです。では次！」

直人「教えてやろう、決死隊とは如何なるものか・・・おのれの体に刻んでな！！」

作者「三月語様からのリクエストで、銀牙伝説ＷＥＥＤという漫画の、スミスの台詞だそうです」

一夏「うわあ、直人ならマジで相手の体に刻みそうだな、名実ともに」

直人「何なら今お前の体にも刻んでやろうか？　（チャキッ）」

一夏「いや、遠慮しておく」

直人「冗談だ」

作者「やれやれ、では、次でラスト！」

直人「ダチとつるむのに理由が必要か？」

作者「アルカイナ様のリクエストで、テイルズオブイノセンスのスパーダの台詞です」

直人「確か、前世が剣だったんだよな、スパーダって」

作者「ええ、デュランダルと言う名の」

一夏「んで、俺がやったルカが、確かそのデュランダルを使ってた、

アスラってのの転生者……だっけ？」

作者「はい。それを考えると、今回の配役は中々だと思いますね、そのうち二人の衣装を着てもらおうかな？」

一夏・直人「おい」

作者「とま、冗談はさておき、今回は最後に皆さんに、オリキャラについてある報告が」

直人「報告？」

作者「私、今だそうと思ってるオリキャラが、今回の史江と飛鳥を含めて五人います。しかもそのうち二人は男です！」

直人「……おい、良いのかそれ？　三月語様のそれとかぶることになるぞ？」

作者「ええ、それに加えて、ＩＳの世界観上、あまり男を出すのもどうかと考えているのですが、色々こちらも思うところがあったりしますので、出したいのですよ」

直人「まさか……」

作者「と言う訳で、このオリキャラの男二人を出すべきか？　という事について、読者の皆様から意見を募りたいと思います。ちなみにこのオリキャラ五人の登場時期は、一人は福音戦の時、残りは遅くても二学期、つまり原作第五巻のには出そうと考えています」

直人「やれやれ。ええ、こんな優柔不断で他力本願な作者だが、こ

れからも温かい目で見守ってもらえるとありがたい」

作者「さて、次回は如何しようか……これから話を考えたいと思いますので、それではまた次回！！」

直人「その前にやることがあるだろ！！」

作者「ダッシュ！！」

直人「待てーーーーー！！」

第二十九話　雪姫の笑顔（前書き）

一年も残すところ、後わずか。

日に日に寒風が身に染みてくるようになってきました。

今や日本は、気温も経済も、冷たい風がビュービュー吹くようになってきました。

この小説を読んでくれてる皆様、どうかお風邪などひかれませぬよう、体調にはくれぐれもご注意ください。

それでは、今回の話、楽しんでもらえたら幸いです。

第二十九話　雪姫の笑顔

「ん……」

ある休みの日、窓から差し込む陽光を、その髪で反射させながら、真白は目を覚ます。

隣ではルームメイトである紅葉がまだ眠っていた。

「う～ん……もう食べられないよ～……えへへ……」

何か幸せそうな夢を見ているようで、ご満悦の寝顔だった。

時刻は朝の六時、早起きにしてはかなり早い時刻である。

それでも、真白にとってはいつもの事なので、ベッドから立ち上がると、そのままシャワールームへと入っていく。

しばらくするとシャワールームから着替えを終えて出てきて、櫛で髪を整えながらドライヤーで髪を乾かす。

「……」

ドライヤーで髪を乾かしながら、真白は今日何をしようかと考えていた。

休みの為当然授業はない。

一夏の訓練はあるだろうし、自身もまだ手にして日の浅い専用機の雪颯に早く慣れたいので、アリーナで自主練でもしようかと思う。

「……そうだ」

その時、ふとあることを思いついた。

訓練が終われば、当然皆体を動かすわけだから、一夏以外はある程度疲れるはず（一夏はへとへとになると確定）。

そこで、以前試そうと思ってた新作のケーキを作り、皆に食べてもらおうと考えた。

そう考えを固めるや否や、早速冷蔵庫の中にあるであろう材料を確認する。

「……えっ？」

だが、その時、真白はとんでもない事実に直面してしまう。

何と、かなり溜めてあったはずの材料が、もうほとんど底を尽きかけていたのだ。

「どうして……」

何故なのかと考える真白だったが、ここでふと、心当たりを思い出す。

「……のほほんさん」

そう、のほほんさんこと、布仏本音のことである。

甘いもの好きである彼女は、ある筋からその情報を入手し、真白

のお菓子をよく食べに来ていた。

真白も、毎日とまではいかなくても、頻繁に通ってくる彼女を無碍にすることもせず、ケーキやクッキーなどを作っては、彼女に振舞っていた。

その際、いくつか考えたバリエーションを作って彼女に試食させたりしているが。

ともあれ、かなりの頻度で来るため、真白の想像以上に材料を消費してしまったのだ。

「どうしよう……あっ」

しかしこれでは、参加すると思われる最低限のメンバー数を考えるととても少ない。

悩み始める真白だったが、ふと何かを思い出し、机の引き出しをあける。

「……あった」

真白はその中から一枚のチラシのようなものを取り出し、それを食い入るように見つめる。

「……よし」

暫くして何かを確信したように呟き、その決意を瞳に宿すのだった。

「ついた……」

時刻は午前１０時。

朝食を終えた後、真白は再度着替えを済ませて街へと繰り出した。

服装は、白いノースリーブのワンピースを着て、その上から、薄い青地の半袖のブラウスを着こなし、肩から鞄を掛けていた。

「さてと……」

周りを少し見渡した後、真白は鞄の中から、先ほどのチラシを取り出し、それを見つめる。

「……こっち」

それをしばし見つめると、真白は目的地へと歩み始める。

しかし、目的地へと歩み始めてしばらくして、真白は新たな問題に直面した。

「……迷った」

そう、迷子である。

材料買い出しの為、頻繁に街へと出かけるのことの多かった彼女だが、今回来たところは、あまり足を踏み入れたことが無い。

方向音痴と言う訳ではないのだが、初めての地でも迷う事が無いほど、彼女の方向感覚も確かではない。

「どうしよう……」

見知らぬ土地で一人きり、真白はこの先どうしようかはたと困った。

一番手っ取り早いのは、携帯端末で誰かに迎えに来てもらう事だが、生憎と彼女はそう言う類のものは持ち合わせていない。

基本、直人と離れることなく一緒に行動していたし、離れていたとしても、長くて精々二、三日、加えて大抵は直人に関わりの無い所での暗躍だった。

その上、その間は端午と一緒だったりしたので、連絡することは無かった。

今は専用機を持ってるので、プライベートチャンネルを開くと言

う手もあるが、そんな事をすれば、規律に厳しい直人の師に、こっぴどく絞られるのは目に見えているし、当人もそれを侵そうなどとは微塵も思ってない。

かといって、このままでは路頭に迷ったままでいるのもまた事実。

「ん……」

如何すればいいのか思考が手詰まりになり、頼る相手もおらず、普段無表情な彼女の顔が、不安の色に染まり始めた。

その時だった……

「あれっ？　真白？」

「えっ？」

突如自分の名を呼ばれ、声のした方向を振り向く。

「やっぱり真白だ。どうしたの？　こんなところで」

「シャルロット……」

そこにいたのは、同じクラスの同級生にして、フランスの代表候補生。シャルロット・デュノアだった。

「それでどうしたの？　こんなところに一人で、直人はどうしたの？」

「直人はいない。今日は、私一人」

「えっ！？」

真白の答えに、シャルロットは驚きを隠せない。

と言うのも、自身の知る限りでは、真白はどこへ行くにも常に直人と一緒でいることが多く、自身も一緒にいるところ、またはついていくところしか目にしてない。

無論、学年別トーナメントの時のように、直人から離れて行動する事もあるようだが、一緒にいる時とそうでないとき、どっちを見かけることが多いかと聞かれれば、十中八九、前者である。

その位、真白は常日頃から直人と行動していることの方が多いのだ。

「今日は買い出しに来た。でも、ここ来るの初めてで……」

「あ、もしかして、迷っちゃったの？」

シャルロットからの問いかけに、真白はこくんと頷く。

「そう言うシャルロットは？」

「僕？　僕は一寸下見。でも今は、真白と同じ状況かな？」

「ってことは、シャルロットも……」

「うん、迷子みたい……」

頬を指で掻きながら、シャルロットはあははと苦笑いを浮かべる。いつもの真白なら少し呆れるだろうが、生憎と自分も同じ状況なので、何も言わないし、何とも思わないのだ。

「それで、真白は何を買いに来たの？」

「……お菓子の材料」

一瞬言おうかどうか悩んだが、別段隠す事でもなかったので、自分の今回の外出の目的を包み隠さず話す。

「へー、そうだったんだ」

「うん。それで、このチラシのお店に行こうと思って」

そう言って、真白は部屋から持ってきたチラシを見せる。

「このチラシ、一体何処から？」

「部屋の机の引き出しから。紅葉が、いつも溜めてるのを」

そう、このチラシは彼女ではなく、ルームメイトである紅葉が、実家から送られてくるものを持ち出してきたのだ。

「……あれっ？　このお店、僕さっき見つけたよ」

「本当？」

「うん」

すると、チラシを見たシャルロットが、この店を見つけたと呟く。

「じゃあ、一緒に行こうか？」

「えっ？」

「もう大分下見も終わったし、せっかくだから付き合ってあげるよ。行こう？」

そう言うと、シャルロットは真白の手を握り、ゆっくりと歩き出す。

「あっ……」

歩調が真白を気遣ってかゆっくりめだったため、こけたりすることはなかったが、手を握られたその感触に、一瞬戸惑いを覚えながらも、共に目的地へ歩きはじめるのだった。

一方、その頃ＩＳ学園の寮では……

「待てやゴルァアーーーーー！！！！」

「あっはっはー！　捕まえてごらーん？」

「本気で逃げ切れると思うちょるんかーーーーー！！！！」

直人が招かれざる客人（端午）を相手に、虎徹を片手（左手）に持って追いかけまわしていた。

何が起こったのか、周りは理解に苦しんだが、その時の直人の表情は、悪鬼羅刹など簡単に逃げ出してしまうほどではないのか？と言うほど恐ろしかったと言う。

「ふぅ、いっぱい買ったね」

「うん」

一方、買い物を済ませた真白とシャルロットは、近くのカフェテラスで休憩を取っていた。

その傍には、先ほどの店で買ってきた、真白のお菓子作りの材料（卵、牛乳、片栗粉ｅｔｃ……）が入ってる袋があった。

その量にシャルロットは一瞬首を傾げたが。真白が、のほほんさんがかなりの頻度で食べにくると話したために納得した。

しかし、彼女の疑問はもう一つあった。

「それにしても、真白って結構お金持ちだったんだね」

「事前に卸してきたし、まだ結構な金額が銀行にある。

「でも確か旅してたんだよね？　一体どうやって稼いでいたの？」

「バウンティハント」

「……えっ？」

真白から言われた言葉に、一瞬シャルロットは固まる。

「バウンティハント」

「二回も言わなくていいからね。バウンティハントって、懸賞金がかかってる賞金首を捕まえて引き出すって言う……」

そう言うと、真白もこくんと頷く。

「でも、普段は現地でアルバイトとかして調達していた」

「ほっ」

まさかそんなことをしてたのかと驚いていたが、直ぐに真白から

現実的、且つ常識的な答えが戻ってきたため、ほっと胸をなでおろした。

「……」

そんな中真白は、さっきから自分の手を見つめながら、その手を握ったり開いたりしていた。

その動作を見て、シャルロットは疑問に思う。

「どうしたの？」

「あっ、うん……」

問いかけられ、一瞬答える事を戸惑うが、しばらくの沈黙の後、口を開く。

「さっき……」

「？」

「さっき、お店に行くとき、手を握られて……」

「……あっ」

ここまで喋って、シャルロットは何の事か理解した。

お店へ行こうとした時、無意識に真白の手を繋いたことだ。

本当に無意識で、今言われて、何故自分でもああしたのか解らな

かった。

「も、もしかして、嫌だった？」

理由はさておき、もしかしてあれが嫌だったのかと思い聞いてみるが、真白は首を横に振る。

「嫌じゃない。ただ……」

「ただ？」

「その……直人以外の人に、手を握られたことなかったから。ちょっと戸惑って……」

真白は直人と出会ってから、様々なところへ一緒に旅して来た。その中で、直人に手を繋がれたこともいくつかあったが、その境遇、そして生活から、当然、直人以外の相手に手を握られたことなど、ただの一度もない。

その為、初めて直人以外の相手に手を握られたことに、少し戸惑いを覚えたのだ。

「それに……何だか不思議な感じもして……」

「不思議な感じ？　手触りとかじゃないの？」

「ううん……」

シャルロットの言うとおり、男と女とでは個人差はあるが、色々な面で違いがある。

手を握られたときの感触一つとってもそうだ。
だが、真白の感じた感じとは、手触りなどのの事ではないようだ。

「何て言うか、握られてると、心から安心する感じがした。よく解んないけど……凄く身近にいる人と、一緒にいるみたいで……」

「それって……お父さんとか、お母さんとか、そう言うのかな？」

「……解んない。自分でも、そう言うの解らないから……」

「えっ？　それって……」

真白の言葉に、シャルロットはふと、ある種の嫌な事を考える。

実際のところ、真白の事はよく解っていないし、一番知ってるであろう直人に聞いても、「本人の承諾なしにぺらぺら喋れない」と言って教えてくれない。

無理に知ろうとは思わないが、もし、今言った言葉を額面通りに受け止めるなら、その言葉が意味するところは、一つしかなかった。

「もしかして、両親と暮らしたこと……」

「……」

聞いちゃいけないと思いつつも、先ほどの言葉の真意を知りたくて聞いてみる。
真白は唯沈黙するだけで、否定も肯定もしなかった。

いや、この場合、出来ないと言った方が、正しいのかもしれない。

ラウラに話した通り、彼女には、両親と一緒にいた記憶が無く、そもそも自身に親兄弟がいたのかさえ解らないのだから。

「ねえ真白。聞いちゃいけない事だったら謝るけど、直人と出会う前、一体何があったの？」

「今は言えない。ううん、言いたくない。でも、もしその時が来たら、話すから」

「……うん、解った」

その言葉に、シャルロットもそれ以上深入りはしなかった。

誰にだって、言いたくない事の一つや二つあるし、自分も彼女に自身の事を話していない。

それなのに、相手の事ばかり知ろうとするのは図々しいし、身勝手にも程があるというものだ。

「……出ようか？」

「そうだね。それに、そろそろどうやって帰ろうか、真剣に考えないと」

「あっ……」

しかし、真白の話題で頭がいっぱいになってたため、二人は忘れていた。

いま自分たちは、半分迷子状態であることに。

結論から言うと、取り敢えず帰る算段は付いた。

店を出た後、暫くしていたら街の区画の案内掲示板を発見し、そこで、ＩＳ学園行きのレールウェイの乗り場を確認し、今そこに向かっているのだ。

「良かったね、帰れる方法見つかって」

「うん」

先ほどのカフェテラスでの話を引きずることもなく、二人は普通に会話しながら乗り場へ向かっていた。

正直、掲示板を見つけるまでは帰れなかったらどうしようという事を考えていたため、引きずる余裕も無かったのだが。

「でもすっかり日も暮れてきたね、早く帰らないと」

「織斑先生が怖いしね……」

「そ、そうだね……でもよく考えてみれば、一夏と直人って凄いよね、織斑先生みたいな人をお姉さんに持って、師事してるんだもんね」

「お姉さん……」

シャルロットの他愛のない言葉に、ふと、真白は何かを考え始める。

「？　どうしたの？」

「うん……さっきのテラスでの話なんだけど……」

そこで歩きながら、真白はふとさっき考えていたことを口にする。

「前にね、直人に手を握られたときの感じがよく解らなくて、直人に聞いてみたことがあるの」

「うん」

「そしたら直人は、「そいつはお前が、俺に手を握られると安心するって事か？」って逆に聞かれたの。よく解らなかったけど、そう言われると、自然とそんな気がしたの」

「うん」

「それで思ったことを話したら、「それは多分、家族に手を握られるのと同じだと思う」って言われたの。よく解んないけど、多分、今回のも、それと同じかなって思って」

「家族……か……」

その言葉に、ふと、シャルロットも心当たりがあるように呟いた。

自分も小さいころ、母に良く手を握られることがあった。

その度に、胸の内が温かくなる気がして、握っていると、心がすごく安らいだ。

ひょっとしたら、真白が自分に手を握られたときも、同じだったのかなと思い、それを思うと、なぜか嬉しく思えてきた。

「ねえ真白」

「何？」

真白に問いかけると、シャルロットは再び手を差し出す。

「帰るまで、手をつないで行こうか？」

「……うん」

こうして二人は、再び手を繋ぎ、その足取りでレールウェイ乗り場へと向かっていった。

その時の二人の顔は、とても嬉しそうに見えたのだった。

「でっ、これは一体どういう事？」

「僕に聞かれても……」

ちなみに帰ってきた二人が見たのは、寮の前で正座させられながら千冬にこってり絞られる直人の姿だったという。

そしてその夜。

「♪～♪♪～」

いつものように直人の部屋に押しかけてきた真白は、直人の髪を梳いているのだった。

「なあ真白」

「何？」

「何か今日はいつにもましてご機嫌だな。何かあったのか？」

「うん、ちょっとね」

そう呟かれ、直人は内心少し驚いた。

基本的に、自分からの問いかけにはなんでも答える筈の真白が、そんな答えを言ってくるとは思ってもなかった。

「……ねえ、直人」

「何だ？」

すると真白は、ふと直人に問いかけてきた。

「一夏と手を繋いだことって、ある？」

「何だいきなり？　まあ、小さいころは良く繋いでいたが」

「どんな感じだった？」

「そうだな、俺が初めて心開いた相手だからな、一夏は。何て言うか、あいつの優しさが流れ込んでくる気がして、気が落ち着くし、心も安らぐ感じがしたな」

「そっか……」

直人の答えを聞くと、真白もその答えに満足したのか、さっき以

上に嬉しそうな顔になった。

「どうしたんだ？　藪から棒に」

「ふふ、秘密♪」

そう言われて直人はふと気になったが、真白が心の底から嬉しそうにしてる気がして、そのことを内心では嬉しく思った。

そして上機嫌な真白の髪梳きは、直人が就寝するまで続いたと言う。

第二十九話　雪姫の笑顔（後書き）

桜爛の間

作者「と、言う訳で、今回は真白とシャルロットの話でした」

直人「なぜこんな話を思いついたんだ？」

作者「まあ、正直思いつきに近かったけど、前回は君が主役だったので、せっかくだから他のオリキャラ二人を主役にした話を作ろうと思ったので、シャルロットを入れたのは、作者が好きなキャラだからと、今後のある展開の為」

直人「ある展開？」

作者「ま、それは追々。それではいきましょう、後書きコーナー！
まずは「直人の目安箱」、まずはこちら！」

直人と真白に質問です。
千冬さん以外で普通に戦っても負けると思う人は誰ですか？（ギャグなし）

作者「まずはグラムサイト2様からの質問です」

直人「師匠以外で戦って負ける人って言うと……俺のもう一人の師匠かな？」

作者「前に何度か話をしましたが、直人は旅に出るまでは千冬さんの元で、旅に出てからは、途中で出会ったある剣術使いに1年ほど剣を教わってました。千冬さんからは主に剣の基礎的な動きや心構え、今直人が使ってる剣術の大半は、その剣術使いの師匠の方から教わったという設定です」

真白「私は……ラウラ」

直人「意外だな。あの時は圧倒してたくせに」

真白「あの時はある種の油断をしてたし、ＩＳじゃなくても、生身だったら多分互角だから、どうなるか解らない」

作者「だそうです。では次の質問」

全員に

以下の状態で自分のとる（と思う）行動は？

『自分が味方とともに敵陣に入って自分の総大将を救出する作戦を実行していた。

救出して後は逃げるだけ、となったが追手が来た。

味方は作戦の影響でボロボロ、戦えるかも分からない。逆に自分はまだまだ元気。

総大将は『自分を置いていけ』と言い、味方は『自分も戦う』と言

う。
追手と戦ったら死ぬのは目に見えている。』

作者「こちらは三月語様からの質問です」

直人「長いなあ」

作者「ですねえ、ではそれぞれの答えをどーん！」

直人「無論味方と対象を逃がして、自分が殿として残る！」

一夏「俺もだな！　死ぬつもりはないけど、味方を見捨てて逃げるなんてできねえよ」

箒「私も二人に同意見だ」

セシリア「難しいですわね……ですが、やはり味方と対象を逃がすことが先決かと」

紅葉「皆で無事に逃げられる方法を考えるね。誰かを見捨てるなんてでき無し、命あっての物種って言うでしょ？」

鈴「紅葉に同感ね」

シャル「僕もかな？」

ラウラ「追手の首魁を潰す。部隊であるからには、頭を潰せば容易く瓦解する」

真白「同じく、リーダーを撃ちぬく」

作者「という事です。では次、「抱腹絶倒！　アフレコ委員会！！」です！　今回はこちらの方々に来ていただきました！！」

真白「ん」

一夏「よっ」

シャルロット「また呼ばれてきました」

山田先生「いきなりお呼びがかかったので来たのですが……」

直人「真白に一夏、シャルロットはともかくとして、山田先生まで来るとは……」

作者「それではまずは、グラムサイト2からのリクエストです。まずは直人から！」

直人「邪眼の力をなめるなよ」

作者「【幽☆遊☆白書】の飛影の台詞です」

直人「作者、この作品知らないんだっけ？」

作者「はい、名前走ってるんですけどね。では、次行ってみましょう。次はシャルロットにやってもらいます！」

シャルロット「あ、はい」

シャルロット「いっぺん、死んでみる？」

作者「【地獄少女】の閻魔あいの台詞です」

直人「何かどっかで聞いたことのある台詞だな」

作者「でも何だろう、シャルロットが言うと、どことなくあの白い魔王様に似てしまいそうな気がするのは私だけだろうか？」

直人「雰囲気的な意味でか？」

作者「ま、あくまで個人感想ですが、では次はアルカイナ様からのリクエスト、まずは直人から！」

直人「まっすぐ生きたバカの魂はなたとえその身が滅びようが消えやしねー」

作者「【銀魂】の主人公、ご存知天然パーマ野郎、坂田銀時の台詞です」

直人「普段はダメ人間の癖に、こういう事言うと凄くかっこよく聞こえてきたりするんだよな」

作者「何でしょうね、ああいうのをギャップルールって言うんでしょうかね、ま、言ってることには共感しますが。では次も直人に！」

直人「力を小出しにしてたら勝てねぇ。防御を捨てて攻撃に徹し、一気に攻めて、負ける前に勝つ。攻撃こそが最大の防御だ」

作者「【バカとテストと召喚獣】より、坂本雄二の台詞です」

直人「攻撃は最大の防御、良く聞く言葉だが、考えなしに突っ込むのは唯の猪武者だからな」

作者「最初から全力で攻めて、負ける前に勝つ。この台詞もなかなかいいですね。では次は山田先生にやってもらいましょう」

山田先生「えっ！？　あっ、はい！」

直人「先生、落ち着いてください」

作者「それではどうぞ！」

山田先生「努力を自分自身で誇るのは、愚か者です。しかし、他人が努力を称えるのは、悪いことではありません」

作者「【バカとテストと召喚獣より、吉井玲の台詞です」

直人「流石、山田先生が言うと説得力があるなあ」

「「「うん、うん」」」

山田先生「そ、そうですか／／／／／」

作者「ええ、とても。では次は常連、三月語様からのリクエスト、こちらは真白と一夏にやってもらいましょう。まずは真白から」

真白「あなたに・・・力を・・・」

作者「【機動新世紀ガンダムX】のヒロイン、ティファ・アディールの台詞です」

直人「あれっ？　俺立ち位置的にガロードか？」

作者「私的には、どっちかと言うとジャミルのような気が、ガロードはどっちかと言うと一夏が適任だろ」

一夏「そうか？」

作者「ま、雑談もそこそこに、次でラスト、一夏にやってもらいましょう」

一夏「どんな理由があろうと、人殺しは正義じゃない！『許せないから殺す』では、争いはなくならない！許せる心を持とうよ！それが優しさだろ？優しさは絶対相手に伝わる・・・それが未来を変えるんだ！」

作者「アニメ【銀牙伝説ＷＥＥＤ】より、ウィードの台詞です！」

直人「一夏なら言いそうだな、台詞の内容も凄く共感できる」

作者「暴力は暴力の連鎖を生むだけ、許せる寛容の心が未来を変える。本当に良い台詞です。皆さん。これからも、よろしくお願いします！」

直人「さて、これで終わりか？」

作者「いえ、実は先週の男オリキャラ二名について少し」

直人「……何となく先が読めるが、言ってみろ」

作者「わずか三名ながらも、男オリキャラを出すことに意見をくださり、誠にありがとうございます。とはいえ、このままでは扱いをどうしようか困るので、アンケートを取りたいと思います！」

直人「ああ、やっぱり」

作者「男オリキャラ二名を出すことについて、以下の三つの中からどれか一つを、お選びください」

1. 世界観を守るためにも、直人以外の男オリキャラは出さない方が良い。

2. 二人は許容できないけど、一人なら出しても良いと思う。

3. 全然問題ないので、二人とも出していい

作者「アンケートの締め切りは、後日報告させていただきます。今後の話に関わる重要な事ですので、普段感想を送ってこない読者のみな皆様にも、是非ご投票いただけるよう、お願い申し上げます」

直人「ええ、こんな優柔不断性の強い作者ですが、これからも皆様に楽しんでいただけるよう精進していきますので、どうか、ご協力をお願いします」

作者「さて、次回の話で間章はおしまい。そしてその次からは、いよいよ原作第三巻、アニメ第九話から最終話までの話に入りたいと思います！」

直人「という事は、いよいよあれか」

作者「はい、季節外れになってしまいますが、これからもご愛読の程、宜しくお願いいたします！」

第三十話　紅葉大暴走！！（前書き）

この間の日曜、お店のＤＶＤの欄を見ていたら、ＩＳのＯＶＡを見つけました。

ほしいと思いましたが、値段は五千以上、とても実家の仕送りに頼ってる浪人生の自分には、手を出すのがつらい……。

本気でバイトを考えた方が良いかもしれません。

さて、今回で間話は終わり、次回から、原作第三巻、アニメ第九話から最終話までに入りたいと思います。

今回は紅葉が主役のお話です。

それでは、どうぞ！！

第三十話　紅葉大暴走！！

「はぁあーーーーー！！」

「うおっと！　お返し！！」

平日、授業も終わり、一夏の特訓の為に、いつものメンバーはアリーナに集結していた。

今アリーナでは、白式を纏った一夏と、秋時雨を纏った紅葉が模擬戦を行っている最中だった。

一夏の渾身ともいえる一撃をひらりとかわすと、紅葉は両手にハンドガンを展開し、一夏目掛けて乱射する。

「うわっ！　っとと」

「これで終わりと思わない事だよ！！」

必死に攻撃をかわす一夏に、紅葉は左手のハンドガンを収納し、代わりにマシンガンを展開し、それをわずかに動きを止めた一夏目掛けて撃つ。

（くそっ！　こうなったら……）

すでにこれまでの戦闘で、シールドエネルギーの残量も残りわずかとなっていた一夏は、最後の攻勢を仕掛ける。

「おっ！　来たね、瞬時加速（イグニッション・ブースト）！」

高速で接近してくる一夏、その手に持つ雪片弐型は零落白夜を発動しており、エネルギーの刃が展開されていた。

「これで、どうだ！！」

渾身の一撃とばかりに、雪片を横に一閃させるが、そこに紅葉はいなかった。

「そーれ！」

「がっ！？」

思いっきりジャンプした紅葉は、そのまま重力に身を任せ、一夏目掛けて飛び蹴りをくらわす。

「げほっ！　げほっ！」

飛び蹴りをもろに喰らった一夏は地面に倒れこむ。

そして、目を開けたその先には……

「どうする？　これでもまだやる？」

一夏の上に馬乗りになって、十文字槍を喉元に突き付ける紅葉が、そこにいたのだった。

日も暮れてきたころ、全員で食事をとりながら、今回の訓練の事について話していた。

「はぁ、何で攻撃が当たんねえのかな？　そりゃあ簡単に当たるとは思ってないけど、ああも簡単に避けられるなんて……」

「だーかーらー、一夏君は動きが直線的すぎるんだよ。あんな真正面から突っ込んでたんじゃ、「どうぞ避けてください」って言ってるようなものだよ？」

紅葉の意見に、他の全員も頷く。

「もうちょっと変則的な動きとか加えた方が良いよ、真っ直ぐばっかりだったら、すぐに手の内読まれるよ？」

「そうはいってもなあ、白式の武器は雪片一本しかないから、どう動いたって結局近づかなきゃならないし……」

「そうだな、考えてみればそれが一番ネックなんだよな」

白式の装備は、かつての千冬の機体の武装、雪片の後継機である雪片弐型一本のみであり、必然的に、接近戦をせざるを得ない機体なのだ。

「せめてライフルが一個ぐらいあっても……いや、駄目だな」

「何でだよ！？」

「だってなあ……」

「お前がライフル構えても、碌に当たんないの目に見えてるし」

「失礼ですけど、やはり私も、一夏さんがライフルを構えて当てる姿が想像できません」

「あげくにやたらめったに撃って、流れ弾でこっちもアリーナも冷や冷やしそうだし」

「下手な鉄砲、数撃てば当たる……」

「ひでえ！！」

直人の言葉を皮切りに、セシリア、鈴、真白が次々と否定する。

酷いと思いながらも、自分でも射撃がまともにできないことを自覚していたために、声をあげながらも反論はできなかった。

「まあまあ、でもさ、一夏も腕は上がって来てると思うからさ、自身も持ちなよ」

「うんうん。初めのころに比べれば大分様になって来てるしさ、そうしょげることもないって」

「しかし、いくら腕が上がっても、相手にまともな人たちも入れられんとは、情けないぞ！」

「全くだ、経験が上とは言え、量産機乗り相手に負けるとは、まだまだ未熟という事だ」

シャルロットと紅葉が必死に一夏を励ますが、箒とラウラの一言で、見事に粉砕される。

「ま、ようはまだ精進が足りないってことだな。特訓にはしっかり付き合ってやるから、お前も早く強くなれってことだな」

「言われなくても解ってるよ」

「なら、よろしい」

直人と一夏のやり取りを見て、周りは談笑するが、唯ひとり、食事を口にしながらも、紅葉は何か考えてるようで、その輪には参加してなかった。

その夜、真白と共に就寝についた紅葉だったが、夕食の時にした考え事から、寝つけずにいた。

「専用機……か」

食事時にラウラに言われた通り、自分の乗ってるＩＳ、秋時雨は、結局は第２世代型の量産機。

一夏との模擬戦では技量差で勝ったものの、他の専用機持ちに比べれば、性能面では確実に最低位につく機体である。

別段、今日まで専用機がほしいと思ったことはないし、専用機持ちを羨ましいと思ったこともないが、一度意識してしまうと、そう簡単にはいかなかったりする。

（そう言えば、直人もそうだけど、周りも専用機持ちばかり、何か場違いのような気がしてきたなあ……）

専用機を持ったからと言って、それで同列になれるとは思っていないが、それでもこうまで集まられると、どこか疎外感のようなものを感じざるを得ない。

欲を言えば、やはり自分も持ちたいと思うところだが……

「駄目だよねえ、今さらやめたものを、私の我儘で始めるわけないよねえ、まして利益にもならない事を……」

打鉄とのトライアルに負けて以降、彼女の実家、秋宮重工は、主にＩＳの後付武装（イコライザ）の開発に方針を転換した。

それを今さら、莫大な予算と時間を要する物を再開するとは思えない。

ましてそれが、売り上げにも何も貢献しない我儘となれば、尚更であることを、企業の娘として、重々承知していた。

「ああもうやめやめ！　どうにもならない物はどうにもならないんだから考えても仕方ないの！　もう寝よ！！」

もうどうにもならないと自分で決定づけ、忘れようと布団の中に入って眠りにつこうとしたのだった。

「ふぁあ～～～……」

次の日、大あくびをしながら、紅葉は教室へ向かう。

「結局一睡もできなかった……ふぁあ～……」

結局あの夜、専用機の事を必死に頭の中から消し去ろうとしたの

だが、消し去ろうとすればするほど逆に意識してしまい、どんどん眠れなくなってしまい、結果、そのまま朝日が昇ってしまったのだ。

「うぅ～……眠い……ん？」

目を擦りながら教室のドアを開けると、教室内は何やら騒がしかった。

「何？　何なの？」

「あっ！　紅葉！　ってどうしたの？　」

「ふぁあ～、御免、昨日ちょっと寝付けなくて。それで何？」

「あっ！　そうだ！　紅葉なら知ってるかも！」

「何を？」

「あのね……」

クラスメイトの一人が、紅葉の耳にひそひそとあることを教えると……

「何ですとーーーーー！？！？」

眠気も倦怠感も吹っ飛び、喉が嗄れるんじゃないかと言う位の紅葉の叫び声が、一年一組全体に響き渡ったという。

その日の夜。

「……」

食事を終え、一度部屋に戻った紅葉は、その後時間を見計らったように部屋を出て、今は直人の部屋の前に立っている。

（あの話……もしかして……いや、そんなことないと思いたいけど……）

今朝、教室で紅葉が聞いた話、それは……

『最近、桜庭君の部屋に、セシリアが入り浸ってるみたいなの！！』

と、言うものだった。

何でもここ最近、直人の部屋にセシリアが入ってく姿が、寮内で何度も目撃されていたそうだ。

何があったのかは、何をしているのかは定かではないが、一部では、「もしや部屋の中で人に言えない事を!?」などと噂するものもいるほどだ。

（そう言えばこの前、大浴場からの帰りに見かけたけど、あの時も凄く機嫌が良さそうだった。時間は確か……8時ごろだった……ってことはマジで!?）

心当たりもあるだけに、噂と馬鹿にすることもできず、こうして確かめに来たという事だ。

（とはいえ、いきなり入るのは不味いよね。間違ってたら恥ずかしいし、まずは……）

紅葉は音をたてないように、ゆっくりとドアに顔を近づけ、聞き耳を立てる。

『えーっと……こうでしょうか？』

『いや、ここをこうして……』

『ですが、本ではこうだと……』

『いや、だから……』

部屋の中から聞こえてくる会話は、一見すると普通の会話のように聞こえるが、紅葉はセシリアの言った、ある単語が気になった。

（本？　本って……まさか！？）

何の本なのかを想像した途端、紅葉の顔が真っ赤になる。

（う、嘘！　そんなはずない！　そんなはずない！！）

必死に頭の中の想像を消そうと、顔をぶんぶん振る。

その時……

「紅葉？　あんた何やってんの？」

「わひゃあ！！？」

突如声を掛けられ、心臓が止まる思いをする。

声を掛けたのは、鈴だった。

「びっくりしたあ、脅かさないでよ」

「脅かすも何も、唯声を掛けただけなんだけど。ってか、あんたここで何やってるのよ？」

「シー！」

あまり大声を出されると、中にいる二人にばれてしまうため、鈴に静かにしてほしいとジェスチャーすると、再びドアに聞き耳を立てる。

その様子を、鈴は疑問に思って首を傾げるが、紅葉にそれを気にする余裕などなかった。

なぜなら再び聞き耳を立てた後、部屋の中から聞こえてきたのは。

「痛っ！！」

「おい！　大丈夫か！？」

「だ、大丈夫ですわ！」

「ああ、仕方ない。後は俺がやるから」

「で、ですが……」

「いいからいいから、俺に任せとけって」

このような会話が聞こえてきたのだ。

そして、今の紅葉の思考回路で、このような会話が聞こえてくれば、当然。

（えっ？　これって、もしかして……）

妄想中

「……／／／／／／（プシュ～）」

「こ、紅葉？」

突如、顔を真っ赤にして頭から蒸気を吹かせる。
しかし、その体はわなわなとふるえており、それに気づいた鈴が声を掛けようとしたその時……

「嫌ーーーーー！！！！」

「おわっ！？」

「直人ーーーーー！！　セシリアちゃーーーーーん！！！！！」

突如大声を発したと思ったら、鈴がびっくりするのを気にも留めず、直人の部屋のドアを勢いよく開ける。

「こ、紅葉さん！？」

「そ、それに鈴も、どうしたんだ！？」

「どうしたじゃない！！　二人ともそんな、りょりょりょ、寮の中でそんな！？！？」

「どうしたの紅葉、さっきからあんた変よ！　ちょっと落ち着き……」

「鈴ちゃんは黙っててて！！」

「ご、御免なさい！！」

熱暴走気味の紅葉を落ち着かせようとする鈴だったが、ものすごい迫力の紅葉の一喝に、反射的に謝る。

「せ、セシリアちゃんもセシリアちゃんだよ！　そんな、二人っきりなのを良い事に、あんなことやこんなことをするなんて！！」

「あ、あんなことやこんなことって……／／／／／／」

セシリアも一瞬、何の事か解らなかったが、瞬時に紅葉が何を言

ってるのか理解し、顔を真っ赤にする。

「ふ、二人して、いいい一体何やってたの!!?」

「何って……唯料理を教えてただけだが?」

「……へ?」

直人の言葉に、さっきまでの熱暴走を忘れ、間抜けな言葉を放つ。

「実は、以前私の料理を鈴さんに食べてもらったのですが、その時あまりにもひどい事を言われたものですので、それで直人さんに料理を教わって、皆さんを驚かせようと思いまして」

「ああ、あの時ね。あれは酷かったわ……うっ、思い出しただけで気持ち悪くなってきた……」

セシリアの説明に鈴もその時の事を思い出したのか、顔色を悪くする。

「まあ、俺も怪我が治ってきたとはいえ、まだ鍛錬を再開する訳にはいかないから、正直やることなくてご無沙汰だったからな、快く引き受けたんだ」

「じゃ、じゃあ、さっきの会話って……」

「聞こえてたのか? ああ、実はセシリアが包丁で少し指を切ってな。そのままやらせるわけにもいかないから、見学させて、後は俺でやってたんだ」

その証拠と言わんばかりに、セシリアが人差し指を見せると、確かに絆創膏が巻かれていた。

「ってことは、これって私の……／／／／／」

以上の説明を聞いた紅葉は、一瞬呆然としていたが、しばらくして、自分が勘違いをしていたことに気付き、再び顔を真っ赤にして俯く。

「こ、紅葉？」

「紅葉さん。どうしたのですか？」

「ひ……」

「「ひ？」」

「光になれーーーーー！！！！！」

しばらく俯いていた紅葉を心配し、覗き込むが、突如紅葉は叫びと共に、どこからともなくハンマーを取り出し、二人に襲い掛かってきた。

「うわっ！　危なっ！！」

「こ、紅葉さん！　いきなり何を！！」

「うるさいうるさいうるさーーーーーい！！！！！」

二人の言葉も耳に入らず、紅葉は唯二人に向かってハンマーを振

り回す。

「忘れろ忘れろ忘れろーーーーー！！！！」

「ちょっ！　落ち着いて……ひあっ！？」

「り、鈴！　見てないで紅葉を止めてくれ！！」

「と、言われても……」

直人に救援要請をされても、今の紅葉を自分一人抑えられる自信はなかった。

「何だ何だ？」

「うるさいぞ！　一体何の騒ぎだ！！」

「どうしたの？」

「？？」

「あ、あんた達！　ちょうどよかったわ！　今すぐ紅葉を止めるわよ！！」

「えっ？　鈴、一体どうし……」

「いいから！　さっさと手を貸しなさい！！」

結局、その場にやってきた一夏、箒、シャルロット、真白の手助けを借りて、漸く暴走状態の紅葉を抑えることに成功したのだった。

「御免なさい……」

「い、いえ、勘違いは誰にでもある事ですし」

直人の部屋での騒動から少し経ち、完全に頭の冷えた紅葉は、廊下を歩きながらセシリアに謝罪していた。

あの後、一夏達が紅葉を取り押さえてる間に、騒ぎを聞き付けた山田先生に説教を受けたが、その際、セシリアが直人の部屋に度々入っていたことを聞き、妄想にトリップしたりで大変だった。

何より極めつけは、騒ぎを聞き付けた寮長たる千冬に、全員正座をさせられて説教を受けた事だろう。

ちなみに直人は、取り押さえる間際に紅葉の一撃をくらい、加えて千冬からも拳骨を一発貰ったため、今彼の頭に、たんこぶの雪だるまができてしまった。

「あぅ～……あんな勘違いをして、自分が恥ずかしい……」

「まあまあ、私ももう気にしておりませんし、直人さんだって許してくれたんですから」

「と、言われても……」

二人には許してもらえたものの、やはりあそこまで騒動を起こしてしまった以上、そう簡単に気持ちの整理はつかない。

まして、とても人前で言うのが憚られる事を妄想していたとなれば、尚更だ。

「はぁ……そう言えばさ」

「何でしょう？」

「どうして料理を教えてもらおうって思ったの？　そりゃあ馬鹿にされて、鼻を明かしたいって気持ちは解るけど、料理って難しいし、得手不得手ってのはあるもんだしさ、無理に教わらなくても良いんじゃないかな？」

紅葉の言い分も尤もだった。

人にはそれぞれ、得手不得手と言うものがある。

まして料理と言うのは、かなり難しい部類に入るものであるし、学園には食堂もある。

無理してまで覚える必要性があるかと言えば、少なくとも、この学園にいる間は必要ないのだ。

「それは、直人さんに料理を教えてほしいと頼んだときに、直人さ

んがこう言ってくれましたの」

「そりゃあ、人によって得手不得手はあるだろうが、そんなもん、頑張り次第でどうにかなるし、そもそも「自分にはできない」、「自分には無理」って最初からやらなかったら、上達するもんだって上達しないだろ？　物事、やってみなくちゃ解らないさ」

「はは、直人らしいや」

「ええ。それで、一念発起してみましたの」

「まあ、見事に鈴ちゃんの鼻は明かせたけどね」

「ええ。少しすかっとしましたわ」

あの騒動の後、直人監修のセシリアの料理を、その場にいた全員にごちそうしたのだ、しかも、鈴は強制参加で。

散々「鬼ー！」とか「人でなしー！！」とか罵声してた鈴だったが、肝心の料理を口にした途端。その美味しさに自分のほっぺを抓ったほどだった。

「やってみなくちゃわからない……か」

それはさておき、セシリアの言葉に、紅葉もふと、その言葉に何か思うところがある様子だった。

「うん、決めた！」

「はっ？　何を？」

「あ、こっちの事。私ちょっと用事思い出したから、それじゃあね！」

そう言って紅葉は駆け出していくのだった。

そして紅葉は夜中、寮の外に出ていた。

周りに誰かいないか様子を見ながら、携帯電話を取り出す。

「あんまり、気は進まないけど……」

そう呟きながらも、紅葉は携帯のダイヤルを押す。

「……もしもし、お父さん？　私、紅葉」

《おお紅葉。如何したんだ？　何か嫌な事でもあったか？」

「あ、そう言うんじゃなくて、ちょっと話が《おお、松ー！　待ってたぞ、お前の愛しい手料理ー！！》……切ろ」

《ああ解った！　ちゃんと話は聞くから、取り敢えず切るな！　な？　な？》

久しぶりの電話で相当嬉しかったのか、電話の向こうの人物、紅葉の父は、紅葉が電話を切ろうとするのを必死で止める。

とりあえず話を続けないといけないために、切ろうとするのをやめ、携帯を再び顔に近づけるが、内心、紅葉は「やっぱ掛けなきゃ良かった」と、後悔していた。

《それで、話ってのは何だ？》

「あのさ、私さ……専用機……ほしいんだけど……」

《何っ？》

紅葉の言葉に、電話の向こうの父は驚いた様子だった。

「やっぱ、駄目かな？《おーい松ー！！　紅葉が、紅葉が私にお願いしてきたぞー！！》……やっぱり切ろう」

《ああすまん！　すまん！　だから切らないでくれ！！　えっ？代わってほしい？　ああ、解った。と言う訳で、愛しの松に代わるぞー！！》

《もしもし、紅葉？》

「お母さん」

すると電話の主は、紅葉の父から、彼女の母に代わった様で、声も男のそれから、女性のそれに代わる。

《話は聞いたわ。どうしたの？　急に専用機がほしいなんて》

「うん、そんな大したことじゃないよ。ちょっとした我儘、そんな感じ」

《我儘、ねえ》

「いやね、駄目なら駄目で良いんだよ？　もう開発から手を引いてるし、私の我儘一つでそういうのしよう何て、流石に……」

《ええ、良いわよ》

「そうだよね、良いよね……えっ？」

やっぱり駄目だなあと思ってただけに、電話の向こうの母親からの答えに、思わず聞き返す。

「実はね、国の方から、第３世代機の開発をしてほしいって頼まれてね。うちとしては如何しようか悩んだんだけど、今倉持技研の方の第３世代、開発がストップしてるそうじゃない？　イギリスや中国で第３世代機が稼働テストに入ってるって聞いて、焦ってるそうなのよ。だから家に、第３世代型の開発に着手するようにってお触れが回ってきたのよ」

「はあ……でもさ、ＩＳ一機作るのに結構時間かかるでしょ？　今から作ってたんじゃ……」

《大丈夫よ。お触れが来たのは、五月の時でね、久しぶりにＩＳが作れるってんで、家の開発陣、特に開発主任が大張り切りでね、「一か月で完成させてやる！！」って大張り切り、それで今まで徹夜で作業と化してたから、外骨格とか武装とか、大体の部分がもう出来上がってるのよ。だから、微調整をそっちでやるって言うなら、直ぐにでも遅れるけど、予定ある？》

「ははは、相変わらず元気だなあ、おやっさん。ちょっと待って……」

そう言って紅葉は生徒手帳を取り出し、予定を確かめる。

「……あっ、もうすぐ臨海学校だ」

「あら、そう？」

「うん。そう言えばこの学校の臨海学校……ＩＳの新装備テストの場所も兼ねてるって前に聞いた気が……」

《そう、じゃあその日に合わせて送りましょうか？》

「そうだね、どっちにしても、学園関係者以外立ち入り禁止だし」

《じゃあ、それまでにできる限り完成させるから、楽しみにしててね。それじゃあ》

その言葉を最後に、電話は切れた。

「あはは……世の中、駄目元でも言ってみるもんだねえ……」

まさかここまで自分の願いどおりになるとは思いもよらなかったが、同時に、念願の専用機が手に入るという事で、高揚感を覚えずにはいられなかったのだった。

第三十話　紅葉大暴走！！（後書き）

桜爛の間

作者「と、言う訳で、今回は紅葉が主役の話でしたー」

直人「いてて……」

作者「おー、こりゃ見事なたんこぶだるまですなあ」

直人「ったく、紅葉の奴、一体何を勘違いしてたんだ？」

作者「君に言っても無駄かと」

直人「何だそれ、すげーむかつくんだが」

作者「まあまあ、さて、今回は今まで紅葉の口から散々出ていた、紅葉の両親を声だけですが、だしました」

直人「何だろう、話だけみてても、すげーラブラブと言うか、これもしかして元ネタは……」

作者「はい、ですが、敢えて言わないでおきましょう。それでは後書きコーナー、まずは「直人の目安箱」から！！」

三月語様より、

Q1．全員に
オリヴィエとセシリアが料理対決をすることになった（審査内容：味、見た目）。審査員に立候補する勇気は？

真白・セシリア以外「無い！！」

真白「（ふるふる）」

セシリア「みなさん酷いですわ！！」

作者「ええ、予想通りの結果が出たところで、次！

Q2．これも全員
一ヶ月一万円生活をする、という対決をすることになった。こいつにだけは負けたくない、という人は？

作者「と、言う訳で、皆さんどうぞ」

直人「特にこれって言うのはいないな」

真白「同じく……」

紅葉「セシリアちゃんには負けたくないなあ。と言うより、セシリアちゃんには負けないと思う」

一夏「直人には負けたくないかな？　やっぱ義兄としては、義弟には負けたくねえし、負けたら負けたで千冬姉とか怖いし……」

箒「誰にも負けん！」

セシリア「やはり鈴さんには！」

鈴「セシリアには絶対負けない！！」

シャルロット「僕も特にはいないなあ、と言うより、僕にできるかなあ？」

ラウラ「サバイバルなら誰にも負けん！」

作者「以上です。ルールを考えるに、一夏、直人、真白、ラウラあたりが強豪っぽそうな気が……次！」

ヒロアキ１４１様よりの質問

1．全員に質問
もしモビルスーツに乗れるとしたら何に乗りたいですか？

作者「これ、確か同じような質問を三月語様の所に送ったような……」

直人「とはいえ貰ったんだ、答えなきゃいけないんだろ？」

作者「それは勿論。事前に聞いておいたので、ではどうぞ！」

直人：スサノオ、マスラオでも可

真白：ガンダムレオパルドデストロイ

紅葉：ガンダムスローネツヴァイ

一夏：クロスボーンガンダムＸ３

箒：ガンダムアストレイレッドフレーム

セシリア：ケルディムガンダム

鈴：アルトロンガンダム

シャルロット：Ｖ２ガンダム

ラウラ：ハイペリオンガンダム

作者「以上です。では次は「抱腹絶倒！　アフレコ委員会！！」です！　今回の参加者は、直人とこちらの方々！！」

真白「ん……」

一夏「よっ！」

セシリア「御呼ばれしましたので」

作者「以上、この四名でやりたいと思います。まずは、アルカイナ

様のリクエストから、連続で直人にやってもらいましょう」

直人「おお」

作者「しかしその前に、本来なら先週の後書きコーナーでやる筈のものだったのに、今週に伸ばしてしまったことを、お詫び申し上げます。それではどうぞ！」

直人「選ぶんじゃねぇ。もう選んだんだよ。」

直人「未来は創り出すもんだろ、選んだ道を信じて創り出すもんだ。」

作者「【テイルズオブヴェスペリア】の主人公、ユーリ・ローウェルの台詞です」

一夏「うわあ、直人がすごく言いそうだなあ」

作者「いっそ髪染めて同じ格好させるか？　結構雰囲気とか出ると思うぞ？」

直人「やめてくれ」

作者「では次は、グラムサイド2様からのリクエストです！　これは直人にやってもらいましょう」

一夏「逃げない、投げない、あきらめない！思い込んだら一直線！」

作者「【真・女神転生Ｄチルドレン　ライト＆ａｍｐ；ダーク】のジンの台詞です」

直人「いかにも一夏に似合う台詞だな」

真白「うん」

作者「では次は、常連、三月語様からのリクエストです！　まずはセシリアにやってもらいましょう！」

セシリア「一体誰に断ってそこに住んでいるのかしら？敷礼２＋今までの家賃×この私（わたくし）を不快にさせた謝罪金を払って、１秒以内に出ていきなさい！」

作者「【ぶるらじW】の第４回での『アークシステムワークス公式のレイチェル＝アルカードの『家の天井裏がな～んか騒がしいなと思ってのぞいてみたら、アラクネが住みついているのを発見！こんな時、何ていう？』』のセリフだそうです」

セシリア「私こんな理不尽なこと言いません！！」

直人「解ってるから、そう向きになるな」

真白「それで、セシリアを選んだ理由は？」

作者「私（わたくし）という一人称から」

セシリア「それだけですか！？」

作者「それだけ。さて次は、一夏に連続でやってもらいましょう」

一夏「止めろ!!もう止めるんだ!魔神具の呪いだと!?そんな物のために、命を落とした奴はここには一人もいない!・・・俺には分かる、あんたは娘を救い出したいんだ、この村から!この村を支配する、凶鳥(まがどり)からな!・・・でもな・・・でも、血を流すことなんかで愛する者を救うことなんか出来やしないんだ!!」

一夏「お前一人が罪被って、姉ちゃん助けるつもりだろうが、残された者(もん)はもっと辛くなるのが分かんねーのか!?自分一人死にゃあなんとかなるなんて、お前が考えてるほど!世の中甘くねーんだよ!!そんなこと・・・絶対(ぜってー)させねえ・・・その死に方、俺が絶対許

さねえっ！！それに・・・悲しむのはお前の姉ちゃんだけじゃないんだぞ！？・・・自分ひとりで方つけるだと・・・！？ケリつけるんだと・・・！？ケリなんてつかねーじゃねえか！！・・・生きろよ・・・生きてくれよ・・・！頼むよ・・・！」

作者「どちらも、アニメ【金田一少年の事件簿】の主人公の台詞です。私も昔見ていた記憶があります」

直人「何か俺に言われてるような気がするな……雰囲気的に」

一夏「そんなつもりはないし、お前ならそんなバカなことしないだろ？」

直人「まあな」

作者「さて、最後はヒロアキ１４１様からのリクエストです。まずは一夏から！」

一夏「我が斬艦刀に・・・断てぬ物無し」

作者「【スーパーロボット大戦ＯＧ】より、我らが親分、ゼンガー・ゾンボルト様の名言です」

直人「作者好きだよな、あの人」

作者「はい」

一夏「てかこれ、直人が言った方がもっといいと俺思うんだが……」

作者「そこは私も思わなかったり、とはいえ、せっかく受け取ったんだから、やっておかないと。それに、中々良かったぞ」

一夏「そ、そうか？」

作者「さて、最後は真白だ、準備は良いか？」

真白「……本当にやるの？」

作者「やるの。ではどうぞ！」

真白「スーパーウルトラァ！リュウセイキィーーック！！」

作者「ええ、【スーパーロボット大戦ＯＧ】より、真白のモチーフにもなった、ラトゥーニ・スゥボータ（リュウセイ病発症Ｖｅｒ）です」

真白以外「……」

真白「げほっ、げほっ」

作者「おやまあ皆さん放心状態、そして真白は声が裏返りすぎてむせ返ってる様子」

直人「そりゃそうだろ」

一夏「あんなに叫んでるところ……」

セシリア「初めて見ましたわ」

紅葉「うんうん」

作者「さて、今日はここまでです！　それと先週から、今後登場予定の男子オリキャラの扱いについて、アンケートを行っております。投票枠は、以下の三つです」

1．世界観を守るためにも、直人以外の男オリキャラは出さない方が良い。

2．二人は許容できないけど、一人なら出しても良いと思う。

3．全然問題ないので、二人とも出していい

作者「以上の三つです。ユーザーの皆様も、ユーザー外の皆様も、気兼ねなく、ご投票いただけると幸いです。投票の期限ですが、一応、アニメ第十話分が終わるまで、というのを暫定的に考えてます」

直人「という事は、あと六週もするのか」

作者「無論あくまで暫定であり、これ以上票が入らないかな？　と思ったら、切り上げますので、なるべく早くの投票をお願いします。それで次回からは、いよいよ本編に戻ります」

直人「と言う事は……」

作者「季節外れながら、臨海学校の話に突入します！　しかし、それはまだ先、次回は直人が、ある人物と買い物に出かけます」

直人「ある人物って……紅葉か？」

作者「いえいえ、誰なのかは、次回のお楽しみ。それでは、また次回！！」

第三十一話　買い物にＧｏ！！（前書き）

いよいよアニメのラストスパート部分、原作、第三巻に突入しました！！

季節外れネタになってしまいますが、皆さんに楽しんでいただけるよう頑張りますので、応援、宜しくお願いします。

第三十一話　買い物にＧｏ！！

「ん？　もう朝か……」

日曜の朝、直人は目を覚ました。

時刻は朝の６時、まだ多くの学生が眠りについてるであろう時間帯に起き上がった。

理由はいたって単純、朝の鍛錬の為だ。

この時間帯に置き、７時まで鍛錬に励み、部屋で汗を流して制服に着替えた後、食堂に向かうのだ。

そうでなければ、１時間目の授業に、とてもではないが間に合わないことがあるからだ。

「よし、今日から鍛錬再会といくか……ん？」

学年別トーナメントで負った傷も治り、鍛錬を再開しようと息巻くが、ここで、奇妙な違和感に気付く。

普段彼はベッドを使わず、床に胡坐をかいて座り、二刀を抱えて眠っている。

旅の間についた習性で、「何時寝込みを襲われるか解らない」と言うので、即時対応するためにこのような体勢になったのだが、きっちり布団は体に巻いて眠っている。

だが、その布団が妙にこんもりしていた。

それに、妙に自分の体に重みを感じる。

まるで、中に自分ではない何かが入っているようで……

「んん……」

訂正、誰かが入ってるようだ。

「！！」

ふと声が聞こえ他のを確認した直人がその布団をはぎ取る。

「なっ！？」

そしてはぎ取った後、その中にいたのは……

「ら、ラウラ！！？」

自分に寄りかかるように眠るラウラだった。

「ん～……何だ、もう朝か？」

「何時入って来たのかとか、どうやって入って来たのかとか、聞きたいことはいろいろあるが取り敢えずこれだけは言わせろ、体隠せ！！」

直人の叫びも尤もだった。

と言うのも、今のラウラの格好は、一糸纏わぬ姿、単刀直入に言えば全裸であったのだ。

着ているものは何もなく、唯一身に着けてるものと言えば、左目の眼帯と、彼女のＩＳの待機状態である右腿の黒いレッグバンドだけである。

さっき布団をはぎ取ってしまったため、今彼の目には、ラウラの裸体が昇り始めた太陽の光に照らされ、映っているのだ。

「夫婦とは互いに包み隠さぬものだと聞いたぞ？　ましてお前は私の嫁……」

「そう言えばラウラ、前々から気になってたんだが、その嫁ってのは何だ？」

本来、夫婦で男を指す場合は、「夫」、或いは「婿」であり、「嫁」は女性を指す言葉である。

なのにラウラは、男性である直人の事を「嫁」と呼んでいる。

直人が首を傾げるのも無理からぬことなのだが、聞かれた当のラウラは、逆に「何を言ってるんだ？」的な顔をしながら言った。

「日本では気に入った相手を、「俺の嫁」とか、「自分の嫁」と言うそうだが？」

「お前に間違った知識を吹き込んだ奴は誰なんだ……はぁ」

常識と言うものがまるで通用しないラウラの知識に呆れかえるが、考えてみれば、ラウラの非常識さはいつもの事だし、生い立ちを考えれば尤もだった。

彼女は戦うために生み出され、戦うための技術や知識しか教えられておらず、その人生の大半を軍事関係の施設で過ごしている。

世俗間、一般人の常識など、持ち合わせてなくても、致し方ない事なのだろう。

尤も、どこからそんな知識を仕入れてるかに関しては、本当に解らずじまいだが。

「とにかく、服を着ろ」

「無い。私は寝るときはいつも裸だ」

「何で？」

「寝るときの服が無い。向こうでもいつも裸だったからな」

これを聞いた瞬間、直人は頭を抱え込む。

見てみると、今視界に入る周囲に、ラウラの衣服らしきものは見当たらない。

つまり、ラウラは素っ裸のまま寮内を徘徊し、この部屋に侵入してきて、自分と一緒に寝たことになる。

考えれば考えるほど、頭が痛くなりそうな感覚を覚えるのだった。

「取り敢えず、布団を巻いてろ」

そう言うと、つい先月まで敵意剥き出しだったのが嘘のように、

あっさりとさっき直人が剥いだ布団を体に巻き、ベッドの上に座る。

立ちあがった直人はクローゼットからワイシャツを取り出し、ラウラの方に投げる。

「ほら、これでも着ろ、俺のサイズだが、お前の体格なら体を隠すには充分だろ。それ来たら部屋に戻って制服着て来い」

そう言いながら、自身は胴着らしき服を持ってシャワールームの脱衣所へ向かう。

「お前はどうするんだ？」

「俺はこれから鍛錬だ、やっと怪我が治ったんだ、早く遅れを取り戻さないとな」

「そうか、ならば……」

「ん？　おお！？」

会話しながら胴着姿に着替えを済ませ、脱衣所から出てきた途端、突如襲ってきたラウラ（Tシャツ着用済み）を、抑える。

「一体何のつもりだ？」

「いや、夫婦は朝起きたら目覚めのキスをすると聞いたのでな、戻る前にと……」

「人のファースト奪っといてまだ物足りないのか！！」

そう言った瞬間、直人自身、あのキスの瞬間を思い出し、僅かに赤面する。

「初めてだったのか？」

「そ、そうだよ。悪いか……」

それを聞いた瞬間、ラウラは「ふむ」と考えこむように言った後、さらに言葉を続ける。

「私も初めてだぞ。うむ、嬉しくはあるな」

「お前なあ！！」

その後しばらく、キスしようと襲ってくるラウラと、それを防ぐ直人の攻防が続いた。

「このっ！　いい加減にぃい！？」

しかし、それはふいに終わりを告げる。

ラウラを取り押さえようと腕を伸ばした瞬間、流れるような動きでそれを掴み、組み伏せられてしまったのだ。

「お前はもう少し寝技の訓練をすべきだな」

「ぐっ、一生の不覚……」

取り押さえられたことを不覚だと思いながらも、ラウラのさっきの物言いとこの抑え込む技術を見て、流石あの人の教え子だと、あ

る種の感心をしてしまう自分が、そこに居たりしたのだった。

「寝技を磨きたいと言うのなら、私があいてになってやってもよいぞ……／／／／／／」

「何故そこで赤くなる！　いいから離せ！！」

と、二人でそんな風に口論をしているときだった。

「直人ー、起きてるー？　なんか凄い音したけど、何かあったのー？」

突如、ドアの方から声が聞こえるが、当の直人とラウラは口論中で気づかない。

「あれ？　開いてる？　不用心だよ直人。いくら寮内だからって、鍵を閉めないなんて……」

「あっ」

「ん？」

ドアを開け入ってきたのは紅葉だった。

そして紅葉がドアを開けたその先には、胴着姿で抑え込まれてる直人と、ワイシャツ一枚で直人を抑えるラウラの姿が。

「な！　なな！　な……！」

「お、おい紅葉！　何を想像してるか知らんが、断じて違……」

「無作法な奴だ、夫婦の寝室に」

「夫婦ーーーーー！？！？」

誤解を解こうとした直人だったが、ラウラの余計なひと言が、紅葉の火に油を注ぐ結果となった。

今の紅葉は、背にどす黒い炎のようなものを纏ってるように、直人には見えた。

「待て紅葉！　違う！　これは誤解……」

「ぶち抜けーーーーー！！！！」

「えっ！？　ちょっと待……ぎゃあーーーーー！！！！」

直人の必死の説得もむなしく、再び、どこからともなく取り出したハンマーが、直人の顔面に振り下ろされたのだった。

「いてて……朝っぱらからひでえ目に遭った……」

「それは災難だったな……」

あの朝の一幕から時間は経ち、今は昼ごろ、直人は私服に着替え、レールウェイの中にいる。

紅葉に殴られた鼻のあたりを押さえる直人に、隣の席で座っていた箒が同情の眼差しを向ける。

「それで直人、何故私を誘ったのだ？」

「ん？　俺と一緒は嫌だったか？」

「そうではないが、気になってな」

出発する前、偶然箒と鉢合わせした直人は、「買い物しないか？」と、誘ったのだ。

突然の事で困惑したが、特に断る理由もないので誘いに乗ったが、箒の中では、何故直人が誘ったのかと、疑問に思ったのだ。

「もしかして、一夏と一緒の方が良かったか？」

「な！？　何故そこで一夏が出てくる！！」

「その反応、やっぱり一夏と一緒の方が良かったか」

「ひ、人をからかうな！！」

箒はからかってくる直人に裏拳をさく裂させる。

「ん？」

ここで、箒はふと疑問に思い隣を見てみると、その裏拳が見事に直人の鼻頭に命中していたのだ。

いつもなら当たる直前にきっちり防がれてる筈なのに、命中することに、内心驚きを隠せなかった。

「ほ、箒……殴るのも叩くのも一向に構わんが、鼻は、鼻だけは今は勘弁してくれ……」

「す、すまん」

紅葉にハンマーで殴られた部分が痛むところへ炸裂した箒の裏拳が相当効いているらしく、鼻を押さえてやや蹲る直人。

まあ、数秒すればまた元に戻ったのだが。

「いてて……んで、なんで俺が誘ったのかって話だったな」

「ああ」

「そんな大した理由じゃないさ、買い物に行こうと思ってたら箒を見つけたんで、せっかくだから一緒にどうかなって思っただけだ」

「しかし、お前なら真っ先に一夏を誘いそうだがな」

そう言われた瞬間、直人は内心ドキッとしたが、平静を装って話を続ける。

「ああ、俺も最初はそのつもりだったんだが、何か用事があるからって断られてさ」

「そうか……」

（あ、危ねえ！　箒の事だから、もっと疑って来るかと思ったが、良かった……）

もう少し疑ってくるかと思ったが、あまりにもあっさり納得したため、直人はほっと胸をなでおろす。

「しかし、妙なものだな」

「？　何が？」

「いや、昔は一夏と千冬さん以外には心を開かなかったお前が、こうして私を誘うなど、昔なら考えもしなかっただろうな」

「ああ、昔の俺はとかくぶっきらぼうだったからな」

昔の直人は、その境遇ゆえに他人に心を開くことはなく、常に一夏か千冬の後ろをついていくような感じだった。

他者に対してはかなり排他的と言うか、攻撃的な雰囲気を醸し出し、決して他者を寄せ付けようとはしなかった。

そんな彼が、幼馴染とはいえ、誰かをこうして何かに誘うなど、一体だれが予想できようか？

「本当に変わったんだな」

「でも、考えてみれば、ずっとぶっきらぼうって訳でもなかっただろ？　自分で言うのもなんだが、小3辺りからましになってきたと思うんだが？」

「確かに、あの時お前から話しかけられたときは、私も驚いた」

そんな風に昔話に花を添えていた二人だったが、話をしながらも、直人は別の事を考えていた。

（はあ、これが気をそらしてほしいって頼みじゃなきゃ、もう少しましだったんだがな……）

実は、直人が箒を買い物に誘ったのは、ある人物の頼みによるものだったのだ。

（これでもし当日失敗してみろ、俺はお前を恨むぞ、一夏）

「！！？」

「どうしたの？」

「いや、何か背筋に悪寒が……」

一方、直人と箒とは別のレールウェイに、一夏は乗っていた。

隣の席に座ってるシャルロットが、突然身震いをした一夏を心配して聞いてみるが、突然何故こうなったのかは、一夏自身にもわからない。

まさか、別のところで直人が「失敗ししたら恨む」なんて言ってるとは、夢にも思わないだろう。

「あ、あのさあ、どうして僕の事だけ、誘ってくれたの？」

それはさておき、一夏と二人きりという事で、嬉し恥ずかしい気分になりながら、なぜ自分だけ誘ってくれたのかと聞く。

ひょっとしたらと、いま彼女の脳内では、ロマンチックな展開が再生されている。

しかし、そう言った乙女の純情をことごとくぶち壊すのが、この男である。

「もうすぐ臨海学校だろ？　でも、お前女子用の水着持ってないって言ってたじゃないか。俺も水着を買おうと思ってたから、ついでにと思って」

「ついでに……」

その瞬間、彼女の中で何かが壊れ、崩れていく音が聞こえたのだった。

「ま、どうせそんな事だろうと思ったけどね……」

「ん？　なんか言ったか、シャルル？」

「シャルロット！　二人っきりの時はそう呼んでって言ったでしょ！！」

「あ、ああそうだったな、悪い、シャルロット」

つい今までの癖で、男装してた時の名前を言ってしまう。

今まで見についた習性と言うもので、本人も悪気はなかったのだが、シャルロットとしては、自身の淡い期待を見事にぶち壊されたことと相まって、あまり面白くない。

「乙女の純情を弄ぶ男は、馬に蹴られて死ぬといいよ！」

「……何だよいきなり？　ま、確かにそう言うやつは、死んだ方が良いとは思うけどな！」

「はぁ……」

「君の事だよ」と、誰かに代弁してほしかったシャルロットだった。

しばらくしてホームについたのだが、依然、シャルロットの機嫌は斜めだった。

「待てよ、何怒ってんだ？」

「はい」

するとシャルロットは立ち止まり、おもむろに手を差し出してきた。

「て、手を繋いでくれたら、許してあげる」

「……ああ、そんな事か。ほい」

「えっ？」

あっさり手を繋いでくれたことに驚くが、次の言葉に、またしても淡い期待を壊される。

「知らない街ではぐれたりしたら大変だもんな。しっかり捕まってるんだぞ」

「……唐変木」

そんな呆れ気味の呟きも、一夏には聞こえていなかったのであった。

しかし、そんな二人の様子を、見つめる影が三つあった。

「……ねえ」

一つは、大きなツインテールが特徴の小柄な少女。

「何ですの？」

一つは、ブロンドの髪をロールヘアーにしてる優雅な感じの少女。

「何？」

そしてもう一つは、オレンジ味のある赤いショートヘアーが特徴の元気そうな少女。

つまるところ、鈴、セシリア、そして紅葉である。

「あれって、手ぇ握ってない？」

「握ってますわね」

「握ってるね」

鈴の問いかけに、二人は見たままを伝える。

今、目の色が単色になってる鈴の背後には、黒いオーラのようなものが出ているが、先ほどの二人の答えを聞いて、それはさらに大きくなったように見える。

「そっか……見間違いでも白昼夢でもなく、やっぱりそっか……よし、殺そう！！」

その瞬間、怒りに満ちた鈴がＩＳを部分展開する、

「わー！　鈴ちゃん！　それは不味いって！！」

「そうですわ鈴さん！　落ち着いてください！！」

「放して二人とも！　あいつを！　あいつを一片殺さないと気が済まないー！！」

今にも二人に襲い掛かりそうな鈴を、紅葉とセシリアが羽絞いにして必死に抑える。

しかし、代表候補生と企業のテストパイロットの二人掛かりでも、鈴は二人の拘束を今にも破ってしまいそうな勢いだった。

実に恐ろしきは、乙女の純情か……

「ほお、楽しそうだな」

「何やってるの？」

すると、突如三人の後ろから声が聞こえる。

「ラウラさん！」

「真白ちゃんも」

「っ！！」

三人の後ろには、制服姿のラウラと、純白のワンピースを着た真白がそこにいた。

ラウラの姿を見たセシリアと鈴は、そのまま警戒心むき出しで見つめる。

紅葉は真白の姿を見かけたので、そう言ったものは出なかった。

「そう警戒するな、そこの二人にも言ったが、今のところお前たちに危害を加えるつもりはない」

「そ、そんなこと！」

「だから信じられないと！」

「大丈夫、嘘はつかないから、ラウラ」

「うーん……真白ちゃんが言うなら大丈夫かな？」

紅葉の言葉に、鈴とセシリアも良く考えて、取り敢えず完全とはいかないまでも、警戒心を薄める。

「それで、二人はどうしてここに？」

「うむ、私の嫁を探していたのだが、知らないか？」

「朝、食堂で見かけたっきり、外出したのかなって思って」

どうやら二人は直人を探しに来たようで、紅葉もセシリアも見て

ないと首を振る。

「……ねえ、あれ直人じゃない？」

「「「「！！？」」」」

が、鈴が直人らしき人物を見つけたようで、指を指す方向に全員目を向ける。

そこに居たのは、確かに直人と箒だった。

「な！　何故箒さんまで一緒なのですか！！」

「んー、何でしょ？」

驚きを隠せないセシリアに比例し、紅葉はいたって冷静だった。

「まあ、幼馴染だから、一緒になっても別段不思議じゃないかも。それに箒さんなら大丈夫かな？　一夏君一筋だし」

「（コクコク）」

紅葉の言葉に真白が頷き、それを聞いたセシリアも、目くじらを立てるのをやめる。

「ふむ……」

すると、突然ラウラが直人の方に向かおうとする。

「って、ちょっと待ちなさいよ！」

「如何するつもりですの！？」

「決まってるだろ、あの二人に混ざる。それだけだ」

鈴とセシリアの問いかけに、平然と答える。

「やめなさいって、せっかくの幼馴染水入らずみたいなんだし、ここで横槍入れるのは野暮ってもんだよ？」

「うん」

「なら如何すればいい？」

「こういう時は、ばれないように影から観察するものだよ！」

ふん！　と鼻息をあげる紅葉の顔は、まさしく弄る気満々だった。

「と、言う訳で、私たちは直人と箒さんの方に回るから、セシリアちゃん、鈴ちゃんのストッパー、よろしくね！」

「えっ！　私が！！」

「ほらほら、二人とも行くよー！」

そう言って二人を連れて、紅葉は直人と箒の追跡を始めてしまった。

セシリアも行こうとしたのだが、直後、鈴が一夏とシャルロットを見失うというので動きだし、結局放置しておくと危険と判断して、

鈴の方に回らざるを得なくなってしまったのであった。

第三十一話　買い物にＧｏ！！（後書き）

桜爛の間

作者「と、言う訳で、ついにアニメの第九話分に突入しました！！」

直人「俺は朝から災難だったんだが……」

作者「まあ、ここはお約束ってことで」

直人「何のだ！！」

作者「まあまあ、そして前回言った意外な人物とは、箒の事だったわけですが」

直人「別におかしくはないと思うんだが？　幼馴染なんだし」

作者「まあ、客観的に見ればそうかもしれませんが、基本的に真白か紅葉、一夏と絡むことが多い君ですから」

直人「まあ、それは否定しないが」

作者「さて、それでは後書きコーナー、まずは「直人の目安箱」から！　最初は、グラムサイド2様からの質問」

全員に

・もしペットを飼うならどんなペットを飼いたいですか？

作者「ええ、一部脱字があったので、こちらで保管させていただきました。全員に聞いた答えがこちらです」

直人：狼
真白：豹
紅葉：オウム
一夏・箒：犬
セシリア：プードル
鈴・シャルロット：猫
ラウラ：伝書鳩

作者「と、言う結果でした。では次は、常連、三月語様からより」

Q1、女子勢に
『自分が想う相手が、この性格だったら嫌だ、というのは？』

真白「人を道具扱いする人……」

紅葉「自分に責任持てない人は嫌いかな？　やっぱ自分の行動は勿論だけど、一言一句にも責任って持たないと」

箒「紅葉の答えと同じだな。それと、軟弱な奴」

セシリア「卑屈な方は嫌ですわね。私の父を思い出すようで……」

鈴「身勝手な奴」

シャル「真白と同じかな？　理由は何となくわかると思うけど……」

ラウラ「嫁以外の男に興味はない。まあ、織斑一夏は別だが」

作者「との結果が出ました」

直人「大体は予想通りだな、後はラウラの認識を如何修正しようか……」

作者「頑張りたまえ、では次」

Q2．直人に
『次のうち、戦いたくないのは？
1．ＴＯＤ2の『バルバトス・ゲーティア』
2．ＴＯＩの『ハスタ・エクステルミ』
3．ＴＯＰの『ダオス』』

直人「……ダオスかな？」

作者「あら以外、てっきりバルバトス選ぶと思ってた」

直人「だってなあ、仮にもラストボスだからな、かなり苦戦すると思うんだ」

作者「ちなみに作者はバルバトスが嫌いです。とくデスティニー２（ＰＳ２）で、神の眼の前で最後に登場する奴が一番。体力は二回目の時より減ってるけど、半分になると術に対してカウンターを仕掛けてくるもんだから、半分になったら全員で力押ししてようやく先に進めるようになりました」

直人「何て強引な……」

作者「さて、次は「抱腹絶倒！　アフレコ委員会！！」です、今回の参加者は、こちらの方々です！」

真白「また……」

一夏「俺もだよ」

箒「私は久しぶりだが」

ラウラ「ここでは初登場か、一回はやったが」

直人「一体何を言わされるんだ？」

作者「以上、こちら五人です。まずはグラムサイド２様からのリクエスト、まずは真白にやってもらいましょう」

真白「……長い」

作者「文句言わないの、ではどうぞ！」

真白「貴兄が乾きしときには我が血を与え、貴兄が飢えしときには我が肉を与え、貴兄の罪は我が贖い、貴兄の咎は我が償い、貴兄の業は我が背負い、貴兄の疫は我が請け負い、我が誉れの全てを貴兄に献上し、我が栄えの全てを貴兄に奉納し、防壁として貴兄と共に歩き、貴兄の喜びを共に喜び、貴兄の悲しみを共に悲しみ、斥候として貴兄と共に生き、貴兄の疲弊した折には全身でもってこれを支え、この手は貴兄の手となり得物を取り、この脚は貴兄の脚となり地を駆け、この目は　貴兄の目となり敵を捉え、この全力をもって貴兄の情欲を満たし、この全霊をもって貴兄に奉仕し、貴兄のために名を捨て、貴兄のために誇りを捨て、貴兄のために理念を捨て、貴兄を愛し、貴兄を敬い、貴兄以外の何も感じず、貴兄以外の何にも捕らわれず、貴兄以外の何も望まず、貴兄以外の何も欲さず、貴兄の許しなくしては眠ることもなく貴兄の許しなくしては呼吸することもない、ただ一言、貴兄からの言葉のみ理由を求める、そんな惨めで情けない、貴兄にとってまるで取るに足りない一介の下賤な奴隷になることを――ここに誓います」

作者「【戯言シリーズ】より、闇口　崩子の台詞です」

直人「何だ、なぜか公の場で言うには非常に危険すぎる台詞のように聞こえるんだが」

作者「そうですねえ、相手はこの場合だと直……」

直人「射千玉（ぬばたま）の闇に光一つ！！」

作者「ぎゃーーーーー！！」

直人「下らんこと言ってないでさっさと次をやれ！」

作者「は、はい……次は直人にやってもらいます、どうぞ……ガクッ」

直人「殺して解して並べて揃えて晒してやんよ。」

作者「【戯言シリーズ】より、零崎　人識の台詞です」

直人「まるで俺が殺人狂みたいだな」

作者「うーんじゃあ、「破壊して蹂躙して、殲滅してやる！！」っていってみるか？」

直人「同じじゃねえか意味合い的に！！」

作者「ま、直人のツッコミはさておき、次は一夏と直人にやってもらいます。ではどうぞ！」

直人「お前は大嘘つきで、お前は真実以外の全てを語る。
なぜならお前はどう見ても人間が好きだというタイプではない。
人間嫌いなんてもんじゃない。
お前は人間を憎んでいる。」

一夏「そうでもないさ。好きな人間ならいっぱいいる。
人間が映し上げた映画、人間が作り上げた音楽、人間が描き上げた絵画、人間が極め上げた料理、人間が組み上げた車や飛行機、人間が学び上げた学問、人間が紡ぎ上げた物語、どれをとってもすばらしいものばかりだ。」

直人「お前は映画が好きで音楽が好きで絵画が好きで料理が好きで車や飛行機が好きで学問が好きで物語が好きなだけだ。
お前が映画と音楽と絵画と料理と車と飛行機と学問と物語が好きだというのは、
逆に人間をなんともみなしていないということだ。
人間を芸術と文化を産み出すだけのセコい装置としかみなしていないということだ。
そんなものの見方は壊れている。」

一夏「壊れている？」

直人「欠陥製品だ。」

一夏「それは言い過ぎだと思う。まるで狂気だ。」

直人「じゃあお前は人間が好きか？」

一夏「・・・・・・・・・。」

作者「【戯言シリーズ】より、いちゃんと零崎　人識の台詞です」

直人「何て言うか、言ってることにはある意味共感できるんだが、相手が一夏となると、台詞に違和感が……」

一夏「俺も、言ってて違和感を感じた」

作者「私も思ったり思わなかったり、では次からは、三月語様からのリクエストです。まずは一夏から、どうぞ！」

一夏「お前がここで、お前の答えを言わなくてどうするんだよ！お

前は今、俺達の中で唯一権限持ってる人間、俺達の代表だ！だからお前の答えを言え！」

作者「【境界線上のホライゾン】より、葵・トーリの台詞です」

直人「そうだよ、こういう真っ直ぐな台詞こそ一夏に似合う！」

箒「そこまで力説するほどか？　まあ、同じ意見だが……」

作者「さて、次は箒に言ってもらいます。それではどうぞ！」

箒「私の意志はもうそちらに向いたから」

作者「【境界線上のホライゾン】より、本多・正純の台詞です」

直人「つまり、箒の意思は一夏に向いたと……」

箒「なっ！　なぜそうなる!!」

直人「違うのか？」

箒「……」

作者「さて、次で最後です。最後の台詞はラウラに言ってもらいましょう」

ラウラ「うむ、任せておけ」

作者「では、どうぞ」

ラウラ「黙って聞いていれば何・・・お客様は神だと・・・？・・・・神は死んだっ！！」

作者「【Ｃａｒｎｉｖａｌ　Ｐｈａｎｔａｓｍ】の『働くセイバー』から、セイバーオルタの台詞です」

直人「確か、騎士王のセイバーが、闇に堕ちた姿だったな」

作者「はい」

直人「恐ろしくマッチしていて逆に怖いぐらいだ」

一夏・真白・箒「「「うん、うん」」」

作者「さて、今回はここまで、次回も応募を待っています。それと、

今現在取ってるアンケートも、どうか、よろしくお願いします」

直人「まあ、年末年始で大変だろうから、無理にとは言いません。一応暫定締め切りまでまだ時間はあるので、ゆっくりお決めになって入れてください」

作者「それでは、次回もお楽しみにー！！」

クリスマス特別企画　ＩＳ小説　特別インタビュー！！（前書き）

と、言う訳で、１２月２４日に合わせて投稿しました。

「クリスマス関係ねえじゃん」とか突っ込まないでいただけると、ありがたいです。

自分でもわかってますので。

それから、本日私は実家に帰省します。

とりあえず、新年、一月一日に更新予定の、リリなのお正月特別小説を更新したら、またこっちに戻ってくるまで、更新は停止しようかと思ってます。

私だって、お正月ぐらいはのんびりしたいですよ！！

とまあ、愚痴も程々に、楽しんでもらえたら幸いです。

クリスマス特別企画　ＩＳ小説　特別インタビュー！！

１２月２４日、クリスマス

作者「と言うことで！　【ＩＳ　桜の花纏う真剣】をご愛読してる皆様に送る。作者、エドワード・ニューゲートのスペシャルインタビュー！！」

直人「クリスマス関係ないじゃん！！」

作者「ま、細かいことは言い子無しってことで、さ、ゲストの一人目はさっさとその席に座りなさい」

直人「一人目ってことは、他にも来るのか？」

作者「はい、でもまずは紹介から。最初の一人目は言わずもがな！　当小説の主人公にして、真の強さとフラグ建築道を突き進む男、桜庭直人！！」

直人「ちょっと待て！　何だそのフラグ建築道って！？　そんなもの突き進んでる覚えはない！！」

作者「いやいやいや、すでに三人の女性にフラグを立ててる君が何をほざくかね？」

直人「酷く心外だな、一夏じゃあるまいし……」

作者「はあ、知らないって幸せだねえ。ハイじゃ次！　当小説の常連、三月語様の小説【ＩＳーインフィニット・ストラトスー　熾天

使を駆る少年】の主人公、ゲームと子猫をこよなく愛する男、二崎奏！！」

奏「……なあ、零距離から粒子砲ぶっ放していいか？」

直人「気持ちは解るがやめてくれ、俺だって今すぐみじん切りにしたいのを抑えてるんだ」

作者「おお怖い怖い、では最後は楚良様の作品、【ＩＳ　一角と少年　にっ！】の主人公、犬耳フードをかぶった泣き虫男の娘、アルフォンス・ラプラス！！」

アル「僕泣き虫じゃないですよ！？」

作者「いやいやいや、お宅の所のキャラ紹介にしっかり書いてあるでしょ、弱虫で意気地なしって」

アル「うぅ～～～……」

奏（ってか、男の娘ってところは良いのか？）

直人「おい、それ以上言ってやるな」

作者「はいはい。さて、以上三名に、簡単なインタビューをしますので、自分たちの思う答えを答えてください」

直人（なんか普通だな）

奏（普通すぎる）

アル（普通すぎて逆に怖いです……）

作者「それでは第一問！」

第一問：一夏

三人「「「一夏？」」」

作者「三人とも、一夏の事をどう思ってるんだ？　まずは直人から」

直人「俺から？　そうだな……まず俺の義兄で、暗闇の中にいた俺に、光を与えてくれた太陽みたいな存在ってとこか」

作者「ふむ、流石、直人らしい答えですね」

直人「まあな」

作者「しかし、小説的に面白味に欠けるため、ペナルティ！！」

直人「はっ！？　何だそれ！！　ヘブッ！？」

奏「直人！？」

アル「金ダライ……痛そう……」

直人「な、何で……？」

作者「言い忘れていたが、つまらない答えだったりすると、容赦なくペナルティを受けてもらうからな」

直人「それを先に言え！！」

作者「そんじゃ、次は奏」

奏「お、おお……」

作者「言っておきと、今考えてるのとかは駄目だぞ。自分の思ったことを素直に答えなさい」

直人（お、鬼だ！　鬼がいる……）

奏「仕方ねえ……一夏は・・・まあ友人だ。ケンカとかもすっけど、大切なダチ」

作者「ふむ、悪くないですな」

直人「俺の時と反応違くないか？」

作者「だまらっしゃい。文句を言うならもっとペナルティを課すぞ！」

直人「理不尽だ！！」

作者「俺がルールだ！！」

直人「どこの英雄王だ！！」

作者「さて、次はアルだぞ」

アル「は、はい……（どうしよう……痛いの嫌だし、やっぱり嘘でも面白い事を……）」

作者「あっ、そうそう、本番前に君たちの腕に取り付けたそれ、嘘発見器だから、嘘ついたら容赦なくペナルティだぞ」

アル「えっ！？　そんなぁ～」

作者「さ、さっさと言っちゃいなさい」

直人「諦めろ、アル」

アル「はい……えっと……とっても優しくて、お姉ちゃんみたい。正直に言うとたまに『お姉ちゃん』と呼んじゃいそうです」

奏「はっ？　あいつは男だぞ？」

作者「ああ、さっきの奏みたいに、『何言ってるんだ？』的な疑問を浮かべた方に補足しておきますと、アル君の登場する小説では、世界でＩＳを動かせるのはアル君だけです。なので、原作では男である一夏も、女の子になってるんです。理解していただけましたか？」

直人「で、判定は？」

作者「う～ん……及第点」

直人「やっぱ俺の時と扱いが違う……」

作者「それじゃ、二問目いきましょうか！　あっ、九問目まではこんな感じの質問が続きます。では第二問！」

第二問：箒

直人「今度は箒か」

奏「まあ、解りきってたと言えば解りきっていたが……」

アル「ねえ……」

作者「それじゃ、まずは直人から」

直人「また俺か。箒はそうだな……幼馴染なのは当然として、紅葉の言葉を借りると、「似た者同士」かな？」

作者「ふむふむ、あまりにも予想できる答えですが……まあ、良しとしましょう」

直人「何だこの理不尽さは……」

作者「では次、奏！」

奏「箒は幼馴染みだな。ま、友人には変わりないけど」

作者「普通すぎますね。でもま、良しとしましょうか。では次、アル君！」

アル「あっ、はい。箒ちゃんは……つんつんしてそうだけど、根は物凄く優しいと思う・・・かな？」

作者「……あまりにもその通り過ぎるので、ペナルティ！！」

アル「えぇえーーーー！！！！」

作者「と言う訳で、こちらのモニターをご覧ください！」

モニター↓ゴスロリ衣装を着たアルの写真

アル「うわぁあーーーー!?!?　な、ななな、何ですかこれ!!?」

作者「いやあ、こうしてると本当にただの女の子ですねえ」

アル「そんなことは良いですから!!　早く消してください!!」

作者「駄目だよ、これはペナルティなんだから、それにスタジオの皆さんもほら。

スタジオ『キャーーーーー!!!!!!!!!!』

作者「ほら、大喜び」

アル「うわあーーーーー！！　見ないで！　お願いだから見ないでーーーーー！！！！！」

作者「さて、それでは、第三問目！」

第三問：セシリア

作者「はい、では次はセシリアの事をどう思ってるか、直人！」

直人「本人に言ったらあれだが、不思議料理人だな。俺と一緒のときは大丈夫なのに、何で一人だとあの料理ができるんだろうか？一度教えてほしいものだ」

作者「確かに……では次、奏！」

奏「セシリアは最初はあんなことがあったから嫌なやつって思ってたけど・・・今は同じ釜の飯を食う仲、みたいな感じか？」

作者「悪くはないんだが、もうちょっとこう何かがほしい、と言う

訳で、ペナルティ！！」

ポチッ！

デデ～ン！

二崎、アウト！

奏「このアナウンス。まさか……ガフッ！！？」

直人「うわ、おもくそいったぞ！」

アル「痛そう……」

作者「じゃあ次、アル」

アル「は、はい！！　えっと……正直言うと苦手の部類かな。僕、上から目線って嫌いなんだ…」

作者「成程ね、では次！」

第四問：鈴

作者「次は鈴について、直人からどうぞ！」

直人「鈴か……あんなことがあったから気まずかったけど……今はまあ、元気な幼馴染ってとこか？　ただ、一夏の事で俺に愚痴りくるのはやめてほしいなあ」

作者「大変ですねえ。では次奏！」

奏「鈴は一夏と結婚できたらどちらも料理できるから・・・安泰な感じがしそうな感じ。」

作者「全く持って同感です。これも悪くないのでセーフ！　次はアル」

アル「中華料理が大好き、だから大好き！（友達的な意味で）」

作者「欲望全開ですねえ。では次の問題！」

第五問：シャルロット

作者「作者も大好きなシャルロットについて、では直人から！」

直人「シャルロットはそうだな、一言でいうなら器用貧乏ってとこか？　フォローも上手いし、いろんな人にペースを合わせられる。場を収めるのも上手いしな」

作者「……何かむかつくのでペナルティ！！」

直人「何だそれ！　へブッ！？」

奏「パイ投げ！！？」

アル「勿体なーい」

直人「……おい、誰か顔拭くもの……」

作者「雑巾でも使ってなさい」

直人「ひでえ！！？」

しばらくお待ちください

直人「ふぅ、着替えも済んだ」

作者「さ、さっさと続けましょう。次は奏！」

奏「シャルは・・・なんというか・・・気遣いの利く優しい男装の麗人、という感じ・・・かな？将来は良いお嫁さんになれると思うけど」

作者「激しく同意見です。では次アル！」

アル「シャルは……行動が読めないなぁ。そういうのは嫌いじゃないけど、あんまり無茶しないでね？」

作者「以上、では、どんどんいきましょう！！」

第六問：ラウラ

作者「次はドイツの冷氷、ラウラについて、まずは直人から」

直人「初めはあんなだったし、正直言って不愉快極まりなかったが、今はそうだな……あの人の教え子って意味では、弟弟子みたいな奴かな？」

作者「成程……あまりにもらし過ぎるのでペナルティ！！」

直人「またか！！？　……ん？　何だ？　なんか紅い光に包まれたでかい鉄球がはっ！！？」

奏「これって、〇〇ートフ〇ー〇ンか？」

アル「良く解らないけど……」

作者「はい次、奏」

奏「ラウラは・・・ストーカー。以上。・・・なわけないけど。なんか俺と同じ雰囲気がする・・・気がする」

作者「私に言わせれば、ラウラが奏に近くなってる気がするんですけどね。話を見る限り……」

奏「そうか？」

作者「はい、では次、アル！」

アル「ラウラは……シャル以上に行動が読めない。クリラッサさんはなにを教えたんだろう？戦闘関連では一番信頼できると思う」

作者「まあ、軍人ですからね。クラリッサさんの知識、是非一度教えていただきたいものです。さあ、サクサク行きましょう！！」

第七問：千冬

直人「俺達に死ねと！？」

奏「下手なこと言ったら出席簿が飛んでくるわ！！」

アル「（コクコク）！！」

作者「それでも言いなさい！　まずは直人！」

直人「尊敬する師匠。それ以外は思い浮かばないな」

作者「よし、ペナルティ決定！」

直人「またかーーーーー！！　ガハッ！！？」

奏「今度は鉄球が落ちてきたぞ」

アル「大丈夫ですか！？　うわあ、おっきいたんこぶ」

作者「はい、次は奏ですよ」

奏「千冬さんは俺にとって姉さんみたいな存在だし、強いから頼れる人だな」

作者「こっちもそのまんまだな。ってか、華奈多さんというものがありながら、千冬さんも求めるか、よし、ペナルティ！」

奏「誤解を招く言い方するなあぁあーーーーー！？！？！？！？」

直人「か、奏！！？」

アル「か、奏さんがお空の彼方に！！？」

作者「大丈夫、しばらくすれば戻ってくるだろうから。じゃ次、アル君」

アル「千冬さんは、厳しいけど良い先生。後、出席簿はなにでできているのかな？」

作者「それは、永遠の謎ってことで」

直人「おっ、奏。お帰り」

奏「成層圏の彼方まで飛びかけた……セラフィム展開してどうにか戻ってきたけど……」

作者「ほお、あのゴムそんなに強度があったと。では次の問題！」

第八問：山田先生

作者「まずは直人から」

直人「山田先生か……普段はあんなだけど、まあ、親しまれる教師って感じかな？　俺も、色々相談に乗ってもらったこともあるし」

作者「そして山田先生のあの巨乳をわしづかみにしたと。よし、ペナルティ」

直人「しとらんわーーーーー！！　ごはっ！！？」

奏「ま、前からハンマーが襲ってきたぞ！」

アル「直人さんがスタジオの後ろの方に……」

作者「全く、セットを壊すとは何て奴だ」

奏「いや、これ壊したのお前……」

作者「さあ次！　奏！！」

奏「山田先生は・・・なんて言えばいいんだろ・・・凄いっていうかなんというか・・・ほら、元代表候補生っていうからすごい人なのは分かるんだけど、普段が・・・」

作者「本当、落差が激しい人ですよね。ま、そこが魅力の一つでもあるわけですが、では次、アル！」

アル「山田先生、あたふたしすぎなのでもう少し落ち着いた方が・・・」

作者「思ってることには違いないが、何か質問の答えと言うより、注意みたいだな。よし、ペナルティ！」

アル「ええーーーー！！！！」

作者「と、言う訳で、ぽちっとな！」

ボフン！！

直人「な、何だ！！？」

奏「げほっ！　げほっ！」

アル「な、何これ！！？」

直人「おい作者！　何をした！！」

作者「直ぐに解りますよ」

奏「……おっ、晴れてきた」

直人「何だったんだ今の……ってアル！　その恰好！！」

アル「ふぇ？」

今のアルの格好→セーラー服、猫耳カチューシャ付

Ｅｘｔｒａｓ『キャーーーーー！！！！！』

アル「う、うわあ！！　み、見ないで！　見ないでーーーーー！！！！」

直人「落ち着けアル！！　おい作者！　早く元の衣装に戻せ！！」

作者「駄目ですよー、これはペナルティなんですから。それじゃ、次の質問！」

第九問：束

作者「ご存知天才、束さんに対してです。では、まずは直人から」

直人「……俺の黒歴史の大部分を占める存在」

奏「い、一体何されたんだ？」

直人「……聞かないでくれ」

作者「では次は奏」

奏「第二の天災。以上」

作者「何と簡潔な、でもま、オッケーとしましょう。では次、アル」

アル「はい……大天災なのは認めるから、張り切りすぎて世界を置いていかないで」

作者「またしても当人に対して言いたいこと的な。でもま、いう事は尤もなので、オッケーとしましょう。では、次の質問はこれ」

第十問：自分

三人「「「自分？」」」

作者「自分にキャッチフレーズをつけるとしたら？　直人」

直人「うーん……『護るための銀刀』ってところか？」

作者「奏」

奏「キャッチコピー？・・・『運命見定めし熾天使の操者』？」

作者「アル」

アル「『最強天才大食漢！』１３歳だけど、頑張ってます」

作者「ふむ、どれもそれぞれをうまく言い表しているので、悪くないな。では次の質問！」

第十一問：言葉

三人「「「言葉？」」」

作者「自分の好きな言葉は何だ？　まずは直人」

直人「『一意専心』！！」

奏「好きな言葉・・・？そりゃ決まってるだろ、『宿命』だ」

アル「『急がば回れ』かな。ゆっくり、着実に頑張るって意味だよね？僕、そういうの嫌いじゃないから」

作者「ふむふむ、これも良いのばっかり出ましたね。中々良いですよ。では次！」

第十二問：墓

三人「「「墓？」」」

作者「墓場まで持って行きたい、自分の黒歴史を述べてください」

直人「なっ！」

作者「はい、まずは直人から」

直人「……一夏が篠ノ之神社に稽古に行くとき、付き添いで行ったら、突然俺の姿を見た束さんに拉致られて……駄目だ、これ以上は言えねえ！！」

作者「直人が何されたのかについては、のちに明かしますが、それまでは皆さんのご想像にお任せします。では次奏！」

奏「・「・・・なんて言えばいいんだろうか、ルティアと事故でキスしたりなんかしたりしたことだな・・・。あと酔ったルティア・

沙霧に襲われた時と・・・俺自身のトラウマだな・・・」

作者「奏自身のトラウマはとっても重いものです。それは解ります。しかし、あんな美少女とキスしておいてそれを黒歴史とはなんとけしからん！　ペナルティ！！」

ポチッ！

デデ～ン

二崎、アウト

奏「ふざけんなーーーーー！！　グハッ！！？」

直人「理不尽な……」

作者「次、アル！」

アル「小さい時に間違って女の子の服を着たことと、そしてそのまま外に出てしまったことかな・・・うぅ・・・・・・思い出しても恥ずかしい／／／／／／」

直人「ご愁傷様……」

作者「では、次の質問！」

第十三問：「動物」

作者「自分を犬、猫、鳥のどれに例えるなら、どの動物？　直人」

直人「俺は犬だな。まあ、どっちかって言うと狼だが」

作者「奏」

奏「猫。俺猫好きだから」

作者「アル」

アル「もちろん犬！あ、でも鳥もいいかなぁ。う～ん、猫も捨てがたいし・・・決めた！鳥がいい！」

作者「随分優柔不断だなあ。よし、ペナルティ！」

アル「もうやめてーーーーー！！」

作者「だが断る。と言う訳で、君の黒歴史を公開だ！」

モニター→小さいころのアル（女の子の格好）

Ｅｘｔｒａｓ『キャーーーーー！！！！』

アル「やめてーーーーー！！！！」

作者「はっはっはっ、では次！」

第十四問：服

三人「「「服？」」」

作者「巫女服、メイド服、きわどい水着のどれの着たいですか？」

直人「もう少しまともなチョイスをしてくれ」

作者「問答無用、では直人から」

直人「巫女服」

作者「奏」

奏「巫女服以外に答えはない。それ以外は恥ずかしくて着れるかっての」

作者「……アル」

アル「巫女服って、あれだよね？箒姉ちゃんが夏祭りで着てたやつ。メイド服はちょっとアレだから、巫女服がいい・・・かな・・・」

作者「……」

ポチッ

デデ～ン

全員、アウト

アル「ええーーーーー！！　はぐっ！？」

奏・直人「「ふざけんなーーーーー！！！！！　ぐおっ！！！？」」

作者「ええ、次で最後の質問です」

第十五問：作者

三人「作者？」

作者「皆さん、自分の作者に一言お願いします。まずは直人」

直人「いい加減バイト探せ。何時まで浪人生でいるつもりだ」

作者「ペナルティ決定」

直人「だからふざけんなぁあーーーーー！！！！」

奏「直人が穴の底に……」

作者「次、奏」

奏「真面目に勉強とかしろ。それに尽きる」

作者「何か自分にも言われてる気がするな……ペナルティ。再び成層圏の彼方まで飛んでいきなさい！！」

奏「うぉおあーーーーー！！！！！」

作者「最後、アル！」

アル「最近寒くなってきたから、体調だけには気を付けてね。手洗いうがいは必須だよ？他の作者のみなさんも、お大事に」

作者「はい、ありがとうございます。じゃあ参加者が二名脱落したので、本日の企画はこれにて終了。それでは皆さん。よいお年を！！」

クリスマス特別企画　ＩＳ小説　特別インタビュー！！（後書き）

皆さん、いかがだったでしょうか？

それと楚良様、三月語様、企画を面白くするためとはいえ、お宅のキャラたちをこのような目に遭わせたこと、深く、お詫び申し上げます。

次回は今年最後の更新、ショッピング話の後篇です。

これが終わったら、次回はいよいよ臨海学校！！

楽しみにしていてください。

それと、今行ってるオリキャラ（男）についてのアンケートにも、出来ればお答えください。

1．世界観を守るためにも、直人以外の男オリキャラは出さない方が良い。

2．二人は許容できないけど、一人なら出しても良いと思う。

3．全然問題ないので、二人とも出していい

この中から、自分の思うものを一票投じてください。

お待ちしております。

第三十二話　ショッピングパニック

紅葉たちと別れた鈴とセシリアは、相変わらず一夏とシャルロットの様子を尾行していた。

しかしその二人、片や抑えられてるとは言え、殺気を滲み出させ、片や厄介事を押し付けられたと、溜息をついていた。

（はぁ、とんだ貧乏くじですわ・・・・・・）

今の鈴を放っておいたら、やばい事になりそうだと言うのは解るが、厄介事を押し付け、自分たちで思い人のところへ行った紅葉達を、恨みがましく思うのだった。

「・・・・・なあシャルロット」

「ん？　なあに？」

すると、件の尾行対象達の方で動きがあったらしく、鈴とセシリアはすぐさま近くに身を隠し、聞き耳を立てる。

「もう皆お前が女子だって解ってるし、シャルロットって名前普通だよな？　何か別の名前を考えないとな。俺とシャルロットだけの」

「えっ！？　良いの！！？」

いきなりの事でシャルロットは驚くが、二人の見えないところでは、鈴の負のオーラが増加していた。

「り、鈴さん！　落ち着いてください！！」

必死にセシリアが宥めるが、はっきりって焼け石に水の状態だった。

そんな事は露知らず、「うーん」と少し考えた後、一夏は思いついた名前を口にする。

「シャルなんて如何だ？　親しみ易いし」

「シャル・・・・・うん！　良いよ！　凄く良い！！」

「そ、そうか・・・・・・」

「シャル、シャルかあ・・・・・・」

（こんなに喜ぶなんて、偉く気に入ったんだな）

凄く嬉しそうな顔をするシャルロット、それを見て一夏は、気に言ってもらえた事にうれしい気持ちになる。

（これって、ちょっと特別な関係ってことだよね／／／／／／）

一方のシャルロットと言えば、愛称をつけてもらえた事について、少し勘違いをしていた。

一夏にしてみれば、そういった疚しい気持ちとかはなく、単に親しめるようにということなのだが、生憎、今のシャルロットにそれを言ったら、確実に奈落のそこに突き落とされたような感覚に見舞われることだろう。

「一夏・・・・・そう、あんたそんなに殺されたいのね！！」

「だから鈴さん！　こんな所でＩＳを展開するのは不味いですってー！！」

そんな二人の影では、今にも一夏に殴りかかろうとする鈴と、それを必死に抑えるセシリアがいるのだった。

（一夏さーん！　お願いですから、これ以上鈴さんの神経を逆撫でしないでくださーい！！）

そんなセシリアの心の声も、（当然ながら）一夏に届く事はなかったのだった。

「ここか？」

「ああ」

一方、直人と箒は、水着売り場に到着していた。

「んじゃ、ここで別れるか、男と女で売り場って違うし」

「そ、そうだな・・・・・・」

そう言って別れようとする直人は、箒が何処か不安げな顔をしている事に気付く。

「・・・・・そう心配するなよ、お前は贔屓目を抜いても美人なんだ、似合わない水着を探す事のほうが、よっぽど難しいって」

「なっ・・・・・・・！？」

本人としてはフォローの心算だったのだが、自身の意中をこうも容易く見破られた事に、箒は驚きを隠せない。

「少しは自分に自身もって、大胆にいった方が良いぞ、出ないと、本当に一夏を取られるかもな」

「な、直人！！」

「はっはっはっ」と笑いながら、怒る箒を尻目に、直人は先に店を中へと手を振りながら入って行った。

（ま、あれぐらい言っても罰は当たらないよな。美人なのは確かだし、あのぐらい言わないと、思い切りがつかないからな。さてと・・・・・）

と、箒の心配をしながら、自身も水着を買おうと売り場に向かい、適当に水着を見つけてそれを手に取る。

「ま、水着なんてどれでも同じだろう。それより問題は・・・・・・」

そんな風に考えていると。

「あ、あの、お客様。何をお探しでしょうか？」

突如、一人の女性店員に呼び止められた。

店員の顔はどことなく赤かった事が少し気に掛かったが、とりあえず断るのも失礼なので、用件を言う事にした。

「あの、夏に着るジャンパーかパーカーを探してるんですが、何かありませんかね？」

「か、畏まりました！　少々お待ちください！！」

なにやら張り切った様子で、店員はその場を走り去って行く。

しばらくして、店員が持ってきたのは、白いジャンパーとパーカーを複数持ってきた。

「うーん・・・・・・」

「あ、あの！　もし御試着を所望でしたら、あちらに試着室がありますので！！」

「あ、あのっ！」

結局そのまま、店員のなすがままに、試着室の前まで連れて行かれるのだった。

「えっと・・・・・・」

「ごゆっくりお選びください！」

別に何でも良いと言いたかったのだが、妙に気合の入った店員の様子に押され、結局そのまま試着室に入っていくのだった。

「・・・・・・はぁ」

別に適当なのを選べば良い話なのだろうが、ああも自身に満ち溢れてる顔を見ると、どうしても真剣に選んでやらないと失礼だと言う、生真面目さがそれを許さなかった。

「ふぅ・・・・・・」

とりあえずと思い、制服の上着に手を掛け、制服を脱ぐ。

その下には、三年間の武者修行で鍛えられた肉体と、その表面にある大小様々な傷が、試着室の鏡に映し出されていた。

「これを見せるのは、不味いよなあ・・・・・・」

普段は制服に隠れてるが、臨海学校の初日は自由行動で海にいけるというので、水着を着る機会が出来る。

その際、上半身に何も着てなければ、この傷が晒される事になる。

そうなれば、折角の楽しい時間なのに、気が滅入る事態になりかねない。

自分ひとりの所為で、楽しい時間が消えるのは忍びない。

無論、海に出ないと言う選択肢もあるが、それは恐らく、クラス

の面々、そして一夏が許さないことだろう。

なのでこの機に、水着と一緒に来て行く上着も買おうと言う事になったのだ。

「さて、どうしたもんか・・・・・・」

上半身を晒しながらも、直人は試着室の中で、店員が持ってきたジャンパーやパーカーの一つ一つを、選ぶのだった。

「直人、あんな見ず知らずの店員さんにまでフラグを立てるなんて・・・・・出てきたら少し、お話しなきゃ・・・・・・」

「紅葉・・・・・・少し怖い・・・・・・」

その際、頬を赤らめる店員の様子に、鈴と同じく、負のオーラを纏った紅葉が、手に何処からともなく槍を出したため、淡々としながらも、それを抑える真白がいたという。

「お兄、しっかり持ってよ、落したら承知しないからね」

その一方で、ＩＳ学園の生徒達とは別に、ある二人組が、同じく買い物に来ていた。

一夏の親友の弾と、その妹の蘭、五反田兄妹だった。

「幾らなんでも、買い込みすぎじゃね？」

「中三の夏は特別なの！！」

妹の買い物のにもつもちをさせられ、苦言を呈す兄の弾に、蘭は気合の入った様子で言う。

「プール用水着、ビーチ用水着、勝負水着、ウルトラ勝負水着、超ウルトラ勝負水着。各種取り揃えて、いざって時に備えないと！！」

「いざって時が何だって？」

「はい？　・・・・・・！！？」

突如声を掛けられ、蘭が振り向いて見ると、そこには一夏が居た事に気づき、顔を真っ赤にして驚愕する。

「一夏！　お前も買い物か？」

「あ、ああ。そっちはすげえな。それ全部水着か？」

「ああ、コイツがお前に見せるんだって、気合入って・・・・・・ごはぁ！！？」

ぺらぺらと喋る弾は、さっきまでフリーズしていた蘭の後ろ蹴りを食らって吹っ飛ばされるのだった。

「えっ？　何？」

「こっちの話です！」

さっき自分の兄を蹴り飛ばしたとは思えないほど見事な変わり身をした蘭の表情は、最早恋する乙女のそれだった。

「えっと、一夏さんも水着を買いに？」

「ああ、もう直ぐ臨海学校だからな」

「くっ！　そうと解っていれば、一夏さんに水着を選んでもらうんだった！」

「えっ？」

「こっちの話です！　そういえば、以前いらした直人さんは？　一緒じゃないんですか？」

「あ、ああ、あいつも色々忙しいからさ」

「そうですか」

はぐらかすように言った一夏の一言を然程気にも留めてない様子の蘭。

「あっ、そうだ！　来年は私、一夏さんの後輩になるんでしょ！！」

「ってことはＩＳ学園に」

「はい！　第一志望です！」

「そっかあ！　受験勉強、頑張れよ！！」

「はい！！」

一夏にエールを送られ、嬉しい気持ちになる蘭。

一夏も、来年は先輩になるのかと言う思い出、少し嬉しい気持ちだった。

「えっと、お兄ったらどこに・・・・・・」

その後、照れ隠しなのか、さっき蹴り飛ばした自分の兄を探してるときだった。

「一夏！　ちょっと来て！！」

「えっ！？」

突如やって来たシャルロットに連れられ、そのまま水着売り場に連れて行かれたのだった。

「本当にしょうがないお兄で！」

「あれっ、一夏は？」

「えっ？」

と、戻ってきた弾の一言で、ようやく我に返り、一夏がいなくなってる事に気付く蘭なのであった。

そして、シャルロットに連れてかれた一夏は、そのまま一緒に試着室に入る事となった。

「なんだよ急に？」

「いや、その・・・・・選んだ水着を見てもらいたくて」

「だからっていきなり連れ込まなくても・・・・・」

「しー！」

一夏の苦言も尤もだが、突如、静かにしてとジェスチャーをするシャルロット。

そして僅かに試着室のカーテンを開けた、その先には、二人を探してるとおもわれる、鈴とセシリアがいたのだった。

「くぅ、あいつら何処に行ったのよ！！」

「まさかとは思いますが、私達の尾行に気付いたのでは？」

躍起になって二人を捜す鈴に対し、セシリアは何処かつかれきった様子で冷静に呟いた。

しかし、その顔色から察するに、鈴を押さえるのにどれほど疲れたのかを、窺い知れるだろう。

（セシリアが一緒にいる理由は解らないけど、見つかったら絶対邪魔される！！）

しかし、シャルロットとしては、もし鈴に見つかりでもすれば、折角の二人っきりを邪魔されると、気が気でなかった。

「外に誰か入るのか？」

「えっ！？」

その時、後ろから一夏に声を掛けられ、一夏を外の様子を見ようとする。

その所為なのか、慌てたシャルロットは、とんでもない行動に出た。

「だ、誰もいないよ！　いいからここで待ってて、直ぐに着替えるから！」

「うぉわ！！？」

何と、一夏がいる目の前で着替え始めたのだ。
いきなりの事で驚きながらも、一夏は直ぐに背を向ける。
一方のシャルロットも、突然の自分の行動に困惑してた。

（うぅ・・・・・勢いでこんな事しちゃったけど、どうしよう／／／／／）

（何だ？　シャルは何がしたいんだ？　解らん、全く解らん！）

（ああ、もう！　やっちゃえ！！）

（いぃ！！？）

その時、衣擦れする音が聞え、一夏も益々慌てる。

（ほ、ホントに脱ぎだした・・・・・いかん！　いかんぞ！！）

幾ら唐変木でも、一夏も健全な男子高校生。
美少女と狭い好意室内で二人きり、しかも生着替え中となれば、否が応でも意識してしまう。
なので一夏は、その意識を逸らそうと、考えをめぐらせていた。

（何か別の事を考えろ！　えーっと、え、え、円周率は！？　π＝3．１４１５９２６５３５　８９７９３２３８４６　２６４３３８

３２７９・・・・・・）

「もう、いいよ」

「いぃい！！？」

円周率で気を逸らしてた所へ声を掛けられ、思わず振り向くと、着替えを終えたシャルロットがそこに立っていた。

「変・・・・・・かな・・・・・・？」

呆然としてて返事の来ない一夏に、心配になって聞いてみる。

彼女の着てる水着は、セパレートとワンピースの中間のような水着で、色は夏を意識した鮮やかなイエロー、正面デザインは胸の谷間を強調するようなものだった。

「い、いや！　そんなことないぞ！　凄く良いと思う！！」

「じゃ、これにするね」

フリーズしてた一夏も大慌てで答えた、その時だった。

「お客様？」

「えっ！　あっ」

「今の声・・・・・・もしかして・・・・・・」

そして突如、外から試着室のカーテンが開けられ、中にいた二人

の目の前に現れたのは。

「「うわあ！！」」

「お、織斑君、デュノアさん！！？」

「何をしている」

名も知らぬ店員と、自分のクラスの担任、副担任だった。

「いいですか！　幾らクラスメイトと言っても、けじめはつけなければいけません！　試着室に男女一緒に入るのは駄目です！　臨海学校まで・・・・・・」

しばらくして、一夏とシャルロット（制服）は、山田先生のありがたい説教を正座で受けていた。

その山田先生の横では、千冬が呆れ顔で見ていた。

（まさか先生方までいらしてたとは・・・・・・）

（下手に出てくとやばそうね、ちょっと様子見しよ）

そしてその影で、様子を見ていた鈴とセシリアも様子見をする。

「・・・・・・何やってんだ二人とも？」

すると後ろから、二人を呼ぶ声が聞える。

「「直人！！」」

振り返るとそこには、紙袋片手に二人を見下ろす直人がいた。

「それに山田先生に師しょ・・・・・・織斑先生まで、どうしたんですか？」

「私達も水着を買いに着たんですよ。あと、今は職務中ではないので、無理に先生と呼ばなくても良いですよ？」

山田先生はにこやかにそう言うが、正直言って、隣にいる千冬がいつも通りスーツ姿のため、それは憚られる。

うっかり「千冬姉」とでも呼ぼうものなら、拳骨が飛んできそうだからだ。

「そろそろ出てきたほうが良いんじゃないのか？」

「俺の後ろにいる二人もな」

それはさておき、二人がそういった瞬間、ギクッと言う音が三つ聞えた気がした。

いや、気のせいではないだろう。

「そ、そろそろ出てこようと思ったのよ！」

「え、ええ。タイミングを計っていたのですわ」

柱の影から、鈴とセシリアが。

「いやあ、水着を選んでたら偶然見つけたもんでさあ、後をつけてたら、何か入りにくい空気みたいだったから」

「ん・・・・・・」

後ろの水着売り場の陰になってるところから、紅葉と真白が姿を表す。

しかも紅葉の手には買い物籠があり、しっかり水着が入っていたあたり、尾行序でに買っていた事がうかがい知れる。

「あ、あー。私ちょっと買い忘れたものがあるんですが、場所がわからないので、凰（フォン）さん、オルコットさん、着いてきてください。それに秋宮さんと風花さん、デュノアさんも」

すると、何か閃いた仕草をした後、山田先生は五人をつれて何処かへ行ってしまう。

「・・・・・・全く、山田先生は余計な気を遣う」

「「え？」」

「ふぅ・・・・・・。言っても仕方ない、か。一夏、直人」

「「な、何ですか？　織斑先生」」

久しぶりに下の名前を呼ばれた二人は見事なシンクロを炸裂させつつ、ギクシャクした反応をする。

そんな二人に苦笑いを浮べる千冬。

「今は就業中でないからな、名前で良い。私たちはこの場ではただの姉弟と、義姉弟で師弟だろう」

「わ、解った」

「先せ・・・・・師匠がおっしゃるなら」

どうも、姉弟水入らず、と言う事らしい。一人義弟で弟子だが。

「って言うか直人、いい加減俺みたいに「千冬姉」って呼べば良いじゃねえか。義理とは言え、千冬姉だって姉弟だろ？」

「それはそうなんだが、何か恐れ多いと言うか、やっぱり師って方がどうもしっくりくるんだよなあ」

「そんなものか？」

「ま、好きに呼べば良いさ。で、二人とも。どっちの水着が良いと思う？」

そう言って千冬が見せたのは、黒と白のビキニだった。

黒の方はスポーティーでありながら、メッシュ状にクロスしてあってセクシーな水着。

白の方は逆に、一切の無駄を省いた機能重視。

（（・・・・・黒の方、かな））

二人は同じ事を考えるが、ふとここで、一夏は気が付く。

（いや、でも、黒のほうだと変な男が寄ってくるんじゃ・・・・・・）

「黒の方で」

「白の方」

その結果、一夏と直人で意見が分かれたが、千冬は苦笑いを含みながら答えた。

「そうか、黒の方か」

「いや、白の・・・・・・」

「嘘をつけ。お前が先に黒い方を注視していたのはわかっている。お前は気に入った方を注意深く見るからな」

「大方、こんなもの着たら変な男が寄ってくるって考えたから、白の方って答えたんだろ。違うか？」

師弟コンビの見事な連携に、一夏はそれ以上何もいえなかった。

「全く、弟が余計な心配をするな。大体、私がその辺りの男に靡くように見えるか？」

「いや、見えないけど・・・・・・」

「師匠なら寧ろ言い寄ってきた男達を投げ飛ばして、逆上してきた男どももちぎっては投げ、ちぎっては投げ・・・・・すいません、調子に乗ってしまいました。だからその突き刺すような視線をやめてください」

本人としては思った事を口にしただけなのだが、まるで鋭い槍か弓矢のような視線を送られたため、思わず閉口する。

「そういえば千冬姉、彼氏とか作らないのか？　そう言う話し、一回も聞いた事もないけど」

「手の掛かる弟が自立したらな。考える」

そう言われると、一夏はぐうの音も出なくなる。

隣にいる直人も何処か苦笑している。

直人自身、三年間の武者修行のお陰で、必要最低限の生活技術を身に着けたりしてたからだ。

少々、人並みはずれた部分はあるが。

「で、お前達の方は如何なんだ？」

「「どうって、何が？」」

「何がも何も、お前達は彼女を作らないのか？　幸い学園内には腐るほど女がいるし、選り取りみどりだろ？　特に直人」

「は、はい！」

「それでなくても、お前は異性と言うものに少々気が無い様に見えるからな。この学園にいる間に彼女ぐらい作れ」

「強制ですか・・・・・・」

そんなジト目の直人を無視して、千冬は話を続ける。

「そうだな・・・・・・ラウラ何か如何だ？　色々と問題はあるだろうが、あれで一途な奴だぞ。容姿だって悪くはあるまい」

「いや、その・・・・・・」

「それに、キスした仲だろう？」

「それを言いますか・・・・・・」

再びジト目を送る直人だが、千冬は何処吹く風だった。

しかも、隣にいる一夏も、さっきの水着の件の仕返しとばかりにニヤニヤしている。

「・・・・・そりゃあ、俺だって異性に全く興味がないってわけではありませんよ。ただ・・・・・・」

「ただ？」

「ただ、それで好きになれるかと言われれば、まだ正直自信がないです」

「直人、お前、まだ小さい時の事を・・・・・・」

一夏の問いかけに、直人は静かに頷く。

小さい頃にいじめを受け、誰からも助けてもらえず、挙句には周りが敵に見えて、だれかれ構わず襲い掛かるようにもなった。

一種の人間不信に陥った直人は、一夏たちと出会うまで、周りの人間が全て信じられなかった。

今はその認識も完全に改まり、信じるに値する人間もいるんだと言う事を重々承知してる。

しかし、それでも、まだ自分が人を好きになれるかと言えば、それをはっきりイエスと言える程の自信もなかった。

「・・・・・少しはまともになったかと思えば、まだその辺りは治りきらずか・・・・・・」

「・・・・・・」

閉口する直人だが、何も千冬は責めてる訳ではない。

心の傷というものは、そう簡単に治らないものである。

昔を知るメンバーからすれば、十分変わったといえるだろうが、やはり彼の心のどこかでは、人を完全に信じきれないところがあった。

「そりゃあ、助けてくれた一夏や師匠には感謝してますし、他の皆だって、人柄はわかってるんですが、人を好きになれるかと問われると・・・・・・」

やはり自信が湧かない、そう言いたげなのは、他の二人も重々理

解した。
彼が本当の意味で人を好きになるには、まだ当分先の事だろうと、二人は心配するのだった。

「それに・・・・・・」

「「？」」

「そもそも俺みたいなのを好きになる奴っていないと思うんですよ。こんな真っ直ぐに進むしか能のない不器用な男を」

その瞬間、さっきまでの重苦しい空気はものの見事に霧散した。
こいつ、あれだけの事があって気付いていないのかと。

「・・・・・はぁ、前からそんな気がしたけど、直人って本当に自分の事になると鈍いんだなあ」

「むっ、一夏にそれ言われるとむかつくな」

「どういう意味だよ！！」

「そのまんまの意味だよ。そもそもお前は・・・・・・」

と、一夏と直人は、呆れる千冬を尻目に口論を始めるのだった。

「やれやれ、何だか真剣になってた自分が馬鹿らしくなってくるな。全く、私の弟どもは揃いも揃って・・・・・・」

そして千冬は、口論を始めた弟二人を置いて、水着を買いにレジへと向うのだった。

一方その頃、箒はといえば。

（こ、こんな水着、恥かしくて着れるか！　しかし、あの一夏の気を引くにはこれぐらい。だ、だが・・・・・）

手にしてる水着を見ながら、一人悶々としているのだった。

そしてその別の方向では。

「これが全て水着か。この世にはこれほの種類の水着があるのか」

と、紅葉、真白と別れたラウラが、水着の多さに、無表情ながらも驚いていた。

しかし当人は、軍人らしい考えで、学園指定の水着があるから良いだろうと考えていた。

だが・・・・・・

「今年の水着は気合入れて選ばないと！」

「似合わない水着着ていったら、彼氏に一発で嫌われちゃうもんね！」

「他の事百点でも、水着がかっこ悪かったら致命的だもんね」

そんな女子の会話が聞えた瞬間、ラウラの中で、硝子がひび割れる音が聞えた。

（な、何・・・・・・だと・・・・・・・！？）

もしそれが本当なら由々しき事態。

ラウラはすぐさま携帯端末を取り出し、ある人物に連絡をする。

「クラリッサ、私だ！　緊急事態発生！！」

《ラウラ・ボーデヴィッヒ隊長。如何かされたのですか？》

通信相手は、ラウラの所属する、『黒ウサギ部隊（シュヴァルツェア・ハーゼ）』の副隊長、クラリッサ・ハルフォーフ大尉、御年２２歳。

隊長であるラウラ不在の部隊を纏める副官にして、彼女に数々の日本知識　（誤り多数）を教えた張本人である。

「う、うむ・・・・・・例の、桜庭直人についてなのだが・・・・・・」

《ああ、織斑教官の義弟にして一番弟子で、隊長が好意を寄せていると言う》

「そうだ。お前の言う所の、私の嫁だ」

実はラウラ、学園内のみならず、自身の隊でも、対人関係で多くの問題を抱えていたのだが、あのＶＴ事件の後、彼女、クラリッサに「好きな男ができた」と言う相談を持ちかけた事から、そのわだかまりが氷解したのだと言う。

と、黒ウサギ部隊の話はさておき、ラウラは自身の悩みを持ちかける。

「実は、今度臨海学校というものがあるのだが、どのような水着を着ていけば良いのか選択基準がわからん。そちらの判断を仰ぎたいのだが？」

《解りました。この黒ウサギ部隊は常に隊長と共にあります。何なりとご命令下さい》

「うむ！」

良い部下を持った。これがこの時のラウラの心境だった。

《では、現在の隊長の装備を確認しましょう》

「うむ、支給品の水着が一着だが・・・・・・」

《何を馬鹿な事を！！》

「！？」

突然のクラリッサの怒鳴り声に、ラウラは端末越しに面食らってしまう。

《確か、ＩＳ学園は旧型スクール水着ですよね、それも悪くはないでしょう。だが、いやしかしそれでは・・・・・・》

「それでは？」

《色物の域を出ない！！》

確認を取るラウラに、クラリッサは声高らかに宣告する。

「な、ならばどうする！？」

《ふっ、私に秘策があります》

きらんと目を輝かせながら、クラリッサは、ラウラに自身の言う秘策を伝授するのだった。

第三十二話　ショッピングパニック（後書き）

桜爛の間

作者「と、言うわけで、アニメ第九話の前半部分、これにて終了！！」

直人「しかし、凄い字数だな。９０００を越えたぞ！」

作者「いやあ、今回はアニメを準拠に、削られた原作部分とかを追加したらこんなになった。ちなみにアニメの最終話部分までは、この方式でいくつもり」

直人「まあ、それは良いんだが。結局あいつらは何がしたかったんだ？　俺や一夏を尾行して」

作者「気付かないって幸せだねえ・・・・・・」

直人「どういう意味だ？」

作者「別に～、さて今回、ラウラの副官、クラリッサさんが初登場！！！」

直人「初登場も何も、あの人、あの場面以外で今のトコ出番ないだろ」

作者「それ以上は言ってやんな。では後書コーナーに入りましょう。
まずは「直人の目安箱」から！　まずは、久しぶりに感想を頂いた
楚良様から！

全員へ（数人だけでもいいですし、誰でもいいです）
弟、妹が出来るならどっちがほしい？
また、どういう兄妹（兄弟、姉弟、姉妹）がいい？

作者「えーっと、これは実際に兄弟（或いは姉妹）がいる一夏、箒、
紅葉、それと義弟である直人は除くとして、真白、セシリア、鈴、
シャルロット、ラウラに答えていただきましょう」

真白「ん・・・・・妹かな？　それか、私が妹で兄が欲しい」

セシリア「妹ですかね？　それで姉妹ですか・・・・・・誰ですか
！　私の事「レズ」とか言ったのは！！」

鈴「別に一人でも問題ないけど、そうねえ・・・・・・あえて言う
なら弟かしらね？」

シャルロット「ぼ、僕も弟が欲しいかな？　何ていうか、母性を擽
られそうな気がして」

ラウラ「私は妹だな、そして鍛えてドイツ軍最強の姉妹を目指す！
！」

作者「だ、そうです。では次、常連三月語様より！」

Q1　全員に
色違いのコイキングを釣るために３５７時間も作業プレイ出来ると思いますか？

全員『色違い？』

作者「ああ、確か金銀から、色違いのポケモンが登場するようになったんだ。登場確率は凄いレアだけど。始めが必ず出てくる赤いギャラドス。んで、その進化前であるコイキングは金綺羅金というわけ、んで、皆さんの感想は？」

全員『ない！』

作者「真白やラウラまで・・・・・まあ、単純計算で３６０時間っていったら、１５日間ですからね、私もそこまでやる根性ないです。では次！」

Q2　女性陣に
自分が想っている相手に、突然その人を『おにーちゃん』と呼ぶ女の子が現れた（抱きついた）。スタイルは圧倒的にあっちの方がいい（きょぬー）・・・どうする？

箒「一夏に問いただす！　いや！　成敗してくれる！！」

紅葉「二人一緒に、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩだよ！」

セシリア「勿論！　直人さんに問いただしますわ！！」

鈴「まずそいつの胸を揉みしだく！　んでもって、一夏を抹殺する！！」

シャルロット「一夏に事情を聞くかな？　あっ、でも手が滑って灰色の鱗殻打ち込んじゃうかも（ニッコリ）」

ラウラ「その女もろとも、嫁を尋問する。何、心配するな、優しく口を割らせてやる」

作者「恐ろしいなあ。で、真白は？」

真白「まず、六人を黙らせる。それで、直人と一夏に話を聞く」

作者「大人だ！　では次！！」

Q3　男性陣に
突然自分のことを『おにーちゃん』と呼ぶ女の子が現れた（抱きついた）。（スタイルについてはQ2と同様）どうする？

一夏「えーっと、とりあえず引っぺがして、話を聞くと思う。よく解らなかったら、千冬姉に聞いてみるかな？」

直人「うーん、正直、孤児院に入る前の記憶が結構曖昧だから、妹がいないって確証もって言えねえからな。まあ、とりあえず話を聞こうとするかな」

作者「その前に殺されそうな気はしますがね。では次！「抱腹絶倒！　アフレコ委員会！！」です！　今回の参加者の皆様は、以下のメンバーです！」

一夏「ちーっす」

箒「また私か・・・・・・」

鈴「久しぶりの登場よ！」

端午「やっほー！　僕、参上！！」

作者「以上、四名で・・・・・」

直人「紫電一閃！！」

端午「おっとー！」

作者「って開始早々なにやっとんじゃ！！」

鈴「ちょっと落ち着きなさいよ！！」

直人「離せ！　離せ鈴！　コイツは、コイツだけは三枚に卸さんと気がすまない！！」

端午「おお、怖！」

一夏「一体、何があったんだ？」

箒「私に聞くな」

作者「ああ、このままでは不味いので、さっさと端午に退場してもらいましょう。と言うわけで、まずは常連、三月語様からのリクエストから！　さあ端午、早くやって！！」

端午「はいはーい」

端午「諸君　私は戦争が好きだ
諸君　私は戦争が好きだ
諸君　私は戦争が大好きだ

殲滅戦が好きだ
電撃戦が好きだ
打撃戦が好きだ
防衛戦が好きだ
包囲戦が好きだ

突破戦が好きだ
退却戦が好きだ
掃討戦が好きだ
撤退戦が好きだ

平原で　街道で
塹壕で　草原で
凍土で　砂漠で
海上で　空中で
泥中で　湿原で

この地上で行われる　ありとあらゆる戦争行動が大好きだ

戦列をならべた砲兵の一斉発射が　轟音と共に敵陣を吹き飛ばすのが好きだ
空中高く放り上げられた敵兵が　効力射でばらばらになった時など心がおどる

戦車兵の操るティーゲルの８８ｍｍ（アハトアハト）が　敵戦車を撃破するのが好きだ
悲鳴を上げて燃えさかる戦車から飛び出してきた敵兵をＭＧでなぎ倒した時など胸がすくような気持ちだった

銃剣先をそろえた歩兵の横隊が敵の戦列を蹂躙するのが好きだ
恐慌状態の新兵が既に息絶えた敵兵を何度も何度も刺突している様など感動すら覚える

敗北主義の逃亡兵達を街灯上に吊るし上げていく様などはもうたまらない
泣き叫ぶ虜兵達が　私の降り下ろした手の平とともに金切り声を上

げるシュマイザーにばたばたと薙ぎ倒されるのも最高だ

哀れな抵抗者達（レジスタンス）が雑多な小火器で健気にも立ち上がってきたのを
８０ｃｍ列車砲（ドーラ）の４．８ｔ榴爆弾が都市区画ごと木端微塵に粉砕した時など絶頂すら覚える

露助の機甲師団に滅茶苦茶にされるのが好きだ
必死に守るはずだった村々が蹂躙され女子供が犯され殺されていく様はとてもとても悲しいものだ

英米の物量に押し潰されて殲滅されるのが好きだ
英米攻撃機（ヤーボ）に追いまわされ害虫の様に地べたを這い回るのは屈辱の極みだ

諸君　私は戦争を、地獄の様な戦争を望んでいる
諸君　私に付き従う大隊戦友諸君
君達は一体何を望んでいる？

更なる戦争を望むか？
情け容赦のない糞の様な戦争を望むか？
鉄風雷火の限りを尽くし三千世界の鴉を殺す、嵐の様な闘争を望むか？

よろしい、ならば戦争（クリーク）だ

我々は満身の力をこめて今まさに振り下ろさんとする握り拳だ
だがこの暗い闇の底で半世紀もの間　堪え続けてきた我々にただの戦争ではもはや足りない！！

大戦争を!!　一心不乱の大戦争を!!

我らはわずかに一個大隊千人に満たぬ敗残兵にすぎない
だが諸君は一騎当千の古強者（ふるつわもの）だと私は信仰している
ならば我らは、諸君と私で総兵力１００万と１人の軍集団となる

我々を忘却の彼方へと追いやり眠りこけている連中を叩き起こそう
髪の毛をつかんで引きずり降ろし、眼（まなこ）を開けさせ思い出させよう
連中に恐怖の味を思い出させてやる
連中に我々の軍靴の音を思い出させてやる

天と地のはざまには　奴らの哲学では思いもよらない事があること
を思い出させてやる

一千人の吸血鬼（カンプグルッペ）の戦闘団で
世界を燃やし尽くしてやる

「最後の大隊　大隊指揮官より全空中艦隊へ」

第二次ゼーレヴェー（あしか）作戦、状況を開始せよ

征くぞ　諸君」

作者「【ヘルシング】より、、『「最後の大隊」大隊指揮官の少佐』の演説台詞です」

鈴「長っ！！」

作者「何でもこの場面だけでアニメ六分も使うそうですから」

端午「うーん、戦争より僕はどっちかって言うと、全世界規模の悪戯が好きだな～」

箒「何て傍迷惑な・・・・・・」

作者「と言うわけで、さっさと君はこの場を去る事をお勧めするよ、でないと直人に切り刻まれるぞ」

端午「うーん、それは勘弁して欲しいなあ。それじゃ、僕はここで！」

作者「よし、消えた」

直人「ちっ！　逃がしたか・・・・・・」

鈴「直人、あんた目がすわってるわよ」

作者「じゃ、次のアフレコは鈴にやってもらいましょう」

鈴「極東の侍なら、極東の君主に使えるのが務めってもんでしょ？ホライゾンを救い出すことがアンタのなすべきこと、それが敵に回るなんて、なんたる不出来！分かったら土下座！お座り！！」

作者「【境界線上のホライゾン】より、葵・喜美の台詞だそうです」

鈴「何でアタシを選んだわけ？」

作者「うーん、女性陣で捜してみた所、一番良いそうなのが君ぐらいのもので」

一夏「これ、いわれてる奴は犬かって話のような・・・・・」

鈴「なんならあんたにやってやりましょうか？　何か犬っぽいし」

一夏「どういう意味だよそれ！」

作者「はいはい、喧嘩は向こうでやってやって。次は、ヒロアキ１４１様からのリクエスト、一夏にやってもらいます。

一夏「遊びなもんか！自分が死ぬのも、人が死ぬのも冗談じゃないって思うから、やれることをやってるんでしょ！」

作者「【機動戦士ガンダムＵＣ】より、主人公、バナージ・リンクスの台詞です」

箒「これ、思いっきり中の人ネタって・・・・・・」

作者「はい、それ以上はアウトー！！」

直人「とは言え、言ってる事はいかにも一夏らしいような気がするな」

鈴「ああ、同感」

作者「それじゃ、次はアルカイナ様からのリクエスト、まずは箒にやってもらいましょう」

箒「ああ、解った」

箒「神様。あなたが選ばれた人々だけを救うというのならば、残りの選ばれなかった人々は、一人も余さず私が救う。」

作者「【とある魔術の禁書目録】より、神裂火織の台詞です」

箒「・・・・・・私は別にクリスチャンではないのだが・・・・・・」

直人「そうだな。どっちかって言うと、禅宗って感じだよな」

箒「それは、お前もだろ」

作者「さて、次は一夏にやってもらいましょう」

一夏「何か、俺多くないか？」

作者「仕方ないでしょ。さあ、さっさとやる」

一夏「まだ終わってねぇ！！始まってすらいねぇ！！ちょっとぐらい長いプロローグで、絶望してんじゃねえよ！！」

作者「【とある魔術の禁書目録】より、主人公、上条当麻の台詞です」

直人「あの不幸ばかりが起こる男か、女難ばかり続く一夏にはぴったりかもな」

一夏「どういう意味だよ！！」

作者「いや、君が言えた義理じゃないだろ」

箒・鈴「うん、うん」

作者「さ、次は楚良様からのリクエスト、またしても一夏にいってもらいます」

一夏「なあ、少しぐらい休憩しても・・・・・・」

作者「駄目。さっさとやる！」

一夏「俺がしてーからすんだ。俺の勝手だろ。アホめ」

作者「【ｍａｇｉｃｏ】より、シオン・エリファス・レヴィの台詞です」

直人「原作でも、「やりたいからやる」って言ってたもんな」

一夏「当たり前だろ？」

作者「さて、次で最後だ。トワイス・Ｈ・ピースマン様より、一夏と箒の二人にやってもらいましょう」

一夏「た、頼む・・・・・せめて少し休ませて・・・・・」

作者「これで最後なんだから、我慢しなさい！　では、どうぞ！！」

一夏・箒「「集いし願いが、新たに輝く星となる。光指す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！」」

作者「【遊戯王ファイブD，S】より、主人公、不動遊星と、ヒロイン、十六夜アキの台詞です」

鈴「って、何で箒となのよ！！」

作者「まあ、そりゃあ、ヒロイン候補として結構有力だからじゃないの？　幼馴染だし、機体は一夏のそれとセットみたいだし」

鈴「きーーーーー！！！！！」

作者「さて、では本日はここまで。それと皆様、私はこれから、１月１日に、リリなのの方で更新する番外編を最後に、実家から金沢に戻るまで、執筆活動を停止したいと思います。

理由は、お正月を楽しみたいというのと、こっちのパソコンでの執筆は、色々支障が出そうだと言うのです。

皆様、御理解の程、如何かお願いします。

次回はいよいよ臨海学校初日！！　季節外れになりましたが、楽しんでもらえるよう、全力を尽くします！！　それでは皆様、良いお年をー！！」

直人「アンケートの方も、如何かよろしくお願いします」

第三十三話　夏だ！　海だ！　臨海学校だ！！（前書き）

いや、もう冬なんですけどね。

当小説の更新速度故とは言え、季節外れ甚だしいですね。申し訳ございません。

さておき、とにかくＩＳ一楽しい臨海学校のお話です。

楽しんでもらえると幸いです。

第三十三話　夏だ！　海だ！　臨海学校だ！！

「海っ！　見えたぁっ！」

臨海学校初日当日、バスの中の女子一同のテンションはこれまでにないほど高揚していた。

しかもそれは、トンネルを抜けた先に広がる海を見て、最高潮に達していた。

「テンション高いなあ。まあ、海で遊べると聞いて、気分が沈む奴はまずいないか」

「そうだね・・・・・・」

女子達の反応を見ながら呟く直人。

そのテンションの高さに少し引き気味だったが、理由が理由だけに一人納得する。

隣席で呟いた真白も、口調はいつも通り淡々としながらも、その顔は何処か嬉しそうだった。

ちなみに二人の席の通路を挟んで斜め左の席に一夏とシャルロット、同じく通路を挟んで左側の席、一夏達の真後ろの席に箒と紅葉、自分たちの前の席にセシリアとラウラが座っていた。

その様子を見れば、正に十人十色だった。

一夏の隣のシャルロットは何処か落ち着きがなくもじもじしており、ラウラと箒はどこか挙動不審で、度々人目を気にするようにき

ょろきょろしている。
唯一まともなのはセシリアぐらいのもので、紅葉にいたっては完全に居眠りしていた。

真白曰く、「臨海学校が楽しみで寝付けなかった」との事である。

（って言うか、口をあけて居眠りするなよな）

ちなみに言うまでもないことかもしれないが、鈴はクラスが違う為ここには居ない。

「なあ、セシリア」

「はい」

「ラウラは一体如何したんだ？　さっきからきょろきょろしてて」

「さあ？　昨日からこの様子のようでしたけど・・・・・・」

そんな二人の会話も、さっきから周りが気になってるラウラには聞えてなかった。

「そ、それはそうと直人さん。実は向こうに着いたら、お願いしたい事があるのですが・・・・・・／／／／／／」

「お願い？　俺にできることなら、何でもしてやるぞ」

直人がそういった瞬間、セシリアはぱあっと顔が明るくなった。

「ほ、本当ですか！？」

「男に二言はない」

「ぜ、絶対ですからね！！」

「はいはい」

そう言って席に着くと、前の席のセシリアはそのまま悦に入っていってしまった。

「直人・・・・・・」

「何だ？」

「安請け合いは碌な事にならないよ？」

「そうか？　ま、折角の頼みごとだ、無碍にするわけにもいかんだろう？」

そう呟くと、隣で座ってる真白ははぁと溜息を付く。

「そろそろ目的地に着く、全員席に着け」

そんな真白の様子に首を傾げていると、千冬からの号令が響き、その一声で、生徒たちは全員席に着いた。

いつもながらその指導力と言うかカリスマ性には、誠に感心させられると思う直人だった。

「そして貴様は何時まで寝ている。いい加減起きろ」

「あいたっ！！？」

そして、未だ眠りこけていた紅葉の頭に、今日も今日とて出席簿の音が清清しい位響き渡ったと言う。

程なくしてバスは旅館に到着、旅館の女将に挨拶を済ませると、それぞれ割り当てられた部屋に荷物を置く為移動を始める。

「ねーねー、おりむー、さっくー」

すると一夏と直人に、間延びした声が聞えた。

二人が振り向いてみると、予想通りというべきか、そこにいたのはのほほんさんだった。

「二人って部屋どこ～？　一覧に書いてなかったー。遊びに行くから教えて～」

のほほんさんがそう聞くと、周りの女子も一斉に聞き耳を立ててくる。

と言うのも、のほほんさんの言うとおり、他の女子達は皆部屋割りが決められていたのに、その部屋割りの中に、何故か二人の名前

は入ってなかったのだ。

「いや、俺も知らない。直人、知ってるなら教えてくれよ」

「直ぐに解る事だ、それぐらい我慢しろ」

一夏自身も知らされてないのだが、直人は何か予想がついたような顔をしていた。

その為、一夏は度々聞いてきているのだが、その度に直人は、「察しが付く」、「自分で考えろ」、「世の中知らぬが仏って事もある」とはぐらかし、教えてくれなかった。

「うーん、多分だけど、廊下にでも寝るんじゃねえの？」

「わー、それは良いね～。私もそうしようかな～。あー、床つめたーいって～」

「織斑、桜庭、お前達の部屋はこっちだ。ついて来い」

会話をしているところへ千冬からのお呼び出しがあった為、二人はのほほんさんに「また後で」と言って、千冬の背中を追いかける。

「織斑先生。俺達の部屋ってどこになるんでしょうか？」

「黙ってついて来い」

一夏が聞くなり言論封殺され、二人は黙々と千冬の後をついて行く。

暫く歩いていき、二人が千冬に連れてこられた場所、そこは・・・

・・・

「ここだ」

「え？　ここって・・・・・・」

ドアに堂々と『教員室』と書かれた紙が張られている部屋だった。

訳が解らず顔を見合わせようと隣を向くと、「ああ、やっぱりか」って顔をした直人がそこにいた。

「最初は二人に個室をそれぞれと言う話だったのだが、それだと絶対に就寝時間を無視した女子共が押しかけてくるだろうと言う事になってな」

「ま、そうでしょうね」

「結果、部屋を三人部屋に急遽変更し、私と同室になったわけだ。これなら、女子もおいそれとは近づかないだろう」

「そりゃまあ、そうだろうけど・・・・・」

「俺たちなんぞの為に、鬼が島に殴りこんでくる勇者は流石にいな・・・・・すいません、口が滑ってしまいました。反省してます」

千冬と同室になった理由を一通り聞いた二人は納得する。

その際、またしても口が滑った直人は、千冬の貫かれるような視線に、再び閉口してしまう。

「一応言っておくが、あくまで私は教員だと言う事を忘れるな」

「「はい、織斑先生」」

「それでいい」

部屋の中に入る許可を得ると、二人は早速荷物を置く為部屋の中に入る。

もとは二人部屋の予定だったのだが、直人の存在もあって、急遽三人部屋に変わったということもあって、三人どころか後一人二人は入れそうなぐらい広かった。

入った二人は部屋を色々と物色し、特にその部屋の良さに一夏は感嘆の声を挙げた。

流石教員、一般生徒とは待遇が違うものだと、隣の直人は感心させられていた。

「一応、大浴場も使えるがお前達は時間交代だ。本来ならば男女別だが、何せ一学年全員だからな、お前達二人の為に他の生徒全員を窮屈な思いをさせるわけにはいかんからな。よってお前達は一部の時間のみ使用可能だ。深夜、早朝入りたければ部屋のを使え」

「解りました」

姉弟水入らず（一名義弟）だと言うのに、職務に忠実である千冬を見て、一夏はらしいと心の中で思うのだった。

「それはいいんですが、態々三人部屋にしなくても、布団さえ貸してもらえれば廊下で眠りますのに・・・・・あいたっ！！」

その一方で、一夏は兎も角、自分の為に態々部屋を変更したのを

申し訳なく思った直人が呟くが、直後、千冬から軽めの、それでも多少痛みが来る拳骨をもらった。

「馬鹿者が、生徒を廊下で寝かせて風邪など引かせたら教員失格だ。貴様は私に責を問わせる心算か？」

「いや、そう言うつもりじゃ・・・・・・そもそも、俺はこのくらいで風邪を引くほど柔じゃありませんよ」

「だろうな。とは言え、一人だけ廊下というのも色々問題だからな、大人しく部屋に居ろ」

「まあ、そう言うことなら・・・・・・」

そんな直人の様子に、何時になっても千冬姉には頭が上がらないんだなと、一夏の中では妙な笑いがこみ上げてきた。

「さて、今日は一日自由時間だ。荷物も置いたし、好きにしろ」

「織斑先生はどうします？」

「私は他の先生との連絡なり確認なり色々ある。しかしまあ――――」

直人からの問いかけに少し答えると、こほんと咳払いをして言う。

「軽く泳ぐぐらいはするとしよう、何処かの弟達がわざわざ選んでくれたもの出しな」

「そうですか」

一夏も千冬にならってさらりと答えるが、その内心はドキドキしていた。

「二人とも素直じゃないな。嬉しいなら嬉しいと・・・・・・はっ！！」

自分の言った事に「しまった！」と思うも時既に遅し。
刹那、彼の頭目掛けて鉄拳が振り下ろされる。
今度はかなり本気だったので、思わず直人はその場に蹲ってしまう。

「直人、最近口滑らせてばっかりだな」

「もう少し口を硬くしないと、長生きしないぞ」

「肝に銘じます・・・・・・いてて」

自分でも、最近口を滑らせてこんなんばっかりだと思っており、これからは気をつけようと、胸に誓うのだった。

「さて、じゃあ海に行って来るか」

「羽目を外しすぎるなよ」

「はい。行こうぜ直人」

「おお、解った」

そして二人は荷物から水着やタオル、着替えが入った物を取り出

し、海へと向うのだった。

「今十一時です！　夕方までは自由行動、夕食に遅れないように旅館に戻る事！　良いですね？」

山田先生の注意に、ビーチにいる女子達は一斉に『はーい！！』と元気よく返事する。

自由時間というだけあって、生徒の大半は水着に着替えてビーチに集まっていた。

ビーチで遊ぶもの、海で泳ぐもの、パラソルの下で寝ているもの、海での過ごし方も様々だった。

「しっかし・・・・・・解りきってたとは言え、ここまで女子が多いと、俺たちすげえ場違いな気がするなあ」

「あはは・・・・・・」

そして水着に着替えた一夏と直人もビーチにやってくるが、当然ながら、あまりの女子の割合の多さに、少し居心地が悪そうにしていた。

ちなみに二人の水着は、共に紺色のトランクス型、直人はその上に、昨日店員に勧められて選んだ、白の半袖パーカーを着ていた。

「ねえねえおりむー、さっくー、私達と一緒に遊ぼ～」

「ビーチバレーしようよ！」

そんな二人に、のほほんさんを含めた女子達が集まってくる。

「ん～、俺は別に構わないが、一夏は？」

「俺も良いぜ、どこで・・・・・おわっ！？」

突如、一夏に誰かが飛びついてきた。

「おー高い高い！　遠くまでよく見えるわー！」

「何やってんだよ！　猫かお前は！！」

その人物、スポーティーなオレンジのタンキニタイプの水着を着た鈴は、身軽な動きで一夏の肩に乗って遠くを見渡す。

「わー楽しそう！　私もやりたーい！」

「その次あたし！！」

「俺は展望台じゃない！　いい加減降りろ！！」

その様子にキャイキャイはしゃぐ女子達とは裏腹に、少し起こっ

たように一夏は降りるように言うが、当の鈴は一向に下りる気がない。

（にしても、さっきのは見事だったなあ。鈴の奴、前世は確実に猫だな）

「・・・・・・直人、あんた何か失礼な事考えてたでしょ？」

「気のせいだ」

「いいからさっさと降りろ！！」

幼馴染三人、そんな会話をしている横では、鈴の肩車を見て周りが騒ぎ始めていた。

「直人さん。こちらにいましたの」

「ん？　おっ、セシリア」

そんな中、直人の後ろから、パラソルやシートを手に持ったセシリアが声を掛ける。

青色のビキニに腰のパレオが優雅さを醸し出していた。

「えっと・・・・・・鈴さんは何をしていらっしゃいますの？」

「移動監視塔ごっこだと」

「はあ・・・・・・」

間の抜けた声しか出なかったが、まあ、ある意味言う通りといえば言うとおりだった。

「んで、俺にやって欲しいことって何だ？」

「あっ、そうでした！　ちょっと待ってください」

そう言うと、セシリアは手に持ってるパラソルをビーチに突き刺し、シートを敷いてその上にうつ伏せに寝ると、横に四角い瓶のようなものを置き、上の水着の紐を解く。

「さあ直人さん。お願いしますわ」

「えっ・・・・・・？」

「何を？」と聞こうとしたその時だった。

「あっ、いたいた。おーい、直人、一夏君・・・・・・ってああ！！　セシリアちゃんなにしようとしてんの！？」

そこへ、大手を振ってやって来たのは紅葉だった。

元気よくやってきた紅葉はそこで、セシリアが何か直人にさせようとしているのを一瞬で見抜き、素っ頓狂な声をあげる。

ちなみに彼女の水着は、セシリアと同様ビキニで、色は鮮やかな赤でバスト部分にオレンジ色のラインが入っている。

「見ての通り、サンオイルを塗っていただくのですわ。レディとの約束を違えるなど、紳士のする事ではありませんわよ？」

「違える気はさらさらないんだが・・・・・・解った、仕方ない」

約束した手前、生真面目なこの男に今更無しにするなんて選択肢は存在せず、観念したように瓶の中のサンオイルを手に伸ばしていく。

その間、後ろから射抜かれるような視線が背中に刺さるように降り注いでいた。

「・・・・・・」

そしてオイルを塗ろうと、その手がセシリアの背中に触れた瞬間だった。

「ひぁ！！」

「ぬおっ！？」

「な、直人さん！　少し手で温めてから塗って下さい！」

「あ、温めるのか？　すまん。なんせこんな事するの、初めてなもんだから」

「は、初めてですの？　それでは仕方ありませんわね／／／／／／」

「ねえ、何で嬉しそうなの？　ねえ・・・・・・」

「紅葉、あんた怖いわよ・・・・・・」

そしてセシリアに言われたとおり、オイルを温めてから改めて背

中に塗る。
直人としては気持ち的に精一杯だったのだが、セシリアはと言えば、非常に気持ち良さそうにうっとりとしていた。

「うわぁ、気持ち良さそう」

「こっちまで、ドキドキしてきた・・・・・・」

「セシリア。後で私にもサンオイル貸し手よね？」

「えっと・・・・・背中だけで良いんだよな？」

周りの女子の反応はさておき、慣れない事に一杯一杯だった直人は、セシリアに聞いてみる。
が、そんな彼の淡い期待は、次の言葉で崩れ去る。

「いえ、折角ですし、手の届かない所は全部お願いしますわ」

「手の届かない所全部って・・・・・・まさか！？」

「足と、その・・・・・お尻も・・・・・」

「なっ！！？」

その瞬間、直人は内心パニック状態に陥った。

（お、お尻って・・・・・いやいやいや！　出来るかそんな！？
でも、約束した以上無理って言うのも・・・・・で、でも、オイル塗る為とは言え、女性の尻を触るなんて！！？）

そんな風に頭の中でパニクっていると・・・・・・

「はいはい、ここから先は私が代わりにやってあげる～」

混乱する直人の代わりに紅葉が割って入り、その手に温めてないサンオイルをたっぷり持たせ、それをセシリアの体にどんどん塗りつけていく。

「隅から隅まで、それそれそれっと・・・・・・」

「ちょっ！　紅葉さ・・・・・ひあっ！！？」

セシリアは声を荒げようとするが、冷たいサンオイルの感触に悲鳴を上げる。

そんな様子を呆然と見つめる一夏達には、紅葉の背中や尻に、小悪魔の羽や尻尾が生えてるように見えたのだった。

「あっ！　お尻も塗って欲しいんだよね？　ほいほいぺたぺたーっと」

「きゃっ！！　こ、紅葉さん！　もういい加減に・・・・・・！！」

「あっ、ちょっ！　セシリア！！」

「えっ？　・・・・・・！！？」

鈴が驚いて声をあげるも、時既に遅し。

今セシリアは、サンオイルを背中に塗ってもらうため、水着のバスト部分の紐を解いている。

そんな状態で上体を起こせば、紐解かれている水着の上部分はシートの上に置き去りにされる。
そうなれば、本来水着で覆われる筈の部分は当然・・・・・・

「いっ！？」

「き、キャーーーーー！！」

「ごはっ！？」

「い、一夏！？」

顔を真っ赤にして悲鳴を上げつつ、ＩＳを部分展開したセシリアの拳は、一夏の顔に見事にクリーンヒットして、海のほうへ吹っ飛んで行くのだった。。

「あー、御免。いや、本当に御免・・・・・・」

「謝ったって・・・・・・許しませんわよ！　紅葉さん！！」

「ああ、やっぱり。ならば駆け抜けること、脱兎の如くー！！」

「ちょっ！　紅葉！！」

怒り心頭のセシリアに、紅葉は直人の手を掴み、その場を文字通り、脱兎の如く逃げ出す。

「すまんセシリア！　この埋め合わせはいつか必ず！　それとギリギリ見えてなかったから！！」

直人のその言葉に、顔を真っ赤にして、振り上げた拳の下ろしどころに困るセシリアがそこで呆然と立っていたという。

「はあ・・・・・・はあ・・・・・・いやあ、走った走った！」

暫くは知った二人は、ビーチの一角に二人で立ってた。

「お前、セシリアのあれは反省無しか？」

「いや、あれは本当に悪かったって思ってる。後でちゃんと謝ろっと」

「許してくれると良いがな」

先ほどのセシリアの怒りようを見れば、そう簡単に許してくれなそうではあるが、その時はその時と、この時の紅葉は考えていた。

（あれっ？　周りに人がいない・・・・・・ってことは私、今直人と二人きり！！？）

そう、周りに人気があるように見えず、今正に二人きりと言う状

態に、顔も水着のように真っ赤になった。

実際は、少し離れた位置に生徒達がいるのだが、今の位置からは見えておらず、彼女達も楽しくおしゃべりしていて二人には気付いていない様子だった。

（えぇえ!?　ど、どど、どうしよう!!）

「紅葉?　紅葉!」

「ふひゃっ!!?」

「どうしたんだ?　ぼーっとして?」

「えっ!　い、いや、なんでもないよ!!　そ、そうだ!　折角海に着たんだし、ちょっと泳いでくる!!」

「あっ!　おい!!」

直人の呼びかけも聞えず、そのまま凄い勢いで海の中へと入って行く。

（あうぅ～、私の馬鹿馬鹿馬鹿!　折角のチャンスだったのに～・・・・）

海に飛び込んだ後、紅葉は思いっきり後悔した。

折角の二人っきりのチャンスを、自分で作っておいて自分でふいにしてしまったのだ。

その落胆振りは大きかった。

（さっきだってセシリアちゃん、サンオイル塗ってもらってたし、良い機会だったのに・・・・・・はぁ）

どんよりとした雰囲気で、海の中を泳いでいた。

（・・・・・そろそろ海面にでよっと）

と、ここでそろそろ息が続かなくなる事を懸念し、海面に出ようとした時だった。

（・・・・・・ん？）

何故か、途中で足が引っ掛る感じがしたため足元を見てみると、自分の足が岩に挟まっていた。

（えっ！？　何で！？　どうして！！？）

何時の間にと内心驚きを隠せない。

実は海面に出ようと、岩を蹴ろうとしたさい、そこに出来てた隙間に足を取られてしまったのだが、いろいろな事を考えていた為に、それに気付かなかった。

（と、とにかく、早く抜け出さないと・・・・・・）

必死に足を隙間から抜こうとするが、足が岩に引っ掛って中々抜け出せない。

（ま、不味い！　早く抜かないと、息が・・・・・・）

徐々に息苦しさを感じてくる。

動きにも焦りが見え始め、動きが大きくなってくるが、やはり抜け出せなかった。

「・・・・・・がはっ！？」

とうとう呼吸止めが限界に達し、口の中の空気を海中に吐き出してしまう。

（あっ、これ、やば・・・・・・）

どんどん意識が遠退いて行く中、彼女の視界に映ったのは、自分の腕を掴もうとする人影だった。

「・・・・・・よう・・・・・・紅葉！！」

「ゲホッ！　ゲホッ！！」

海水を吐き出しながら気が付くと、目の前には直人の顔が映っていた。

海に入ってないはずなのに、顔や髪に雫がついていた。

「気が付いたか」

「直・・・・・人？　あれっ？　私、一体・・・・・・」

「海の中で溺れてたんだよ。全く、心配掛けやがって・・・・・・」

「あっ・・・・・・」

ここまで説明されて、紅葉は混乱してた記憶を思い出す。

「あの時海の方を見てたら、気泡が浮かんだのが見えて、もしやと思って潜ってみれば、岩に足が嵌って溺れかけてたんだ。一瞬ヒヤッとしたぞ！」

「ご、御免・・・・・・」

事故と言えば事故だが、何だか自分が悪い事をしたような気分になり、起き上がろうとしながら謝る。

「まだ寝とけ。しかし良かったよ無事で。もし死なれたりしたら、後味悪いからな」

「あ、あはは・・・・・本当に御免・・・・・・」

「そうだよねー、さっくー慌てて人工呼吸したもんね～」

「ちょっ！　それは・・・・・・」

（えっ？）

ホッと胸を撫で下ろしていた所へ、のほほんさんがやってきてそんな事を呟く。
そして、顔を赤くして狼狽する直人。
（人工呼吸？　それに、直人の慌てよう・・・・・えっ？　もしかして、人工呼吸で私、直人とキスを！？）
その瞬間、紅葉の顔が再び赤くなる。
（う、嘘ー！！　い、意識がなかったとは言え、私、直人とき、キキキキ、キスを！！？）
今彼女の頭の中では、ちっちゃい紅葉が総出でフィーバー中だった。
しかし、そんなフィーバーな感じも、次の瞬間一瞬で霧散するのだった。
「紅葉さん」
「！！？」
どことなく底冷えしてるような声が聞える。
戦慄を覚えつつ上を見上げてみると、そこにはニッコリ笑顔のセシリアが居た。
「聞きましたわ。海で足を取られて溺れかけたんですって、災難でしたね」
「あ、あはは・・・・・本当にね」

「今のままでは動くのも辛いでしょうから、私が旅館までお送りして差し上げますわ」

「えっ？　いや、そんな、悪いよ！」

「遠慮なさらずに、色々お話したい事もあるので、では・・・・・・」

「いや、もう大丈夫、大丈夫だから！！　ちょっと直人！　ヘルプ！　ヘルプミー！！」

そのまま紅葉は、必死の懇願虚しく、セシリアに連行されて言ったのだった。

「・・・・・・まあ、あれだけ元気なら大丈夫か」

少し弱ってるのではと心配していたが、悲鳴に近い声をあげていたので、まあ大丈夫だろうと、そのまま見送っていた。

「ちょっと一夏！　助けてー！！　いーちかーーーーー！！！！」

別の方から、聞き覚えのある声が聞えたので見てみると、二人ほどの女子生徒に引きずられて行く鈴の姿が見えたのだった。

「一夏、どうした？」

「直人。ああ、鈴が溺れたんで、旅館に送ってやるって」

「鈴もか！？　俺もさっき紅葉が溺れかけてたんだが」

話によると、どうも鈴も溺れかけたみたいで、それを一夏が助けたのだと言う。
ずぶ濡れになったパーカーを絞りながら、一夏と会話してると。

「いた、直人・・・・・・」

「一夏、ここに居たんだ！」

「・・・・・・いぃ！！？」

「ん？　どうした、一かぁ！！？」

突如声を掛けられた一夏が振り向いた途端奇声を発し、気になった直人も振り向きざまに奇声を発す。
二人が振り向いた先には、水着姿のシャルロットと真白、その間には・・・・・・

「な、何だ？　その、バスタオルお化け」

「バスタオルミイラだろこの場合。でも、本当に何なんだ？」

そう、二人の間には、数枚のバスタオルで姿を隠した何者かが居た。

「ほら、直人に見せたら？　大丈夫だから」

「うん・・・・・・大丈夫だと思うよ？」

「だ、大丈夫かどうかは私が決める・・・・・・」

「ん？　その声はラウラか？」

そう、バスタオルミイラの正体はラウラのようだった。
だが、いつもの堂々としてる彼女と違い、とても自信のない様子だった。

ラウラの両隣にいる二人も当然水着で、シャルロットは昨日買ってきたオレンジ色の水着で、真白も同じく昨日、シャルロット紅葉が選んだと言う、胸元にリボンのある真っ白のワンピースを着ていた。

「折角来たんだから、見てもらわないと」

「直人なら、笑ったりしないから・・・・・・」

「ま、待て！　私にも、心の準備と言うものがあってだな・・・・・・」

二人の説得にも、中々煮え切らないラウラ。
遂に真白が強硬手段に出る。

「じゃあ、私だけ、直人と遊ぶ」

「そうだね。このままだと真白だけ直人と遊んじゃうけど、良いの？」

「そ、それは駄目だ！・・・・・・ええい！！」

シャルロットの援護を受けた真白の言葉を聞き、遂に観念したラ

ウラは半ばやけくそに、かなぐり捨てるようにバスタオルを脱ぐ。

「うぅ・・・・・わ、笑いたければ、笑うが良い／／／／／」

夏の日差しの下に晒されたのは、レースをぶんたんにあしらった、傍目から見れば大人の女性の下着に見えなくもない黒い水着を着て、普段はストレートにしている髪を鈴のようにツインテールにしているラウラの姿だった。

「可笑しな所なんてないよね？」

「ああ、ちょっと驚いたけど・・・・・・」

「可愛いと思うぞ？　俺は」

「！？　そ、そうか・・・・・私は、可愛いのか・・・・・・そのように言われたのは初めてだ／／／／／」

顔を真っ赤にして照れるラウラ、その隣にいる二人はそんなラウラの様子に苦笑している。

「おっりむらくーん！　さっくらばくーん！」

「さっきの約束、ビーチバレーしようよー！」

「わー、おりむーやさっくーと対戦～。ばきゅんばきゅーん」

とそこへ、さっき二人をビーチバレーにさそった女子達から、お誘いが来る。

「おお、丁度俺たち含めれば八人だな」

「じゃあ、誰か一人向こうのチームに行けば数が合うな、誰が行く？」

「じゃあ、私が・・・・・・」

すると立候補した真白は、言うなりのほほんさん達のいるチームに加わる。

そしてコートの準備も終わり、相手チームの先行で始まった。

「ふっふっふっ。七月のサマーデビルと言われたこの私の実力を見よ！」

ジャンピングサーブと共にビーチボールが飛んでくる。

「一夏！　いったぞ！！」

「おお！！」

一夏はそのボールをサーブで返す。

それは相手のチームに直ぐに返されるが、シャルロットがレシーブをし、ボールは直人目掛けて飛んで行く。

「おお！　ナイスレシーブ！　一夏！！」

「おお！　それっ！！」

直人のトスを繋ぐように、一夏のアタックが飛んで行く。

「うわわ、わわわわ！　おっ？　わ～い！！」

ところがそのシュートは、のほんさんが偶然トスしてしまう。
そして宙を舞うボールに向って行くのは真白。

「ふっ！」

小柄な体を目一杯使ってジャンプし、のほほんさんがトスしたボールをアタックする。
もの凄い速球で、ボールはラウラに向っていってしまう。
「可愛い・・・・・私が・・・・・・可愛い「ラウラ！！」・・・・・へっ？　ふみゅ！？」

「あっ・・・・・・」

思いっきりボールを顔面に食らったラウラはそのまま倒れこむ。

「おっ、おい、大丈夫か？」

「ラウラ、どうしたの？」

「か、可愛いと言われると・・・・・・私は・・・・・・うぅ／／／／／／」

「ひょっとして、まだ照れてたの！？」

「おーい真白、ゲームなんだからもう少し手加減しろよ。ラウラ、大丈夫か？」

心配になって直人が顔を近づけると、ラウラは顔を真っ赤にして奇声を上げながら海のほうへ走っていってしまった。

「えっと、あれ追いかけたほうが良いか？」

「えっと・・・・・・とりあえずそっとしておいてあげよ」

とりあえずシャルロットの言うとおりそっとしておく事にした。

「にしても、ラウラの抜けた穴はどうするべきか・・・・・・」

「あっ、そういえば一夏と直人の部屋って何処なの？」

シャルロットがそう聞いてきた瞬間、向かいのバレーチームメンバーも、周りに居た女子達も聞いてきた。

「あ、それ私も聞きたーい！」

「私も私もー！」

「私もー、冷たい床は共有しようよー」

のほほんさんの言葉に全員はてなをうかべるが、直ぐに気を取り直して聞いてくる。

「えーっと、二人揃って・・・・・・」

「織斑先生と同室」

『うん、やめとこう』

答えを聞いた瞬間、女子達（シャルロット含む）は、即座に一夏と直人の部屋に行くことを諦めた。

「やっぱり？」

「ああ」

ただ、真白はある程度予想がついてたらしく、そう言ってきた。

「ま、そういうわけだ。いないとは思うが、俺達の部屋に来ようとか、考えない方が良いぞ」

「そ、そうだよね！　態々鬼の寝床に入らなくても・・・・・・」

「誰が鬼だ、誰が」

その瞬間、その場の雰囲気が凍りつく感覚がした。

全員が振り向くと、そこには水着姿の千冬と山田先生が居た。

一瞬場が凍りつく感覚はしたが、それも、千冬の水着姿で直ぐに氷解した。

「織斑先生、綺麗・・・・・・」

「モデルみたーい」

「あっ、ビーチバレーですか、私たちも如何でしょうか？」

「そうだな、では少しやって行くとしよう」

そんな教師二人の会話も、上の空上体で聞えていない二人の男が。

「一夏と直人ってさ、もしかして織斑教官みたいなのが好みなの？」

「いっ！？」

「何を言い出す！！？」

「だって僕達の水着を見た時と随分反応ちがうみたいだからさ。ね、真白」

「うん・・・・・・」

「「そんな事ないと思うけどなあ・・・・・・」」

二人がシンクロしてるその脇では、シャルロットは溜息を付く。

「はぁ、ライバル多いなあ・・・・・・そこに織斑先生まで入ったら・・・・・・」

「ああ、千冬姉は強敵だ、油断しないで行こう！」

「だな、よし！　行くか！！」

「一夏、直人も絶対勘違いしてる・・・・・・」

「シャルロット、どんまい・・・・・・」

そんな真白の言葉と同時に、シャルロットは深い溜息を付くのだった。

こうして午後、日が暮れるまで、生徒たちは臨海学校初日を満喫したのであった。

だが、この後、この楽しいはずの臨海学校で、思いもよらない出来事に巻き込まれるのを、この時の一夏も直人も、誰一人知る由もなかったのである。

第三十三話　夏だ！　海だ！　臨海学校だ！！（後書き）

桜爛の間

作者「と言う訳で、三週間ぶりの更新です」

直人「実家にいる間も、こつこつ執筆してたんだな」

作者「私だってただ家で食っちゃねしてたわけじゃないですよ！！」

直人「でも、一日のほとんどは食べて寝てたろ」

作者「うっ……そ、それはさておき、今回は臨海学校初日にの話でした！！」

直人「本当に季節外れ甚だしいな」

作者「それは本当に……毎週一話更新してたらこうなりました」

直人「ま、良いけどな。んで、何か言いたいことがあるんだろ？」

作者「ええ、でもまずは後書きコーナーから、まずは「直人の目安箱」、今回は常連、三月語様からの質問だけです。

Q1．男子勢に
　告白されるならどんな娘がいい？
　（スタイル・性格を正確に答えてください）

作者「とのことです」

直人「また……俺を好きになる奴なんているのか？」

一夏「俺もそう思う」

作者「じゃあ小出しに聞いてみましょう。まず顔はどうですか？」

直人「そうだな……まあ綺麗に越したことはないかな」

一夏「だな」

作者「次は容姿」

直人「上と同じだな、ただ人それぞれだから、別にこれを判断材料にする気はない」

一夏「まあ、あまり良すぎても、目のやり場に困るしなあ……」

作者「成程、では性格は？　おしとやかとか、元気が良いとか」

直人「性格か、特にこれと言って好みの性格とかはないな、性格だって人によって好みは違うだろ？　何を持ってよしとするんだ？」

一夏「うんうん」

作者「じゃ、じゃあ、スキルとかどうですか？　家事ができるとか、手先が器用とか」

直人「別にそんなもん、教えればどうとでもできるんだ、いいだろ？」

一夏「あっ、でも俺は家事ができたら助かるかな？」

作者「結局あんた達の好みってなんなの！！？」

直人「俺はそうだな……意志の強い奴かな？　自分で決めたことを最後まで貫き通す奴とか好きだな」

一夏「ん～……俺は何だろう？」

作者「はぁ……なんか疲れた……次」

Q2．女子勢に
　今まで見てきた人の中で、（今自分が想っている人を除くのは絶対で）この人になら恋をしてもいいかな、と思ったのは？

全員『ない！』

作者「そう来ると思った……まあよくよく考えてみると、原作キャラもほとんどこう、一夏と出会うまで男に興味を持つようなことがなさそうな過去がありますからね、そう答えが来ても仕方ないのかも。では次」

Q3．全員に
もし自分のＩＳがガンダムに出てくる戦艦に配備されるとしたらどれがいい？

１：ホワイトベース（機動戦士ガンダムより）
２：アークエンジェル（機動戦士ガンダムＳＥＥＤより）
３：プトレマイオス（機動戦士ガンダムＯＯより）

作者「映像とか性能とかを見せたうえで、アンケートを取ってみたところ、次のような結果になりました」

１：一夏・箒・鈴

２：セシリア・ラウラ

３：直人・真白・紅葉・シャルロット

作者「という結果になりました。次は「抱腹絶倒！　アフレコ委員会！！」、こちらも、トワイス・Ｈ・ピースマン様からのアフレコです。参加者はこちらの方々！」

一夏「またかよ……」

箒「私も」

作者「と、いうわけです。まずは箒からどうぞ！」

篝「わ、解った」

篝「冷たい炎が、世界の全てを包み込む。漆黒の華よ、開け！シンクロ召喚！現れよ、ブラックローズ・ドラゴン！」

作者「遊戯王ファイブD，Sのアキの台詞です」

一夏「だろうなあ、でも確か、何かこのアフレコで鈴が暴走しかけたって聞いたけど？」

直人「……」

作者「触れないでおきましょう。では次、一夏に、どうぞ！」

一夏「そうさ…！　この右腕は、貴様を殺す為にある！この一撃で…消えろ！」

作者「デビルメイクライ４の主人公、ネロの台詞です」

一夏「いや、別に俺皮肉屋とかでもないんだけどなあ……」

作者「何というか、直人の方が似合いそう……」

直人「生憎、俺は銃は駄目だから」

作者「いや、そう言う問題でもないんですけどね。では、今回はここまで。で、ここからはアンケートについてです」

直人「ああ、あの男キャラを出すとか何とかって奴か」

作者「はい、思ったよりアンケート1の方の意見が多かったので、他に意見も来なさそうなので、アンケートはここで打ち切りにしたいと思います」

直人「ってことは、出さないことにしたのか？」

作者「と、いきたいところなのですか……」

直人「まさか……」

作者「やっぱり出したい衝動が強い！！」

直人「アホかーーーー！！」

作者「へぶっ！！？」

直人「自分の作品なんだから、人に物を聞くぐらいなら好きなように書けばいいじゃないか！！」

作者「そうなんですが、やはり一度アンケートを取った手前、意見を無碍にするのもあれで、それによく考えてみれば、どんなキャラかも解らないのに、いきなり、「オリキャラ出します！」って言われても、いきなりあれだろうと思って」

直人「まあ、言いたいことは解るが……」

作者「と、言う訳で、再アンケートです。今回はいろいろ考えたうえで、出すオリキャラは一人、どんなキャラなのかもここと、明日、大学から帰宅し次第、活動報告に乗せたいと思います。と言っても、ネタバレを防ぐために、特徴を少し上げるだけですが、こんな感じのを出したいと考えています」

・中世的な顔立ち、女の子に見える。

・温厚な性格

作者「……あれっ？　なんか男版シャルロットって感じがしてきた」

直人「してきたじゃなくて実際そうなんだろ？　って言うかこれ、元キャラ……」

作者「それ以上は言うな！！　さて、ではアンケートですが、この小説、もしくは活動報告をご覧になった方は、是非ご投票いただけるよう、お願い申し上げます」

1．面白そう！　出してほしい！！

2．一人だろうと二人だろうと、男オリキャラは直人一人で充分だ！　要らん！！

作者「以上のどちらかにご投票ください」

直人「って言うか、なんでそこまで出したがるんだ？」

作者「大半の理由が、「端午の作ったＩＳをもっと出したい！！」と言うのが大まかな理由だけど、現在原作が停滞してるとは言え、今後一夏以外に男の操縦者が出ないとは限らないでしょ？　「二度あることは三度ある」って言うし」

直人「だとしてもだろ……」

作者「本当に、こんな優柔不断作者ですいません。ですが今回で駄目という声があれば、きっぱり諦めますので、協力していただけるよう、お願い申し上げます。期限は２月１日の夕方６時までという事で」

直人「全く……んで、次回は？」

作者「次回はアニメ第十話、目安としては、始まりから千冬さんと女子ズの会話、翌日と紅椿披露、福音事件勃発と言う風に分けていきたいと思います。それでは、また次回！！」

作者「ついでに実はオリキャラは最低でもあともう二人出す予定」

直人「ってことは史江とあの付き添いを含めると……あと四人は出すつもりか！？　大丈夫か！！？」

作者「まあ、やるだけやってみます」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0273t/

ＩＳ　桜の花纏う真剣

2012年1月11日09時51分発行